

東京大学史料編纂所研究成果報告  
2024 | 12 (二〇二五年三月)

## 中世東大寺記録

## 東大寺法華会・興福寺維摩会関係史料

遠藤 基郎  
畠山 聡  
西尾 知己

基盤研究 (A) (2018～2023 年度)日本中近世寺社<記録>論の構築  
—日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化 (代表遠藤基郎) (課題番号 18H03583) 報告書

科研費  
KAKENHI

## 目次

はじめに（付凡例）

### I 東大寺法華会記録

解題	1
一 法華会英憲・英訓筆跡日記	142-1439
二 法華会私日記	141-1502
三 法華会探題・講師抜出	142-1447
四 法花会日記 薬師院―	12-294
五 法華会短尺箱日記	142-1429
六 法華会探題并講師日記	142-1430
七 法華会開口并論匠番表白等	141-1524
八 法華会講師日記	141-1496
九 法華会講師日記	141-1501
一〇 法花会日記講師方	142-1412
一一 法華会日記講師方	142-1413
一二 法華会講師日記	142-1414
一三 法華会旧記	141-1509
一四 法花会堅者方日記 薬師院―	12-290-1
一五 法華会日記 薬師院―	12-291
一六 法花会始行日記 薬師院―	12-292
一七 法花会私日記 薬師院―	12-296
一八 法花会日記 薬師院―	12-297
一九 永正二年東大寺法華会記録	113
京都大学総合博物館所蔵一乗院文書	110

### II 興福寺維摩会記録

解題	121
一 維摩会記録	141-1541
二 維摩会日記	142-1466
三 維摩会記	142-1465
四 維摩会逐業日記	142-1467
五 維摩会日記	142-1493
六 維摩会堅義日記	142-1476
七 維摩会日記	142-1469
八 維摩会真俗私日記	141-1526
九 愚記 薬師院―	12-256
一〇 維摩会日記	142-1468

## はじめに

基盤研究 (A) 18H03583「日本中近世寺社△記録△論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化」のうち東大寺グループでは、東大寺図書館所蔵の記録(日記)の翻刻を課題のひとつとしており、その成果として、『中世東大寺記録執行関係史料』(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二〇―一)と『中世東大寺記録出世後見・俱舎三十講関係史料』(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一―一六)の二冊を刊行した。それ引き続き本冊は、東大寺法華会と興福寺維摩会に関するものを翻刻するものである。

本冊は東大寺記録のシリーズとしては一区切りとなるものである。東大寺の記録・日記について気づいた点を、記録・日記を作成・書写することの目的と契機、原本と写本の区別と読み取り方の注意点に分けて雑ばくに述べておく。記録・日記を作成・書写することの目的と契機は単純である。何らかの役職を勤める際の参考資料に備えるためであった。本冊で扱う法会の場合は、法会の中の役割を担う職衆となったことがほとんどの契機である。その場合、対象となる仕事の内容に特化した日記となる。その意味で、特定儀式に絞った公家の部類記と共通する性格を帯びている。

次に原本と写本の区別と読み取り方の注意点であるが、これは少し複雑となる。

そもそも原本とは何かの定義が難しい。写本原本という表現も可能だからである。ここでの原本は、写本を基準点とした相対的な定義である。写本の対象となる親本の起点、すなわち祖本がここでの原本である。それは記主が経験し

た内容をまとめたものとなる。つまり、ある年の法華会の堅義がその経験を、今後のために活かすべく記録したようなテキストである(本冊法華会記録四・七号他、維摩会記録二号他多数)。

原本はその作成者のみが書き手で完結する場合もあるが、それを継承したものの(伝領者)が、さらに追記をする場合もある(本冊法華会記録一四号他)。たとえるなら、親の日記帳の余った部分に子供が書き継いでいるような具合である。内容や筆跡によって判定する必要がある。

原本が今後に備えた《現在》の記録だとすると、写本は事前準備に参考にするために、《過去》の記録を写したものとと言える。写本は、親本として原本(祖本)を第一次的に書写する場合もあるが、数次わたる書写を経た一世代前の写本が親本となることも一般的である(本冊法華会記録六号他)。

現存する写本と原本(祖本)の世代が離れば離れるほど、様々なノイズは増えるし、また原本の持っていた情報が失われることとなる。失われるものの典型が、前述の伝領者による追記筆跡情報である。原本では筆跡が区別の判断材料とできる。写本の場合には書写者の筆跡のみとなるので、判断材料は内容解釈だけとなる。したがって内容を吟味して追記関係を慎重に復元する必要がある。その際、記事の中の年月日が第一の手がかりとなることは言うまでもない。

写本は単一の原本(祖本)の書写の場合と、複数の場合がある。複雑になるのは後者である。複数の場合、書写のありようの違いにより大きく二つに分類できると思われる。

第一は、複数親本の区別が明瞭なタイプである。理想的な事例は親本の奥書





## I 東大寺法華会記録

## 東大寺法華会記録解題

東大寺法華会は、奈良時代以来の歴史を持つ論義法会である。寺内だけでなく南都他寺（興福寺・薬師寺・法隆寺）の参加があり、南都寺院社会に共有の法会であった。同時に寺内僧にとって重要な寺僧身分階梯のひとつであった。

東大寺法華会の概略や、記主の役割を基準に分類した八類型の特徴は、すでに遠藤基郎「中世後期東大寺「記録」「日記」序論」（『日本中近世寺社〈記録〉論の構築…日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化』東京大学史料編纂所研究成果報告二〇一一一八、JSPS18H0358318H03583 報告書二）一〇頁以下で説明した。そこでの分類は、①出世後見・寺務代、②執行（含む会行事）、③南都綱所・注記、④講師、⑤探題、⑥堅義（堅者）、⑦学侶、⑧会料方納所であった。

以下では、本冊掲載の個別の諸本の書誌（書写・伝来）に絞り込んで説明する。なお配列は、前述の分類順とは異なる。(1)複数職衆・一般聴衆(①④⑥⑦)、(2)探題(⑤)、(3)講師(④)、(4)堅義(⑥)、(5)執行(②⑧)、(6)注記(③)である（括弧内は八類型との対応）。

なお(2)については遺漏があった。「法華会探題旧記」（一四一・五一）である。これは江戸前期の英性による（法華会記録一号参照）、応安二年・明德二年・応永二十年・宝徳三年・文明九年の記録の写本である。

## 複数職衆・一般聴衆

一 法華会英憲・英訓筆跡日記 一四二―四三九

江戸前期（概ね一七世紀）の英性撰の写本である。複数の日記が重層的な書写関係にあつて、今回掲載した史料の中では、もっとも複雑な構成となっている。少し丁寧に説明しておく。

大きく(あ)大永元年（一五二二）撰の密乗坊英憲本②④⑤⑥、(い)天文・弘治年間（一六世紀第二四半期）の英訓による追記③⑦、(う)この(あ)(い)を北林院から伝領した訓憲識語①と追記⑧である。

(あ)は本冊の大部分を占める。その内訳を祖本の成立順で示すと以下のようになる。④宝徳三年（一四五二）正月度の堅者普門院実経本でもっとも長い引用である。⑤応永一〇年（一四〇三）度の出世見曉円本、⑥（大永元年力）法華会表白からなる。大永元年度は英憲が講師であつた（本冊法華会記録三号）のでその折のものだろう。②（一才）は、④⑤⑥をまとめた際の英憲の識語で、あるいは表紙見返し書だったと判断する。英憲は自ら講師を勤めたことを契機に、過去の法華会記録と自らの経験を交えて記録し、今後の参考資料にしようとしたと思われる。

(い)は、③⑦天文・弘治年間の出世後見・寺務代英訓発給文書の写である。一部弘治二年（一五五六）十一月度法華会の関係記事もある。一部、写し漏れがあつて最末尾にウに追加で写している。表紙ウワ書の「英憲・英訓筆跡」によれば、(あ)英憲自筆に(い)英訓自筆が追記されたのであつた。通字使用からもこの二人は師弟関係にあつて、英憲自筆本が引き継がれたのである。

その発給文書内、興福寺維摩会堅義・大仏殿阿闍梨・東大寺執行・東大寺三綱関係は一見すると法華会と直接関係ないようだが、前二者は法華会堅義を勤めた僧侶が補任されるものなので、広い意味で関係する。全く関係がない後者は、ついでに書写されたと判断する。

また(あ)②大永元年擬講英憲識語の第一行目に(い)③⑦の項目立てがあるのは、明らかに矛盾するので、これは英訓の追筆と判断する。

(う)表紙見返し①の訓憲識語によれば、訓憲は北林院から(あ)(い)を得たとする。ちなみに(あ)英憲は北林院にいたことがある(『大日本古文書石清水文書(菊大路)』六卷四二六号)、英訓も同院の可能性が高いから、訓憲は原本を得たのであろう。その後、訓憲本人ないしその関係者が⑧慶長・元和度の記録を追記したと推測する。本文中に「予」と見えている人物がその人物である。

本号そのものは、訓憲所蔵の英憲・英訓自筆本を英性が写したものである。

英性は、明暦・寛文・延宝頃(一七世紀後半)頃に出世後見をするなど活躍した東大寺僧である。その法華会記録の写本は、本冊一三号(一四一―五〇九号)の他、一四一―五〇八・五一〇―一四の六冊に及ぶ。

ただ本号は若い時期に書写された可能性が高い。料紙となった紙背文書には寛永年間の年記が見えている。

## 二 法華会私日記 一四一―五〇二

寛永八年(一六三一)惣持院重祐の書写本であり、大きく(あ)英訓撰本①

④、(い)浄実撰本⑥、(う)文明八年出世後見発給文書抜き書き⑦からなる。

(あ)は、①大永元年十一月度講師・寺務代英憲、②「講師次第之事」、③天文九年十一月度の寺務代兼講師英訓、④天文十六年(二五四七)十一月度探題兼寺務代英訓、⑤弘治二年(二五五六)一二月度探題兼寺務代英訓からなる。①も英訓は職衆として携わっている。弘治二年以後に英訓が①⑤をまとめた自筆本が祖本である。②はその際の地の文である。また天文九年度の③の途中(一七ウ)に「弘治二年」度への言及があることも一種の地の文と言える。なお③天文九年度は永正三年焼失した講堂に変わって大仏殿が初めて会場となった際のものであり興味深い。

(い)の⑤浄実講師日記は本冊法華会記録第一二号の別写本である。

元和四年(一六一八)閏三月に(あ)(い)を相次いで清涼院実英が写している(34オ・38ウ識語)。同年五年度の講師準備のためであった。なお再末尾(う)は極めて短い引用であり、実英本にあったのであろうが、なぜここにあるかは不明である。

本第二号そのものは、その実英本を親本とした重祐写本で、その書写の契機は寛永八年(一六三一)八月度に重祐が講師となったことにあった(39ウ識語)。なお本冊法華会九号はこの時、同時期に写されたものであろう。

表紙の「上生院」の黒印は、後に惣持院から同院に本書が移った際のものと考えられる。

## 三 法華会探題・講師抜出 一四二―四四七

江戸中期の宝暦・明和頃(一八世紀四半期第三期)に年預五師や出世後見であった北林院成果の撰。(あ)応安二年(一三六九)年から享保元年(一七一六)

までの講師・探題・堅者・精義など僧名の書き上げと、(い)日記(本冊法華会記録一二号)・口伝などから次第や作法について引用などがある。(あ)については、年次順配列ではなく、時間が前後する場合が多い。成果の入手した知見を順不同であげた、さしあたりの記録ノートと判断される。

#### 四 法花会日記 薬師院―二―二九四

天文九年(一五四〇)の延秀撰の原本(祖本にあたる)である。本冊第二号③天文九年日記に対応する。延秀は法華会聴衆である。あるいは加任堅義かその問者の可能性もあるが断定は困難で、役割なしの一般聴衆の可能性もある。内容は、法華会実施決定後の様々な寺内の対応・準備から、当日の次第、聴衆の作法までである。法華会に関わる大きな流れを記述することに目的があったようにも思える。さらに維摩会・大仏殿修正会での学侶中臈の故実に及ぶ。本来は学侶延秀の院家に伝来したものであろう。後に執行家正法院に移り、貞享元年(一六八四)正法院実宣が修覆した(後補裏表紙見返し)。

#### 探題

#### 五 法華会短尺箱日記 一四二―四二九

①応永八年(一四〇一)正月度の探題弁玄大僧都、②某聞書、③寛永五年実英の追記「探題故実条々」などからなる。

①は「北室故大納言法印記」や興福寺別当修南院からの指南を整理したものである。②は、全体で応永八年の興福寺修南院の教示内容が基本となっているようにも読めるが、なお確証がない。途中、「尊勝院御物語」「北室故大納言法印記」などの文言も見える。①②をまとめた祖本は、寛永五年(一六二八)四

月度の探題清涼院法印実英に伝領されたが、損傷の激しい「古本」であったために修復された(9才識語)。その際に「探題故実条々」を追記したのだろう。本五号そのものは、実英所蔵本を寛文六年(一六六六)十二月度の探題惣持院法印実秀が書写したものである(10ウ奥書)。

本書の書きぶりの特徴は、カナ表記の多用である。具体的な身体所作を表現するために、より日常語に近い表記を選択したとも言えるが、あわせて本来、口伝でしか伝え得ないものということが、漢字に比べより音声に近いと感じられていたカナ表記を取らせているのだろう。

#### 六 法華会探題并講師日記 一四二―四三〇

応永二九年(一四二二)十二月度の探題普門院法印権大僧都秀経撰本が祖本である。四聖坊英性に伝領され、それを親本に、本冊第五号と同じ時、寛文六年(一六六六)十二月度の探題惣持院法印実秀が写している(11ウ奥書)。

ところで表紙には「文明九年酉三月日法華会探題并講師日記」とあって、年紀が異なる他、本号に見えない講師日記もあって困惑する。親本である四聖坊所蔵本の表題をそのまま写した結果と推測される。本号にはない文明九年講師日記はおそらく本冊法華会記録一〇号の別本ではないか。

#### 講師

#### 七 法華会開口并論匠番表白等 一四一―五二四

鎌倉末期・南北朝期の学侶賢慶撰の原本(祖本にあたる)である。東大寺法華会だけでなく、東大寺八幡八講・東大寺三季講・興福寺維摩会などの表白の実例を集めたもの。うち一件は正中二年の年記がある。後、澄芸が伝領した(表

紙ウワ書)。

八 法華会講師日記 一四二―四九六

応永十三年(一四〇六)二年度の講師尊勝院光經撰本を、文安四年(一四四七)権僧正秀経が書写したもの。秀経は、文安四年閏二年度の講師であろう。以前講師を務めた西室公顕法印から口伝指南を得たことにも触れている。江戸時代には惣持院が伝領した(表紙ウワ書朱印)。

九 法華会講師日記 一四二―五〇一

元和四年(一六一八)五月度講師清涼院法印実英が、多数の旧記引用を交えながら、自身の勤めた元和四年度の内容を記述したものである。地の文と引用文が織り交ぜられているのでやや混乱を覚える。引用順に天正五年(一五七七)一二月度講師浄実撰本の論義部分、応永二年(一四一五)正月度の出世後見賢春法印日記、応永三五年閏三月度の講師光実日記、天文四年(一五三五)維摩会堅義放請(差出東大寺出世後見英訓)となる。準備のために目を通した文献から適宜取捨して、書きつけたものと理解すべきと思われる。

本号そのものは、この実英本を寛永八年(一六三一)八年度の講師惣持院権大僧都重祐が書写したものであり、本冊二号と同時期のことであった。後に上生院に移っている(表紙ウワ書黒印)。

問題は、表紙ウワ書の元和四年閏三月二十八日に書写した旨の記述である。本文に同年四月などの記事がある。おそらく講師実英が準備の記録ノートとして冊子を用意し、起筆した日付と解釈すべきだろう。なお表紙ウワ書は、寛永八年重祐の筆跡であるから、親本実英本をそのまま写したものと考えられる。

一〇 法花会日記講師方 一四二―四二二

文明九年(一四七七)四月度の講師延英が自らの経験をまとめた祖本を、延忠が書写し、それを親本に室町後期の密乗坊英憲が写したものである。英憲の最初の講師役は大永元年(一五二二)十一月度であった(本冊法華会記録三号)から、その折りのものの可能性が高い。江戸初期には賢盛(裏表紙奥書)が伝領し、最終的に惣持院に伝わっている(表紙ウワ書朱印)。

一一 法華会日記講師方 一四二―四一三

文明十三年(一四八二)四月度講師英祐に随行した密乗坊英憲(当時一九歳)の撰。原本(祖本にあたる)である。英訓に伝領された(表紙ウワ書)。さらに英■に移ったのだが(裏表紙奥書)、最終的に前一〇号と同じく惣持院所持となった(表紙ウワ書朱印)。前一〇号と比べて内容が極めて詳しい、随行した折の経験を英憲が丹念に記録したからである。

一二 法華会講師日記 一四二―四一四

天正五年(一五七七)十二月度講師擬講浄実(当時五六歳)による自身の記録で原本(祖本)である。奥書に、この時の事情が書いてある。当初、周防国衙に目代として下った訓芸が講師を勤めるはずであったが、信長と毛利との合戦に巻き込まれ交通が遮断したため、急遽浄実に代わったとある。戦乱は東大寺の法会にも暗い影を落としていたのである。本冊掲載のいくつかの写本は、本号を親本としており、後世の見本となっている。

豎義

一三 法華会旧記 一四一―五〇九

本号は本冊法華会記録一号と同じ英性写本で、大きく（あ①～③）実相坊卿得業撰（光祐写）、（い④・⑤）恵延撰（順円写）、（う⑥）順円撰の各本からなっている。

（あ）の内訳は、①応永二十年（一四一三）正月度豎義重弁法華会日記、②年未詳芝律師口伝聞書、③康応元年（一三八九）の書写奥書のある浄願坊日記である。この三点を一編にまとめた実相坊卿得業本があり、それを親本に永享三年（一四三二）に光祐が写している（8ウ識語）。

（い）は、④永享十二年（一四四〇）正月度豎義朝乘法華会日記、⑤文明三年（一四七一）九月豎義恵延日記である。なお④末尾の前に永享四年正月五日付け、差出豎義英乗の調鉢代送状の引用がある。これは永享十二年の朝乗が手本とするために、過去の事例を引用したものだろう。恵延は自ら豎義を務めた維摩会終了直後に④・⑤を一編にまとめ、若干の追記を加えた（16ウ識語）。その後、文明十三年（一四八一）二月に順円がそれを書写している（17オ識語）。これは四月からの自らの豎義に備えるためであった。

（う⑥）文明十三年四月度は豎義順円本人の記録である。これには奥書がない。おそらく自らによる写本（い）に（う⑥）が追記されたのだらう。つまり（い）（う）は一冊として伝領されたのである。

そして本号は、（あ）と（い）（う）の二冊をあわせて親本として、英性が写したものだらう。同人は明暦四年（一六五八）五月度で堅者を勤仕しておりそ

の際に撰述した可能性がある（薬師院文庫史料二―二二四）。

一四 法花会堅者方日記 薬師院―二―二九〇―一

本号は、原本（祖本にあたる）の伝領者が、その余った料紙に続けて書き継いでいる。まず①は明応三年（一四九四）十月度豎義経順日記であり原本となる。その余った丁に、伝領者英訓が引き続き②大永三年（一五二三）十二月度維摩会初夜豎義英訓日記、さらにその後の伝領者定賢が③天正五年（一五七七）度維摩会聴衆定賢日記を追記する。

本冊各号にも現れる江戸初期の清涼院実英に渡り（表紙見返ウワ書。最終的に薬師院に伝来した）。

執行

一五 法華会日記 薬師院―二―二九一

永正二年（一五〇五）十一月度の執行・会行事を兼帯した叡実撰の原本（祖本）。執行となつて最初の法華会であったことに加えて執行・会行事兼帯であったために記述内容は詳しい。双方の業務の個別の仕事の由来や留意事項にも触れ、過去の事例（永徳二年〔一三八二〕十二月度、文安四年〔一四四七〕十二月度）にも及ぶ。さら一旦脱稿後も朱筆追記での情報を付加するなど、業務マニュアルとしての完成度は高い。この三年後、永正五年（一五〇八）講堂は焼失するが（以後再建されず）、その指図が掲載されている点で史料価値が高い。貞享元年（一六八四）九月に正法院実宣が修覆している（後補裏表紙見返し識語）。

## 一六 法花会始行日記 薬師院―二―二九二

永正十年（一五二三）四月度の執行・会行事兼帯の叡実撰の原本（祖本）である。永正五年講堂焼失後、初めての法華会であり、かなり手狭な中門堂が会場となった。叡実が筆をとったのはこうした事情によるのだろう。前号と同じく貞享元年（一六八四）九月に正法院実宣が修覆している。

## 一七 法花会私日記 薬師院―二―二九六

弘治二年（一五五六）十二年度の「法華会料結解状」である（書き出し）。前半は銭分で、探題以下の職衆、三綱・楽人などへの下行銭、あるいは年預五師に対する結解料がある。後半は米分で、大仏供、公人・堂童子などへの下行が続く。年預五師への結解料があるところから、惣寺方の法華会料納所の可能性が高い。

ただし表紙ウワ書によるならば、本号の筆者は慶長年間の執行実祐であり、この点が悩ましい。後欠であるために不安は残るが、弘治二年の会料納所結解状を慶長年間に実祐が写した写本の可能性がある。あるいは実祐が弘治二年惣寺方納所を兼帯した可能性もなくはない。

## 一八 法花会日記 薬師院―二―二九七

原表紙には薬師院（花押）とのみで僧名不明であるが、後補表紙の通り実祐であろう。自らが執行として関わった天正五年（一五七七）十二度を記述し、その余った丁に引き続き慶長七年（一六〇二）十二年度で記録している。原本（祖本にあたる）である。他の執行の記録と同じで、貞享元年（一六八四）九月に正法院実宣が修覆している。

## 注記

一九 永正二年東大寺法華会記録 京都大学総合博物館所蔵一乗院文書

本冊法華会記録二号③、四号と同じ天文九年（一五四〇）十一月度で、注記を勤めた興福寺僧丹波寺主泰淳の手に実際に届いた法華会用の文書綴りである。東大寺年預五師・出世後見からの連絡文書と出仕僧侶などの折紙注文である。ほとんどは後者である。注記は法会当日それを懐に納め、適宜手元に出して、出仕者の出欠管理などを行ったと考えられる。合点が付されているのは、進行状況確認を示すものであろう。なお泰淳は、本号史料の写を「東大寺法華会注記方日記」（帝塚山大学奈良学総合文化研究所蔵南院家文書）として残している。『大乘院寺社雑事記研究論集五』（大乘院寺社雑事記研究会編、和泉書院、二〇一六年、四一頁以下）に田中香織による翻刻がある。

一 法華会英憲・英訓筆跡日記（東大寺図書館一四二・四三九号）

○紙背文書と校合作業のための朱合点などは省略した。

○（う①）（あ②）などの区切りは解題参照。

（表紙ウワ書）

法華会 英憲・英訓筆跡日記

英性

（表紙見返し）

（う①）文禄三年訓憲識語

此本北林院経蔵ヨリ訓憲（禪栄房）申請矣、

文禄三 五月日

（1才）

（あ②）大永元年擬講英憲識語

○英訓追記か。い③⑦  
法華会放請并有職阿闍梨之補任在之、

○あ④  
法華会普門院実経堅義日記（改名秀雅）

○あ⑤  
出世後見沙汰次第折紙等案文（暁円法印日記）

○あ⑥  
法華会初問表白

大永元年十一月六日写之、

（代カ）  
寺務方并会料納所擬講英憲

（1ウ）

（い③）天文三年出世後見英訓発給文書拔書

本堅者堅義者事  
放請 明年法華会 加任堅義者事

○裏表紙見返し  
奥二案文在之、

某法師

右別当未補之間、寺門評定所放請如件、

天文三年十二月日

出世御後見擬講英訓判

寺務代法印権大僧都英訓判

（あ④）宝徳三年堅義実経日記

宝徳三年正月十六日法華会始行之、

（2才）

○（貼紙）「応永廿年」が混入している。

探題別当僧正東室隆実

堅者実経（年十五才）

一、去十一月三日、自寺務来年正月十六日可有法華会執行、可被堅者勲仕旨、

以出世後見被申之間、僧正在京之時節也、可申上之由返事畢、仍京都へ申

処二、可領掌之趣、申クタサル、間、同十七日可勲仕之由、寺務工申之間、

目出之由返事畢、

（2ウ）

一、如近年者、花厳宗ノ良家衆ハ初夜堅義ヲ勲仕之間、本堅者相模公有憲ニ替

テ、彼ヲ加任ニナシテ本堅者ヲ沙汰シ畢、必モ名僧方可勤初夜事、

(鑑腸力)  
其監触ヲ不知能々可尋、

一、因内ノ題ヲ取事、名僧ト住侶トノ時ハ、良家ハ縦ヒ下藹ナレトモ、先題ヲ撰テ取ル也、良家衆アマタル時ハ、其内ニテ藹次ニ取ヘキニ、今度ハ西室ノ公恵上首ノ間、申合テ題ヲ定メ畢、

(3才)

一、同十五日、被成放請畢、放請ノ使ニ廿三疋ノ分下行シ畢、

一、同日召請師五師經真、短冊ノ文字読等習始メラレ畢、杉原一束・布一段礼分ニ遣之、

一、同廿四日、吉日之間、被始加行、七日ノニ參社、

一、祈師堂衆賢良ニ申付、自今日々參云々、

一、十二月朔日詔舜良得業承俊、大夫公盛重、

(3ウ)

精義・問役方ヘノ短冊共写之、問役方ヘノ重ノ書趣、色々ニアレトモ、因内ニ明ヲ別紙ニ書タルヨシ、近年又多分加様ニ沙汰セリ、問役ノ方ヘ一ノ問ハ、四ノ重ノ問マテカクヘシ、二三ノ問ハ三ノ重ノ問マテ可書、イツレモ答不入故ニ略之、四ノ問ハ問題計ナルカ故ニ、因内共ニ一紙ニ書ク、五問又同シ、

一、精義方ヘモ因内別紙ニ書之、四五問ハ各一紙ニ書テ遣了、精義方ヘハ重ノ分悉ク書テ遣ス、為存知也、

(4才)

一、注記方ヘハ一問ヨリ五問マテ悉ク問題ノ答マテ書也、何故ノ重ヨリ後ヲハ

不可書、

一、宝徳三正月四日、以承俊得業探題方ヘ義者<sup>(名)</sup>拝礼并送物ノ現紙等可有御免之由、被申遣之处ニ、不可有子細云々、略之畢、

一、同五日夜ヨリ、後夜入堂ヲ始了、三ヶ夜也、当寺計也、

一、義名ノ催状(立紙・礼紙アリ、杉原二重ニ書タリ)

(4ウ)

彼状云、

明日可令出堅義々名給候由、別当僧正所候也、恐々謹言、

正月十一日

延海(奉)

大納言禪師御房

返事認様、立紙・礼紙ヲスル也、杉原二枚ニアリ、

明日可出法華会堅義々名之由、謹承候了、早可存其旨候也、以此旨、可令申入給候、恐々謹言、

正月十一日

堅義者実經(請文)

(5才)

此ハ奉書之間、又付状ニ認テ遣了、出世奉行延海法印ナトモ、出世奉行スル事ニヤ、能々可存知事也、上綱衆ハ、住侶方ヘハ若輩ノ時モ恐々謹言ト書間、如此沙汰シ了、但能々思案アルヘキ事歟、有議ノ仁ニ可尋之、奥ニモ表書ニモ、堅者実經ト書ヘシ、今度表書ニ堅者ト不書、越度也、催状、探題ノ直ノ状ト奉書ト二様ニアリ、可得其心也、堅者返事モ直ノ返事付状ニ様也、



(5ウ)

一、御請ノ御請ノ案文<sup>(衍カ)</sup>

謹請

綱牒一紙

右依 宣旨、自十六日被始行東大寺法華会堅義者、謹拝領如件、

宝徳三年正月十六日

実経

・杉原二枚ヲカサネテ書テ、立紙ヲスル也、不捻シテヲ<sup>(押折)</sup>シヲルナリ、  
若キ修学者者、襲衣ニテ袈裟モカケ

(6才)

スシテ蘿箱ノ蓋ニ入テ以テ出テ、御請ヲ請取ル也、又御請ヲ出ス時  
毛蘿箱ノ蓋ニ入テ以テ出テ渡ス也、 綱掌・鑑取ニハ三種毛立等ニ  
テ勸酒畢、

一、諸奉行

・装束方〈経賢弁公・堯賢讃岐公〉

・出仕方〈帥五師経真・舜良得業承俊・民部公経綱〉

・送物方〈舜良得業承俊〉、・申継方〈綱英筑後寺主

・雑掌方〈助公秀嗣・筑後法橋英守〉

・献之次第方〈民部公経綱〉

(6ウ)

・座敷料理〈侍従公秀綱・筑後公綱英〉

・灯燭〈讃岐君堯賢・卿公経性〉

一、十二日曉景ニ義名ト十題トヲ認テ、承俊得業付衣ニ白五条ニテ蘿箱ノ蓋ニ

義名・十題入テ、持参之处、義名・十題ハ請取畢、名籍ヲ可給云々、毎事

略定之間、令無沙汰之处、又催促二字ヲスル間、ヤカテ認テ、又舜良得業

持参了、二字ノ書様、奥ニ古キ跡ヲ載之間、別ニ不記、

一、十六日、棟門ノ内ニ幔一帖引之、幔ハ年預

(7才)

五師ニ申テ借寄了、・中門・棟門両所ニ立沙シ畢、

一、座敷事、九間ト四方六間ノ障子ヲ取ノケテ、中藹以下ノ座トス、茶所ヨリ<sup>(×間)</sup>

東ノハシ綱所マテ十間取ヒロケテ、方廣衆ノ座敷トス、

一、役送事、御前、侍・中童子、次間ハ御小者・代官・殿原共沙汰之、御前配

膳、

侍五人〈伊予上座祐玄・丹後上座舜暁・筑後寺主綱英・讃岐君堯賢・越後  
君英俊〉

(7ウ)

中童子二人 阿茶丸・虎千世丸

次間配膳、御小者四人〈千代石丸・初石丸・今乙丸・藤満丸〉

一、当日、天晴、

四時分、宿坊エ可被出由、以力者〈直垂〉二人触サセ畢、学非学唯窓衆マ<sup>ママ</sup>

テ催シ畢、大都ハ出畢、悉来臨之後、酒宴ヲ始メ了、五献也、初ノ三献ハ<sup>(宴)</sup>

アラ物ナリ、四献目ハ図カキタル、五度イリヲ出了、五献目ハセト入、同

図書タル、盃ヲ用意シ畢、肴風情事、別紙記ス、

(8才)

一、院主僧正着座ノ事、先例依難知、東室エ相尋ル処ニ、当別当堅義ノ時、先師東室僧正康海着座シテ勸盃云々、仍今度任此義了、

一、酒晏事畢後、綱掌・鑑取御請ヲ持テ来ル、経賢弁公襲衣ニテ、蘿箱ノ蓋ヲ持テ、出合ニ請取之畢、則御請文認テ遣ス、請文ノ書様ヲクニ載之、綱掌・鑑取二三種肴毛立(五)、五献勸之、下行物如

(8ウ)

例、ヲクニ記之、

一、神人(廿一人計)、公人(十四人計)、御礼ニ参ス、給一献畢(三種肴、毛立五)、

小綱参、一献等同前、

一、夜ノ四時分、催威儀僧十五人、三献ヲ勸ム、座敷ハ次間之配膳、御小者・

代官・殿原衆也、

一、威儀僧ノ奉ヲハ両三日ノ先ニ取也、

一、出仕後夜ノ後也、

(9才)

行列次第、棟門ヨリ出仕、

先力者二人(取松明二行)、次走童二人(取続松)

次大童子四人(千代石丸・初石丸・今乙丸・藤満丸)

次從僧二人(舜曉上座・綱英寺主)

次堅者、次中童子二人(阿茶丸・虎千代丸)取松明、

次右方威儀僧十五人(侍從得業英寛、会堂ナリニテ供奉、先例如何、)

次唐笠持一人白丁、

持続松・生松仕丁一兩人、

次立近廊等ノ儀、或如常、会堂ニ入ル五床ニ

(9ウ)

腰ヲ掛テ、向南居候、札ヲ取方如常、札ヲ取テ後、扇ヲ持テ高座エ登歟、懷中ノマ、スクニ登高座スル歟否ヤ無思束之間、堅者少々評定シテ、所詮札トル時、扇ヲ懷中シメルマ、登高座スルハヨシ、扇ヲ手ニ持テ、高座ニ登事ハ、更々不可有事也、然ハ懷中ノマ、登高座、可然也ト談合シテ、如此沙汰シ畢、

次堅義訖テ退出、会堂ノ西ノ近廊エ出テ、闇馬道エ出テ、其ヨリ還ル宿

坊、

(10才)

一、大童子ノ事、寺大童子ト云者ハ平坊ノ下人也、上綱衆召具スル事、下品至極之由、先年沙汰アル間、中大童子ヲ召具スヘキ処ニ、竹王丸一人ナラテハ人躰ナキ間、イカ、スヘキヤノ処ニ、竹王申様ハ、先例ヲ人尋候ヘハ、無人数ノ時、非大童子ニモ立合事、無子細候歟之由ヲ申間、其通ニテ、非大童子三人ト竹王ト合四人治定之処、其夜一乘院俄御社参之間、竹王指合也、計会之由侘申間、無力又小者一人

(10ウ)

尋出シテ召仕レ、格悟ニナシ召具ス、仍今度ハ一円ニ非大童子也、四人共

ニ格悟也、寺大童子ヲツル、ヨリハマスヘキ歟、

西室ノハ大童子四人内一人ハ竹王丸也、余ハ寺大童子歟ト云々、

一、大夫法印延海ハ一床ニ可出仕之處、老躰ノ上、肺氣ニヨリテ、行歩不叶間、

(負)  
ヲワシテ一床ニ着ス、行道ニモアワス、ヤカテ又ヲワレテ還ト云々、先例

無覺束事也、

一、服者從僧事沙汰アリ、尋先例之間、弁玄

(二オ)

永徳三年歟、

僧都日記云、服者モ從僧以下ノ供奉人ハクルシカラス、当年東北院ノ從僧

モ、一人ハ服者アリト、他寺ノ人物語スル也云々、

又服者遂業等例、尊勝院家維摩会記見タリ、

一、義名ノ書様(杉原二枚ヲ重テ書テ、用立紙也、札紙ハナシ、卷之、不捻押折ル也、不封極注ニ書也、)

註進 法華会初夜堅者所立義名事

断惑義童

疏四種相違義

(二ウ)

右注進如件、

宝徳三年正月十二日 堅義者実経

此義者書様ニ花嚴・三論ノ書様カワル子細不存知、雖然、華嚴宗多分如此書之間、是ヲ用畢、

一、十題ノ書様如常、

一、探題送物案文(杉原二枚ヲ重テ書テ、立紙ヲスル也、ヲシラル也、)

進上 法華会初夜堅者酒肴棚事

(二オ)

合 棚二脚

大瓶一双

鷺一双

右進上如件、

宝徳三年正月十六日 堅者実経

是モ杉原二枚重テ立紙アルヘシ、ヲシラル、

進上 法花会初夜堅義者捧物事

合紙一積(上積十帖・下積二十五束・結緒帶二筋)

右進上如件、

(二ウ)

宝徳三年正月十六日 堅者実経

以上、探題ヘ送状如此認テ、員数ヲハ不載シテ、別ニ送物代二百疋執進之、

可然様、可有御披露ト折紙ニ書テ、承俊得業ノ奉書ニテ、少輔得業順実方

ヘ遣了、退紅ノ仕丁ニ長櫃ヲカ、セテ、大童子フタコニテ、探題方ヘ遣了、

一、講師并一床エノ送物文事

講師方

奉送 法華会初夜堅義者捧物事

(13オ)

合紙一積(代四百文)

右奉送如件、

宝徳三年正月十六日 堅者実経

当講ハ修南院法印也、上綱タル間、世俗方ヲ略了、

一、一床送物ノ案

奉贈 法華会初夜堅者威儀供奉物事

合紙一積〈代六百文〉

右奉送如件、

宝徳三年正月十六日 堅者実経

(13ウ)

如此認之了、一床皆住侶也、以上送物共退紅ニモタセテ力者ヲソエテ遣了、

大童子略之、講師同之、

一、調鉢代ノ書様〈イカニモ吉杉原ヲ四ニ切テ、中ニ大書之、員数ヲハ裏ニチ  
斗サ／＼トカク也、〉

法華会初夜堅義者調鉢代

ウラノコノ辺ニ、世俗捧物代五百文

諸下行

探題、二貫文 法印、六百文

(14オ)

僧都二人、五百六十文宛 律師二人、五百四十文宛

擬講三人、五百廿文宛 得業廿三人、五百文宛

威儀師、五百廿文 從儀師二人、五百文宛

講師〈上綱〉四百文 読師五百文

散花師、四百八十文 会行事〈寛家法橋、五百四十文〉

執行〈快実寺主〉五百文 正勾当、五百文

権勾当、四百八十文

(14ウ)

合廿二貫七百九十二文

従方

威儀僧十五人〈二貫五百九十文、拝礼三人卅文宛〉 同奉取小綱百文

從僧二人、六百文 中童子二人、六百文

大童子四人〈格悟〉、一貫二百文 走童二人、二百文

力者六人〈百廿三文、廿文宛〉 又童子八人、八百文

唐笠持一人、廿文

(15オ)

寺方

講堂仏餉百文〈寺升一斗代〉 読経僧十人〈一石代、同、一貫文〉

綱掌鑑取〈同二斗代、二百文〉 小綱二百文〈同二斗代〉

公人〈同三斗代、三百文〉

以上米分

読経僧十人〈捧物代三百六文、一帖宛〉 鑑取〈雜紙二帖代四十文〉

小綱公人〈雜紙代百一文〉 小綱公人拝礼二百文

以上

(15ウ)

祈師 一貫文

装束身入賃（六具分）六百文

以上九貫百八十三文

惣合卅一貫九百七十八文

寺方助成

会料二貫八百文 助成方八貫文

亭饗料百文 油倉五百文

以上、此油倉ノ五百文ハ本堅者方へ渡ス間、不請取、

(16才)

以上、<sup>(美經)</sup>普門院日記写之、

大永元年十一月六日 擬講英憲

(あ)⑤永十年東大寺出世後見曉円法華会日記

法華会出世後見日記

一、先所作配兼日用意之、自他寺会参之仁可用意、

一、講問役人交名并三所作配一品書テ、注記方へ可遣、講問役書様折紙、

(16ウ)

法華会講問役次第（興福寺講師之時定）

初問 卿僧都

夕座 三川僧都

第二日

朝座 中納言僧都

夕座 帥律師

第三日

朝座 武藏律師

(17才)

夕座 覚現房五師（薬師寺）

第四日

朝座 若狭擬講

副問者 越後得業

夕座 永順五師（法隆寺）

以上如此書之、

当寺講師之時ハ、副問者無之、又問役ハ自リ他寺末寺、

(17ウ)

副ハ問者ハ第四日ノ朝座ニ付也、朝座ノ令懃仕也、問講畢テ聽而問者ヲ挙ル也、

一、亭差帳書遣会行事方様、

差定 明年法華会堅者交名事

々々法師

々々々々

々々々々

々々々々

右所差定之状如件、

年号月日

(18才)

一、論匠衆請定〈案文〉

請定 亭論匠衆事

一番

々々法師 々々法師

二番

々々法師 々々法師

三番

々々法師 々々法師

右請定如件、

年号月日

(18ウ)

一、注記方へ惣之会参之仁、仮名・実名・年戒書之可遣、此モ折紙、

(×説)  
講師 慈恩院僧都

法華会出仕交名

一床

探題 寺務僧正〈尊勝院〉

卿僧都 尋盛

興福寺  
深観房僧都琳弘

三川僧都賢春

(19才)

中納言僧都經胤、蓮藏院

帥律師覺祐

武藏律師重俊

二床

顕覚房五師定有

了忍房得業英祐

々々々 々々々 々々々

々々々 々々々 々々々

々々々 々々々 々々々

(19ウ)

散花師

大式公淨弁

如此書遣之、応永十年始行之時、如此被沙汰畢、

一、喚立擬講方へ可遣様〈折紙〉

亭論匠衆

一番

澄祐法師

快実法師

二番

々々々 々々々 々々々

々々々 々々 々々

(20才)

三番

々々々 々々 々々

々々々 々々 々々

如此書可遣也、

○英憲識語

○英憲識語  
応永十年始行之時、大都分祿之至、枝葉略之、

(ママ)

(あ⑥東大寺法華会初問表白)

法華会初問表白

夫今大会者、自天平之往事、既ニ為リ日域之恒規<sup>コウ</sup>、誠ニ是一天無双之大  
会、四海安全之御願ナル者歟、爰ニ問者夏藤、徒ニ蘭<sup>タケテシイニ</sup> 愁<sup>ウレシ</sup> 応候、

(20ウ)

初問ニ最尤憚リ道儀之莊觀<sup>サウ</sup>、愧<sup>ハッ</sup>文載之卑賤<sup>トモ</sup>、然而只為備法会之勝躋

ニ、纔ニ挙ク二明之問端ヲ、

論義畢後初問送句

抑一門 好<sup>ヨシハ</sup> 深シ、二明ノ疑ニ有憚リ四座依<sup>テ</sup>次ニ、両帖僅ニ揚ク題ヲ、

(い⑦天文・弘治年間出世後見英訓發給文書拔書)

一、補任 大仏殿有職阿闍梨事

(21才)

某阿闍梨 〈補任料三百五十文〉

或ハ別当未補之間、依寺門評定、所補任  
右依別当之仰、補任状如件、

年号月日

寺務代法印權大僧都英訓

出世御後見実名判

一、放請 明年維摩会豎義者事

某得業 放請之代三百五十文

右別当未補之間、依寺門評定所放請如件、

天文十一年正月八日

(21ウ)

寺務代法印權大僧都英訓

一、補任 大仏殿有職阿闍梨事

重祐阿闍梨補任料三百五十文

右別当未補之間、依寺門評定所補任如件、

天文十一年十二月吉日

寺務代法印權大僧都英訓在判

○27丁裏よりの挿入を指示。

σー補任 東大寺三綱職事

都維那祐実

(22才)

右寺務未補之間、依寺門之評定所補任如件、

天文廿二年〈癸丑〉十一月廿四日

寺務代法印權大僧都英訓

雖有補任料、今度私戒師沙汰之間、ケタミ畢、  
補任 東大寺執行職事

祐実都維那

右寺務未補之間、依寺門之評定、所補任如件、

(23ウ)

天文廿二年〔癸丑〕十一月廿五日

寺務代法印権大僧都英訓

以上二通之補任者、

藥師院佐京公得度之時、私英訓戒師勲之、則寺務之代之間、二通之補任所

望之間、書与畢、任料ハ二通ニ何ツレモ雖有之、今度得度之戒師、愚老沙

汰之間、於任料二者、ケタミ畢、

一、弘治二年辰十一月二可有法華始行之旨、寺

(23オ)

門惣別相定畢、教觀房雖為本堅者、既去年卯十月七日、依病氣ニ死去之故

二、次之膺次則公胤法師本堅者之補任所望之間、書与畢、

放請 当年法華会本堅者堅義者事

公胤法師 放請代二百卅文請取畢、

右別当未補之間、為寺門之評定、所放請如件、

弘治二年八月十八日

(23ウ)

寺務代法印権大僧都英訓

放請 当年法華会加任堅者事

訓英法師 放請代二百卅文請取畢、

右別当未補之間、為寺門之評定所放請如件、

弘治二年十一月四日

寺務代法印権大僧都英訓

一、伝聞、自今日十一月四日法華会之加行被始之由、承及畢、学乘房訓藝法師、

養舜房

(24オ)

憲祐法師、春識房訓英法師、以上三人、

同日ニ加行畢ト云々、其中ニ訓藝法師ハ為本堅者四人之内間、先年天文十

六年末、法華会之時、本堅者ノ放請ハ出畢、

憲祐法師放請、同日四日出之畢、料物〔二百卅文、請取畢、〕

一、大仏殿有職阿闍梨者、惣而六句也、

此内三句ハ末寺分、三句ハ学業ノ内ニ顕密兼相依ノ仁、法華会遂業之仁躰

ニ補任ヲ成スハ

(24ウ)

規模儀也、則当年〔丙辰〕法華会遂業之躰三人所望之間、成補任ヲ畢、

一、補任 大仏殿有職阿闍梨事

憲祐阿闍梨

右依法華会遂業所補任如件、

弘治二年十二月廿八日



寺務代法印權大僧都英訓

次淨実阿闍梨方へ同成有職阿闍梨之補任出了、同書、

(25才)

⑧慶長・元和年間某法華会日記

追加

一、慶長七〔壬寅〕十二月十九日法華会執行、

講師興修南院法印大僧都光助

探題無量寿院法印訓藝〔八十五才、卯正月十四日死去〕

会始清凉院法印真海

唄役觀音院訓盛大法師

(25ウ)

一、堅義者〔花〕淨觀、〔花〕訓賢、〔三〕良意、〔花〕実英、〔三〕澄延、〔三〕

祐藝、〔三〕訓秀

一、得業成ノ事、会〔壬寅〕十二月廿三日結願、廿四日於新造屋、年預訓盛被

披露、淨觀・訓賢〔二仁〕得精畢、  
(請)

一、同廿六日、二月堂集会、堂司淨觀、呪師実英、

一、慶長八〔卯〕正月八日、於新造屋、良意・実英〔二人〕

(26才)

得精畢、年預実英披露、永隆寺行ノ前、

一、慶長九〔辰〕正月八日、澄延・祐藝〔二人〕得精畢、

訓秀ハ阿闍梨補任〔寺務代清凉院法印真海ヨリ被申請〕、同辰年、於新造屋〔三月十五日ニ〕得精畢、已上、

一、從 寺務代補任取ル事、学侶マテ放請フトル、本堅者〔四仁〕、加任〔二仁〕、

寺務加任〔一人〕法華会堅義遂業已後、得業之補任ハ不被取、往古ハ取ル

ト云々、

(26ウ)

今度モ阿闍梨所望之人者補任ヲ取ル也、訓秀取ル云々、

一、元和四〔戊午〕五月廿三日、法華会執行、

放請衆英經・重祐・淨光〔本堅者〕、寺務代清凉院法印真海補任出畢〔料三

百五十文ツ〕、実隆〔本堅者〕

(27才)

御寺務東南院僧正増孝〔北京小野随心院与兼住〕放請補任取ル云々、已

上四人、

一、予〔加任堅者〕東南院ヨリ法華会加任堅者之補任ヲ、慶長十八十二月晦日

二頂戴、料式百卅文遣畢、

一、予從東南院本僧坊供僧之補任、慶長十九二月十九日頂戴、〔料鳥目老貫式百

文進上〕

(27ウ)

小野遣、

一、実盛〔加任〕補任東南院ヨリ、了恩〔寺務加任料ハ不知〕、

已上三人、都合堅者七仁

一、英経・重祐（二口）会式已後、其年午六月朝日鎧探題三昧之刻、得業二成  
ラル、年預訓秀ヒロウ、

一、浄光・実隆（二口）、元和五（己未）正月八日、於新造屋得精畢、年預訓秀  
権律師、

（い⑦の一部）

『一是<sup>は</sup>上へ入』〇<sub>21</sub>丁裏への挿入を指示。

σ一、補任法花会亭論匠衆事、英慶法師

（裏表紙見返し）

右所補任如件、天文九年十月十三日

寺務代法印権大僧都英訓

一、天文十六年（未）十一月十七日ヨリ法花会執行在之、探題法印権大僧都英  
訓、七十二才、講師興福寺東院僧都御房兼範、

加任堅者堅義者事、

一、放請法花会本堅者義者事、放請ノ代二百三十文、

某法師

右別当未補之間、為寺門評定、所放請如件、

弘治二年九月廿三日

寺務代法印権大僧都英訓

（裏表紙）○白紙

## 二 法華会私日記（東大寺図書館一四一・五〇二号）

○写本一四一—四九八で欠損箇所を補った部分は、四角囲みで表した。

（表紙ウワ書）

○「惣持院」朱印に重ね「東大寺上生院」  
黒印を捺する。

法華会私日記

英訓法印、淨実 □□□□  
（権律師）

（黒印「東大寺上生院」）

○惣持院  
法印重祐

（表紙見返し）○白紙

（1才）

（あ①大永元年寺務代兼法華会講師英憲日記）

大永元年（辛巳）十一月五日ヨリ法花会□□□□日

一、探題清涼院秀海法印也、探題<sup>第二度目也</sup>、

最初ノ宿坊ハ北室金藏院有借用□□勲役畢、

第二度目ノ探題ハ於上司清涼院ニ探題被勲訖、各ノ無等閑仁探題箱等諸神

御影向之事也、然者如借坊被勲畢ナハ、可然之由、各ノ秀海法印教訓被申

畢、法印返答云、探題之事、既ニ及第二度畢、又借坊之事者、事ノ外造作

儀ナル故、当坊ニテ可有

（1ウ）

沙汰之由、返答畢ヌル間、各一往ノ教訓ノ分ニ而止畢、

其後維摩会執行、大乘院殿分御堅者精義者、秀海法印也、其ノ日ノ四ツ時

分ヨリ俄カニ氣煩ヒ、色々他寺之仰天也、松井ヲ薬師ニ雖被相付、終ニ無

本腹儀、乗物ニテ当寺へ被帰畢ヌレハ、即時ニ令本腹如本ノ也、其時ノ会

奉行蓮花院被申畢、<sup>去年</sup>貴寺法花会探題敷ノ内ニ而御沙汰<sup>無勿体</sup>之由、及

沙汰畢、只今ノ秀海法印ノ病<sup>氣</sup>俄之義出来、併テ依古様之聊爾ニ歟<sup>下</sup>

（2才）

会奉行衆各被申畢、可得心事也、其日、闕如ノ精義ハ三時計ノ間ニ、東院

僧<sup>正</sup>御房御沙汰神変不思議之由、自他寺衆<sup>稱美</sup>被申畢、

一、寛正四年（癸未）正月十六日ヨリ法花会執行、探題普門院法印秀雅、御年

廿七、御宿坊者北室円祥坊ヲ、有御借用、探題御沙汰也、先規如此嚴重也、

不可有聊爾儀也、

一、講師者、密乗坊英憲擬講、講師坊（戒壇院千手堂）

（2ウ）

一、九月廿日、於清涼院秀海法印探題坊ニ、英憲擬講講師口伝被沙汰畢、則瓶

子（一雙）・鳥目百疋被持參畢、重衣白五帖ニテ被出畢、其日請用衆当年預

備賢擬講・公意擬講・英訓得業・快憲得業、以上五人、

一、十月廿日、於<sup>テ</sup>寺務代英憲擬講密乗坊ニ<sup>手番</sup>被沙汰畢、

召請衆

探題秀海法印・年預備賢五師・公意擬講・

（3才）

快惠得業・英訓得業、以上五人、

一、用意廻章ハ自探題坊被廻畢、<sup>使者</sup>ハ出納之役也、文卷ニ裏ミテ持テ廻リ畢、

〔会〕式定日ノ前へ三日計リ前キニ廻シ畢、

一、探題床ニ着座時、影向之間ノ戸ヲタテヨトノ下知ハ昼堅義ノ時ハ不下知セ也、被申訖、

一、当寺專順得業自当年秋之■比、内々京都随心院ト被申合、鳥羽谷反錢被相切畢、当寺集会評定云、彼ノ谷之事ハ

(3ウ)

雖東南院殿御知行也、於田地者自他宗之談義并講問之料也、無披露ノ義、恣之沙汰無謂、自然堂塔之修造并於会式法事等之所用ニ者、無力可被切ラ、不爾、私シノ反錢、恣之儀一向無其謂、所詮於專順得業ニ者、可被処一生不免之罪<sup>(過)</sup>科之評定一決畢、依之、法花会ノ聴衆被停止セ、会□後、伊賀国ヘ令下向、終ニ無ク免除ノ義、会□中ニ專順得業、興福寺ノ衆徒吉田五郎ヲ

(4オ)

相語ヒ、当年預備賢擬講ノ披官イヌイ垣田ノ道順カ住宅ヲ被破却<sup>セ</sup>畢、依テ如此ノ之窓<sup>ニ</sup>、法華会一日延引畢、言語道<sup>断</sup>之曲事共也、於專順得業者、法花<sup>会</sup>結<sup>願</sup>後伊賀国ヘ下向畢、終ニ不蒙寺門之免除、於田舎令入滅畢、

一、講問役三人交名并所作配一品書テ注記方ヘ可遣之、

一、当寺ノ講師之時ハ、副問者無之、問役ハ興福寺・

(4ウ)

藥師寺・法隆寺沙汰也、

一、興福寺講師ノ時ハ、副問者在之、問役者当寺之僧綱ヨリ次第第二藥師寺・法隆寺等沙汰也、

(あ②講師次第之事)

講師次第之事

一、当寺ノ講師ニケ度沙汰シ畢テ、次第第三度目ニ興福寺講師ニ当ル也、

大永元年〈辛巳〉十一月講師英憲法<sup>印</sup>

天文九年〈庚子〉十二月講師私英訓法<sup>印</sup>

此後チハ興福寺ノ講師ニ当ル也、

(5オ)

一、自天文十六年〈丁未〉十一月法花会執行在之、興福寺東院権少僧都兼範講師御勲役也、

(あ③天文九年寺務代兼法華会講師英訓日記)

自天文九年〈庚子〉十二月十九日法華会執行畢、

一、会堂之事、講堂・僧坊〈永正五年〈辰〉三月十八日ニ〉炎上以後、於中門堂ニニケ度法花会執行在之、降雨之時ナントハ供奉之童僕令乱転、其外修理等之用却過分ノ失墜等、大ニ無益之造作也、所詮於寺門ニ、雖及異義ニ、

(5ウ)

法花会之事者、聖武皇帝已來為 御行幸之会式之上ハ、何於大仏殿ニ不執行<sup>セ</sup>哉、況ヤ花嚴会・般若会・淨名会等之十二大会、多ク以テ於<sup>テ</sup>大仏殿、被執行畢、依之、講誦之高座東西仁在之、其証無紛之由、依<sup>テ</sup>多分之評定ニ、今度初テ於大仏殿<sup>ニ</sup>法<sup>花</sup>会執行畢、

一、探題西室院權僧正公順

一、講師愚身法印英訓〈六十五才〉

(6才)

法花会講師論義 ○以下、問答記事は省略。

初日〈十九日〉朝座、開白問者 興福寺龍勝院曉胤擬講

(7才)

同夕座〈十九日二座〉 寬舜得業〈陽善房得業、北之院殿二住〉

(7ウ)

第二日〈廿日〉朝座 覺清擬講、《興》春学房、龍雲院

(8ウ)

同夕座 《興》実乗得業〈了觀房得業、觀音院ノ同宿〉

(9ウ)

第三日〈廿一日〉朝座 《興》英乗得業

(11才)

同夕座 《興》訓憲得業〈谷坊〉

(12才)

第四日〈廿三日〉朝座 《興》興嚴得業、惣珠院

(12ウ)

同夕座 《興》祐算擬講、発心院

(13ウ)

○以上省略

一、初夜堅者、第二夜堅者、第三夜堅者、第四堅者、夜ハ本堅者四人、

一、第二日堅者、第三日堅者、第四日堅者、

(14才)

日ハ三人ノ加任ノ堅者ト云也、

一、十九日初日開白ノ夜モ講問二座〈在之〉別初夜之研学浄芸法印ハ、開白ノ

日ノ夕座ノ講問ニ付テ堅義畢、初日ハ初夜之研学一人之堅者ハカリ也、講

師并ニ探題ソラカエリ也、講問二座在之故ニ如此、

一、第二日ヨリ一日ニ堅者二人ツ、有之、第三日ニ二人、第四日ニ二人、合シ

テ七人ノ堅者也、

一、第五日ニ於テハ無講問<sup>モ</sup>、講師ハ結願之義式計リ也、縁起ノ奥ニ作法在之、

此ノ後行香并三札在之、探題ト

(14ウ)

末ヘノ已講トノ之役ナリ、五ケ日目ニ結願也、

一、今度自寺門、私寺務代ニ被差畢ヌル間、諸寺聴衆年戒等当坊ヨリ調畢、

一、今度於当寺聴衆ノ内ニ英嚴法印并春祐律師二人会始ナリ、權少僧都快憲ハ

雖為自リ春祐律師上衆、快憲僧都ハ、第三日ノ堅者英雅法師之精義役ニ相

定畢ヌル故ニ、会始ノ体ニ除之畢、〈次座春祐ヲ会始ニ定ル也〉

一、初夜研学ノ精義ハ頼賢擬講ノ沙汰也、第三夜ノ

(15才)

堅者幸儼法師ノ精義ハ澄芸擬講沙汰畢、於当寺ニ者、精義役ノ体三人也、

此精義者ノ体ニハ、於堅問役ニ者、無沙汰也、如此於当寺聴衆之内ニ、堅問

役沙汰之体ハ、秀覺得業・宗助得業・実紹得業・宗芸得業此四人ノミ也、

御問役ノ体、余ニ少分ノ故ニ、興福寺聴衆可有ル加増之由評定也、惣而ハ興福寺之聴衆雖七人ハ上古ノ義ト、今度ハ

## (15ウ)

十人請シ畢ヌル、則自寺務代彼聴衆ノ体相定畢、

一、此等之趣、法花会於沙汰人中ニ、自上衆次第ニ、於各々ノ坊ニ、唱会合ラ被相定畢、

一、沙汰人ハ秀覚得業・宗助得業・宗芸得業三人也、此外寺務代、会料納所快憲僧都・惣寺年預頼賢擬講・学侶年預実耀法師、依上古之例ニ、此等四人被加ヘ、以上七人ノ沙汰人也、(上古ハ十二人ノ旧記モ在之、望テ時ニ広略有ル也)

## (16オ)

一、今度七人堅者ノ体、英運法師・実胤法師・幸儼法師・興定法師、以上四人本堅者、加任三人ハ浄芸法師・英雅法師・英美法師、此内一人於テ英美法師ニ者、雖為末座、於寺務代ニ私ニ有ル由緒ノ義者、七人目ニ一人之堅者可申請之由、堅固ニ被所望間、無ッ力寺務方一口ノ分申定畢、

一、加任ノ内浄芸法師ハ雖為加任、花嚴宗ノ内ニテハ為上首間、英運法師ニ被相替、初夜之

## (16ウ)

研学ヲ沙汰シ畢ヌ、則英運法師ハ、雖為本堅者ノ内ノ一臈、第二日ノ堅者沙汰畢、実胤法師ハ自英運法師、雖為末座、本堅者相当ノ処、第二臈ナル故ニ、第二夜ノ堅者沙汰畢、

一、兼日ニ専寺并他寺一床之聴衆ノ交名、年戒ヲ付ケ、仮名・実名・坊号ヲ付テ、注記方ヨリ所望スル時遣之ヲ、

一、堅者ノ体并講問役精義ノ体、唄師・散花師、注記方ヘ注シテ遣畢、

## (17オ)

一、一床ノ聴衆并講師・読師、此等ハ京都ヘ注進在之、早々注記方ヨリ所望スル時遣ス也、

一、床賦ハ注記方之沙汰也、故ニ、兼日ニ聴衆ノ交名、年戒ヲ付、早々注記方ヘ遣ス也、

一、七人ノ堅者ノ十題、自一問五問マテ、一問一答ノ分ヲ、各々ノ堅者方ヘ、乞請ケテ注記方ヘ遣ス也、何故ノ重ヨリ後ハ不書也、論義ノ初二、初夜ノ堅者、第二夜ノ堅者ト、実名ヲ書ヲ并ニ花嚴宗・三論宗ト名ノ下ニ書キ加ヘテ遣ス也、

## (17ウ)

一、講堂ノ々童子ノ事、前々法花会之時、自リ寺務代被申付畢スル間、当年ノ法花会モ木屋ノ公人清宗ニ申付畢、則彼ノ体所望申間、無別義申付也、堂童子方ヘ油ノ代、《時ノ油ノネナリ》<sup>(値)</sup>五百文下行也、此レハ寺務方ヨリノ下行也、惣シテ油五升也、八合升ノ定メ也、油ニテ八合ノ升ニ五升ナリトモ、代物ニテ《時ノネニテ》<sup>(ママ)</sup>五百文ナリトモ法花会ヘノ堂童子ヘ下行スル也、一、今年弘治二年自十二月《丙辰》廿一日法花会執行畢、時ノ評定云、法花会ノ堂童子ハ、自今

(18才)

以後、法花会ニハ於六堂ノ々童子之中ニ、以當番ノ堂童子ヲ、則法花会ノ堂童子ニ可懃之、上古大講堂在之時、則當番衆法花会ノ堂童子懃之例ノ故也ト評定、

(あ④天文十六年寺務代兼法華会探題英訓日記)

法花会、天文十六年〈丁未〉自十一月十七日執行畢、

一自天文十六年〈丁未〉六月上旬之比、可有法花会執行之由、堅者衆各々有烈參、寺務代私英訓法印方へ被申入畢、其後於惣寺集会二度々有テ披

(18ウ)

露、則多分、一同ニ可有執行之由、一決評定畢、依之、法花会沙汰人被差定畢、六月廿二日

英運得業・榮賀得業・英実得業三人、此外寺務代英訓法印・会料納所頼賢法印・惣寺年預浄芸五師・学侶年預憲 法師、此四人ハ先規也、合七人堅者衆〈七口〉、《少将公》英澄法師〈初夜研学、花嚴宗〉、《治部卿》秀範法師〈第二夜堅者〉、《貞忍房》公海法師〈第二日加任〉、《大藏卿》隆賢法師〈第三夜堅者〉、《明順房》順定法師〈第三日堅者〉、《学禅房》延秀法師〈第四夜堅者〉、

(19才)

《乾弁公》賢祐法師〈第四日堅者〉 以上七人

一、各堅者自八月十二日加行被始畢、

一、自九月十三日ノ夜、後夜入堂、且五人於<sup>テ</sup>安樂坊、同自十六日於地藏院、二人被始之由、被治定畢、

一、九月十三日為吉日間、興福寺注記方へ、自寺務代法印英訓方、可有法花会執行之由牒畢、

其詞云、

當寺法花会来十月可有執行之由候、可被成其御心得候、目出恐々謹言、

(19ウ)

九月十三日

寺務代  
英訓法印

注記御房

一、當年探題法印英訓〈寺務代勤之、七十二才〉

一、講師興福寺東院権少僧都兼範〈御宿坊金藏院〉

一、自興福寺講師之次第ハ、當時之講師二人ツ、ケテ、被逐之畢後、第三度目之法花会ニ、自興福寺被參懃畢、

一、藥師寺并法隆寺遣触狀、九月廿六日

其詞云、ヨキ杉原ニテ折紙也、

(20才)

當年法花会、来十月可有執行候、聽衆交名并年戒可注給候、恐々謹言、

東大寺觀音院

九月廿六日 英訓

藥師寺沙汰所

法隆寺へノ狀之文言ハ同前、

年預所 杉原ニテ折紙也、

一、自他寺ノ年戒、同九月廿六日ニ取り畢、  
 一、十月廿日、於当坊觀音院ニ、手番<sup>ツガイ</sup>在之、則

(20ウ)

請用衆、前々者雖為五人、於テ今度者、惣寺衆皆請畢、当參十一人英訓法  
 印・頼賢法印・英嚴法印・宗助法印・英運得業・実胤得業・大夫得業・《当  
 年預》浄芸得業・栄賀得業・英実得業、以上十一人、

此外禅実得業ハ在田舎也、宗芸得業ハ為目代防州へ下国也、雖然三ヶ年  
 下国已満之故、剩へ当年維摩会堅者切口ノ故ニ、自寺門当年四月中ニ可  
 有上洛之由、被申下畢、則八月中ニ可有上洛之由其後

(21オ)

雖有返牒、于今至十月廿日ニ迄テ上洛之由不及風聞<sup>ニモ</sup>也、

一、信花坊英運得業、当年維摩会堅者、十月八日ニ、自他寺被相觸問、則自当  
 坊寺務代、英運得業方へ、当年維摩会催シ畢、則無別儀領掌畢、随而今日  
 廿日手番之砌ニ、十一月ニ可有法花会之旨必定也、維摩会之堅者被請取畢、  
 以後可有法花会ノ聴衆ニ出仕并問役等被沙汰敷之由、内々及<sup>ヒ</sup>沙汰畢、依  
 之旧記勘云、大永元年〔辛巳〕十一月十五日ヨリ

(21ウ)

法花会執行在之、則同年十二月ニ維摩会在之、当寺ノ堅者地藏院浄憲得業・  
 快惠得業二人、此二人則十一月十五日ヨリ執行之法花会ノ聴衆へ在会參、  
 兩人共二一ノ問ノ問役被勲畢間、則以此先例ヲ、今度於テモ英運得業ニ、

被会參、問役等沙汰在之、為後年ノ記之畢、

一、注記ノ問題七人ノ堅者ノ分、悉ク注記方へ十一月六日調へ渡シ畢并聴衆自  
 寺・他寺・末寺分悉ク年戒ヲ付テ、仮名・実名注シテ同日注記方へ渡畢、

(22オ)

一、亭論匠奉取ノ小綱ハ、法花会ノ年預ノ少綱奉ヲ取ル、寺務方ヨリ五十文下  
 行畢、  
 一、探題ノ威儀僧ノ奉ハ何レノ少綱ニ也トモ、知音次第ニ取スル也、五拾文下

行畢、今度ハ亭ノ奉取ト同シ人ニ取ラセ畢、合亭ノ奉取リト探題ノ奉取ト  
 二色二百文下行之、

一、探題ノ奉ヲハ会式ノ定日之三日ハカリ前ニ取ルヘシ、

一、自リ堅者方捧物以大童子ヲ被送<sup>ヲ</sup>畢、其返事ノ請取ノ詞云、

(22ウ)

初夜ノ研学為<sup>シテ</sup>御堅義御捧物ト、以別義ヲ百疋進上被申畢、則具ニ以令披露  
 候、相心得可申之旨候也、

天文十六年十一月十七日 行事僧清順在判

初夜研学少将公御房  
 次々ノ堅者同之、

一、探題口伝ニ東院殿へ參出申、

御樽二荷・酒代百五十文・慈仙〔廿丁、八十文〕・柿一盆、一貫文ソエテ進  
 上、以上、

(23オ)



一、法花会執行、吉日ニ、百文 幸徳井

一、用意ノ物共、二百十文〈杉原三帖〉、五十文〈カイタ一帖〉、百五十文 カ  
ワラケ、二百文 アツキ、五拾文〈探題威儀僧奉ヲ取ル少綱へ下行〉、五拾  
文 亭論匠奉ヲ取ル少綱方へ下行、五百文 酒ノ代、六百文 柴、〈十合  
升〉八斗 酒ニ入ル、八十文 タウフ、百五十文 ウトン、二百文 サ  
ウメン、百文 クズ六升、九十文 シイタケ、餅米〈用意スヘシ、赤飯用〉、  
三百六拾文、油三升代 六百文 味噌ノ代、

(23ウ)

水門ヒモノヤ申事  
木具方

《代二百五十文》短尺箱 短尺ノ札〈七十枚〉 檜扇代五十文

カンナカケ シハン 合七百分、

一、注記方へノ硯ハ、出世ノ後見方ヨリ出スト云々、瓦硯ト筆二管ト・墨一延  
ト・小刀一ツ、ヒタツカ紙ニテ柄ヲ巻ク、水入レハス土器二ツ、重テ紙ヲ  
切テ上へニ置ク《代百文ト申也》、硯箱ハ檜物師ニソゲサスル也、長サ一尺  
ハカリ、広サ六七寸也、蓋アリ、会式結願ノ後ハ出世後見方へ返也、

(24オ)

探題諸徒下行

一、大童子二人三百文ツ、中童子一人三百文、從僧二人三百文ツ、合一  
貫五百文、

《一》力者七人百文ツ、合七百分、又童子四人〈合四百文、一人別百文

ツ、

一、威儀僧卅人三貫文、聴衆ノ威儀僧五人五百文、  
《二》唐笠持一人百文、加用二人〈五十文ツ、百文〉  
一、法花会ノ堂童子方へ油ノ代五百文、寺務方ヨリノ下行ト云々、  
油ハ八合ノ升ニ五升也、油ナリトモ代物ニテ也ト下行スル也、

(24ウ)

一、一貫四百五十文 伶人方〈濃州大井莊ノ所下也、引違テ先々渡シ畢、  
此外正面等ノ骨オリ衆二三三人、〈百文ツ、合三百文〉

一、当年ノ堅者七人ノ得業成之時、維摩会ノ放請、各々三百五十文ツ、請取り  
畢、一年ニ二人ツ、得業ニ成ル也、七人ノ内ニテ初夜ノ堅者英澄法師ト秀  
範法師ト二人ハ、則当年中ニ得業ニ成ル、也、次ノ公海法師ト隆賢法師ト  
ハ次ノ年於テ伴寺ノ勲行之砌ニ、成業

(25オ)

得請令披露畢、此内於隆賢ニ者、有識ノ阿闍梨所望之間、阿闍梨之放請ヲ成  
畢、次年順定法師、同ク有識ノ阿闍梨所望ノ間、阿闍梨之放請ヲ成シ畢、  
次ニ延秀法師同ク得請畢、次年乾賢祐法師、同ク成業ノ得請成シ畢、

以上七人之堅者悉ク成シ成業ノ放請ヲ畢、

一、於放請ニ、法花会ノ本堅者ニ加任ノ堅者、悉ク放請ノ代二百卅文、  
一、成業成之放請代、阿闍梨并得業ノ放請之代

(25ウ)

各々三百五十文ツ、也、

一、後年ノ本堅者四人へ各々成シ放請ヲ畢、此四人会中ニ取リ放請ヲ畢、衣ニスミヲ入畢ヌル也、其四人ハ則良順房実雅・春学房英海・教観房珍賢・学乘房訓芸、

以上四人、後年法花会本堅者也、悉ク成シ放請ヲ畢、各ノ放請之代二百卅文ツ、被持サ畢、

以上、天文十六年〔寺務代〕私英訓法印〔七十二才ニテ〕探題勲役之私日記也、

(26才)

一、阿闍梨ノ放請ヲ取シ各人ノ維摩会ノ聴衆ニ被渡ラ時ハ、又重テ取テ維摩会得業ノ放請ヲ被渡ラ也、阿闍梨ノ得請ニテハ聴衆ニ渡ル事ハ不叶也、又阿闍梨ノ得請ノ体ノ維摩堅義遂業之時モ、又重テ取テ維摩会得請之放請、遂ル会式ヲ也、

一、亭論匠衆ハ六人新ク被ル、望人体在之時ハ、補任ヲ出シ畢、補任料三百五十文ツ、也、惣シテ論匠衆六人ノ体、対シテ御寺務ニ望ミ次第ニ、被成御補任ヲ也、

(26才)

非ル寺次第<sup>三ハ</sup>也、則愚身、普門院秀雅僧正御寺務之時、於彼ノ御院家ニ、卅講御執行在之、英祐法印卅講御結願之次日、愚身ヲ召具シテ、此体論匠衆ニ被加ヘテ、可給之由所望被申畢ヌル処ニ、應而惣持院英順得業ノ出世ノ

後見ニ被仰付ケ、英順得業ヨリ、論匠衆ノ放請ヲ被出畢、則三百五十拾文遣畢、其ノ放請ハ三面ノ僧坊炎上ノ時、焼失畢、其以後紛失之放請ヲ、会料之納所英憲法印方ヨリ取り畢ヌ、近年無御寺務、未補時ハ、自会料之納所、補任ヲ

(27才)

只取ル也、無補任料ハ也、

(あ)⑤弘治二年寺務代兼法華会探題英訓日記

弘治二年〔丙辰〕自八月之比、四人ノ本寺堅者ト三人ノ加任ト七人ノ堅者、対寺門ニ、近年法花会執行無之間、当年中ニ御執行頼存之由、於新造屋ニ被披露畢、各評定云、惣寺無人衆之故、別而者又天下惣別寺領等為祈祷ノ、会式執行目出之旨、学侶一同之評定也、

堅者衆

良順房実雅〔花嚴宗、初夜研学、法自相、精義者快祐擬講、興ノ蓮成院〕

(27才)

第二日了識房淨美、花嚴宗、一因違三、精義者興ノ窪転性院春寛房

第二夜春学房英海、花嚴宗、当寺普賢院精義者栄賀擬講

第三日栄順房憲祐、三論宗、一因違四、精義興ノ慈心院

第三夜学乘房訓芸、三論宗、法差別、精義者長禪房擬講、《興ノ》珍蔵院

第四日春識房訓英、三論宗、局通寸、精義者浄芸擬講、《東》地藏院

第四夜無量寿院公胤、三論宗、有法差別、精義者興ノ成身院

当年之次第、聴衆両宗之次第、《花嚴宗》次第散花之体之事

次第聴衆ハ金珠院浄仙房阿闍梨宗快也、

(28才)

金藏院未被勲散花師ノ役<sup>ヲ</sup>之間、雖可為彼之体、当位律師之故ニ一床之可為出仕歟、於密宗<sup>ニ</sup>者、於<sup>テ</sup>一床出仕之所役無之故ニ、次之膺次之浄仙阿闍梨へ撰定ル也、

一、当年之次第、散花之体ハ忍辱山可為知恩院之貞堯房弘助法師也、

一、会料之事、濃州大井莊近年不納故、自堅者衆、惣寺へ助成之事被申送畢、惣寺ヨリ返答之、折節、自防州陶方、家之重

(28ウ)

(宝) ユキノカマ 室 雪 筌 天目〈内白〉・水指・玉 閑 繪五色上畢、故ニ売次第二百貫文

分助成可申也、当座ノ事ヲハ先ツ々為堅者衆ト有<sup>テ</sup>借錢、会式ヲ可被調之由、返条也、此外会料不足之事者、如天文十六年会式、各堅者衆被積錢沙汰<sup>セ</sup>、会式興行可在之、自惣寺返事也、則堅者衆有領掌各加行事被始畢、

一、初夜研学良順房実雅者、九月廿七日ニ加行被始畢、

(29才)

一、於当坊十一月九日ニ手番調之、惣寺衆七人、其外寺僧若輩ノ衆六人、合十

三人、二百四拾三文〈市ノカク物〉、百廿文〈酒一斗二升〉、《長合ノ升ニ》

白米一斗八升、後段者〈イノコ餅〉、同米壹斗五升、

以上

一、十一月〈十三日夜・十四夜・十五夜、三ヶ夜〉後夜入堂畢、以上兩衆七人、

於テ無量寿院ニ同時ニ被沙汰畢、

一、同日、薬師寺・法隆寺、注記方へ法花会執

(29ウ)

行事牒畢、吉キ杉原ニテ折紙也、

当年十二月中旬之比、法花会可有執行候、聴衆交名并年戒可注給候、恐々謹言、

御寺務奉行

十一月十日

觀音院法印英訓

薬師寺

法隆寺

〈文章ハ兩寺同也、〉

沙汰所

年会所

注記方牒送状云、

当寺法花会来十二月中旬之比、可有執行之由候、可被成其御心得、目出、恐々謹言、

十一月十日

御寺務奉行

注記御房

觀音院法印英訓

(30才)

一、探題松明用意ニ廿五所山ノ松木三本モライテ切畢、人夫五人在之、此内杣

一人、《長合》米一斗、硯水五十五文、

講師ハ重衣ニテ白五帖、探題ハ重衣ニテ常ノ袈裟ニテ、口伝也、

一、十一月廿日賴賢法印、講師口伝在之、

鳥目百疋并二瓶子ノ代十疋〈相ソエテ〉被持畢、

時ノ請用衆  
法印英運、英雅擬講、興定得業、英澄得業、英実得業、年預五師浄芸ハ依

テ悪氣ニ不被成出仕也、

以上成業衆八人、此外若輩衆五人請用之

(30ウ)

後段用意〈在之〉、麵類・スイモチト、〈飯ノ時ハ白衣ニテ賞翫〉、

百文〈市ノカイ物〉、《長合》白米一斗五升 百文酒一斗ノ代、百文後段ノ

素麵ノ代、 以上講師口伝

一、会式吉日十二月ノ十五日・十七日・廿一日、以上三ケ日、

十足幸徳井へ遣畢、折紙ノ口ニ十足遣之由注ル也、

十月廿二日

(31才)

一、十一月廿三日ニ自他寺ノ聴衆年戒取り畢、杉原ニ折紙也、

其詞云、

法花会聴衆年戒

《探題》英訓法印 《講師》頼賢法印 《会始》英運法印 浄芸擬講

栄賀擬講 興定得業 英澄得業 公海得業 隆賢得業 延秀得業 英実

得業 以上

(31ウ)

一、当寺ノ分ハ以承仕<sup>ラ</sup>年戒ヲ取也、出納他行故ニ承仕<sup>ラ</sup>雇フ也、

法花会 興福寺聴衆、年戒

各仮名・実名次第仁、御沙汰候而、年戒被相付而可給候、

十一月廿三日

法印英訓

一、折紙ノ口ニ如此ノ書テ、文卷ニ裏ミテ使者出納ニ渡シ畢、

私云、興福寺ノ坊号ヲ一々ニカナニテ書テ出納ニ内ニ持セハ、可然歟、  
(仮名)

(32才)

一、探題ノ威儀僧ノ奉ヲ取ヲハ、会式定日ノ前へ三ケ日計リサキニ、何レノ少

綱也トモ、知音ノ小綱ニ奉ヲ取ラスル也、今度ハ小綱賢栄ニ申付ケ畢、

一、亭ノ論匠ノ奉ヲモ同ク少綱賢栄ニ申付、則十二月十六日ニ各々ノ奉ヲ取り

畢、会式ハ当月廿一日必定也、

一、用意廻章ノ会式定日ヨリ前三ケ日計前ニ廻シ畢、出納文卷ニツ、ミテ持テ  
(包)

廻リ畢、

(32ウ)

一、催義名事、

明後日〈廿一日〉可合出堅義々名給之由、探題法印御房所候也、仍執達如

件、

十二月十九日

興定

良順御房 余ノ六人ノ文言同之、

一、後年本堅者四人之放請事、会中ニ成シ畢又、十二月廿二日

英光法師〈禪宗房〉 光憲〈觀乘房〉

(33才)

經宗〈少輔公〉 快円法師〈深長房〉

以上各々二百卅文ツ、放請料被出畢、

於四人ノ本堅者ノ内ニ光憲ハ、依テ現病ニ在田舎也、会式之時分ハ無寺住、

又於経宗二者、関東下刻之間、至テ今日廿二日ニ雖無上洛、現病遠他行之事者、寺門ノ之掟旨之故ナルカ故ニ、成シ放請ヲ畢、

一、《初夜研学》良順房《二百文》 《惣持院》第二夜英海《二百文》 《了識

房》第二日浄実《三百文》 第四夜公胤《二百文》 是ハ祝言計リニ助成

遣了、

(33ウ)

学乗房へハ当尾イモ谷ノ地子一石五斗、当年辰ノ地子助成ニ遣畢、於憲祐者、以十合升ヲ五斗遣畢、於訓英春識房ニ者、十貫文ノ積錢引キ違テ寺門出シ畢、来年巳ノ三月中ニ可有<sup>ル</sup>返弁トノ約束也、利分者助成ニ故実スル也、七人ノ堅者へ各少分を令助成畢、

一、探題出仕之時、初ノ開白ト結願ト計リ、手輿ニハ乗ル也、中間ノ出仕ニハ短尺箱ヲ出ス時ハ、彼ノ箱ニ恐ル、故ニ、輿ニハ不乗也、步行也、私探題

(34オ)

二ヶ度勤之、第二度目十二月廿一日ヨリ執行畢、八十二才

以上

以英訓法印自筆写之畢、

元和四年戊午閏三月廿五日法印実英《写之畢、》

(い)⑥天正五年浄実法華会講師日記

○以下は38丁才まで本冊法華会記録一二号、一四二一四一四法華会講師日記の写し。省略する。

(38ウ)

以浄実擬講之奥書也、

元和四年戊午閏三月廿九日法印権大僧都実英

来五月中旬之比、法花会可有執行之旨、必定也、然予講師相当之間、写之訖、

(39オ)

(う)⑦文明八年出世後見発給文書拔書

○一四二七五出世後見之日記の55丁才《中世東大寺記録出世後見・俱舎三十講關係史料》東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二一六、七九頁》と同文の記述であり、省略する。

(39ウ)

寛永八年辛未七月日《清凉院法印実英之以本写之畢、法印権大僧都重祐》

(ち)裏表紙見返、裏表紙) ○白紙

### 三 法華会探題・講師拔出（東大寺図書館一四二・四四七号）

（表紙ウワ書）

専寺法華会探題講師拔出

権大僧都成泉

（表紙見返し）○白紙

（1才）

大永元年巳十一月五日始行、講師（密乗坊）英憲擬講（三論宗）

探題清冷院秀海法印（第二度）（会始堅者）

専寺講師時副問者無之、問役ハ興福・薬師・法隆三ヶ寺沙汰也、他

寺講師時、副問者在之、問役ハ専寺之僧綱次第・薬師・法隆二ヶ寺

ノ沙汰也、

寺務代英憲

寛正四（癸未）正月十六日始行、講師英憲擬講（三論）

探題普門院秀雅法印（廿七齡、宿坊北室円祥坊）

講師次第、専寺講師二ヶ度沙汰畢、第三度目他寺ノ講師沙汰之、

会始

堅者

（1ウ）

天文九庚子十二月十九日、講師（観音院）英訓法印（三論）

探題西室院公順權僧正

会始

堅者

一、会堂ノ事、講堂僧坊（永正五年辰三月十八日）炎上以後、於中門堂二

ヶ度執行ト云々、法華会之事、聖武皇帝已來為行幸之会式之上、何於

大仏殿、不執行哉、現華嚴会・般若会・浄名会等之十二大会、多ク以

於大仏殿被執行畢、今度始而於大仏殿執行了、

寺務代英訓法印

天文十六丁未十一月十七日、講師（興福寺東院）兼範權少僧都（法相）

探題観音院英訓法印

会始薬運法印

堅者本堅公胤、加任訓薬

初夜（花）英澄、第二夜秀範（加任）・公海、第三日隆賢（法）・顯

定、第四夜延秀（法）・弁祐、

精義

（2才）

弘治二丙辰十二月廿一日講師頼賢法印（八十二歳）

（寺務代英訓）探題観音院英訓法印（第二度、八十二歳）

会始英運法印

堅者初夜研学（花）実雅、第二日浄実、同夜英海、第三日憲祐、同夜

訓芸、本堅公胤、加任訓薬・憲祐、第四日訓英、第四夜公胤

精義 専寺 第四日地藏院擬講

他寺 初夜快祐擬講、第二日春覚房、同夜英賀擬講、第三日慈

心院、第三夜珍藏院、第四夜成身院

上生院淨実擬講義

天正五丁丑十二月講師〔北林院〕隆賢法印〔三論〕

北林 隆賢

探題上生院淨実法印〔七十一才〕

会始

〔花〕宗憲、添〔三〕訓盛、第四日〔花〕淨賢、添〔三〕英光

堅者 初夜〔花〕快円、第二夜〔花〕真海、添〔三〕定賢、第三日東

海、第三日宗憲

精義〔専寺・他寺〕

〔2ウ〕

応永廿二乙未正月始行〔普門院〕講師

于時寺務

探題尊勝院権大僧都光経〔賢春記二八探題寺務云々〕

会始

堅者

精義

興福寺修南院

慶長七壬寅十二月十九日始行光助大僧都〔法相〕

探題無量寿院訓芸法印〔八十四才、卯正月十四卒〕

会始清涼院真海法印〔寺務代〕

堅者〔花〕淨観、〔花〕訓賢、〔三〕良意、〔花〕実英、〔三〕澄延、〔三〕

祐芸、〔三〕訓秀

精義

〔3才〕〔元和四年五月度分省略〕

〔3ウ〕〔寛永九年十一月・明暦四年五月度分省略〕

〔4才〕〔寛文六年十二月度分省略〕

〔4ウ〕〔延宝八年十二月度・宝永元年十一月度分省略〕

〔5才〕〔享保元年十一月度分省略〕

〔5ウ〕

一、応永廿巳正月十八日始行、講師

探題

会始

堅者第三夜重弁

一、永享十一年

法花会探題実相坊弁法印隆盛、花蔵坊伊与法印寛英兩人也、会

始密乗坊卿僧都良祐

寺務西室院権僧正

興福寺慈恩院

一、永享十二年壬子正月十二日始行、講師大納言権大僧都任円〔法相〕

探題西室院権僧正

会始〔弁権大僧都・卿権少僧都・侍從権律師〕

堅者第四夜朝乗

精義 専寺伊与権大僧都、侍從権律師、性実擬講、延海擬講

〔6才〕

他寺 源息房権律師、任観房権律師、光耀擬講

寺務秀雅法印

一、文明三年卯九月六日始行、講師〈浄法院〉大納言権大僧都任円〈法相〉

探題普門院秀雅法印

会始弁権律師賢憲、少輔権律師順実

堅者七人、初夜〈花〉行盛、第二夜〈三〉東南院、第三日〈三〉良

恵、第三夜東室光任第四夜〈三〉恵延、第四夜〈三〉顕覚

精義 専寺四口 聡海僧都、澄春僧都、盛海権律師、順実権律師

他寺三口 寛尊権大僧都、実悟擬講、寛心擬講

別当東室

一、文明九年丁酉閏正月廿五日始行、講師延覚権少僧都

于時寺務

探題東室光任僧都〈但雖為未遂講任先規云々〉

会始重忠律師〈是ハ擬講ヲ不經律師下云々〉

堅者

精義七口 専寺四口、他寺三口

(6ウ)

一、文明十三辛丑四月廿日始行、講師禪識房権大僧都英祐

探題普門院権僧正秀雅〈第三度目〉

会始卿権少僧都澄延〈花嚴宗〉

堅者 初夜〈花〉円盛、第二日〈花〉順円、第二夜〈花〉秀範、第三

日〈三〉実友、第三夜〈花〉英定、第四日〈花〉英経、第四夜

〈三〉宗順

精義 専寺一澄延権少僧都、他寺三〈各重役〉実心権少僧都、兼光

擬講、興弘擬講

寺務東室隆実僧正

一、宝徳三辛未正月十六日始行、講師修南院法印

探題東室僧正隆実

会始

堅者 〈花、良家〉実経〈十五才〉、〈三、良家〉公恵、〈相模〉宥憲、

〈余者分明追而可考〉

出世後見延海法印

(7才)

寺務尊勝院

一、応永十年 始行、講師慈恩院僧都

探題尊勝院僧正

会始蓮藏院〈中納言〉経胤僧都

堅者

精義

一、応安二年四月十日始行、講師

探題

会始按察律師春宝

堅者七口

精義

(7ウ)

一、応永卅五戊申潤三月廿三日始行、講師法眼和尚光実



探題西室〈房惠法印〉

会始

堅者

精義

一、明応七戊午

講師大夫僧都

不分明

探題禪識房法印

会始

(8才)

堅者

精義

別当僧正

一、応永廿九壬寅十二月十七日始行、講師弁雅権大僧都

探題〈東室光海法印・普門院秀經法印権大僧都今年被任云々、両探題〉

会始西室房宣権少僧都

堅者初夜經宗、第二夜光実、第三夜盛賢、第四夜光真、

隆盛〈探題東室〉 寛英〈探題普門院〉

精義 専寺初夜題者東室、第二夜探題秀雅、第三夜良尋〈探題東室〉

他寺 専他不分明、精義清覚〈探題普門院〉

(8ウ)

一、応永五年十一月 始行、講師重俊擬講〈仮名武蔵〉

探題

会始

堅者

精義

一、応永十六年

講師覚祐

探題

会始

堅者經顯

精義

(9才)

一、応永十三丙戌二月廿一日始行、講師光經律師

探題

会始

堅者

精義

一、講師光經律師、不經已講、昇綱位、講師勤仕之条、他思遺恨之、准

講宣下了、有別記、

(9ウ)

別当東南院

一、応永八年後正月四日始行、講師

探題実演法印・弁実大僧都、任此職

会始

堅義

精義

(以下余白)

(10オ) (10ウ) (天正五年十二月擬講浄実撰法華会講師日記(本冊法華会記録一二号、一四二一四一四号第一丁)第二丁表、第八丁の写。省略)

(11オ)

御後見櫃ノ古記

一、聖実僧正房俊探題ニテ御他界ノ時、会料先用下行之時ハ、探題ヲハ取手無之、仍東室僧正康海先年ノ探題ニテ御ワタリアル間、探題分ニ成申サレテ、先用分被召了、

一、永享十一年法華会ハ、探題ハ実相坊弁法印隆盛・花藏坊伊与法印寛英兩人也、会始ハ密乗坊卿僧都良祐ナリ、爰ニ伊与法印寛英、永享十一年他界セラレタリ、両探題ノ花藏坊ノ支配分ヲ卿僧都良祐ヲ探題分ニナサレ畢、仍支配分是ヲ取ル、是モ先規ヲ勘テ見時、北室法印ノ日記東室ニ在之、彼ニモサヤウノ記置アリトテ御寺務ヨリ如此沙汰セラレ畢、

(11ウ)

(七行余白)

亭番論義表白

講スルヲ一乗ヲ而十座莊ノ断揄ノ之威光ヲ開ク事八軸而、五日備フ社壇ノ之御味ニ重テ簡シテ四口ノ碩才ヲ、令ム叩<sup>ナラ</sup>四双之論義ヲ、若爾ハ者長吏ノ運久ク諸徳ノ学昌<sup>サカンナラン</sup>矣、

以上随喜導師

(12オ)

講師口伝(北林院)

一、旧記云、注記磬ヲ打テ、其後呼行事小綱ヲ来ル、其時始縁記初日ニ有口伝、終ヌレハ小綱帰ル、次勸請神分尊有之後挙<sup>ク</sup>経ヲ、其ヲ見テ問役歌ヲ挙ク、講師先表白、其後牒ヲ取、香呂持、答ノ時ハ如意ヲ取ル、終ヌレハ、注記、侍ヲ召テ講下ノ鐘ヲ打ス、其聞テ下ル、後々ハ講問計也、

一、口伝云、小綱ニ為紙燭ノ蠟<sup>カ</sup> (燭カ) 遣之、縁記正見為也、後々ハ散花ハテ、聴衆床ニ着座之時、聽而挙経ヲ、

一、経講様事、開白ノ時無量義經ト第一卷トヲ講、後々ハ前次ニ一卷ツ、講之、第四日ハ八卷ト并ニ普賢經講也、次捧講演説切、影向天神地祇増樂ヲ、奉副威光尊之廻向之句有之云々、

一、結願作法之事(第五日)蓋番差事、如初日勸請至心、勸進尺迦尊等如常、次ニ是故普賢以下ハ明<sup>ス</sup>普賢ノ徳ヲ也、五日ノ勤行ヲ法界衆生ニ廻向ス、是ヲ名<sup>ク</sup>訓廻向ト、如此結願畢テ後、講師<sup>ウシロヘ</sup>後ネチムク

(12ウ)

様ニスレハ、注記意得テ呼<sup>テ</sup>侍ヲ、鐘ヲ打ス時退出、下乗正ヲ出時ギ、吹キ出ス也、

一、卯月廿七日ニ講師口伝ニ、興福寺喜多院空慶僧正へ参畢、同探題伝受仁、正源院訓賢法印令同道、是最初ニ探題被伝授畢、其次ニ講師口伝スル也、其様ハ法華会縁起一返被読之、空慶云、縁記読・表白読各別也、表白ニハ上声・返声在之、縁記読ニハ返声ハカリ也云々、訓廻向

ハ、重テ可含相伝也云々、

読師ハ令精進、懸<sup>テ</sup>御仏、毎日縁記一返并朝座・夕座へ会講問可行之云々、  
当寺ノ旧記ニハ其趣全不見也、

但、訓秀ハ探題伝受、他へ不可致旨状ヲ被乞間、種々勘旧記処ニ、其  
趣全不見及、先年訓芸法印探題之時、一乗院へ被遣状在之、則其趣ニ  
マカセテ他へ不可有伝受之間、正源院ヨリ被遣也、於<sup>モ</sup>当寺、御門跡・  
院家衆在之者、他へ伝授勿論也、凡人ハ他へ伝受不叶云々、実説歟、  
不知之、其時之

(13才)

使僧訓賢探題ヨリ訓秀ヲ被雇間、召三人喜多院へ参也、

(以下余白)

(裏表紙) ○白紙

## 四 法花会日記（東大寺図書館薬師院文書二・二九四号）

○紙背文書があるが省略した。

（表紙ウワ書）

延秀

法花会日記（天文九（子）執行在之）

（表紙見返し）○白紙

（1才）

法花会条々事（天文十）<sup>（九）</sup>

一、八月廿七日為先途者、於唐禪院二季講問砌、惣寺・年預唱集會、會式事披露畢、連々雖經其沙汰、八幡宮造替并上遷宮・転害会以下、至去年打続故、難調置候、於今者必可有執行、然者可致加行之旨、先途者へ被出集儀之趣<sup>一藤英運</sup>返答了、<sup>五師頼賢</sup>

（E）

一、□後順次遂會合、大方返条分差間、用脚等之事、致入魂、弥々嚴密二可及沙汰之由、申談、九月十一日 於地藏院二惣寺衆悉令召請、則從中飯各皆參畢、構後段酒勸申、於其席會式沙汰人可被相指

（1ウ）

之意□文、依申合則仁体被定畢、

沙汰人（本来沙汰人擬講以上不指之、但依事可有故実歟）

秀覺、宗助、宗芸、会料納所快憲、寺務代英訓

於当日用脚等沙汰無之、至晚各退散畢、

一、先途者、遂樂会要脚并加行定日等可被申談之由、英雅住坊於成福院對ヤニ致參會、種々評定在之、所詮各於無其便者、惣寺物被用之、可有會式執行之旨、評定畢、連々依之去八月廿七日二モ、於先途者、無其便故、為寺門被住興隆心、以他足可被執行旨、懇望之披露畢、無兎角儀為

（2才）

惣寺被遂領納、被催加行上者、于今至、用脚事、全不可存先途者旨、内覺悟事決定畢、雖然、為向後以使節、惣寺・年預并寺務代・其外沙汰人中へ、任先段御催、加行始可申示者、會式事弥々嚴密二御執沙汰頼存候旨、被仰送、可然旨多分評定故、実胤（二藤）・英雅（當沙汰所）兩人、為一藤所指之、先途者評定旨申之他、各無別儀返答故、則簡吉日、同月廿七日一藤英運・（初夜研学）浄芸・英雅、<sup>（以上三）</sup>□□□被始加行者也、同十月九日（二藤）  
実胤（二人加行始）

（2ウ）

「一」興定・英実（二人加行、）同十八日幸嚴加行、祈師各有之、堂方也、  
一、堅者住坊服者事并御茶衆服事、依□事、他寺東院殿へ、從寺務代英訓法印被尋申處、曾以不苦子細之、仍今度禪実房幸俣如此勤役畢、然處出仕之砌、大雨フリ畢、向後者但無御益歟、

一、加行者觀音講出仕事、會式当月ハ無出仕、其前月マテハ有テ出仕、問者探給畢、維摩会同之、

（3才）

一、用脚事、依難調、從惣寺七人堅者、可有談義之旨、為寺務代英訓法印被申

出了、各令会合、凡此会式天平勝宝四始行已後、至当年既及七百九十余年、天文九庚子

為此度先途者非例如何之由重々雖有申事、不可為例旨、寺務代一行可出申

由、懇望之条、為先途者身上、似煩敷、專又於用脚無之者、会式不可成遂

業無力同心了、但初夜研学廿貫文、余十貫文、興定ノ本堅者四人目拙者ハ寺家ノ加人悦酒相手

之故、為失墜<sup>(以外)</sup>□□条、其旨披露處、准例如何之由煩敷

(3ウ)

<sup>(寺)</sup>□□□發心院長行擬講、堅精・手番然處彼体法タル間、以故実纔三百足

分積錢了、此外威儀僧以下如形一献在之、但為随意上思之也、

一、威儀僧之事、服者不可然之間、除畢、

一、加行事、元日ハ御前サンケ、於住坊用之、則着白五帖、寺内悉并春日參詣

了、

一、加行中寺門結解以下出仕事、不然之、内々参会限制了、

一、霜月五日於寺務代住坊、手番在之、<sup>(請定無之)</sup>修学者十人計会人者畢、

(4才)

一、後夜入堂事、<sup>(三ヶ夜、此内一ヶ夜)</sup>十一月十一日淨芸・英雅・英実、於地

藏院沙汰畢、同十四日ヨリ英運・実胤・興定・幸儼、於信花坊沙汰了、大

仏・八幡・春日厚紙袋一ツ、用之、白米二升ツ、御ヘイ載畢、別無施物

之、

一、探題<sup>(西室院公順僧正御房)</sup>御一人御勤役畢、

一、講師觀音院英訓法印勤役畢、時ノ一稿也、

一、読師安養坊春定大<sup>(中門堂方一稿也)</sup>

霜月廿四日、於寺務代向役手番在之、筆者

(4ウ)

□前□一人被語了、年戒調次第沙汰之、

一、堅者并当寺聴衆皆下事、依寺門無物、以切符故実畢、当下行無之、

一、会場者、於大仏殿執行畢、堅者座ハ西入口北脇在之、

一、義名事、極月十五日探題ヘ出仕、隨身物二字懸名乗・実名、十題論義・因

内<sup>(十)</sup>義名三論□多賢聖分認給如旧記、合三色持參之、伴直垂着下部、

<sup>(葛籠)</sup>ツ、ラノフタ持之、■入了、二字十題ハ懷中、時宜之事、本者從僧

(5才)

具之、仍從僧彼フタヲ持、堅者跡ニ出仕、ミスノ外ニ櫛ニ蹲畢、先着座、

次探題目ヲ見合謹礼在之、其後彼ツ、ラフタヲ持參、御前推之、其時十題

御尋ノ時、袖下ヨリ進上之、今度略義故、出世奉行頼賢渡之、一番ニ二字

出之、以之則奉行參、御前披露畢、重而十題奉行渡之、次出仕畢、依無從

僧今度ハ堅者直ニツ、ラノフタヲ隨身了、此義不可然、免為略義上ハ、直

垂着ツ、ラノフタヲ御櫛マテ具之、彼フタヲ可持之事ト

(5ウ)

□人モ在之、堅者重衣白五帖、

一、加行会中沙汰之、

一、探題・講師不加行、

一、堅者沙汰次第事、(加行後夜入堂義名ヨリ会堂出仕、)

一、極月廿五日為新得業、兩人中藹衆初而集会出仕在之、御請人者、自以前披露砌中座可許可旨、決定ノ上、以少綱彼兩人被催畢、其時兩人着座了、自余中藹衆者不能披露、中藹畳出仕了、集会所未

(6才)

座拈二被敷之、得業一例量也、遂業已後、中藹惣寺集会出仕在之、大湯田伴寺・方広衆座被着畢、

維摩会

一、御請事、正月乃至極月随意也、(年中二人守之、)

一、堂方読師僧(上十人)下行事、会式ノ砌、当下行壹石(寺升)廿足余哉、又得請ノ時石(寺升)・四百十二文別下行畢、堂読師方へ交名ヲコイ人別支配畢、

一、中藹修正出仕、鈍色白五帖・草履用之、

(6ウ)

一、大殿修正中藹畳ハ薄縁用之、

寺升一斗

一、法花会時、於堅者会料納所饗料代請之、請取如例、

一、於修理納所、油倉所出五十足請之、(本堅者四人分也、)

一、中藹於永隆寺ヒサシノ間出仕了、

(從儀)

一、□□ 出仕内饗出仕畢、

一、□者從寺門請分八貫五百文(助成)二貫八百文(皆下在之、)

一、中藹解除会出仕者第四床也、(着座)第五床ハ本堅者放請者懸腰之、當時ハ

若輩ノ面々各義放請衆ノ外ハ床外立畢、

(7才)

一、今度論匠衆六口之内、英寛・延超二人成業ナリ、亭饗料聴衆分ト論匠分ト二口宛下行先規也、此旨勸学院頼賢法印私記、年預覚悟様被注置、古キ日記ニ在之、

(7ウ) ○白紙

(後補裏表紙見返し)

紙数八枚

貞享元年九月日修覆

法眼実宣

(後補裏表紙) ○白紙

# 五 法華会短尺箱日記（東大寺図書館一四二・四二九号）

○校合作業のための朱合点などは省略した。

（表紙ウワ書）

実秀法印

法華会短尺箱日記

（朱印『惣持院』）

（表紙見返し）○白紙

（1才）

## ①探題弁玄大僧都記

応永八年後正月四日法華会始行

一、探題ノ法則、北室殿ノ御日記ヲ大夫得業シテ、東南院殿ヨリ申請テ大都致沙汰之處ニ、札箱之様并札奉納之様不見之間、後正月二日参于修南院尋申之處ニ、短冊箱シタ、ムル様、短冊奉納之事ハ口伝在之流ニ多キ事也、其職ニナラヌ人ニハ申マシケ

（1ウ）

レトモ、探題ニテ御渡候ハ、口伝申サント被仰也、

一、箱ニ緒ヲツクル様、蓋ニモ身ニモアナヲ二モミテ緒ヲ留ムル処ヲ其内ニナ

シ、惣ノ緒ヲモ内ニナシ様ニツクル也、身ノアナヲハ蓋ノシタニナル処ニ

アクル也、

一、紙シク様、コワ杉原ヲタケヲ箱ノソコノヒロサニキリアワセテ、箱ノハシ

ヘナル方ヲ一分ケヲカケテヲリテ箱ノ前ノ方ヘ立ヘシ、

（2才）

サテシキテ、奥ノキワヨリアマリヲ立テ、上ヘキスル様ニ引ヲ、ウ也、

一、ツリ緒ハ、カウヒネリヲホソクシテヨリ合セテツル也、水引ハワルシト被

仰間、今度ハウスヤウヲカウヒネリニシテヨリ合セテツル也、

一、ツリ緒ムスフ様ハ、箱ノ内ヨリ引出シテ、両方ヲワナニムスヒテ、大概ヒ

ネリ合セテ上ノ方ヘサシカウ流モアリ、又蓋ト身トノアイヘヲシ

（2ウ）

入ル流モアリ、又ヒネリハセテ、輪ノ様ニ指ニハカリニマキテ、箱ノ中ヘ

ヲシ入ル流モアリ、三流也、

一、短冊奉納ノ様ハ、ソトワ以ヲ左ヘナシテ、内明五枚重ネテ奥ニヲク、因明

五枚重ネテハシニヲク也、重スル様ハ五問ハイチ下也、次ニ四問、次第二

上ヘカサスル也、一問一番ノ上ニヲク也、二問ヨリ五問マテハ文字ヲ上ヘ

向テヲク也、一問ヲハ文字ヲ下ヘナシテヲク也、

（3才）

一、札ヲ二トヲリ中ニ奉納スレハ、箱三ツニワケラル、様ニマクハリテヲク也、

箱ノ両方ノキワト中トヲアクル様ニヲク也、

一、朝ヨリ札ヲ奉納シテツクエノ上ニ置ニ、屏風ヲ引マワシテ、人ニイロワセ

テ、我身ニ向テ置ヘシ、出候時ハ箱ノウシ取テ、会堂ノ侍ニ渡候也、侍ハ

会堂タナノ南ヨリ北向ニナリテヲク也、

(3ウ)

一、短冊箱出事ハ、<sup>(探)</sup>短題ノ初年ハ修学者、後年ハ侍法師出也、二番ノキタハシマテフリテ渡也、西院家ハ初年ヨリ侍出《畢》也ト云々、

以上修南院ニテ相伝分大概記之、被<sup>テ</sup>仰之、於<sup>モ</sup>当寺ニ、自方々当院へ被尋云々、

応永八年後正月 日 権大僧都

(4才)

## ②某撰聞書

法華会、応永八〔辛巳〕曆潤正月四日ヨリ始行、時之寺務東南院、両探題

実演法印・弁玄大僧都、弁玄任此職出仕之用意、北堂故大納言法印日記ヲ

借申、被致沙汰、但札奉納ノヤウ、<sup>(様)</sup>彼日記ニ見ヘサル間、興福寺ノ別当修

南院殿ニ罷向尋申サル、更ニ口伝ナキ事ニ候ヘトモ、既明日会 候、

当職事ニテ候間、口伝申

(4ウ)

トテヲヒタ、シク トヒシノ由被申ケルト物語候、此職 レン仁ハ望

期口伝アルヘキ事可有、○以下親本欠損か。

一、箱シタ、メ様、コウ杉原ノタケヲ、ハコノナカキカタニアテ、<sup>(箱)</sup><sup>(長)</sup>キリアワ

スヘシ、マヘニナルカミ<sup>(紙)</sup>ノハシヲ二分ヲリテ、サキヲハ箱ノソコニウツ

クシクヲリアワセテ、<sup>(折合)</sup>残タルカミヲ、ウエヘヒキアケテ、札ノウエ、ヒキ

カケテ、フタノミエヌ様ニスヘシ、但ユヒノ入ホト、マエノ方アリヘシ、

ストヒキヲ、<sup>(覆)</sup>イタランニハ、堅者手入ニクカルヘシ、但此紙ノハシアクル事ハ、

(5才)

唯今ノ了簡也、随テ如此今度セサセ申也、

一、櫃<sup>(閉)</sup>ツルヤウ、ウシロニ<sup>(所)</sup>コロヲツル也、カミヨリヲ如法ノホソクシ

テ、ニヲヨリアワセテ、サキヲムスヒテ、

ノウチヨリ、トヲシテ、又アラワヨリウチヘトヲス、其ノカウヨリヲフタ

ノ下ノアナノウチヨリ、アラワヘトヲシテ、又アラワヨリ、ウチヘト

ヲシテ、ウチニテトムヘシ、ハコノ身ノアナヲハ、フタノ<sup>(箱)</sup>キノシ

(5ウ)

○上余白に書く。「マエ」とある。

タニアクル也、マエノツクヲカ、イカニモユルノトヒネリアワセテ、タ

ワノトナルヤウニスヘシト、<sup>(帳後)</sup>チャウウシロノコトク、ムスヒメウチアル

ヘシ、マエワナカニスル也、身ノアナフタノキノシタニアクル也、ツクヲ

ノナカサ、フタヲアヲノケテミテ、<sup>(胸反る)</sup>チトムナソルホトニスヘシ、箱ノマエ

ノ方ノアナ、身ノアナノ上ノアナヒロク、フタノハ下ノアナヲヒロクアク

ヘシ、札奉納シテ後此ツクヲ、<sup>(結)</sup>モチテムスフニ、三ノ口伝アリ、一ハ、

フタトミトウチヨリトヲシテ、チトヒロキアナヨリ

(6才)

ウチエ入レタリツルヲ、<sup>(蓋)</sup>フタトミトノヲマヲナシヤウニ、ヒキイタシ



テ、ヒトムスヒムスヒテ、二ノワナヲトリアワセテ、フタノカミヨリノアイエヲシ入ル也、残二説紙面ニノセカタシ、

一、札ノ長サ一問一尺五分、二問一尺如此、五分ヲトシニソトワカシラノ方ヲシ、ムル也、五問ハ八寸五分アル也、是ハ北室御日記見タリ、此日記禪花院僧都筑前得業ニ

(6ウ)

誂ラル云々、僧都ノ方カ得業ノ方カニアルヘキ也、

一、実演法印日記モ見候、口伝モセラレスシテ諸邊越度共多シ、一ハ初夜ノ堅者ノ札ヲ五度ニクワラセラレ畢、先例ナシト云々、二ニハ札ノ二三四五ノシ、メヲ少分セラレケルヤラン、<sup>(注記)</sup>チウキ方ヘ札ヲ出サル、事ハ、クンノトウリアリ、所詮北室殿ノ日記

(7オ)

ヲ能々令一見者、不可有越度歟、法印ノ越度共当年一々ニノスルニオヨハス、

(三行余白)

探題以上ノ人ナラテハ不可見、堅ク是ヲイマシメラル、顕宗ニ於テハ至極最秘可秘之、云々、

探題箱ニ札ヲ納様東院ノ口伝ト尊勝院物語アリ、

(7ウ)

一、因内共ニ、一三二五四ト重テ十枚ノ札ヲ二重ニツミアケテ、箱ノマン中ニ

入ル札ヲウツフセテ置也、因明ノ一問一下、次ニ三問、次ニ二問次ニ五問、<sup>(俯)</sup>

次ニ四問ヲヨク、其上ニ内明ノ一問ヲウツフケテ置、<sup>(セ)</sup>其上ニ又三問ヲ置ク、其上ニ二問ヲ置、其上ニ五問ヲ置ク、其上ニ四問ヲ置ク、因内加様ニ重ナルヲ、略頌ニ一三二五四ト云也、其上ニ紙ヲウチヲ、ヲナリ、箱ノ

(8オ)

<sup>(綴目)</sup>トチメノアル方ニ札ノ頭ヲムケテヨクナリ、トチメノナキ方ハ札ノ末ニナルナリ、

一、《是ハ仏地院ノ日記ニアリト云々、》札ヲ從儀師ノ方ヘ渡候時ハ、因内ノ札二枚面ヲ合セテ、因明ハ下、内明ハ上ニ重テ札ノ頭ヲ内ヘ向ヘ、札ノ末ヲ外ヘナシテ、密々ニ渡候、一二問ヲハ二ケ度ニ渡候、三四五問ヲハ別々ニ重テ是レヲ一度ニ渡候ナリ、

以上大概御物語ノ記之不分明之歟、

(8ウ)

一、札ヲ箱ニ奉納シテ机上ニ安置シテ屏風ヲ引マワシテヨキ、探題御向人公人ニ是ヲ渡候、持テ出、修学者ハ箱之トチ目ノ方ヲ左ニナシテ横サマニ持ツ、請取、公人ノ右方ニ箱トチ目ナル、会堂ニテ、北向テ棚ニ置ケハ、トチ目ノ方東ニナリテ並ル、也、トチ目ノ方ハ札ノ頭ナリ、

当年法華会可有執行之旨、依

(9オ)

（ママ）  
堅者衆競望相定訖、勝（予）可為探題、付古本令破損之間、加修復畢、

寛永五年（戊辰）卯月廿五日

法印權大僧都実英

探題故実条々

一、義名催事、一、用意廻請事、

一、夢見触事、一、夢ミスル事、一、木短尺可有用、

（9ウ）

意事、一、木短尺寸法之事、（有異説）、

一、木短尺書様、一、木短尺納箱様三説、

一、短尺重様三説、一、短尺箱寸法之事、

一、短尺箱二紙ヲ敷様事、

一、短尺箱置机上故実事

一、短冊箱役人事、一、奉幣事、

一、短冊箱安置閑静所、不可通人事、

（10オ）

一、於会堂木短冊調異説事、

一、短冊後維那樣事、

一、影向戸下知時分異説事、一、申上ヨリ時気色事、

一、須取条、加難勢之詞無之事、

一、自謙句并得略句之事、

但於自謙句者、初度之後ハ随意敷、  
一、結日甲乙付事、并書様事、

已上

（10ウ）

右古本之秘記取要書様之、

清凉院実英法印旧記借用申令書写畢、

探題実秀法印

寛文六（丙午）十一月吉日

（裏表紙見返、裏表紙）○白紙

六 法華会探題并講師日記（東大寺図書館一四二・四三〇号）

（表紙ウワ書）

文明九年（丁酉）三月日（朱印『惣持院』）

法華会探題并講師日記

惣持院法印実秀

（表紙見返し）○白紙

（1才）

法華会探題日記 権僧正秀経

応永廿九年十二月十七日法花会始行、結願廿一日、無為無事、法印権大僧

都秀経被任探題、其間沙汰之条々、大概記之、

一、探題《東室》光海法印、秀経法印、両探題、

会始《西室》房宣権少僧都、《西南院》公覚法眼、

弘豪律師、以上会始三人、

隆盛律師、寛英律師、一床之分

一、初夜堅者経宗、精義隆盛、探題《東室》

（1ウ）

第二夜堅者光実、精義寛英、探題《普門院》

第三夜堅者盛賢、精義良尋、探題《東室》

第四夜堅者光真、精義清寛、探題《普門院》

一、綱取三人二床・三床・四床 唄師 散花師 以下聴衆如常、略名字、

一、講師弁雅権大僧都、出仕之義、如先々嚴重也、

一、自寺務別当僧正御房、可被探題、於晚着之由、兩人ニ蒙仰之間、真俗共依

有其憚、堅辞退申処、東室光海法印秀経不領狀之者、同辞可申之由、被申

之間、无力領狀畢、

（2才）

一、寺之探題之事、面目之至無比類条、難詞尽、

一、探題之事、口伝之受事条々、則尊勝院之僧正御房光経、悉秘事相伝申畢、

探題之箱并札捧納之様之事也、

一、用意之廻請、如常、号於如判形、ワケ置也、口伝也、以出納於奉於取、<sup>（ママ）</sup>

一、堅者義名之事、兼日以出世奉行之奉書可出事、触也、今度之堅者東室之符弟<sup>（付）</sup>

光実禪師也、出世者之両家之無人体之間、以直<sup>（房）</sup>

（2ウ）

狀、於義名触畢、直狀之節、東北院之日記定宗直狀之詞お移候、<sup>（写）</sup>

○以下の引用は追い込みで書写されているが、原状を推測して改行を加えた。

被義名事可為明白也、仍狀如件、

号草二書也、

十二月十四日法印秀経

大納言公御房

於出世奉行者、明後日（二日）可令出法華会之義名給之由、普門院法印御

房候処也、仍執達如件、

十二月一日出世奉行之名卜

大納言公御房

是礼紙アルヘシ、直之状ニハ礼紙ナシ、則有返事、

一、堅者義名ニ出之時、開大門、於中門ニ高灯台ニ

(3才)

御薦お懸、公卿之間、狭之間、内へ引入テ疊ニ帖、題者疊ハ高麗、堅者

紫縁也、座席広間東方屏風ニテ立切也、西方一間・奥三間ニシツラウ、北

方南向ニ題者疊ヲ敷、西ノ脇ニ光灯台アリ、未ニ東向西ノツラニ堅者疊ヲ敷、

一、堅者来時、以力者法師、於先案内言等人、衣着シタル侍、出合聞付、堅者門之内へ入テ中門ニ立時、出世者〈付衣五帖袈裟〉出合テ氣色シテ内へ

(3ウ)

入ル、其後題者、出合対面ス、鈍色〈五帖ケサ着也〉、堅者〈法服ニ平ケ

サ、草鞋ハク〉、蘿箱ノ蓋ニ義名入テ持テ、題者ノ前ニウスクマル、題者右

手ヲ以テ是ヲ取、則堅者ハ本座ニ直ル、題者披テ一見シ卷々之内エ入、

今度八十題ヲ直ニ乞畢、堅者則懷ヨリ是ヲ取出、題者ニ出ス、則是ヲ取テ

内へ入畢、堅者退出ス、十題之事者、堅者退出之時、出世奉行マテ乞モア

リ、二流ナリ、堅者

(4才)

二字ヲ出ス、一番ニ出世者出スモアリ、直ニ出スモアリ、今度者退出之時

出畢、

○追い込みで書写されているが、原状を推測して改行を加えた。

一、義名之時出世奉行之事、良家為堅者時者、不成僧綱ニ良家出世奉行ヲスヘ

シ、凡仁之為堅者、可凡仁奉行云々、然今度者、依無良家之人体無力、以

凡人出世奉行ヲサス、清薫〈伯耆得業也〉、然間触状ヲモ、十題ヲモ直ニ

沙汰シ畢、是皆先例也、

(4ウ)

一、十七日探題坊へ移ル、華藏坊ヲ借移ル也、坊ノ料理ノ様、面ノ庭ニ幡一帖、

東ノ方北南へ、又幡一帖、是ハ井ノモトヲカクサンタメナリ、御簾悉懸、

中間ノ両方ノ脇ノ像、高所台ニ内ニ〈光灯台〉、疊ニ帖、横座ニ一帖、題者

ノ疊高麗、末ニ一帖紫縁、夢見之時丁衆之坐也、丁衆ハ僧綱アラハ、小文

一帖可用意之、中間ヲ屏風ニテ立隔也、其後ニ短尺箱ヲ安置

(5才)

申屏風ヲ立廻、人ヲ入ヌ事也、

夢見当月十二月十七日之夜、

一、夢見事、他寺之聴衆悉来ル、聴衆以使啓案内、出侍等人、衣ヲ着シテ是ヲ

申付、次ニ出世奉行出合テ何ケ夜ノ何ノ問ト問、シカト答聞畢テ、出

世者探題御前ニ参テ、其由ヲ奏シ申、其時、夢見ノ題ヲ袖入テ寸面ノ時、

潜ニ聴衆ノ袖ト題者ノ袖トヲ合テ出ス、

(5ウ)

丁衆モ題者モ同右ノ手ニテ取、丁衆ハ鈍色五帖袈裟、題者ハ付衣ニ五帖ケ

サ、聴衆座席ニ直ル時、題者内ニ入、其後丁衆座席ヲ立テ縁ナル高灯台ノ

本ニテ、題ヲ披テ是ヲ見畢テ後、退出ス、或又内ニ光灯台ノ本ニテ見ル物

モアリ、二流敷、

一、夢見題書様、強杉原一枚ニ中ヨリハスコシ端へ寄テ内明ヲ書ク、合四五寸計アケテ、因

(6才)

明ヲ奥ニ書キ、卷テ別ノ紙ヲ細ク切テ中ヲ封シテ、トチメニ封ト云文字ヲチイサク書、上ニ何ノ問ト計畫、別ニ札ヲ、何ヶ夜ノ何問某ト書テ、悉ツク出シ様ニ取テ捨ルナリ、マキラカサシカ用也、

一、探題役夜之事、堅者清涼院ノ斬ニ立ツ時、題者装束ヲ着シテ待、会堂之侍御迎ニ参ル由ヲ申、其時修学者(付衣五帖ケサ中臈之仁也、)札捧

(6ウ)

納ノ箱ヲ後取テ会堂之侍ニ、キタハシヲ二重下テ渡ス、請取テ後、題者御伴ヲ申テ出、会堂之侍、御前声アリ、出仕ノ様、短尺箱(一番)、次ニ力者

二人、次ノ大童子二人、次ニ大童子二人、次ニ從僧二人松明ヲ取、次ニ題者、次ニ中童子左方、次手輿、力者四人シテ奉ル、綱ヲ片手ツ、ニテ取、次ニ力者以下道具・香呂箱・居箱・水瓶・盥・磬・笠持、次ニ大童子以下

(7才)

持双ツ、右方ニ威儀僧供奉スルナリ、僧綱ハ法眼平ケサ、成業ハ(法眼青(甲)申)会堂之出仕之姿也、若衆ハ鈍色ニ五帖ノ袈裟也、人数ノ多少可依時歟、

一、威儀僧見参書之事、修学者鈍色ニ五帖ノ袈裟中臈仁也、可用意、今度之在

取ハ華藏坊縁ノ西ノ端ニ、屏風ヲ、後ロニ立ツ、讃岐円坐一枚是ヲ敷、瓦硯、檜折ノ箱ニ入、若ヤナイ箱也、水入、土器ニ塩紙、紙ヲ引サキテ水ヲ入テ置、墨(一丁)

(7ウ)

筆(二管)・料紙(同入テ置)、右ノ脇ニ光燈台火トホス、見参書ノ仁彼所ニ居ル時、威儀僧一人ツ、面ノキタ橋ヨリ登テ見書ノ前ニ尊踞シテ某トナノル時、其如ク書付テ、参澄テ後、着到ヲ題者ノ懸御目也、

一、威儀僧事、当寺近年沙汰跡不分明之間、維摩会之儀ヲ移ス、三方探題ノ時ハ門徒悉ク是ヲ触ラル、是ハ無捧物、今度モ其儀ヲ追テ門徒ニ立入、猶若衆十人余請定ヲ

(8才)

兼日ニ廻ス、悉其仁参勤ス、其外志ノ仁ハ僧綱・已講・成業皆威儀ニ参ス、威儀之捧物紙ノ代ヲ遣ス、是東室之記ニアル如ク沙汰シ畢、

一、探題、会堂ノ床ニ着スル時、威儀僧悉退出畢、

一、短尺箱認事并札等之事、依有子細不記之、

一、探題退出之時者、手輿ニ乗ル、箱ノ御件ヲスルトキハ、何モ手輿ニノラス、

(8ウ)

一、拝礼之事、堅者三四ノ問ニ成時、題者(法眼紫申着ス)堅者、会堂之退出ヨリスクニ探題坊へ来テ先様ニ拝礼ニ来ル由、案内ヲ云、侍等人衣ヲ着シ出合聞付テ申時ニ、探題坐ニ直ル、出世者、出合気色シテ堅者ヲ内エ入ル、

板ニ尊踞ス、題者氣色アリ、其時疊ニ直テ三拝シテウスクマル、其時題者

 (難?) シテ言、大会遂業者異于他ニ、无為返々神妙之ト、言候ノ字可

依仁、其時間畢テ、堅者氣色シテ

(9才)

退出ス、探題内へ入、

一、短尺之櫃返ス事、堅義終テ会堂ノ侍持參ス、其夜ニテモ、次ノ日ニテモ、

取入ル人体之事、先々ハ等人衣着シタル侍歟、不存知、今度ハ出キ次第ニ

取入畢、

一、開白之夜ノ事、手輿乗事、北室ノ上ノ壇ノ下リロテ中ニ南向ニ輿ヲ立テ直

シテ其ヨリ下ル、其時香呂トテ一人從僧是ヲ持ナリ、退出時モ其ヨリ乗ル、

從松明ヲ取所、篝焼近辺マテニ行ニ取テ畏ル、探題居床ニ坐スル時、其方

ノ脇ヘヨル、大行道ニ

(9ウ)

成ル時、從僧一人、会堂之後戸ヨリ入テ道具ヲ探題ノ座ニ置ク、一人ハ件ス<sup>(伴)</sup>

ル也、香呂ヲハ大行道ニナル時、探題ニマイラスルナリ、結願如此、

一、一床カマチニ縁坐アリ、其上ニ草坐ヲハ敷、会始以下縁坐ナシ、縁坐敷事

年預ノ沙汰ナリ、

一、大行道西方一藹・東方二藹、大行道引頭<sup>イントウ</sup>二人、東西エ別ル跡ニ付テ行、音

樂ヲ奏ス、正面ヨリ入引頭兩脇ニ留ル、一床之分正面ヨリ床ニ直ニ付、後

門ヘ廻ラス、左方ノ事也、

(10才)

一、丁衆床直テ後、講・読出仕アリ、正面ノ高坐ニ三礼アリ、其時一床ノカマ

チニ綱所来テ三礼ト言、床上マテ丁衆悉三礼アリ、開結如此、

一、講師登高坐在テ舞アリ、唄ノ間ニ定者法師香呂ノ蓋ヲ持テ廻ル、散華畢後

在後起、其後講問下樂アリ、

一、講師退出之後、一床ノ探題ニ綱所三礼ヲ申時、探題立テ正面ニ行テ三礼ア

リ、鐘ヲ打、其後綱所立テ、行香ノ器ヲ伶人ニ渡ス

(10ウ)

時、一床ノ分悉床ヲ下テ、行香ヲ請ク、行香畢テ床ニ直ル、一藹六礼ノ後、

本ノ床ニ帰ル、其時未ヨリ退出ス、開結如此、

一、探題役、夜短尺箱ヲ開ク時、維那一床ノカマチニテ、堅者何宗ノ某ト聞ヘ<sup>ナニカシ</sup>

又様ニ、探題ニ向テ言、探題氣色シテ音モセス、其後箱ノ本ヘ行テ静ニ是

ヲ開テ本座ニ帰ル時、堅者三床ノカマチニテ袖ヲスリ、違テ堅者ノ題ヲ探

テ登高坐、其後維那坐ヲ立テ<sup>(礼)</sup>

(11才)

取テ探題ニ進候、探題取テ次第ニクハル、口伝アリ、

一、堅者何故ノ重ノ時分探題後ヲ見帰ル様ニシテ、預向ノ間ノ戸立ヨト、注記、

後戸ノ近辺ヘ行テ戸ヲ立サス、

一、精義重ニ移ル時、探題見向スシテ申上ヨト云、注記申上、其後精義条ヲ取

テ難ス、

一、一問ハテ、後、精義、得略如何様タルヘキ哉ト探題ニ伺、兎毛角モト答、

二問以下はヲ問ハサル也、

(二ウ)

一、道具置事、居箱三衣袋、從僧上衆之役也、草座同敷、香呂箱次ノ從僧置、

〔左方ニ〕居箱ヲ置、右方ニ香呂箱ヲ置也、

一、鼻高ノ役從僧ノ上衆役也、鼻高ヲハ次ノ大童子ヨリ大童子ニ渡ス、從僧取テ役ヲツトム、又道具ヲハ力者ヨリ大童子ニ渡ス、大童子取テ從僧ニ渡ス也、

一、一床ノ探題ナラハ行香三礼アルヘシ、坐具可用意、今度東室依為上衆用意也、坐

(12オ)

具礼盤敷事、從僧ノ上衆役也、路次ノ間ハ懷ニ入テ是ヲ持、敷時後戸ノ近辺ヨリ取出シテ手ニ持テ一床ノ前ヲ過テ正面ニ行テ、西方礼盤ニヒロケテ、両ノ手ニテ先キ様ヘ敷之、畢テ帰ル、三礼以後又從僧行テ取之、三礼ノ後行香アリ、行香ノ後又六礼アリ、又行香ノ時ハ東上ヘ立替也、

一、從共用意事、從僧二人・中童子一人如木・大童子二人如木、次ノ大童子二人・力者二人・唐笠持一人

(12ウ)

〔装束タイ紅〕可松明用意、

一、從共可御伴様事、力者輿二十六人、前キ二人・道具三人〔香呂箱、据箱、同草坐一人ツ、水瓶・盥一人シテ持ツヘシ〕、道具持事未ノ力者役也、コノカウヘ〔無役、出腰〕、

一、悉ニ奉行ヲ付テ可沙汰也、人数アマタ入ヘシ、

一、從僧人体〔英守筑前寺主・円舜上総維那師〕・中童子之人体〔岩菊丸〕・大童子之人体〔春藤丸・松石丸〕、次ノ大童子、修学者ノ中間ヲヤトウ、又童子〔在家ノ者ヲ雇〕、力者

(13オ)

不足少々賃ニテ雇、

一、探題之御請持テ鑰取下御請申、粮物鑑取ニトラス、

一、御請之詞云、

謹領 網牒一紙〔ツネノ杉原ニテ書ヘシ、二枚ニ書テ立紙卷テヒネラスシテ推折〕

一、右依 宣旨、自来十七日、被始行、東大寺法華会探題者、謹領如件、

応永廿九年十二月 日 法印權大僧都秀經

一、用意ノ廻請書様事、〔強杉原一枚ツ、立紙端ニツク〕

(13ウ)

可被用意法華会第二夜堅義精義役事、

所立〔聲聞賢聖義、疏四種相違義〕所立可依時

寛英權律師

応永、、、、

法印權大僧都秀經

一、問役之廻請書様事、精義ノト料紙同之、可被用意法華会第四夜堅義・堅問役事、

(14オ)





請納第二夜堅者調鉢代事、

合紙一積（上積十三作、下積廿束、帶二筋、

右、請納之狀如件、

応永廿九年

（二四ウ）

右之旧記四聖坊英性法印へ借用申令写畢、本書者四聖坊二有之、

寛文六年（丙午）十一月 日 惣持院法印実秀

（以下余白）

（15、裏表紙見返、裏表紙）○白紙

七 法華会開口并論匠番表白等 (東大寺図書館 一四一・五二四)

○紙背文書があるが、翻刻は省略した。

(表紙ウワ書)

(異筆)  
「澄芸」

法花会開口并論匠番表白等

賢慶之

(表紙見返し) ○白紙

(1才)

当寺法花会 初問表白

夫今大会者、鎮護国家之御願、興隆佛法之勝躡也、二明伝燈之道、繼法命於此  
会、一寺昌繁之計任護持於此功、大哉盛矣、萬而猶新、方今講匠者三論之才  
鳳、振翅於義天之風、問者五教之垂羊泥蹄於学路之跡、恐傍綱位之烈、猥当初  
問々仁、

(1ウ)

講師返表白

大会嚴重 <sup>ニシテ</sup>、<sup>ウツシシユレイノ</sup> 写 驚嶺之昔フ、<sup>ニシテ</sup> 論談巧妙 <sup>マナフ</sup>、<sup>セキニ</sup> 学 月友之決斷、<sup>ニ</sup> 爰 問  
者、<sup>イキライヲ</sup> 以 <sup>ク</sup> 勢、<sup>ル</sup> 忝 預 師子ノ講席、<sup>イヨク</sup> 弥 <sup>タマハツテ</sup> 賜 二明ノ龍問、  
只欲蒙 <sup>モラ</sup>、<sup>ント</sup> 四座ノ優 怒 <sup>イフシヨヲ</sup>

法花会表白 問者方

夫今ノ大会者、自天平之往事、既為 <sup>ス</sup>、<sup>コウキ</sup> 日域之恒規、誠 <sup>ニ</sup> 是 <sup>レ</sup> 一天無雙之大会、四

海靜謐之御願 <sup>ナル</sup> 者歟、爰二問者年齒徒 <sup>ネンシツラニタケテナマシヒニ</sup> 闡 <sup>ニ</sup> 愍 <sup>ニ</sup> 忘初問仁、<sup>ニ</sup> 内者恐 <sup>ニハレ</sup>  
冥衆

(2才)

之昭覽、<sup>ヲ</sup> 外者愧見聞之朝 <sup>ニハハツ</sup> 咲 <sup>アサケリヲ</sup>、然而、只為 <sup>ニ</sup> 備 <sup>ンカ</sup>、<sup>セキニ</sup> 法会之規跡、纔 <sup>カニ</sup> 舉  
二明之問端、

法華会亭番表白 (八幡宮御八講ニモ可用之、)

講 <sup>シ</sup> 一乘、<sup>ヲ</sup> 而、<sup>テ</sup> 十座莊 <sup>サリ</sup>、<sup>威</sup> 粉槍之井光、<sup>ヲ</sup> 開 <sup>テ</sup> 八軸而五日、備社壇之法味、  
重 <sup>ラムテ</sup> 簡 <sup>ム</sup>、<sup>ハニ</sup> 六口せきサイヲ、<sup>ム</sup> 令 <sup>ハニ</sup> 叩 <sup>ム</sup>、<sup>ハニ</sup> 三雙之論鼓、<sup>ヲ</sup> 若爾者長吏運久 <sup>ク</sup> 諸德学  
昌、<sup>サカムナラム</sup> 是故、

転 <sup>シテ</sup>、又云、

□法輪 <sup>ヲ</sup> 而、五日驚峯之 <sup>ハナフサ</sup> 尊 <sup>シハクリヤウノ</sup>、<sup>マトニ</sup> 薰 <sup>ンテ</sup> 柏 <sup>シテ</sup> 梁之窓、<sup>ンテ</sup> 叩

(2ウ)

□鼓 <sup>ヲ</sup> 而三隻、白天之光 <sup>リカク</sup>、<sup>ニ</sup> 耀粉槍之影、<sup>ニ</sup> 实 <sup>ニレ</sup> 是 <sup>レ</sup> 一天無雙之法筵、四海安全之  
御願ナル者歟、若 <sup>シ</sup> 爾者、長吏上綱久 <sup>ク</sup> 持 <sup>チ</sup> 万歳加算、<sup>ヲ</sup> 満寺ノ諸德遙 <sup>ニ</sup> 繼 <sup>ガン</sup> 千  
秋之惠命、<sup>ヲ</sup> 是故、

(以下約三行余白)

(3才)

八幡宮御八講番表白

講一乘而十座 <sup>カサリ</sup>、<sup>ヲ</sup> 莊 <sup>サリ</sup> 粉槍之威光、<sup>ヲ</sup> 開 <sup>テ</sup> 八軸而五日、備 <sup>ウ</sup> 社壇之法味、<sup>ニ</sup> 重簡  
六口之碩才 <sup>ヲ</sup>、<sup>ヲ</sup> 令叩三雙之論鼓、<sup>ヲ</sup> 若爾長吏運久 <sup>ヲ</sup> 諸德学 <sup>ラム</sup>、<sup>ヲ</sup> 是故、

(3ウ)

□□四年六月廿五日 三季講々師顯舜〈侍從得業〉 問者教宗〈大進公〉 当座探 俱舍六卷 講問探衆十人 論匠探衆六人 講問論義〈九地聖道、非心為日第二師〉

番少納言擬講 彼表白云、

夫以、

鷲峯一乘之教 留芳躅於我寺 鹿園三乘之宗 伝玄軌於此砌 依之、三權一実之開講 貴世親之行願、一日一座之惠業 謝祖師之遺法 重

(4才)

属六口之才鳳 令闕三雙之智龍 誠是、紹隆勸学之。《大》本 寺門昌栄之懇祈者歟、若爾 長吏運久 群徒学繁 是故

交名

成真法師〈春長房〉 訓賀法師〈出雲公〉 教範々々〈駿河公〉

明寛法師 定禪法師〈筑後公〉 寛海法師

三季講論匠番狩末座役催之、 着平袈裟

論義〈九上縁武恵行因事、能作国用通過候歟、

(4ウ)

維摩会 初表白〈親尊已講〉

夫今大会者、菴羅苑林之教、風綾十万余里之浪、興福精舎之智、燈照五百余廻之霜、二明 法命、依此永続、累葉家門、為斯弥盛 論場再

複旧、道儀増殊新、大厦甫就燕雀、可賀大会儼然、光彩究妙、誠是三朝勝絶之斎席也、寧非万秋避運之精祈乎、爰今講匠者法相独歩、卓躒之義龍 響名於遥漠之处、問者花嚴六相円宗之愚羊

(5才)

蹟 蹄 於覺路之露、恐列四座之末筵、猥致兩帖之間端矣、

正中二年十二月廿三日始行法花会亭番表白用意之、

大会嚴重 移鷲嶺之昔フ、論談巧妙、学月友之粧、誠是、紹隆

仏法、無双之恒規、神明法楽 第一之梵筵者歟、重簡十口之碩才、叶五雙論軌、若爾 長史運久、諸德学昌 是故、

(5ウ) ○白紙

(6才)

御八講論匠番〈正中二年秋季〉 法眼平袈裟・草鞋

第三日出仕南廻廊〈一座〉 唄役勲仕之、夕座五卷講師登高座、北座有司・五

師、読指帳、

次講師薪讃唱之、此旨ハ全北座ニ有之、

次全渡南座引唄〈金三丁〉也、散花錫杖了〈金四丁〉、講問了〈金三丁〉、講

問了、

次番表白 先答者〈如書置次第〉 次問者呼立也、

(6ウ)

学頭大進得業快春

番已講加分厚紙三帖二帖已講分、一帖八番分歟、

(7、裏表紙) ○白紙

八 法華会講師日記（東大寺図書館一四一・四九六号）

（表紙ウワ書）

（秀經カ）  
普門院

法華会講師日記

（朱印『惣持院』）

（表紙見返し）○白紙

（1才）

応永十三年（丙戌）二月廿一日ヨリ被始行法華会、

条々日記

一、講師光経律師勲仕畢、大都之様者、当寺講師者、新已講勲仕也、光経不経已講昇綱位、彼講師勲仕之条、絶思遺恨之由、物語賢春僧都之处、賢春僧都云、縦雖僧綱勲仕之条不可有子細、故東室深兼法眼者、如光経、不経已講轉法眼、然而、法花会始行之時、給准講宣、勲仕彼講《師》、光経給准講宣、可參勲、為会式、為自身、為道為寺、可然之由、被相勸之間、自元競望之間、即 殿下へ望申准講宣、殿下仰云、

（1ウ）

光経已僧綱也、准講宣者、此維摩会講師宣下也、是已講也、似悔還不可有子細事哉、能々可勘先規由被仰下之間、先規者深兼法眼之例也、亦退思道理所《被》准維摩会講師、雖僧都・法印勲仕之条、本既然、准講宣何偏限凡僧哉之由陳申候間、申旨有其理、可有御免之由被仰下、即三百足進上殿下、拝領已講之宣畢、依之、講師參勲畢、

一、講師出仕僮僕員数事、

自身法服納

力者九人（此内道具持一人 唐傘持一人 水瓶持一人 残六人、取松明二行）

（2才）

御童子二人 大童子二人 從僧二人

中童子一人（雖二人用意、俄依違例不召具之、從僧中間四人 中童子中

間二人 定者法師一人

以上

一、開白結願ニハ執蓋役一人 幡差二人 松明二人（悉職掌役也）、

一、所持道具 香呂箱居箱、香呂、三衣袋、草座、鼻荒、草鞋、如意

一、講師參勲法則事

先開白者、聴衆集会畢、漸欲成列之位、チツトイソキ

（2ウ）

經藏面之戸ヲ開テ、火ヲタク、

一、開白結願ニハ、強無三度案内、又小綱不来、鎰取来催也、

一、聴衆成列、入堂内畢、鎰取勸出仕、其時先遣定者法師、定者入堂内之時分、

講師出仕、

一、定者法師者、入堂内西ノ礼盤ニ懸腰、南ニ向居也、講師出仕シテ、正面ニ

立位ニ定者法師礼盤ヲ立テ、正面ノ西柱ノカケニ立、其時分、從僧入堂内、

置道具、

一、香呂箱ヲク從僧取香呂来、居箱ヲク從僧ハ置畢、正面ヨリ出テ、供草鞋、

一、草鞋ヲハキテ、入堂内之時分、登樂有之、其時講師

(3才)

入堂内、於正面之《西》礼盤三礼、読師於東礼盤三礼、自礼盤下テ香呂ヲ  
從僧ニ渡ス、從僧大座ニ登テ、入香呂箱、講師登高座、此時、舞樂有四〔万  
歳・延喜・賀殿・長保〕

一、舞畢磬二打之、

一、次唄、此時定者取火舎蓋、廻仏壇一返廻テ、納蓋、正面ヨリ退出、

一、唄畢散華師、進正面、大衆大行道行道畢、注記喚行事小綱云、差紙燭立、  
侍高座辺云時、即差紙燭而來、其時読縁起縁起畢、次講問役論義、次講師

通問表白・論義、

(3ウ)

一、次講下鐘、注記喚侍鐘三打之、

一、次下樂、講師退出、從僧道具ヲアク、

一、次於正面之西柱脇、鼻荒ヲハク、

開白作法大都如此、

一、初日夕座、以小綱申三度案内、先遣定者、次出仕、其作法如朝座、但略居  
箱、舞樂無之、

一、散華行道之後、磬一打之、其時ヤカテ挙經、論義ウタイ出マテアケテ待之、

論義ウタウヲ聞、定テ置之、

一、論義畢退出、

第二日以下法則如此、

(4才)

一、結願作法、諸事如開白、

一、舞樂二〔万歳・延喜〕

一、次訓廻向、

其作法ハモノヲハ高ハイウス、心中ニ祈念スル計也、ヨミ畢テウシロヘ  
ニカヘル様ニスル時、註記侍ヲヨヒ、講下ノ鐘打之、其時退出、

(4ウ)

一、亭出仕、手輿・平袈裟、此時力者二人重テ召具、其故ハ手輿ニ六人入間、  
松明トル力者無之故也、

一、道具悉持之、

一、講師之座ニハ円座必敷之、然而今年不敷之、重々問答会行事之三綱、所詮、  
会行事方之日記ニ無之云々、然註記已下綱所方所持之日記ニ可敷之見タリ、  
并自元如此存知之間、如何様可敷之由、堅令問答、然而俄之間、円座難有、  
イカ、スヘキカ丁衆已下申間、先平座ハカリニテ着座畢、

(5才)

会行事方ヘハ、後日ニ円座ヲ敷ト見タル日記ヲ出テ可処罪科之由申懸了、  
即後日会行事并榮專罪科了、

一、随喜導師ノ前ノ机ニカケタル絹ハ講師取云々、今度無沙汰ニテ不取之、

一、講師ハ南ノツマ戸ヨリ入テ着座、丁衆列以後入ナリ、

一、列已前ハ、前ノ芝ニ手輿ヲカキスエサセテ待也、

(5ウ)

一、講師御請案文

僧綱

権律師法橋上人位光経（年膺） 専寺

右依 宣旨奉請、自来廿一日被始行東大寺法華会講師、如件、

応永十三年二月日 從儀師相淳

威儀師隆紹

大僧正

僧正

（6才）

、 1

、 1

、 1

、 1

一、御請案文

謹領

綱牒一紙

右、依 宣旨、自来廿一日被始行法華会講師者謹領如件、

応永十三年二月 日 権律師法橋上人位光経（謹請文）

（6ウ）

一、鑰取粮物一斗下行（寺斗定）

（以下余白）

（7才）

一、講師方下行日記

從僧二百文 大童子百文（襪代、此外七十五文下行、踏ハ秘計遣了、）

定者法師（<sup>四</sup>重百文） 中童子三百文（踏襪代）

力者九人中（<sup>侍力</sup>貨ニテ倩三人各百文、殘六人各七十五文下行、日別十五文）

御童子七十五文

從僧中間・中童子中間合六人各百文、

以上

（7ウ）

一、講師方請物

会三口分 八貫四百文

寺助成方四石（寺斗定） 代三貫六百文

亭九十文（和市ニヨルヘシ）、堅者捧物以下依時不定、

講堂餅二杯

亭隨喜導師机ノ絹

以上

一、講師坊菓子一（ケンシヤウ） 筒一置之、

一、松明（イケ松■巨多ニ用意スヘシ、）

（8才）

以上

文安四年閏二月三日写之、

一、重会之時ハ、講下ノ鐘ヲ不撞、從儀師磬一打之、聞之、講師高座ヲ下ト云々、  
註記方日記ニ在之、文安四年閏二月九日法華会始行、公顯法印講師勤仕之  
時如此云々、

(以下二行分余白)

(8ウ)

一、文安四年二月晦日、令公顯法印來臨於当坊、法華会縁起等口伝畢、并出仕  
次第等種々加指南、当院面目之至者歟、

權僧正秀經

(以下余白)



九 法華会講師日記(東大寺図書館一四一・五〇一号)

(表紙ウワ書)

元和四年(戊午) 閏三月廿八日時分写之、

○「惣持院」朱印に重ね「東大寺上生院」黒印を捺する。

〈奥二七人堅者五問十題在之、〉

法華会講師日記

法印権大僧都重祐

(表紙見返し) ○白紙

(1才)

○以下元和四年記地の文

講師用意事

- 一、松明巨多ニ入間、則〈予〉修理納所之故、惣寺へ令披露、先年大風ニ倒タル松木鐘樓ノ南方ニ在之間、卯月十四日杣二人雇一間ハカリニキリテ探題訓賢法印・実英法印両所へ取之畢、長サ一尺ハカリノ続松二百令用意畢、
- 一、九升杣一日半賃ニ遣之、訓賢方ヨリ九升、合一斗八升杣一日半ノ賃也、
- 一、一斗五升人夫六人雇賃也、半日ニ二升五合宛〈皆キリ也、飯事不知〉六人此外当院之衆二人、合八人シテ半日ニ運ヒ畢、卯月十四日

(1ウ)

- 一、旧記云、注記磬ヲ打テ其後喚行事ノ小綱来ラ、来ル、其時始縁起ラ、初ノ句ニ有口伝、終ヌレハ小綱帰ル、次ニ勸請神分等在之、後挙テ終ラ其ヲ見テ問

役歌イ挙ク、講師先ツ表白後、牒ヲ取ル、香呂ヲ持、答ノ時ハ如意ヲ取ル、終ヌレハ注記侍ヲ召テ講下ノ鐘ヲ打カス、其ヲ聞テ下ル也、後々ハ講問計也、

- 一、口伝ニ云、小綱ニ為ニ紙燭ノ蠟燭遣之、〈縁起為正見ノ也、〉後々ハ散花ハテ、聴衆床ニ着座之時、聽而挙テ終ラ、

- 一、經講様之事、開白時は無量寿經ト第一卷トヲ講、後々ハ藕次ニ一卷ツ、講之ヲ、第四日ハ八卷ト

(2才)

并ニ普賢經ト講也、次ニ捧開講演説切、影向天神神祇増榮ヲ、奉副威光等之廻向之句有之、

以上旧記写之、

(二行分余白)

○以下(3才) (8才) 途中まで天正五年記引用は、本冊法華会記録二二号(一四二・四一四)と重複するため省略する。

(8才)

以上淨実法印講師之時被用意論義也、

○以下元和四年記地の文。

法花会手番(元和四年(戊午)五月十一日開白手番ハ卯月八日ニ在之

○以下(9ウ) 途中まで、問答の内容は省略する。

(9ウ)

以上

一、手番之事、近來於寺務代坊、雖被沙汰之、幸寺務東南院門主者小野に被住  
トモ留守居有之間、令相談、於善生院卯月八日に在之、成業衆祐芸・訓秀・  
実英令会合沙汰畢、其外

(10オ)

若輩衆四五人請用在之、日中飯二膳以下鄭重也、後々者御湯漬也、

○以下「出世後見日記」(一四一―一五三、『中世東大寺記録出世後見・俱舎三  
十講關係史料』東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一―一六、五八頁)  
の引用。

二、准中臈補任状、安文寺務方良盛上野君方へ送畢、

補任 寺務准中臈事

実名

右自寺准中臈可被免畢、仍可充行之由、依別當之仰、所補任如件、

応永廿年

(10ウ)

出世後見法印權大僧都資春<sup>(賢)</sup>

○以下(12オ)途中まで、元和四年度の問答の内容は省略する。

論匠三双

番

(一行分余白)

二番隆盛法師答 実祐法師問

(10ウ)

三番 昌盛法師 真英法師問

(12オ)

一、亭論匠六人ハ平袈裟也、貳石宛ノ布施也、此内一斗少綱ニ下行也、論義ハ  
第一番ノクサリ計リ宗也、(三重)、次ニ皆俱舎之一帖宛互為也、合ニ帖也、  
二臈(問者)又互ニ如此、一臈(問者)也、第一番ノ宗ハ三重、第二番俱  
舎以後ハ二重ナリ、

(12ウ)

一、論匠衆六人ハ鈍色平袈裟也、然ルニ今度依無案内ニ六人ナカラ白五帖也、  
向後可得其旨ヲ也、并成業衆暫退シテ論匠衆ニ加レハ法眼平袈裟也、今度  
訓秀モ依テ無案内、鈍色白五帖也、以後可存此旨ヲ者也、

○以下「出世後見日記」(一四一―一五三、前掲東京大学史料編纂所研究成果報  
告、五八頁以下) 応永二十二年記の抄出。

旧記云 賢春法印ノ日記

応永廿二(乙未)正月十六日ヨリ法花会始行、探題寺務、講師普門院家

一、廿二夜亭へ寺務探題マテ出仕也、当寺聴

(13オ)

衆悉ク出仕、延海得業ハカリ無出仕、違例歟、

一、一床探題ノ座ニ讃岐円座一枚用意スヘシ、余ニハナシ、

一、所作宛出世後見沙汰兼日ニ認、

一、用意廻章ハ探題役今度ハ寺務、《スナワチ》探題タル故ニ出世後見出之、

十三日奉取畢、奉ヲ取ル使ハ出納強杉原ニテ書之、立紙アリ、只ノ杉原ニ  
テ被書事モ有之、

一、亭ヘ講師論匠衆円座ハ年預役、

一、亭ニテ明年堅者ノ差帳出世後見出之、会行

(13ウ)

事方ヘ兼日ニ遣之、強杉原一紙ニ書之、立紙ハ無シ、但シ料紙ハ只ノ杉原  
ニテモ書、案文別紙アリ、差帳ハ舞ノ中間ニ会行事読ナリ、

一、論匠衆一番《光重・光寛》、一番《憲祐・経頭》、季御読経三番《弁春隨喜  
導師重弁》、

一、喚立已講ハ英重擬講、舞終後表白ヲ出ス、

以上賢春法印ノ日記写之、

(14オ)

○以下元和四年記地の文。また(15ウ)まで問答の内容は省略する。

法花会堅義 五問十題

花嚴宗

○ 初夜研学 英経法師 禪花坊

花嚴宗

○ 第二夜 重祐法師 惣持院

(14ウ)

花嚴宗

○ 第三夜 浄光法師 惣地藏院

花嚴宗

○ 第四夜 実澄法師 阿弥陀院

(15オ)

花嚴宗

○ 第二日加任 賢盛法師 帥公

三論宗

○ 第三日加任 実盛法師 金珠院

(15ウ)

三論宗

○ 第三日加任 了恩法師 上生院

以上七人

(16オ)

○ 法花会講師論義

○以下(16オ)途中(24ウ)省略する。初日朝座より第四日夕座まで。

(25オ)

一、天正五年《丁丑》法花会講師実胤法印其時有沙汰、論義雖写置之、今度新

ク因内之論義古抄書集令沙汰畢、不可有定量、此内第三日於朝座之論義ニ者、淨実法印時之論義也、藥師寺宝積院并福藏院兩人会式ニ付当院來臨之時、被急之間、先以遣之畢、

一、元和四年〔戊午〕卯月廿八日ニ注記方へ会講問役折紙ニ書テ興福寺・藥師寺・法隆寺分遣之畢、

(35ウ)

○以下応永三十五年年記引用

「講師日記

応永卅五年〔戊申〕自潤三月廿三日 法花会始行、

探題 西室〔房惠法印〕 五ヶ日

一、講師 法眼和尚位光実 出仕行粧 法眼衲袈裟〔着〕、道具 如意〔所持物也、兼会堂置之〕 香呂箱居箱 香呂〔一枝〕 三衣袋ヲ入居箱 草座 手洗水瓶 唐笠〔入袋ニ〕 以上

一、僮僕事、從僧〔二人・鈍色白五帖袈裟〕・中童子〔一人〕・大童子〔二人〕・御童子〔二人〕・力者八人、衣袴ニテ

(36オ)

一、定者法師事、人体ヲハ講師ヨリ苦勞ス、装束ハ寺ニ在之、

一、初日朝座ハ皆參、開白列ノ始ル時、講師坊經藏面ノ戸ヲ明ケ火ヲ明ス、後々ハ第二度ノ安内申時開テ、火ヲ明ス、講師望則職掌ノ迎ニ來ル、蓋差一人

幡ヲ差二人、職掌ノ役也、読師ハ東室ノ經藏面ノ戸ヲ開キ、對シテ出仕ス、講師ハ食堂ノ正面鼠走ノソイニ至テ、鼻高ヲ草鞋ニヌキカウ、其後從僧道具ヲ置テ畢ヌレハ、講師・読師同ク堂内ニ寄入ル、立チ留ル処へ從僧香呂ヲ指出、其ヲ取テ、札盤歩至テ三礼ス、其畢ヌレハ香呂ヲ從僧ニ渡ス、漸歩至講師之

(36ウ)

西ノ蓋ノ高座ニ登ル、大段マテ草鞋ヲハキアク、其後暫ク相イ待ツ処ニ法用舞〔左右〕有之、舞樂ノ後注記磬ヲ打ツ、次ニ散花、次ニ注記磬ヲ打テ、其後喚テ行事ノ小綱ヲ、差テ紙燭被侍高座ノ辺ニ下知ス、則差テ紙燭ヲ來ル、其後始縁起ヲ、初ノ句ニ有リ口伝、終ヌレハ小綱帰ル、次ニ勸請神分等有之、後挙テ經ヲ、其ヲ見テ問役歌イ挙ク、講師先表白、其後牒ヲ取り香呂持、答ノ時ハ、如意ヲ取ル、終ヌレハ注記侍ヲ召テ、講下ノ鐘ヲ打ス、其ヲ聞テ下ル、後々ハ講問計リナリ、

(39オ)

一、口伝之小綱ニ為紙燭蠟燭遣之、縁起正見為也、後々ハ散花ハテ、聴衆床ニ着座之時聴而挙經、

一、經講樣之事、開白ノ時ハ無量義經ト第一卷トヲ講ス、後々ハ藕次ニ一卷ツ講之ヲ、第四日ハ八卷ト并ニ普賢經ト講也、次ニ捧開講演說切影向天神地祇増法樂ヲ、奉別威光等之廻向之句在之、

一、結願作法之事、第五日、蓋幡差事、如初日、勸請至心勸請釈迦尊等、次ニ

是故普賢以下ハ明ス普賢ノ法ヲ也、五日ノ勤行ハ

(29ウ)

法界ノ衆生ニ廻向ス、是ヲ名ク訓廻向ト、如此結願畢テ後、講師後ネチムク様ニスレハ、注記心得テ喚テ侍ヲ、鐘ヲ打ス時退出、下樂ハ正面ヲ出ル時吹出ス也、

一、從僧故実之事、居箱・草鞋ハ上衆ノ之役居箱ヲハ机ヘノ北ノ端ニ置之、香呂箱ハ下臈ノ役也、机ノ南ノ端シニ置之、定者法師ニ火舎ノ蓋ヲ執テ遣事モ下臈ノ役也、

一、定者法師振舞事、出仕以前ニ御童子イタキテ正面ヨリ内ヘイル、講師出仕マテ礼盤ノ辺ニ居ル也、持テ火舎ノ蓋ヲ唄ノ間堂ヲ一反廻リテ正面ニ帰テ、

(30オ)

蓋ヲ從僧ニ渡ス、正面ヨリ還計也、

一、亭出仕之事、行粧手輿ニ乗ル、平袈裟ヲ着、僮僕ナト如前ノ乗手輿ニ間、力者〈十二人〉召具ス、道具ハ居箱計リ也、入三衣袋雖然草座可在之、

一、講師着座ノ前ノ机ニ被物ノ絹可在之、從僧拳ル道具ヲ時取リノセテ出也、

以上旧記写之、

(30ウ)

○以下元和四年記地の文

一、堅者方送物請取ノ書様之事

請取 法花会初夜堅者威儀供捧物事

合

右講師之御分所請取如件、

年号月日 行事僧名〈判〉

(31オ)

一、卯月二十七日講師口伝ニ興福寺喜多院之空慶僧正ヘ参畢、同探題伝受ニ当寺正源院訓賢法印令同道、先ツ最初ニ探題被伝受畢、其ノ次ニ講師口伝スル也、其様ハ法花会縁起一反被読也、空慶云、縁起読・表白読各別也、表白ニハ上声・返声在之、縁起読ニハ返声ハカリ也云々、訓廻向ハ重テ可令相伝也云々、講師ハ令精進懸テ信仏毎日縁起一返并朝座・夕座ニ会ノ講問可行之云々、

(31ウ)

当寺旧記ニハ其趣全ク不見也、

一、捧物料、五百文并指樽二荷、肴三種・索麵十五把・コブ三束・ビワ三種、ナカラ台ニ積ム也、

探題モ同前、但肴ハ別也、

初献毛雑 二献素麵〈引副麩〉 三献〈スイセン・油煎タラフ〉

縁高菓子 酒三返在之、

他寺相伴衆

成身院

福園院

実田房権大僧都

実清権律師 以上

(32オ)

訓賢 実乗 訓秀

右之訓秀ハ、探題伝受他ヘ不可致旨、状ヲ被乞間、種々勘旧記処ニ、其趣全ク不見、及先年訓芸法印探題之時、一乗院ヘ被遣状在之、則其趣ニマカセテ他ヘ不可致伝受之旨、正源院ヨリ喜多院ヘ被遣也、於モ当寺門跡・院家衆在之時者、他ヘ伝受勿論也、凡人ハ他ヘ伝受不叶也、但実証歟、不知之、其時之使僧ニ探題ノ訓賢ヨリ訓秀ヲ被雇間、三人喜多院ヘ参也、一、從五月十一日可有ル法花会始行之旨、相定処ニ、伶人衆從江戸將軍被召、于今無帰宅付会式延引畢、依之、薬師寺・法隆寺ヘ延引之趣、書状ヲ遣了、

文詞云

舞樂人等 從江戸不致帰宅付、来十一日之

(32ウ)

法花会可有延引之旨候、定日者重而從是可申入也、恐惶謹言

御寺務奉行

五月七日

実光

薬師寺  
沙汰所  
法隆寺  
年会所

折紙也、文章ハ両寺同也、使者ハ出納ヘ持遣也、

(33才)

諸從下行物之事

〈京升〉一斗五升 〈円宗〉從僧 〈同升〉一斗五升 〈從僧〉同人 一

斗 大童子久松

一斗〈障子紙一束遣也〉、大童子源次 定者法師〈了徹〉ヘハ障子紙二束・帶一筋遣、

小性一人南市之源藏ヲ雇ニ付、白帷一ツ遣之、

二斗八升〈□升〉力者四人賃ニ渡之、

此内開結ハ四人、中間三ヶ夜ハ二人宛〈二人別ニ升宛下行訖、

中童子ハ内ノ小性故ニ不入下行物也、

唐笠持ハ五升十合升ニ渡之、

(33ウ) ○白紙

(34才)

○以下天文四年出世後見英訓日記の引用。

一、放請維摩会堅義者事

右、依別当之仰所故請如件、

天文四年正月 日

出世御後見擬講英訓 判

(34ウ) ○白紙

(35才)

右旧記者清涼院実英法印仁令借用写之者也、

寛永八年〈辛未〉八月日 法印権大僧都重祐

(以下四行余白)

(35ウ)

今度某講師慇懃役次第ハ、清涼院実光法印之趣ヲ以テ懃役スル也、講師口伝ニ  
ハ実光法印へ参也、持参事(捧物)五十疋、樽二荷三種也、則三献次第モ在之、  
但論義者隆実法印講師之時論義也、

寛永八年(辛未)八月日 講師重祐

(36、裏表紙見返し、裏表紙) ○白紙

## 一〇 法花会日記講師方（東大寺図書館一四二・四二二号）

（表紙ウワ書）

（異筆）  
「惣持院」

法花会日記（講師方）

（朱印『惣持院』）

英憲

（表紙見返し）○白紙

（1才）

講師方（文明九年延宮講師時日記、延忠得之写之、）

一、十六日晚、以講師坊へ被移、重衣白五帖云々、

一、講師坊料理事、執行所沙汰、講師出仕之時、着座之、畳一帖（高麗）・屏風

（片）・燈台（二）・簾等ナリ、

一、僮僕事、旧記之趣、住侶沙汰之時、如形見タリ、雖然、今度ハ且為会、為

ト身被存故、從侶（二人）・中童子（二人）・大童子（二人如木）・御童子（二

人）・力者（六人）・又童子（四人）・唐笠持等召具之、則出仕ノ様ハ先ツ力

者二人、次ニ御童子（一人）、次ニ大童子一人、次ニ從僧二人、其次ニ講師、

次ニ中童子二人、次ニ力者二人、又童子四人、此中程ニ道具持ノ

（1ウ）

力者一人、其ウシロニ唐笠持等ナリ、中童子・道具持等ヲ除テ、余ハ悉ク

松明ヲ取ル也、講師ヨリ後ナランハ松明ヲ取ヘカラサル也、雖然以故実儀

如此云々、

一、從僧ハ壇上ノキワニテ松明ヲステ、講師ヨリ聊引退ヲアトニ、二形ニ壇

上ヲ行也、講師壇上へ上ラントスル時、御童子・力者・又童子等悉クウス

クマル、大童子ハ腰ヲカ、ム、サテ右ノ力者・御童子・大童子、其次ニ中

童子、次ニ左ノ力者・御童子・大童子、其次ニ講師ノアトニアリシ力者・

又童子等壇ノ下ヲ行也、此時ハ松明ヲ左ニ持ツヘシ、講下ノ時ハ右ナルヘ

シ、

一、講師正面ノ西ノワキニ立ツ時、御童子ヨリ大童子・中童子・從僧次第二、

草鞋ヲトリ渡ス、但以右ノ役ナルヘシ、

（2才）

道具ヲワイテヨリ、彼ノ草鞋ヲハカスト見タル日記モアレトモ其レハ不可

然、仍今度ハ先草鞋ヲハカセ参セテ、ヤカテ鼻広ヲトリテ渡ス事如前、其

後居箱左ノ御童子・大童子・從僧如此次第第二取り次キ、香呂ノ箱ハ右ノ役

取ツク事如左、

一、講下ノ時ハ從僧兩人道具ヲ取出シテ後、草鞋ヲ取リカフル也、

一、初結ノ時、列成テ悉ク堂内へ被入時分、定者法師ヲ遣ワス、其後職掌五人

来ル、此内松明二人モ從ニハ不混、講師ノソエヲ行也、又綱掌来テ参堂候

ヘト之事アリ、其後出仕アルヘシ、中間ハ三度ノ案内アルヘシ、

一、列ノ鐘之事、開結ニハ注記下知之、中間ニハ講師坊ヨリ加フルト下知見タ

ル日記在之、爰今度者注記イツモ下

（2ウ）

知ヲ加フル事タル由申ス間、不及旧記之沙汰、講師坊ヨリ不知スル事無之、



一、亭ノ出仕者、如意坊ヨリ在之、路ハ北堂<sup>(室)</sup>大道ナリ、手輿タル間、力者三人・又童子二人、已前ノ外ニ雇畢、

一、講師ヘノ堅者ノ引物事、堅者ノ覚悟、悉威儀供計ト云々、爰応永五年十一月執行之時、重俊武藏擬講師沙汰、此時堅者隆祐引物ノ日記、威儀供捧物等分ト見タリ、又応永十六年講師覚祐、此時堅者経顕ノ日記モ等分ノ送物也、此外モ猶見タリ、所詮威儀供計ノ日記ハ、良家御時ノ事也、此申者候間、威儀供・捧物俱以不送乎、

以上

(3才)

一、堅者方送物請取書様事

請取 法花会初夜堅者威儀供捧物事

合

右、講師之御分所請取如件、

年号月日

行事僧名 判

(三行分余白)

(裏表紙)

(左端中央、異筆)

「賢盛」

一一 法華会日記講師方（東大寺図書館一四二一四一三号）

（表紙ウワ書）

文明十三年（丑） 自卯月廿日被始行了、

（朱印『惣持院』）

法華会日記（講師方）

（異筆）  
「相伝英訓」

英憲

（表紙見返し）○白紙

（1才）

文明十三年（丑） 卯月廿日被法華会始行畢、

講師 権大僧都英祐

一、所持道具（装束者、法服、衲袈裟） 香呂箱・居箱・香呂・三衣袋（入衣）・

草座・鼻荒・草鞋・如意・檜扇・念珠、

一、僮僕事、力者四人（二人者松明、二人者道具ヲ持、（香箱・居箱）） 從僧

二人 大童子二人 御童子二人 中童子二人 又童子二人 唐笠持一人、

（1ウ）

定者法師

一、開白事、聴衆欲成列之時ヲハカライ、火ヲタク也、仍注記・綱掌ヲ以テ列

ニ成リ候ト催、聴衆入堂内畢時、先定者法師ヲ遣也、或日記ニハ綱掌出仕

ヲス、ムル時、定者ヲ遣トモ見タリ、綱掌（触）フル、事二度也、其後職掌五人

（二人ハ松明、二人ハ幡持、一人ハ蓋持、合五人）、迎參時、講師出仕也、

西南ノ廻廊ヲトヨリ講堂石壇ノキワニテ力者ヨリカシコマル、大童子、腰

ヲカ、ム、從僧ハチト御礼計也、壇上へ御トモハ從僧計也、其後諸從ハ石

橋ヲトヨリ（切芝）シリシハへ行也、右ノ諸從ノ後中童子モ、アトニ左ノ諸從ナリ、

正面ニテハ東ヨリ一面ニナラフ、  
（並）

（2才）

講師ハハタカハシ（幡頭）ラノ南ヲ御トヨリ也、講・読タカイニ見合スヘシ、北へ

向、《西ノ脇》戸ノソイニ御待ノ時、御童子ヨリ大童子・從僧次第二草鞋ヲ

取渡シ、《講師東向テハク也》ハカセ参セテ、廳而鼻高ヲ取渡事如前、居箱

ヲ左ノ御童子・大童・從僧、次第ニ取次テ、從僧高座ノ棚ニ置、香呂箱、

右ノ役取次事如前、其ノカヘリニ香呂ヲ取出、講師ニ渡也、廳而堂内へ入

テ、《此時舞樂アリ》、正面ノ西ノ礼盤ノウエニテ三礼アリ、三礼ノ後、西

へ向行時、從僧香呂ヲ給リテ大座へアカリ、香呂箱棚ニ置也、講師ハ草鞋

ヲ大座マテハキ、キタ橋ヲ上テ着座ス、《若講師威儀、橋へヲチカ、リナ

ントシタレハ、從僧北ヨリアカリ威儀ヲナラス、サナクハスヘカラス》、

其後法用ノ舞有四（万歳・延喜・賀殿・長保）舞畢テ、注記磬ヲ二ツ打時、

唄始、次散花次又注記

（2ウ）

磬ヲ打、其後注記喚行事小綱云、差紙燭立侍高座辺之時、即差紙燭而來、

其時縁起ヲ始、縁起畢テチトアイヲ置之、経ヲヒロケ奉、問役ウタウヲキ、

テ置也、次講師表白、次牒答、答畢テ注記侍ヲ喚テ講下ノ鐘ヲツカス、次下樂アリ、(但樂ヲソクハ先ヲルヘシト、日記ニ見タリ)、其時退出也、從僧道具ヲ取出事如前、於正面ノ西ノ柱脇ニテ鼻高ヲハク、

一、初日自夕座事、

以小綱三度ノ案内申、初度ニ用事ヲナス、第二度ニ装束スヘシ、カ、リヲ(簪)タカスヘシ、第三度ニ從共ヲソロヘ出仕スヘシ、

(3才)

此時モ先定者ヲ遣也、(從僧ハ妻戸ノ前ニ出テ待申也、中童子ハ門ノサヘノ外ニマツヘシ、諸從ハ北ヘ一面ニナラフ、此ハ開白モ如此)、出仕行粧如開白、但略居箱、草座ト香呂箱トヲ一人シテモツ也、從僧取時二人シテ取(ツキ)□□モチテ行也、又無舞樂也、職掌ノ迎キタラサル也、此時モ散花ハテ、チトシテ□□也、

一、結願作法事、諸事如開白、(道具モ悉申)、舞樂有二(万才・延喜)、次訓唄・散花ノ後、訓廻向アリ、其作法ハ、モノヲハ之句ハイワス、心中ニ祈念スル計也、ヨミ畢テ、ウシロミカヘル様ニスル時、注記、侍ヲヨヒ講下ノ鐘ヲツカスル也、下樂アリ、其時退出、

一、雨儀事、諸從ハ西ノ金廊(軒)ニマツヘシ、但中童子・大童子ハ御トモシテ壇上ヘアカル也、香呂箱・草鞋ヲモツ故也、力者一人ヒツシサル角ニテ

(3ウ)

松明ヲタカク阿克ヘシ、壇上ヘノ為也、

一、從僧役事、講・読共ニ正面ノ戸キワニ立也、其内從僧ハハカタ桂(桂)ノ辺ニ立也、其時鼻荒ヲカフ、御道具ノ内ヘ入時(此時ハ講師ハサヘノ外ニマツヘシ)右ノ從僧ハ読師ノトニ行ニナルヘシ、道具ヲ御高座ニ置テ後、講師サヘヲ御コヘノ時御手ヲ引ヘシ、(二人共ニ)、三札ノ時ハ從僧二人共ニ西桂戸口ノソイニ立イル也、三札ハテ、西ヘ御向ノ時香呂ヲ取、大座ヘアカリ棚ニ置也、退出ノ時ハ、大座ヘ御ヲリノ時分ニ道具ヲ取出也、イツモ道具ヲ前ニ出、講師ハ後ニ出也、

一、定者法師事、講師坊ヨリイソキ正面ノサヘノキワマテ行、其後サヘヲ歩ミコシ、西ノ札盤ニ南向テ腰ヲカク、講師出仕シテソトノ正面ニ立位ニ西桂ノキワニ立イル也、(戸口ノ桂ナリ、從僧ト一所ナリ)、

(4才)

三札ハテ、又如元南向キニコシヲカクル也、唄始時東ヨリニ番メノ香呂ノ蓋ヲ從僧取テ渡ス、是ヲ持テ。(如散花師ノトヲル、)堂内ヲ一辺マワル、廻畢テ正面ニテ從僧渡テ、サヘヲコユル時、又□□講師坊ヘカヘル也、一、(装束ハ寺ニアリ、草鞋ヲハク也、)亭出仕事、北室大道ナリ、装束ハ法服・平袈裟、手輿ナリ、聴衆列ヲ始ムルマテハ、手輿ヲ前ヘノシハニ立也、(芝)列ハシムル時輿ヨリヲリ、鼻高ヲハク也、其後小綱参向シテ手ヲサイソク申也、其時東ノ戸口ノキワニ立待ヘシ、其時從僧兩人ヲマタシ、橋ノ上ニテ大童子ヨリ道具ヲウケ取テ亭ヘ入、西ノ方ヨリ上テ畳ノ上ニヲク也、草鞋座ヲハ円座ノ上ニ敷也、又外ヘ出ヘシ、其後講師御出仕アリ、從僧ハ立

帰テ、戸口ノ内東ノソイニ立ヘシ、諸從ハ御着座以後亭ノ前樹ノ下ニ東ヨリ一面ニ床木ニ腰ヲカケテ居也、

(4ウ)

カ、リヲタカスル也、中童子ハ立テ輿ヨリ少前道ノ北ノシハヘヨリテ床木ニコシヲカクル也、一、講師ハ南ノ戸口ヨリ一文字ニ床ヘ上リ、御着座ナリ、

一、御退散事、隨喜導師以後ヨリ樂アリ、其時御立アルヘシ、從僧ハ則寄テ、道具ヲ取、右ノ從僧ハ東ノ机ニ捧物ノ絹アリ、是ヲ取■居箱ニ入テ持歸ヘシ、又雨タレキワニテ渡事、如前、後御輿ニ召御歸也、

一、從僧ハ松明トラス、余ハ悉トル也、御道具ハ草座・居箱也、

(以下五行分余白)

(5才)

出仕之体

力者、御童子、大童子、從僧、力者(御道具)、又童子

職掌(松明・幡持前)

講師、蓋持、中童子、唐笠持

職掌(松明・幡持)

力者、御童子、大童子、從僧、力者(御道具)、又童子

職掌松明ノ松ハ日記ニ見サレ共、今度中間開結ニチャウツ、講師方ヨリ

下行畢、

職掌ハ中間ニハ無シ、開結計也、

(5ウ)

從下行情事、皆々〇《為》内衆間、令勤略下行畢、

定者法師(三百文)、中童子(三百文)、從僧(二百五十文ツ)、

大童子(二百文宛)、御童子(二百文ツ)、力者(百五十文ツ)、

又童子(百文宛)、唐笠持(百文)

(二行分余白)

亭之時ハ力者九人ナリ、三十文宛、

(二行分余白)

(6才)

此時堅者七人

順円(華ム宗)

精義者興弘擬講(法相宗)

円盛(同)

兼実擬講(同)

秀範(同)

実心権少僧都(同)

英定(同)

興弘擬講(重役也、)

宗順(三論宗)

兼実擬講(重役也、)

実友(同)

実心権少僧都(重役也、)

英経(華ム宗)

澄延権少僧都(華ム宗)

(6ウ)

(二行分余白)

探題ハ普門院僧正秀雅(三度召敷)、会始ハ澄延権少僧都

(二行分余白)

一、集会鐘事、已前九年之時ハ開結ノコトク、中間ニモ注記加下地由申間、講師ヨリ可加下地見タリ、然ニ今度ハ中間ニハ〈自初日夕座〉自講師加下地之由、注記申間、自講師加下地畢、仍又旧記如此云々、

(7才)

抑今此大会者、自天平古至文明今、燈煙不斷、混每春之霞、年数雖旧、事猶是新、然則所講之无二之真文、施皆令入仏之他所請之、二明之深義顯破邪、顯正之益、若爾鑽衆窓閑桃惠燈、於万春之曉論弁床高叩法鐘、於千秋之霜乃至平等利益、雖為惡筆為大会未來弘通、今度講師〈重祐〉出仕、行粧再僮僕義式、如形留日記者也、依之□者速遂両会堅精、願者、令昇維摩・法花之燈主之高座給乎、

文明十三年〈丑〉卯月廿五日 三論宗英憲〈生年十九〉

(7ウ〜10、裏表紙見返し) ○白紙

(裏表紙)

(左端中央 ○伝領者)

(英)  
「■ ■」

一二 法華会講師日記(東大寺図書館一四二・四一四号)

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

(表紙ウワ書)

天正五(丁丑)十二月 日

法華会講師日記

擬講浄実

(表紙見返し)

今度講師請物

八貫四百文(二貫八百文宛・三口ノ定)、四石(寺升定)、一斗(寺升)亭  
以上、以斗和市定合十二石五斗請取之畢、

一、今度ノ会ニ<sup>カイトリ</sup>鑑取講師来リテ、請物一斗可給由申間、返答云々、講師ハハ  
始中終行事ノ小綱第三度マテヲ催ス、鑑取ノ催ハ無之上ヘハ不可為下行之  
由、返答了、又鑑取ノ申様ニ開白ノ最物ノ結願ノ終リトニハ鑑取催シ申間、  
是非共可給由、申ス間不及力一斗《十合》下行畢、

(1才)

天正五年(丁丑)十一月十五日ニ法花会講師口伝ニ大乘院僧正ヘ参ル、樽  
二荷(タウフ廿丁・クシカキ二把・ミカン百)・八木一石持参ス、講師口伝  
之後、三献給ハル、初コン(赤飯・サウニ)・二献(ムシムキ)・三献(ス  
イセン・シイタケ)・<sup>(縁高)</sup>フチタカ菓子、此後又僧正対面ニテ<sup>(供饗)</sup>クヤウニテ御  
盃ヲ給ハル、三献ノ座敷ノ相伴ノ衆南井坊・常光院・予(講師)・北林院  
(探題)、当寺ヨリ探題・講師二人一<sup>ト</sup>双ニ口伝ニ参スル也、

一、講師口伝之様事。《法花会之》縁起一返ヨミ給ヘリ、<sup>コハサシハ</sup>聲指、当寺ノ第  
二重ノ引<sup>コヘ</sup>キ聲ノフシトノコトク也、縁起ノ奥ノ

(1ウ)

勸請ハ当寺ノ表白ノ時ノ勸請ノフシノコトク也、

一、第二度目ノ講問ヨリハ経尺ヲハ講師坊ノ内ニテヨミテ、会堂ニテハ不<sup>ル</sup>読  
之<sup>レ</sup>也、○《高座ニ上リテ問ヲ行フ也》、会ノ問役講問ヲ兩題ヲ挙。《ル、

畢ヌル》時<sup>キ</sup>講師、表白ヲ最初ニ云出ス、其ノ表白ニ云ク、

大会厳重<sup>ニシテ</sup> 写<sup>ツシ</sup> 驚嶺之昔<sup>シヲ</sup>、論談巧妙<sup>ニシテ</sup>、学<sup>ブ</sup> 月支之決断<sup>ヲ</sup>、爰

ニ<sup>テイヤウノヒラ</sup>講者以<sup>ク</sup>抵羊<sup>ノセキニ</sup>勢<sup>ヲ</sup> 忝預<sup>ヨ</sup> 獅子<sup>ハテ</sup>講席、弥賜<sup>ニ</sup> 二明龍問、只欲

フムト<sup>ノイフジョウ</sup> 蒙<sup>テ</sup> 四座<sup>ヲ</sup> 優恕<sup>スル</sup> 矣、次取<sup>テ</sup> 牒<sup>ヲ</sup> 答<sup>スル</sup> 也、

一、取<sup>ル</sup>牒<sup>ヲ</sup>様ハ常ノ如<sup>ク</sup>講問之時、初メニ面モノ因明門ノ問題、次ニ

(2才)

内修ノ講讀経等也、取<sup>ル</sup>牒<sup>ヲ</sup>調子ハ、表白ノ如調子<sup>ノ</sup>也、答<sup>ノ</sup>此事ヨリ一重高  
ク聲ヲアケテ答スル也、又<sup>コハ</sup>聲色ロハ当寺之講問之時ノ問者ノ第二重ノ引  
キ聲ノフシ也、每座如此也、被仰也、

一、講師ハ法服ニ<sup>(衲)</sup>ノウノ袈裟也、檜扇ハ常ネノ也、フサヲ付ル事ハ探題以上ノ  
事也、

(2ウ)

法花会講師論義(天正五年(丁丑)十二月十一日ヨリ法花会ノ執行也、)

○以下、8才途中まで問答内容は省略。

(3才)	初日朝座	開白問者慶憲得業
(3ウ)	初日夕座	問者円清
(4ウ)	第二日朝座	問者興尋々々
(5才)	第二日夕座	問者教英々々
(5ウ)	第三日朝座	問者堯英々々
(6ウ)	第三日夕座	問者穩英々々
(7ウ)	第四日朝座	問者英印擬講
(8才)	第四日夕座	問者英俊擬講
(8ウ)	以上	

天正五年（丁丑）十二月二日ヨリ六日ノ夕部結願也、廳テ六日ノ曉、亭論  
匠ニテ講師結願也、亭屋ヘハ講師計出仕也、講師モテナシノ番論義也、云々、

六日ノ夕結願座ニハ惣之聴衆満參アリ、唄・散花之様、講師ノ作法ハ如遠ノ講問ハ無之、結願之作法ヲハ心中ニ祈念シテ、音声ニハ不<sup>ル</sup>出<sup>サ</sup>也、心中祈念シ畢テ如意ヲ指シ挙ケテ、注記ニ見スル也、此時鐘ヲ打テ諸衆皆退散畢、講師ハ亭屋ヘ出仕スル也、但結願之作法ニ付、興福寺ノ講師ノ番ノ時ハ、副問<sup>ソエ</sup>トテ会ノ講問一座在之故ニ、会ノ講問九座在之、当寺ノ講師ノ時ハ、会ノ講問八座之也、

一、開白ノ講師ノ出仕ノ様、手興<sup>テヨシ</sup>ニノル、赤衣ノ仕丁五人来ル、一人ハ蓋<sup>カイ</sup>ヲサス、二人ハ左右ニハタヲサス、二人ハ

(9才)

松明ヲ持テ前ニ立ツ、此從僧二人、中童子一人、大童子二人、エヒノ皮四人、力者四人（二人コシヲカク、二人松明ヲトル）

一、開白ノ様ハ、会堂<sup>エン</sup>ノ櫛ノキワニ立テ、前エ從僧ニ草座并香呂箱・居箱ヲ入サセテ、其後読師ト講師ト左右ニ並ヒ、堂内ニ入テ仏前ノ礼盤ニ上ホリ、三礼ヲシテ高座ニ上リテ座ス、然レハ唄役、唄ノ後散花行道アリ、散花後鐘一丁、此時縁起ヲヨム也、縁起并次ノ座ノ時ヨリハ散花ノ鐘ノ後、經尺ヲヨミ、終リヌレハ、開口ノ問者会ノ問ノ論義ヲウタイ懸クル時<sup>キ</sup>、講師表白ヲ

(9ウ)

初メニウタイテ、次ニ問者ノ條ヲ取テ答之也、因明ノ論義ヲ初ニ取テ、次ニ講讀ノ經等ヲ條ニ取也、講問終リテ講ヲエシノ鐘ヲ聞テ高座ヨリヲル、

也、

一、手輿ハ初結計<sup>(結)</sup>リ也、赤衣仕丁五人出仕スルモ、初結計也、一献ノ様ハ初コ

ン〈赤飯・サウニ〉、二献〈サウメン・ムシムキ・木具〉、三コン、二ツ分

三毛立、フチタカクワシ、<sup>(菓子)</sup>

一、諸徒エ如形一コン在之、但初結ハ赤飯、中間ノ夜ハホウサウ、或ハ夕飯以

下、任時宜、<sup>ニ</sup>

一、下行物事、徒僧へ《十合》二斗充、中童子二斗、其外ノ

(10才)

徒へ八十合一斗充下行畢、

当年法花会講師予勤之、一生之満足何事如之、其子細者、上座訓芸防州目

代下向四五年在国也、去年備後鞆迄帰洛之处、信長与小坂取合之故ニ路次

不通也、依之又防州へ下国也、然処、大会執行之間、予則勤仕畢、依之、

当年之法花会講師予勤仕之、倩案此次第、偏八幡大菩薩御感応之故也、感

□浴双袖、歛喜□五体者也、

(10ウ)

学究之望免、既遂持悦々々矣、

天正五〈丁丑〉十二月七日

擬講浄実〈五十六才〉

(以下余白)

○以下裏表紙まで白紙



一三 法華会旧記（東大寺図書館一四一二五〇九号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。校合用の合点も省略した。

（表紙ウワ書）

法華会旧記

英性

（表紙見返し）○白紙

（1才）

（あ 実相坊卿得業撰法華会記録）

（あ①応永二十年法華会堅義重弁記拔書）

法華会日記（応永廿年（巳）正月十八日第三夜堅者重弁）

聴衆方

一貫文

三河法印

帥法印

三百六十文  
頭覺房権少僧都

同

了恵房権少僧都

二百四十文  
舜觀房権律

同  
大進権律師

同

大夫々々  
但馬々々

已上一床

三百廿文

隆盛擬講

同  
弘豪得業

同  
英重々々

同  
寛英々々

（1ウ）

同

清覺五師

同  
英玄々々

同  
澄祐々々

同  
快実々々

同

融賢々々

同  
賢盛々々

同  
賢海五師

同  
澄賢々々

同  
延海々々  
公覺々々  
弁雅々々  
散花師（公秀）

已上専寺

三百廿文  
三百文

舜專擬講

同  
懷縁得業

同  
印重々々

同  
堯祐々々

同

良深々々

同  
已上興福寺

同  
祐円五師

同  
良繼得業

已上薬師寺

三百文  
淳藝得業

已上法隆寺

三百廿文

威儀師

三百文  
從儀師

同  
注記

（2才）

已上綱衆

三百六十文

藏人法眼

同  
大夫々々

三百文  
慶舜寺主

已上三綱

三百文

頼賢法橋

同  
定勢伍師

已上五師

三百文

正勾当

二百八十文  
権勾当

已上勾当

二百六十文

講師

三百  
読師

已上講読

合拾四貫八百一文

（2ウ）

雑々所下

八百五十文〈威儀僧十五人五十文ツ、拝礼三人加分卅文ツ、〉 五十文〈同  
奉取小綱賢智、年預小綱役云々、〉

百四十文〈從僧、此内四十文捧物二帖〉 五百文〈中童子二人引手物代扇ヲヒ、〉

百六十三文〈大童子四人、各二帖四十文ツ、〉 二百文〈身入賃〈辰王下行了〉

四十文〈身入時捧物、辰王下行了〉 四十文〈身入時紙代〉

八十文〈中童子捧物二帖ツ、四十文ツ、〉 二百六文〈読経僧捧物二帖ツ、〉

百文〈小綱公人雜紙五十帖代〉 二百文〈小綱公人拝礼〉

四十文〈御請使鑑取下行畢、雜紙二束代〉 五百文〈祈師〉

合三貫百廿文

(3才)

米所下

八十文

一斗 講堂仏餉〈寺升〉

二百八十文 二斗 鑑取綱掌〈寺升〉

八百廿四文

一石 読経僧十人〈寺升〉

四百文 五斗 三斗公人二斗小綱 寺升

四百文

四斗〈大童子四人 各一斗ツ、〉 長合 一斗〈装束師〉 長合

百文

二百文

二斗 中童子二人 長合 一斗 從僧 長合

百文

三百文

三斗 力者三人 長合 一斗 ハラツハキ 長合

百文

合二貫七百八十七文

都合二拾貫七百十一文

此外

八百文 大童子装束賃 三百文 力者衣袴賃

(3ウ)

百文 ワラツクツハキ装束賃 五百文 ハカリ中童子将束賃

以上四色、尊勝院殿ヨリ、第二夜堅者清重用ニ諸方ヨリ御秘計アルヲ、一

円ニ借申間、此分不入也、

一、一床ニハ、当日相副送文、以力者遣之、

一、両探題〈三河法印帥法印〉 講師東室、此三ヶ所へハ進上ト書之、余ノ一

床へハ、奉送書之畢、賢海五師堅義之時、実演法印探題之時、被遣送文正

文、披見候、彼云、

進上 法花会第 夜堅義者威儀供・捧物事

合壹貫文者

右所進上如件、

年号月日

(4才)

第 夜堅者賢海、此年ヲ写テ、余一床等悉用意畢、員数ヲ合下ニ載之畢、

一、維摩会日記

寺家権別当両探題捧物送文案文〈但現紙数可替、〉

進上 第四夜堅者調躰代事

合紙一積、上積十五帖、下積三十五束、結緒二筋

右進上如件、

々々年号月日 第四夜堅者某

或立紙上下捻云々、  
杉原二枚引重書之、立紙在之、押折也、表書無之、

(4ウ)

酒肴捧物同篇也、正権探題進上、余一床ハ奉送云々、

○維摩会日記のことはこまやか。

一、五師方へハ、設雖為僧綱、等分三百文可有下行云々、即此分下行畢、但古日記ニハ、加分下行トモ見タリ、雖然、五師ハ中床役ナル故、三百文可下行由、依有沙汰下行畢、

一、五師・三綱・勾当、一ヶ夜モ無出仕者、下行物一円ニ不可請之、若雖為一ヶ夜、出仕在之者、下行物可請之云々、然而、賴賢法橋、伊与法印ノ中陰ニ、被籠之間、出仕不叶、雖然、先年大会、定勢五師ノ代官行遍阿闍梨被出仕、下行物一円ニ被請、先規在之由、法花会沙汰人集会ニテ

(5オ)

披露之間、尤有其謂トテ、賴賢法橋モ立代官ヲ、即下行物被請畢、出仕多少ハ無子細云々、非学道ノ五師如此觸穢等ニモ立代官無子細、学党分五師ハ觸穢スレハ不叶云々、其故ハ出生せハ、定テ堅問役等、可懃仕故也云々、

已上旧日記

(あ②芝律師口伝聞書)

一、良家ハ威儀供ヲハ不被召、捧物計ナル力故、良家分ニハ捧物計カキ、(書)余一床ニハ威儀供・捧物トカク処、維摩会時一床分ハ、悉捧物計也、法花会時、住侶ハ威儀供ヲ被取見タリ、引物ニハ減少モナキ力故也、良家分ニハ減少

シテ

(5ウ)

二百文宛等分在之、

一、御請ノ請文書様如維摩会日記、但法花会ト日ツケト替ル也、

一、二字書様、伝灯法師位某〔年号月日在之〕

堅者法則

一、義名事、先力者探題方へ遣啓案内、其後可行也、探題坊へ入テ、(沓脱)クツヌキノキタハシ一重登テ、鼻広ヲヌキテ、(脱)草鞋ヲエンマテハキテ、妻戸キハニヌキテ、内ニ入テ坐ニツク也、サテ從僧義名ヲツ、(葛籠)ヲノ蓋ニ入テソハへサシ出也、夢見ヲハ

(6オ)

始ヨリ懷中スル也、其後、探題被出、タ、ミニ坐ナカラ、(嚴)キヒシク礼ヲスル也、若代官風情ナラハ、少儀ヲスヘキ也、サテ着座ノ後、義名ヲ蓋ニナカラ、両手上ニヲイテ、指アケテ、探題ノ前ニウスクマル、其時探題義名ヲトル、サテ蓋ヲハエンニ出シテ本座ニウスクマル、其時探題十題ヲ被<sup>レ</sup>尋、懷ヨリ取出テ、可渡也、不尋者、探題内へ入テ後、退出シテ、エンニ立タラハ、修学者可出、其二可渡也、サテ廳テ退出也、渡時ハ袖ヲサシ合セテカマエテ、密々ニ渡也、探題廳内へ不入之時、チト儀ヲシテ退出スル也、(顔)探題カヲ、シテ、可出色ヲ見スル也、サテ出テ後、(南廊カ)面ランノ中間ニ立也、威儀僧北間立、中童子ハ<sup>(南)</sup>經藏面間トヲリノ南柱ノモトニ坐也、大

(6ウ)

童子ハ、面ヲウノ中間北柱、北間北柱モトニ居也、サテ四ノ床ノ聴衆内ヘ入テ後、散花行道始テ、末座後戸ヲ行位ニ、中童子大童子以下、僮僕皆壇下ヲ西ヘメクリテ行、堅者從僧威儀僧、壇上ヲ西ヘ行、サテ西ノ戸ヨリ入テ、五ノ床ノ頭ニ尻ヲカケテ、南ムキニ居也、其後、探題案内申テ、從僧スエ箱ヲ持テ、堂内ヘ入位ニ、堅者西戸ヘ出テ、用事アレハナス也、サテ探題着座後、鼻廣ヲヌキテ、草鞋ヲハキ、内ヘ入位ニ、綱所短尺ノ箱ノ蓋ヲアケテ、西ヘムキカヘル、其位ニ堅者東ヘ行、二(三イ)ノ床ノ頭ノ程ニテ、

(7オ)

綱所ハ北、堅者ハ南、袖ヲスリ合ル様ニテ、スクニ正面ヘ行テ、本尊ニ向テ三礼コト／＼シク無テソトスル也、香呂ヲハトラス、只檜扇ハカリニテスル也、サテ東ヘムキテ大菩薩ニ一礼スル也、サテ本尊方ヘ向テ、還テ西向ヘナリテ、短尺ノソハヘヨリテ、箱ノ内ナル札ヲ取テ、左指ノマタニ(又)ハサム也、大指マタニ一二問札四枚ヲハサミ、次第二三四五トハサム也、内明ヲ上ニ次第／＼ニハサム也、サテ一問内明ヨリ一ツ、右ノ手ニ取テカワリ、探題辺ヘスコシ聞程ニ読也、サテ内明ヲハ箱ノ東ニ置、因明ヲハ箱ノ西ニ置也、一問ヲハ箱ノヒヲ頭ニシテ、次第二内明ハ東ヘ置、因明ハ西ヘ置也、文次第二読テ、其ノ札アルヘキ所ニ

(7ウ)

置也、仮令三問カ文始ナラハ、一二問置程、箱ノソハヲアケテ置也、札ヲ

ハ文字ヲ下ヘナシテ置也、サテ檜扇ヲムネヨリ取出テ、高座ヘ登也、草鞋

ヲハ大座上エマテハキ、キタハシノキハニヌク也、サテ登テ後、綱所札ヲ

探題前置テ、一問取テ(配)ハル、古日記、此ノ帰ル定ヲトヲ聞テ表白ヲ出也、

如此論義終テ、彼探題若無時ハ、精義得略判シテ、綱所十題内九得、一未

判ナント云、終レハ自高座下テスクニ西戸ヘ出也、(直)

一、一人ナントノ貴所ニテハ、草履ハク時、聽テ從僧持タル、義名ノ蓋ヲ直

取テ、探題前持向蹲跪也、又拝札モ疊ヲ下テススル也、

一、拝札ハ堂帰ニ力者ヲ遣テ、案内申テ行向、鼻広等

(8オ)

儀、或如義名之時、礼探題者立時歟、若者後出力不定也、内ヘ入テ坐礼シテ三礼スル也、コト／＼シカラスシテ探題悦様申サレテ後、出也、

已上《芝》律師口伝分

(あ③康応元年淨願坊英重カ日記抜書)

一、サテカレ(彼)ハト云事ハ、一問ハ第三重ノ答内明ヨリ、因明ヘウツル時、始テ

サテ彼ハト云也、二三問ハ第三重ノ問ヨリ始テ云也、

一、第三重ノ答ノ内明ノ終ニハ、不可有相違、サテカレハト云也、因明ノ終ニハ無辺可答申也ト云也、

一、是以依之、何況等ノ詞ヲハ、一問ニハ切音ニハセス、二三問ニハ切音ニスル也、ウタウ時ハ何問ニモウタワサル也、

一、答申旨、不可然云、初ノ言分明ニ答申ト云、終詞是ヲハチウニ

(8ウ)

取、不取二説有トモ、以不取為善、

一、切音一問ハチトナカク、二三ノ問ハマスコシハヤクスヘシ、  
(長) (速)

一、但馬法印云、一二問ハ第三重ノ答ヨリ、サテカレハト云也、三問ハ第二ノ  
問ヨリ、サテカレハト云也、此説不審ト云々、

康応元年〔己巳〕十月廿三日夜書写之者也、

已上淨願坊日記云々、

于時永享三年〔辛亥〕九月十九日、実相坊卿得業本ニテ書写畢、

三論宗光祐

(い 法華会堅義恵延撰法華会記録)

(い④永享十二年法華会堅義朝乘日記)

自永享十二年〔壬子〕正月十二日始行、法華会日記

第四夜堅義者朝乘〔卅六才〕

(9才)

一貫文 三百八十文会始 同精義

探題〔西室権僧正、于時寺務〕 弁権大僧都 伊与権大僧都  
(公頭)

三百六十文会始 三百四十文会始 三百廿文精義  
卿権少僧都 侍從権律師 快実擬講

同 同 精義 同 精義 三百文  
賢海々々 延海々々 清重擬講 幸重五師

同 同 賢叡得業 同 賢重々々 同 重弁々々  
経兼々々

(9ウ)

同 同 同 同 同  
弁範々々 祐俊々々 憲延々々 經宗々々

同 同 同 同 同  
重融々々 盛賢々々 隆秀々々 英真々々

同 同 同  
経真々々 快春々々 散華師祐成

已上東大寺

三百四十文 精義 同 精義 三百廿文 精義  
源恩房権律師 忍親房権律師 光耀擬講

三百文 同 同  
善円得業 顕守々々 乗縁々々

同 同 同  
重実々々 懷尊々々

已上興福寺八口

三百文 同  
良繼得業 慶弘々々 已上薬師寺

三百文  
清祐得業 已上法隆寺

三百文  
定勢五師 已上五師

三百六十文 三百四十文 三百文  
寛専法眼 慶実法橋 寛能寺主

(10才)

已上三綱

三百文 三百文 同  
威儀師 從儀師 注記

已上綱所

三百文  
二百文  
正勾当 權勾当 已上勾当

二百八十文 三百文

講師(興福寺慈恩院大納言權大僧都) 読師(賢円大) 已上講読

合十五貫三百廿四文

雑々所下

八百五十文(威儀僧十五人、各五十文宛拝礼三人、各三十文当加分)

五十文(奉取小綱下行宗舜、是ハ法花会方年預小綱云々、常ノ年預小綱ニハアラサル也、)

(一〇ウ)

百四十文 從僧(此内四十文ハ捧物二帖代、)

五百文 中童子扇帶以下引手物

八十文 中童子二人捧物代 百六十三文

大童子四人(各四十文ツ、捧物二帖宛代)

二百文 身入貨(今度ハ身入、サレトモ下行) 四十文 同装束師捧物代

二百六十文 読經僧十人(捧物代各廿文宛) 百文 小綱公人雜紙五十帖代

二百文 小綱公人拝礼 四十文 御請使(雜紙二束代鑑取下行了、)

五百文 祈師

合三貫七十六文

米所下

百文 二百文

一斗 仏餉(講堂童子下行) 二斗 鑑取綱掌

五百文 一貫文

五斗 生料威儀僧(三斗公人二斗小綱) 一石 読經僧十人(各一升ツ、)

已上寺升下行、寺升一斗和市

(二才)

百廿四文 二百四十八文

一斗 從僧 二斗 中童子二人

四百九十六文 百廿四文

四斗 大童子四人 一斗 装束師

三百七十二文 百廿四文

三斗 力者三人 一斗 藁沓履

已上長器升下行、長器八升宛和市、

合三貫二百九十一文

都合二十一貫六百九十四文

一、宿坊於東室經營之、委細注文別紙在之、

一、調駄代札書樣

法花会第四夜堅義者調駄代

裏ハシ書之、世俗捧物代三百文

(二ウ)

永享四年(壬子) 正月廿五日 英乘

已上旧日記

(い⑤文明三年法華会堅義惠延日記)

法花会第四日堅義者惠延(自文明三年《辛卯》九月六日始行之)

一貫文寺務 四百文精義

探題普門院法印(秀雅) 帥法印權大僧都(聡海) 融乘房々々々々々々(證

春)

三百廿文会始  
弁権律師〈賢憲〉 同 同  
三百四十文精義  
按察々々〈盛海〉

三百四十文会始  
少輔々々々 〈順実〉 三百廿文精義  
慈照房擬講〈延宣〉 亮信大法師

同  
春海々々々 同 同  
弥賢々々々 同 同  
盛宗々々々

同  
覚延々々々 同 同  
祐栄々々々 同 同  
英祐々々々

(12才)

同  
専順々々々 同 同  
澄延々々々 同 同  
英澄々々々

同  
経健々々々 同 同  
英弘々々々 同 同  
散花師幸俊

已上専寺

三百八十文精義 三百廿文精義 同精義  
陽春房権大僧都〈寛尊〉 頭舜房擬講〈定情〉 覚恩房々々 〈実心〉

三百文 同  
専厳大法師〈乗縁房〉 好藝々々々 〈深学房〉 同 同  
専覚々々々 〈舜連房〉

同  
重兼々々々 〈堯頭房〉 已上興福寺七口

三百文  
長乘大法師〈堯觀房〉 繼範々々々 〈長禪房〉 已上薬師寺

三百文  
暁懷大法師〈延願房〉 已上法隆寺

(13ウ)

三百廿文 三百文 尾張都維那 同  
威儀師孝乗 〈越前寺主、北大路〉 從儀師泰増 注記泰弘

三百六十文 同 同  
実家〈二位法眼〉 快実〈大夫法眼執行〉 叡実〈大夫権寺主〉

三百文  
守芸〈中将都維那〉 已上当寺三綱四口

三百文 二百八十文  
正勾当 権勾当 已上勾当

二百八十文  
講師大納言大僧都〈任円浄法院〉 読師長弘〈春道大〉

都合十三貫八百五十八文

今度ハ非学道五師無之、当寺三綱四口在之〈人数随年不定之云々〉、

(14才)

雑々所下

八百五十八文威儀僧〈十五人五十ツ、三人拝礼三十文ツ、加〉

五十文 奉取法華会年預小綱

百四十文 從僧〈此内四十文捧物代〉 五百文 中童子二人扇帶代

八十文 中童子二人捧物 百六十三文 大童子四人捧物

六百文 身入賃 四十文 同捧物代

二百六文 読経僧十人捧物代 百文 小綱公人雜紙代

二百文 小綱公人拝礼 四十文 御請使〈捧物雜紙二束代〉

五百文 祈師

合三貫四百八十五文

(14ウ)

米所下

八十一文 百六十文  
一斗 仏餉〈堂童子〉 二斗 鑑取綱掌

四百十七文  
 五斗 生料威儀僧 (二斗小綱三斗公人) 一石 読經僧十人  
 已上寺升

九十五文  
 一斗 從僧 百九十三文

二斗 中童子二人

三百八十一文  
 九十五文裝束師

四斗 大童子四人 二斗 藁沓ハキ

三百九十四文 九十五文

三斗 力者三人 二斗 藁沓ハキ

惣合二貫六百七十一文

宿坊密乗坊 世俗方日記別紙在之

(15才)

一、力者下行一斗代斗卜覺悟スル處、前々堅者達一斗代ノ外二五十文宛下行云々、所見及日記ニ無之、大童子サヘ一斗外ニ捧物代四十文也、力者ノ下行過分々々無其謂也、雖然臨期可為違亂間、先下行畢、無分明之日記者、於向後者可被略之事歟、仍下行注文ニ不載之、

一、身入賃事、旧日記云、身不入時二百文下行云々、然者今度モ可為二百文處、

近年身ヲ不レトモ入、六百文下行云々、又前々堅者達為其通間無力下行畢、

一、設雖僧綱分、五師中座ノ役ナル故、下行物等分ニシテ不可有加分見タリ、  
調鉢代

又ハ加分下行ノ旧記モ在之歟、今度延宮擬講

(15ウ)

雖為五師職、前ノ堅者皆加分ヲ下行アル間、其通ニシテ三百廿文下行畢、既精義役沙汰アル上ハ擬講ノ加分有ヘキ事有其謂歟、

一、亭勸杯ハ專寺末ノ擬講役也、裝束ハ法眼平袈裟也、今度延宮擬講沙汰論匠衆交名ハ、自出世御後見方被送之、

唄師大仏供一杯請之、仍祐榮得業被請之畢、

堅者七人

初夜〈花〉行盛、精義者澄春法印 第二日〈三〉賢曉、精

義帥法印〈聡海〉

(16才)

第二夜〈三〉東南院、精〈義〉精陽春房少僧都 第三日〈三〉良甚、精

義延榮擬講 第三夜〈三〉東室〈光任〉、精義盛海律師 第四日〈三〉

惠延、精〈興〉顯舜房擬講 第四夜〈三〉顯覺、精義〈興〉覺忠房擬講

論匠衆一番ハ三重〈宗〉 二番三番ハ二重〈俱舍〉

一番 經健大法師 英弘々々々 二番盛縁 正算

三番《隨喜導師》秀惠 祐実

去七月七日加任事、自寺務蒙仰、領掌申畢、仍同十日放請被送畢、任

料二百卅文

(16ウ)

文明三年〈辛卯〉九月十八日書之畢、惠延〈年卅一、戒十六〉

○以下、惠延の追記か。

廿文 四十文 六十文 六十文 百文

已講 律師 少僧都 大僧都 法印〈如此加分アルヘシ、〉

若雖為律師、不經已講者廿文加分タルヘシ、余モ可准之、



威儀師ハ准已講、仍廿文加分

廿文 四十文 六十文  
上座 法橋 法眼

講師ハ捧物代計也、仍二百文也、此外ニ加分アルヘシ、今度ハ大僧都ニテ  
アル間、二百八十文奉送畢、

良家ハ捧物計也故二百文歟、住侶之時ハ威儀供捧物共ニ下行之間、三百文  
也、并位ノ加分可有也、

(一才)

文明十三年〈辛丑〉二月九日書寫畢、東大寺華嚴宗順円法師

(う)⑥文明十三年法華会堅義順円日記

法華会第二夜堅義者順円〈文明十三年辛丑四月廿日ヨリ始行〉

一貫文 三百八十文

探題普門院権僧正秀雅 講師禪識房権大僧都英祐

三百六十文 三百文 三百文

会始卿権少僧都〈澄延、精義〉 大進得業亮信 帥得業春海

三百文 三百文 三百文

少納言々々盛宗 少納言々々英澄 弁得業経賢

三百文 三百文 三百文

順宗得業経健 大進々々英弘 按察々々行縁

(×盛)

同 同 同

大式々々盛縁 卿々々正算 三位々々秀恵 少納言々々祐実

(一才)

三百文 同 二百八十文

刑部卿得業延忍 卿々々実賢 散華師琳春房重怡

以上

三百六十文 精義重役 三百廿文  
覚恩房権少僧都実心 長勝房擬講〈兼実、精義、重役〉

三百廿文 三百文 同

学延房々々〈興弘、精義、重役〉 円実房五師専心 延明房得業懷秀

同 同 同

陽識房々々貞海 学賢房五師宗芸 実浄房々々英照

以上興福寺

三百文 三百文 藥師寺

忍觀房得業長覚 陽勝房々々光賢

三百文 法隆寺

実禅房々々舜海

(一才)

三百文 三百文 三百文

威儀師因幡上座 從儀師〈相模公、泰弘〉 注記丹波公

已上綱所

三百六十文 三百六十文 三百廿文

二位法眼寛家 大夫法眼快実 大夫上座叡実

三百文

觀芸寺主

已上三綱

三百文

快賢非学五師 已上五師

三百文 二百八十文

正勾当 権勾当 以上勾当

三百文

読師〈賢良代延恵〉

以上合十三貫七十五文

(18ウ)

雜所下

五百二文 威儀僧八人〈各五十文、拝礼三人、三十文加〉

五十文 同奉取〈法花会小綱賢長代、賢与方へ〉

百四十文 從僧〈此内四十文、捧物、淨教〉 五百文 中堂子二人扇帶代

八十文 中童子捧物〈兩人方へ四十ツ〉

百六十三文 大童子四人〈捧物四十文ツ〉

六百文 身入賃 四十文 同捧物代

二百六文 読経僧捧物代〈廿文ツ、十人方へ〉 百文 小綱公人雜紙代

二百文 小綱公人拝礼 四十文 御請使捧物代

五百文 祈師方へ行宗房方へ、 百文 中堂子二人袖一重代

合三貫二百廿九文、

(19オ)

米所下事

九十文 百八十三文

一斗 御仏餉〈講堂童子〉 二斗 鑑取綱掌

四百五十文 九百廿七文

五斗 生料威儀供〈小綱公人方へ〉 一石 読経僧十人方へ

合一貫六百五十五文、米一石八斗代

已上寺升分

百十文

一斗 從僧淨教房方へ

二百廿文

二斗 中童子二人方へ

四百四十文

四斗 大童子四人方へ

百十文

一斗 装束師方へ

三百卅文

三斗 力者三人

百十文

一斗 藁沓履

合一石二斗代一貫三百廿三文

以上長合、惣都合十九貫二百八十五文

(19ウ)

一、宿坊日記在之、

一、大童子中童子袖一重ノ絹之事、代ナラハ五十文宛六具三百文歟、可取由訴

訟ス、古日記無之、所詮良家ノ時ハ在之、半人ノ時ハ無之由、色々問答ス

ル処ニ宿老達談合ニテ、肝要向後者中童子二人分五十文宛可有下行由評定

也、大童子モ無力、其通請歟也、乍去無謂之人在之也、

一、今度路次不通ニヨテ鑑取開白日ハ不行、雖然七大寺会合在之、七堂方へ

鑑取役可有沙汰

(20オ)

由申付ラルル処、無子細領狀、仍始行也、第二日鑑取罷下間目出云々、

一、亭勸杯ハ当寺擬講末役也、雖然已講人躰無之、仍澄延少僧都暫退ル、勸杯

サタセラレ畢、

堅者七人

花、法自相

花 違四

初夜円盛、精義長勝房擬講

第二日順円、精義学延房《興弘》擬講

花、法差別  
三 言許躰  
第二夜秀範、精義覺忍房僧都  
第三日実友、精義覺忍房僧都

(裏表紙見返し、裏表紙) ○白紙

花 有法自相  
第三夜英定、精義興弘  
第四日英経、精義澄延

(20ウ)

三 有法差別  
第四夜 宗順精義、長勝房已講

亭論匠 一番、宗、三重末 二番、俱舎、二重

一番祐実・延恵 二番実賢・廉俊

三番《随喜導師》宮海・重祐

一、今度法華会付テ卿得業実賢、師匠盛海法印他界、仍服者也、雖然、除服而会参ス、先例、

(21オ)

重服除服ノ例無之、近比曲事云々、

一、亭ニテハ、裏頭ハ丁衆着座マテハ、ヘツイトノソトニ居也、聴衆着座以後内へ入ナリ、

順円問役之事

一問春海得業《相伝実賢》 二問継賢得業《代亮信》

三問秀恵得業 四問菓師寺陽勝房得業

五問正算得業

一智障断徒違四 二愚法出界 举此三種

(21ウ)

三第七外書如無違法 四寄於三障 《此上諸説、但是主敵両俱不成四類  
違因》

一四 法花会堅者方日記（東大寺図書館薬師院文書二二二九〇号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

（表紙ウワ書）

明応三年「」

堅義者威儀供捧物事

法花会堅者方日記

経順

（表紙見返し）

（異筆）  
「伝領実英」

（1才）

①明応三年東大寺法華会堅義経順日記

法花会第二日堅義者経助（自明応三年（甲寅）十月十五日始行之、）

寺務尊勝院

一貫文

三百四十文

探題禅識房法印権大僧都

順宗房権少僧都

三百廿文

三百廿文

按察権律師

卿権律師

三百廿文

三百廿文

三百廿文

延芸擬講

円盛擬講

秀海擬講

三百文

同

同

盛縁得業

秀恵々々

英定々々

同

同

同

宗順々々

実友々々

実儼々々

同

同

同

顕円々々

英経々々

営海々々

（1ウ）

同

重祐々々

同  
延理々々

二百八十文  
散花師良恵

已上専寺

三百廿文 無量寿院精義

三百文 学順房

同 大喜院行専房

興胤擬講

永専得業

兼祐々々

三百文 琳能房

同 四十九院

同行禅房

秀尊々々

永弘々々

頼専々々

同 専堯房

泰俊々々

以上興福寺七口

三百文 忍親房得業

三百文 慣了房得業

以上薬師寺

長寛々々

長懷々々

興基（実舜房得業）

以上法隆寺

（2才）

三百廿文 西院

三百文 福智院子

三百文 二条殿

威儀師

從儀師（興舜）

注記

三百八十文

三百二十文

三百文

快実法眼印

英実

守芸（已上当寺三綱三口）

三百文

二百八十文

正勾当

権勾当（今度始テ、クロワカウト、云物人）以上勾当

三百廿文

読師（円玄大）

講師 擬講順円

今度非学五師無之、

合

（2ウ）

雑々所下

七百五十一文（威義僧（十三人五十文ツ、拝礼三人三十文ツ、今度十五

人マテハ無之間、十三人ツレ申畢、

五十文 奉取法花会年預小綱

五百文 祈師〈ヲクノ坊〉 四十文 御請使〈捧物雜紙二束代〉

六百文 身入賃〈大童子ヒワウキヤ方へ下行〉

四十文 捧物〈大童子ヒワウキヤ方へ下行〉

二百文 少綱公人拝礼 百文 少綱公人〈雜紙代〉

二百六文〈読経僧捧物廿文ツ、十人二下行之、十人実名書送之、

寺升

一石〈五百六十文〉上二同、読経僧十人

寺升

一斗〈五十六文〉仏餉〈講堂々童子〉

寺升

三斗〈百七十一文〉生料威義供〈公人方へ下行〉

(3才)

寺升

二斗〈百十五文少綱公人〉

寺升

二斗〈百十五文〉鑑取綱掌

從方所下

長合

百四十文 從僧

五百文 中堂子

長合

二斗〈百四十五文〉同

百六十三文

大堂子四人〈四十文ツ、捧物〉

長合

四斗〈三百一文〉同

長合

三斗〈二百廿四文〉

力者三人

長合

一斗〈七十三文〉藁沓履

三斗〈二百廿四文〉

大堂子三人

(3ウ)

一斗〈七十三文〉 装束師 百文 中堂子袖絹代

一、松モチ・シヤウキモチ・唐笠モチ〈去年下日記ニハ無ケレ共、先々モ下行  
由當海被申間、各三人ニ五十文ツ、下  
行之了、

惣都合

十合升ニハ一斗四タアリト云

寺升一斗七升八合 和市一斗代五十六文

長合升一斗三升二合 和市一斗代七十三文

河上升七升八合 和市二十月五日集会被定畢、然間河上升一升力、寺升ニ

ハ二升入也、サヤウナレハ七斗八合力、寺升ニハ一斗五升六合可有定ナル

由被申方在之、雖然、〈河上ノ〉七升八合ヲ寺升ニハカリテ

(4才)

ミレハ一斗七升八合アリ、寺ノ二升入定ニハ背ケトモ、サリトテハ一斗七

升八合アル間、寺ノ定如ニハ難仕由堅申間、道理子細スル、依一斗七升八

合分会料納所モ、堅者七人モ一斗七升八合和市中此、悉下行シ畢、

明応三年〈甲寅〉十月廿一日書之了、

(以下余白)

(4ウ) ○白紙

(5才)

②大永三年維摩会初夜堅義英訓日記

○大日本史料九編二冊大永三年十二月十日条一八七頁以下に掲載につき省略

する。

(7ウ)

③天正五年維摩会聴衆定賢日記

請 維摩会第二夜堅義捧物事

合

右、為東大寺聴衆定賢〈願教得業〉之分所請之状、如件、

天正五年十二月 日

請使五郎丸

維摩会講問表白

(8才)

一、檢思へハ講匠ノ智弁ヲ、懸河波ノ絵ヲ胸ニ、比スレハ因内ノ解説ヲ、偃嶽之響キ

浮フ耳ニ許也、

又

檢同御風セ芳シ、雖モ斷ツト往復之淨ヲ、

疑開霧リ深シ、只挙ク古來之題ヲ

又

檢庵羅還ノ花下ニハ、雖モ恐ルト二明ヲ、

毘邪城月前ニハ、只揚両題ヲ、

(8ウ)

大会請物書様

請 維摩会初夜研学威儀供捧物事

合

右、為東大寺聴衆定賢〈願教房擬得業〉之分、所請取如件、

天正五 十二月 日

請使徳松丸

初夜ノ研学ト東第四夜之堅者トハ、六百文ツ、中間夜ノ堅者ハ四百

文ツ、也、

(9才)

一、本院威儀供二百文 第二日講師坊ニテ請之、

一、第二日ノ夕部講師坊ヨリ、鈍色白五帖シタル僧三ノ床ノ辺ニ来リテ、講師

坊威儀供候ト申、第四日ニ講師坊ニテ二百文請之、

一、粥土器代百文、講師坊ニテ請之、

一、二百文〈本院威儀供〉、二百文〈講師坊威儀供〉、

百文粥土器代、第二日・第三日・第四日ニ三色ヲ下行也、

合五百文ハ從講師坊請之、■今此ノ三色合五百文ヲハ、

(9ウ)

一床ノトニハ無下行也、当年淨芸法印一床出仕之、先請文ヲ遣シケレハ一

床へハ無下行之由、返答之、此方ノ旧記モ所見タリ、故其分止了、

一、別当坊ノ非時供三百文ヲハ一床へモ有下行也、別当年淨芸法印三百文請之、

請物事 英憲日記趣書様

一、紙二枚引重書之、立紙捻之式折之、表書無之、

(10才)

謹領

請書一紙

右、自今月六日、被始行維摩会、聴衆領如件、

年号月日 大法師定賢

一、謹請 維摩会別当坊捧物事

合

右、謹所請之状如件、

年号月日 東大寺聴衆大法師定賢

一、維摩会別当坊非時供事

(10ウ)

合

右、謹所請之状、如件、

年号月日 東大寺聴衆大法師名

已上二枚重ネテ立紙在之、折之云々、

講師坊、大乘院・一乘院之時者、謹字加之、

請 維摩会講師坊威儀供事

合二斗下行也、 一斗不足也、

右、為東大寺聴衆大法師実名分、所請之状如件、

年号月日 請使名

請 維摩会講師坊粥時事

合 年号月日

(11才)

一、請 維摩会本僧威儀供事

合 二斗下行也、

右、東大寺聴衆大法師実名之分、所請之状如件、

年号月日 請使判

已上講師坊ニテ下行畢、紙一枚ツ、書之、

一、請 維摩会初夜堅義威儀供捧物

合 六百代六斗下行也、

右、東大寺聴衆大法師名之分、所請之状如件、

年 月 日 請使名判

請 坂田莊仏供米事

(12ウ)

合

右、東大寺聴衆大法師実名、所請如件、

年号 月 日 請使名判

此坂田加供米ハ初年ニハ不請之、次年ニ請之也、

一、請 維摩会日供之事

合 壹ヶ夜分

右、東大寺聴衆大法師実名之分、所請如件、

年号 月 日 請使名判

(12~13、裏表紙見返し、裏表紙)○白紙

一五 法華会日記（東大寺図書館薬師院文書二二二九一号）

叡実（花押）

○『』で挟んだ箇所は叡実追記の朱筆。

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

（後補表紙ウワ書）

第貳号

法花会始行記

叡実記

（後補表紙見返し）○白紙

（表紙ウワ書）

法華会日記

執行会行事兼帯

叡実

（表紙見返し）

□□□物二十一枚

『一、俱舎之卅講ハ会行事不存知、三綱中各出仕シテ、各日二一日ツ、致奉  
行ス、庄役事ハ執行所ニ執沙汰也、又執行所ハ彼講演之道場へ出仕セ  
ネトモ当日饗料札一枚ツ、取之也、法華会支配者、執行所取沙汰也、

一通ハ 日供唄飯米諸庄役（以年預ノ小綱廻之、）

二通

一通ハ 掃除事、以木守諸庄へ廻之、

何モ、自寺門可有法花会執行之由、被申送者、両笠間方  
へ廳而申送、支配等諸庄へ可遣也、両笠間へハ以公人折紙  
ヲ遣ス、

（1才）

永正二年（乙丑）十一月十九日より法華始行之、

『会中天氣快然、但結願亭夜大雨下、』

一、探題

大藏卿權少僧都英経

〈禪花坊『官位二老也、』

『会前二小僧都二昇進シテ探題ヲ沙汰、』

一、講師

大夫法印權大僧都秀海（清凉院『一老法印也、』

一、読師

大法印行賀（法花堂衆禪長金剛院）

一、時之寺務

『般若坊之室御居住』  
尊勝院殿（大納言禪師実真（之息）三条殿□□）

『出世之御後見清凉院大夫法印秀海』

（1ウ）

豎者

初夜

順助

〈三藏院禎宗房〉

第二日

春芸

〈如意輪院卿公〉

第二夜

信祐

〈専舜房 東室之内〉

第三日

公意

〈觀順房 信花坊之内〉

第三夜

僭賢

〈宗舜房 勸学院〉

（2才）

第四日

快惠

〈治部卿 三藏院之内〉

第四夜

盛重

〈俊善房 実相坊之内〉

以上七人（本豎者四人、加任三人）



一、日唄飯事、如前々、以少綱、庄役之支配、給主方へ遣之、年預之以少綱、支配給主方へ、可遣之處、小綱之一藹役トシテ、法華會方事ハ致其沙汰由申間、其方相尋之處、

『又法華會方事少綱一藹役之事、古記ヲ撰之處、一藹役分明也、』

(2ウ)

笠坊賢長一藹トシテ、代官宗賢方彼支配ヲ庄之給主方へ令持參、庄役之奉ヲ各取之、則任支配之旨、日供唄飯米庄々ヨリ執行所へ被寄、以寺升、執行方へ各々計渡之、但北伊賀庄々(七斗)并櫟庄(四斗)・賀茂庄(一斗六升)合三ヶ所、為闕庄分ト一石二斗六升(代六百四十七文寺升和市一斗九升五合ツ)、此分年預舜賢房五師延海切符被出之間、廳而法華會之納所四聖坊興春得業方へ遣、六百四十七文請取也、次長屋庄ハ御寺務ヨリ執行所へ

(3オ)

被持送之、其余之庄々、清澄・藥園・両笠間、各々執行所へ持送、被計渡、寺升執行所ニ在之、其升ヲ出、ハカラセ請取之、然處、薦生庄《此庄乾方給主也、代官勸學院》給主之間、急可被致其沙汰之由、度々加催促之處ニ、惣而於執行所持渡事無之、可請取候由被申之間、惣而自執行所取遣事無之、此日供唄飯米事ハ、會式第二日目ニ綱所・注記・威儀師・從儀師方へ渡之處ニ、第三日ニ至マテ無其沙汰事サへ、併曲事ト存置之處ニ、剩自執行所、給主へ可取給之由、返答、惣而無覺悟之由、及数度加

(3ウ)

問答之處ニ、依之唄飯米直引トテ、綱所方及訴訟之間、年預五師舜賢房、既及臨期此如儀不可然之由、色々被加教訓之間、賢可(堅固)詰加問答之處ニ、

無力自年預、人ヲ被出《舜賢房五師延海》、勸學院へ取遣之間、薦生庄役分二斗四升六合(寺升定)請取之、則四石五斗(寺升定)綱所三人ヨリ取來之間、各々以請取狀、此方ヨリ計渡之、次入物之俵可被相副之由、使申此方、惣而入物俵遣事、一向ニ無之云々、入物ヲモテ請ニ來ル之由返答之、乍去綱所三人近昵之間、以別儀

(4オ)

俵且(三ツ)分借遣者也、不可成後之例之者也、於向後者、不可遣之、此日供唄飯米ハ會式已前以小綱、支配被廻テ、庄々、執行所へ持セ被計渡米也、升ハ執行所寺升云之、執行所之執沙汰也、勸學院斗非例也、自余之給主、悉以執行所ニ被持送之、

一、無官布之代之事、(寺務役)『四貫文、此内(三貫文無官之代、一貫文絹ノ代)』時之御寺務役(大井庄役云々)、彼庄近年雖為無明無実、就会式者、無懈怠之儀、至于今迄四貫文被出、寺門ヨリ量之代寺家へ被進上之處ニ、彼無官布之代寺家依難致調法、自寺門、

(4ウ)

量之代四貫文、無官布方へ御立用也、則今度自寺家方、三藏院禎宗房方へ被仰合、寺門へ披露之間、年預五師方へ被申合會料之納所(四聖坊興春得業)方ヨリ(無官布代三貫文絹之代一貫文、合肆貫文分於執行所請取之、

〈四貫文之請取ヲ認取ニ遣也、〉

所下

一貫五十文 寺侍、四百文 楽頭、五百文 小綱五人〈各々百文宛〉、  
合一貫九百五十文、各々以請取請来リ遣之、

百文 出納〈一人〉、二人アレハ二百文可遣之也、

(5才)

一、講師坊料理之事、執行所之沙汰也、

簾一間、畳二帖〈カワライ一帖、ムラサキ一帖〉、屏風一双、燈台二却、台  
火鉢一ツ、長床二帖

以上大都此分也、〈但火鉢ハ十一月ニ執行之時ハ出之、春秋中ハ不出之、〉

『講師坊幡ホコニ本自年預所講師坊へ被送之也、』

一、講堂庭掃除之事、〈兼日ニ支配、以木守庄々へ廻之、公人カリカネヤ行真木  
守之間、支配遣ス、立札同遣之、〈ナンチャウツ、ノ札也、〉

講堂正面ヨリ東ノ分ハ庄役也、東之分事、以立札六枚、南ヨリ北へ配分ニ  
立札、執行所ヨリ書出之、木守廳而丈尺枚ヲ以テ

(5ウ)

配分シテ、各々庄々分札ヲ立置、庄々札之面ヲ見テ令掃除了、当庄役雜役  
分ハ講堂之東門ノハシ也、北室之経蔵面也、今度如形ヲ□□モチイノモリ  
タルコトク、サウチサス、<sup>(掃除)</sup>例式在之、

一、講堂大仏供之事、十七杯分自寺門、正勾当以下如前々下行之、代ニテ寺升  
一斗九升五合宛、年預方切符出、法華会之納所四聖坊興春得業方ヨリ各々

下行之、

其外十杯ハ毎度櫟庄役也、内別而仏供田トテ在之、《十杯分之》櫟庄ニ  
カキリ、彼下地在之、但今ハ無其下地失哉、

(6才)

都合 廿七杯之内、各被請分、

講師〈二杯〉・読師〈二杯〉・唄師〈二杯〉・散華師〈二杯〉・会行事〈二杯〉・  
楽頭〈二杯〉・大炊〈二杯〉・《行事役》小綱〈二杯行事少綱ト云〉堂童子

〈一杯〉

以上十杯分也、残十七杯ハ正勾当以下皆々請取テ、致其沙汰輩取之了、但

小綱〈二杯〉取云々、然者堂童子ハ不取歟、《正勾当・小綱已下代々ニテ、

自年預所請之、餅仏供ヲ備之、講堂内之床子取出事、木守役云々、郷之夫  
ニテ取入取出事、一円ニ木守沙汰云々、》

一、講堂三綱所床堂之正面南東之方在之、高麗一帖、紫一帖、三綱無人之間、  
近年畳二帖無子細歟、非学之五師床、東ヨリ西向ニ在之、勾当之前ニ在之、  
両勾当之

(6ウ)

床ハ五師之後、<sup>(×西)</sup>東之端ニ在之、長床ヲ可敷之、非学之五師ハムラサキノ  
畳、何モ〳〵自年預所被加下知、七堂敷之云々、

『講堂へ三綱所会始ラレヌ時分ヨリ可出仕、又  
講師出仕アテ、表白十四五クタリヨリ、ヨマ  
レハ見合退出スヘキ也、』

『講堂候童子請之、』

『出納請之、』

一、講堂之内油之事者、五升分御油庄役制油ハ寺門之沙汰也、云々、  
又亭油一升同庄役云々、

『法服・平袈裟・鼻高也、』

一、專寺三綱所會堂出仕之事、初中後可出仕也、但一夜出仕初日分モ無其子細也、

一夜ニテモ出仕セハ、調鉢之代可取之也、

一、正宝院大進都維那寬盛初而今度會堂へ

(7才)

出仕、雖為服者、會堂へハ出仕也、竈殿へハ不叶之間、大夫法橋ニ會行事職被詔了、自寺門モ可致其沙汰之由、被申者也、

一、竈殿料理之事、兼而ニ油倉之代、修理所密乘坊禪榮得業方へ、雜具等悉以被相口、内々掃除等悉以可被申付之由、以折紙、會行事方ヨリ遣之間、則雜具等相退、被掃除内ニハ雜具等被置之間、自修理所被掃除、外南面之走ハ自年預、郷之夫ニ被加下知テ有掃除之、南面之アマタレ(雨垂除溝)ノケミ、ソニ

(7ウ)

橋ヲ敷之、講師出仕之道之用意也、云々、

一、講堂事、終ラハ竈殿へ急々致出仕、燈明等可用意之由、兼日ニ會行事方ヨリ可加下知、則今度其分加下知之間、講堂事終、出納竈殿へ罷上、燈明等『燈油土器ノ代ハ會料方ヨリ出納ニ下行之、』  
致用意、カワラケハ出納用意ス、油ハ自年預所被下行之、會料方之要脚云々、  
『亭殿卷絹并円座三枚、年預所ヨリ大炊ニ被渡畢、』  
一、亭殿量運移事ハ、七堂役也、

(8才)

亭殿會式之前後ニ大炊初而七堂釜屋前上ル大炊殊以所役在之也、

一、亭殿之事者、一円時之會行事致其沙汰也、先講堂ヲワラハ、イソキ、ハ、出納ヲ召具テ後、亭殿へ罷移リ燈明已下諸職ヲ可相調者也、

一、講師出仕之事、以小綱・公人ニ加下知、講師之宿坊へ第三度迄催促之スル也、

一、今度丁衆出仕之時、集會之乱声未下知之處、卒爾ニ亭殿之内へ各被入之間、以小綱、集會乱声在之者、亭殿之内へ可有御集會之由、申送之間、聽而各亭殿之内ヲ

(8ウ)

南面之外軒へ被退出、又聽而集會之乱声加下知之間、乱声ヲ聞テ内へ皆以出仕口、

以小綱相触分之事

一、可有集會乱声事、(舞人ヲ以小綱加下知也、)

『惣而綱所方へノ申送事也、』

一、可被成烈之由、注記ニ以小綱申送事、聽而又烈之樂之事、以小綱、舞人ニ被加下知事、

一、烈アテ聴衆着座アラハ、不移時ヲ以小綱講師ニ可有御出仕之由、申送、講師前ニ以公人、得第三度案内間、亭殿之南之走ニ出仕アテ

(9才)

『小綱ヲ以案内』

被得其意、得會行事案内テ、南之ミソノ橋ヲ渡リ、内へ被入者也、其次ニ論匠出仕之事急可有座之由、以小綱申送者也、又論匠着座アラハ可奏舞

之由、以少綱可加下知事、

一、今度大雨以外之間、講師出仕遅参也、以公人、度々加催促、但大雨之間、少令故実者也、惣而講師之宿坊へ催促之事者、以公人第三度迄可加催促者也、

一、今度講師亭殿南面走迄出仕候処、丁衆出仕之、《着座之間》、内へ御出仕之事、少綱二申付之処、若輩之族不取入公人丸二申付、以外曲事云々、

(9ウ)

惣而小綱召返講師二直二案内可申之由、申付之間、則其分得案内、講師内へ出仕并講師者手輿・從僧・大童子・力者已下也、

一、亭殿之事、前之日会行事罷出、七堂并出納已下召寄、厳密二無越度之様二ト各加下知、同床并畳以下事、能々懇二申付者也、

一、机・卷絹之事者、大炊方役《可》有用意、自《卷絹ハ》年預所《ヨリ》大炊方へ被出、於会堂机二卷絹ヲ置之事大炊役也、惣而亭殿之指図共古本多在之、以古本可得其意者也、

一、舞二番《亭殿籌南北二一ツ宛、二所ニヲク、タク北ハ檢校役、南ハ出納役》

(10オ)

『カ、リノ木ハ黒田庄役也、』  
万歳樂 延喜樂 賀殿 登天樂

以上

『此会行事ト云者、三綱中末之役也、上古者上衆ハ不沙汰近年無人數ニヨテ沙汰也、』

一、舞二ツ目ニ会行事読差帳、綱所之床之前二又床在之、其之床へ不上シテ、

(鼻高) ヒカウヲハキナラ東シへ向テ、《差帳ヲ》ヒロケテ本堅者之交名ヲ読也、

昔ウチ坂ノ床之上へヒカウハキナラ上テヨマレタル例モ在之也、雖然御

寺務以下御出仕之間、鼻高ヲハキナラ上事、且其憚之間、近年ハ下ニテ読也、少令故実故哉、《読経同様也、但近年ハ床ノ下ニテ読者也、》

一、舞四ツ二番終テ後、已講論匠ヲ召立ツ

(10ウ)

論匠一双終時、綱所退出、<sup>專寺</sup>同三綱退出ス、惣而亭殿之日記共、度々例、古

本共在之指図等別紙在之、能々見分テ可致奉行者也、亭殿之事者、会行事一円執沙汰也、

『綱所ハ一向ニ不存知、烈之引頭計ヲ存知也、』  
差定 明年法華会堅義者事

『此差定ハ出世之後見方ヨリ会行事方へ認被送之、今度ハ出世後見方へ、聊依所用罷出之間、幸トテ直ニ被猷之、惣而ハ被書送者也、』

『今度之来堅者也、』

英薫法師

英秀法師

秀芸法師

実憲法師

右、所差定如件、

永正二年十一月日□□院

(11オ)

一、日供焼飯庄々ヨリ於執行所請取分事、

十一月十八日

一石二斗六升〈代六百四十七文、以年預所、以切符法華会納所ヨリ請之、〉  
〔賀茂庄・北伊賀庄々、櫟庄三ヶ所分也、〕

十一月廿二日

六斗一升五合 笠間・薦生庄〈三斗六升九合 両笠間庄ハ深位坊願勝五師方ヨリ被持計渡也、〉  
〔二斗四升六合勸学院乾方之時之代官〕

十一月廿二日

三斗二升 清澄庄 〈安樂坊ヨリ以道慶持被計渡〉

十一月廿二日

六斗四升藥蘭庄〈同安樂坊ヨリ被渡之、〉

十一月廿日 『尊勝院』

三斗二升 長屋庄〈御寺務ヨリ被持送被計渡也、〉

四斗雜役庄 自分

十一月十九日

一石二斗四升 黒田庄〈于時納所深位坊願勝五師頭円、付使者、於執行所持被計渡者也、〉

合四石六斗三升五合〈執行所寺升定、此分庄々給主方、執行所へ持送計渡サル、也、〉

(二ウ)

此焼飯米三口綱所方所下事〈寺升ニテ執行所□先計渡也、〉

北少路越前上座

二条丹波都維那

一石五斗 威儀師分 一石五斗 維那分

二条丹波寺主

一石五斗 注記分 〈此内一石二斗六升ハ自寺門、闕庄分代六百四十七文被出間、代物ニテ遣、猶殘分二斗四升ハ米ニテ遣之、〉

合四石五斗分也、〈執行所之寺升定、此方先計渡之、日供米ハ一円執行所執沙汰也、会行事不存知也、会行事ハ亭殿計

之執沙汰也、

一、法华会堅者方ヨリ調鉢之代請日記事

初夜堅儀者 三藏院禪宗房

第二日堅者

四百四十文 順助

三百四十文 春芸〈如意輪院卿公〉

第二夜堅者

第三夜堅者

三百四十文 信祐〈東室之内専舜房〉 三百四十文 俵賢〈勸学院宗舜房〉

(12オ)

第三日堅者

三百四十文 公意〈信花坊之内觀順房〉

第四日堅者

三百四十文 快恵〈三藏院之内治部卿公〉

第四夜堅者

三百四十文 盛重〈実相坊之内俊善房〉〈但此三百四十文ハ助成、雖為少

分之間為助成分不請取之、不可成後日例也、別而之事也、又送文ヲモ不取之、

合現錢二貫百四十六文〈加目錢定、俊善房方〉 三百四十文除之、

此調鉢之代之事ハ堅者悦酒之日夜ル昼之分二通請取二書分テ請之者也、

則請取之案文別紙認之置者也、此捧物之事、三百文ハ本物、四十文

(増下同)

加僧ハ《上座》法橋分之加僧分也、上座ヨリ至法印マテ廿文ツ、加僧之物

也、請取ニモ官位ヲ載書者也、惣而堅者事本堅者并加任等之面々、能々兼

日可存知、并論衆ナントモ、同何モ、交名ヲ可書置存者也、

(12ウ)

一、論匠衆事

英憲得業〈密乘坊禅栄房講衆依無□上成業〉

英薫〈信花坊之内帥公〉

英秀法師〈三藏院之内源乘房〉 秀芸法師〈金藏院之内源忍房〉

實憲法師〈了順房〉 賴賢法師〈勸學院之内式部卿公〉

三番

以上六人分也、

此英憲得業ハ論匠衆ニ加事一段規模也、然間法服平袈裟ニテ、三床ニ有着座、論匠ニ出事、別而賞翫之事也、如此之旧例明鏡之处、鈍色白袈ニテ論匠ニ出仕之事、成業之規式、

(13才)

無其甲斐、先年論匠之衆之内ニ成業体在之時、加聴衆テ交列装束モ法服平袈裟也、仍三之床ニ有着座云々、応永卅五年法花會執行之時、論匠六人之内二人ハ成業也、今四人者、依為中臈、鈍色ニ平袈裟ニテ南ノ方之長床ニ着座也、今度英憲得業被存知哉、又存知アレトモ如此沙汰哉、不審之、

『寛盛』 中将寺主寛芸

一、今度正宝院大進都維那、依為親父他家之間、服者會堂出仕之事、不可叶并調鉢之代不可被取之由、及寺門之沙汰之間、雖為服者、會堂之出仕之事、無相違之由被申、然者旧記可被出

(13ウ)

之由年預方寺門評定ト被申間候、大進都維那、旧記於年預所持參之、

永正二(乙丑)十月卅日年預舜賢五師延海方へ大進都維那持參之旧記之趣云、(服者會式出仕之事)

永徳二(壬戌)十二月十五日ヨリ法花會在之、依為榮清忌中、不及會行事役、代官沙汰、明年會行事為藏人寺主寛専之間、亭會差帳役可有勤仕之由、

自寺門被申間、請取了、於服者ハ有代官之儀、先年法花會之時、專曉弁五師雖為服者、在出仕、又ハ今年散花師手搔指

(14才)

坊若狹公依為服者、及代官云々、於向後モ為忌中時ハ、不可有代官儀者也、此代官者差帳事也、

如此旧記トテ大進都維那、年預五師ニ被加問答、雖然、此分之旧記ニテワ不分明之由、色々被加問答之間、叡実大夫法橋申云、寺官方法花會之時、《服者》會堂出仕之事、旧記分明無其紛者也、乍去竈殿江有出仕テ、亭之會式可執行之事、惣而不可叶之由、申開之間、其分ニ治定シテ大進都維那師會堂出仕之事、無其煩也、又亭殿之事ハ叡実法橋ニ為寺門被申付、并大進都維那方モ、其沙汰アラハ、可為

(14ウ)

祝着之由、賢佗言之間、則亭殿會式、叡実法橋致執沙汰者也、依之、亭屋之所下之布施請之、

鍋見二口五十一文ツ、百二文會行事分一口・自分一口合四口分二百十八文請之、(但加目錢定、)

一、正宝院大進都維那師、今度初而得度之間、為新聴衆法花會料新補分二貫文分、會料之納所四聖坊興春得業方ヨリ被請之、年預五師延海、其分納所へ被申送間、新會料二貫文無相違被渡之、年預延海、大夫法橋ニ被加不審之間、度々旧記無其紛之由申之間、則此分下行之也、調鉢之代之

(15才)

事、會式出仕之上者、各是又無其煩被請者也、新會料ハ二貫百文也、今度

二貫文所下不審之、

『則今度正勾当新補二貫文取也、堯頭勾当、新丁衆分重実、』

一、正勾当モ新補之歳会式アレハ、新会料二貫文請之、明応三〔甲寅〕十月十五日ヨリ会式執行之時、堯延〔堯禪子〕・重寛・俊正『正勾当也』勾当新会料違乱之間、時之年預五師〔大式得業盛縁〕、大夫法橋旧記所持之、御下行之事無其紛、旧記之段分明之由申開之間、則納所方へ被申送二貫百文被下行者也、三綱并正勾当同之、〔正権共以新補体同之、〕

『此二貫百文ハ会料之納所花蔵坊ヨリ請之、』

大夫法橋新補之時モ会式始行之間、新会料二貫百文請之、度々旧例分明

〔候者〕  
□□之也、

(15ウ)

寺門評定之記云、『コレハ今度之紛ニ書写之、』

就法花会々参之事、於学侶分五師者設雖為重服、五師分床、東二別二在之上者、可有出仕歟、随而於三綱分者、雖為重服出仕之条、旧日記在之、可被准抛歟旨、自式方披露在之、評定云、応永廿年法花会之時、非学分五師、依触穢被立代官、是ハ先例也、於学侶分五師者、豎間役勤仕之間、於重服者、五師床、別二雖在之、会参之事、不可叶之由、已前既被定置上者、不可為

(16才)

会参之旨、卯二月廿七日評定畢、

文安四〔丁卯〕二月廿七日 年預五師經真

就正宝院大進都維那会参有無之紛之儀、於年預所色々糺明之時、寺門大双紙引付ヲ見之处、如此古例共加一見之、則以其次、書写置者也、〔執行所ニモ古日記少々在之也、先年寺門後評定分、為後証令存知者也、〕

一、法花会執行之事、自年預所執行所へ兼日ニ自集会砌、被申送諸庄役等

(16ウ)

可加下知之由、被申送者也、同会行事方へ被申送者也、今度者、執行所ニ会行事共以可存知之由、一紙ニ被申送、其故者、正宝院大進都維那、依触穢亭殿之執沙汰不叶之間、執行方兼帶之由、為寺門被申付也、随分ニ失錯存可励美麗者也、

一、会行事職之事者、三綱所中二一年持也、各年ニ可存知也、  
『手搔会八月一日小使会行事役出之、兼日ニ檢校經案内也、』

一、講師亭殿出仕之事、

(17才)

北室大道ヨリ装束ハ法服ニ平袈裟、手輿也、

〔僧脱〕  
『従力者 大童子以下也、今度亭会ノ夜結願大雨也、笠ヲ被用也、』

聴衆烈ヲ初ムルマテハ手輿ハ、前ノ芝ニ立也、烈ハシムル時、輿ヨリ下リ、鼻高ヲハク也、其後少綱参向シテ催促スル也、其時東ノ戸口ノキワニ立テ待ヘシ、其時從僧兩人ア〔雨垂〕マタレ橋ノ上マテ、大童子ヨリ道具ヲ請取テ亭へ入、西ノ方ヨリ上テ、畳ノ上ニ置也、草座ヲハ円座ノ上ニ置ク、又外へ可出、其後

(17ウ)

講師出仕在之、從僧ハ立歸テ戸口ノ内東ノソエニ可立、諸從着座以下アハ  
 ラノ前植木ノ下ニ東ヨリ一面ニシヤウ木ニ腰ヲカケテ居也、又カ、リヲタ  
 カスル也、中童子興ヨリ小前ニ居也、

一、就法花會寺門和市定事

寺升ニ一斗九升五合三夕 一斗力五十一文ニ相当也、

廿三日ニ亭屋結願也、

三綱丁衆分之、自分一口五十一文、會行事  
 分一口、鍋見二口五十一文ツ、合四口請之  
 也、

布施物次日下行之、

(18才)

年預五師舜賢房延海方ヨリ下行之、請取ヲ以テ請之、

一、講堂餅仏供(一杯)、會行事取之處ニ、彼正宝院大進都維那會堂へ出仕之上  
 者、此仏供(一杯ハ)本會行事之間、大進都維那被取之者也、亭殿之會式  
 ハ大夫法橋執行之間、布施物ハ法橋取之也、

一、寺官中每度法花會之時、於寺門助成分者、佗言在之、先年執行之時モ申之  
 間、則最少分在之、度々預合力事、証跡分明也、雖然、已前転害會之時、  
 寺門無等閑之儀

(19ウ)

預合力之間、重而聽而申事斟酌憚之間、今度之儀之事ハ、先以令故実者也、  
 転害會・法花會每度其例不珍者哉、殊以俱舍卅講之時者、御寺務并寺門へ  
 合力之儀歎申事、寺官中之規式也、其跡度々之儀古日記共ニ在之也、會行  
 事職之時者、猶別而御助成之事申達、預御芳助事不珍例多之者也、

一、法花會講師・探題之儀、聊相論共在之、惣而次第之講師者、清凉院大夫之  
 (20才)

法印『秀海』、探題ハ禅花坊大藏卿律師『英經』タルヘキ処ニ、今度  
 探題之事、為寺家蒙仰之間、講師ヲ不勤、可致探題之由被申、此条背先規  
 者也、次第之講師ナラハ、大夫法印可為講師、又探題之事、禅花坊大藏卿  
 律師可為理運之由、寺門及其沙汰、剩集会在之哉、依之御寺務(尊勝院へ)  
 学侶之衆上六七人、以内儀被召、被加不審之處ニ、信花坊(少将五師英海)  
 次第之証跡等、被所持事之子細等、懇ニ被申入、其外之

(20ウ)

衆各任尽理之旨、旧例已下之子細被披露之間、清凉院大夫法印探題事無其  
 謂、講師之切口ヲスヘリ、探題之儀恣ニ競望也、所詮任次第理運、講師者  
 大夫法印、探題者大藏卿律師ニ、寺家并老僧衆被一味、其分ニ相定者也、  
 則會五ヶ夜、無為無事執行之、『講師之切口ヲ対捍シテ探題ヲ可被沙汰事、  
 先規無之也、』

一、講堂會式執行之最中ニ禅花坊弟子少納言公ト如意輪院之舍弟中将公ト

(21才)

第二日ニ於會堂ノ前、惡口ヲ申アヒテ剩アタマヲハリアヒ、物忿存外之体  
 也、両寺會合規模之講演之庭ニテ、如此振舞、前代未聞之積惡也、然者會  
 式已後、聽而任故戰坊戰之旨、(防)両方可被加罪科之處、終無其儀、太以不可  
 然、為後惡斷絶可被経嚴密之沙汰之處、被処無沙汰之条、末世寺門衰微濫



吹之根元、此時哉

一、堂之後門清涼之斬之事、一円注記可被加成敗之处、今度簀之儀紛事、注記未練之儀也、

(21ウ)

一、講堂々内簀并役者以下可相勤仕之事、

堂内後門烈以下指図

○以下、22オにかけて指図がある。次頁に掲載した。

(22ウ)

如山堂内後門等之儀、旧記無其紛之处、当時色々料簡才学在之哉、太以不可然者哉、付其後門之簀之事、有人、下司・上司役之簀、北へ下切芝辺へヲキヨセ、可焼之由、被加下知也、下司之役者、行光『公人』惣而北へ下可焼事、不及覺悟之由、度々致返答、猶重而賢被加下知之处、猶無其例候之由ヲシ返へ被申、剩吐過言之、結句狼藉越常篇之間、『次ノ日』無力於講堂集会シ、行光力住宅被破却、両寺会合

(23オ)

規模之講演之处、放惡口事、難遁其罪者哉、寺門之腹立者也、然处、此簀之焼所、能々古例之儀、被加糾明之处、行光簀タキ所、上古之在所也、申分尤以無其紛、サル間、有人被申事、楚忽未尽之下知也、且者、行光不便之子細哉、狼藉ヲ申上事一段之緩怠至極歟、其後各老僧達被申合、為自他寺之聴衆、於清涼前被加評定、他寺丁衆之面ヲ以テ被致侘言、彼行光申上雖被加寺門勘心、免除者也、則結願之

(23ウ)

簀之事者、行光如申上、本式二四ツノカ、リ焼者也、如此之間、有人陵爾『此人律師已上、如形学問之者之体也』

之被申事哉、行光事者、惡口之緩怠之上者、被処重科了、又自寺他寺会式之砌、旧記未練至極之成敗、前代未聞之恥辱也、縱雖為寺僧難遁故戰坊戰之其科事哉、会式以来不及評定事、寺門之越度ト云、過ト云、自他寺之嘲哂云、比興之隨一也、雖然儼ニシテ被人ニ崇事者、仏法繁昌之基、寺門穩ナル根元哉、

(24オ)

一、於執行所者、雖不存知題目、便宜之間、書置也、

宝徳二年、同三年法花会延引シテ、正月十六日始行、

一、亭論匠衆事

珍賢法師 澄芸法師

盛重法師 盛宗法師

祐真法師 専慶法師

(24ウ)

於英祐者依為服者除之畢、

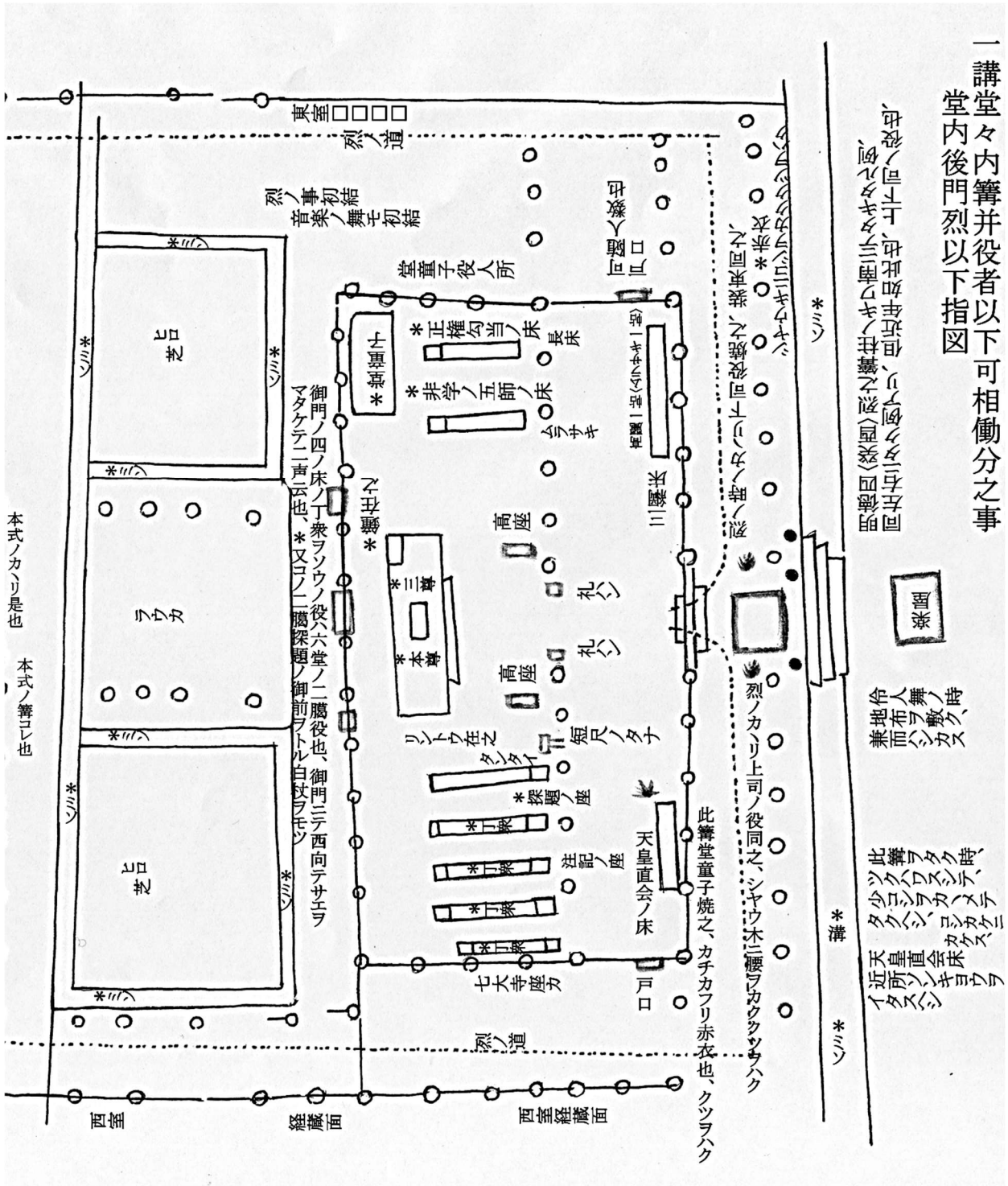
一、明年本堅者四人事

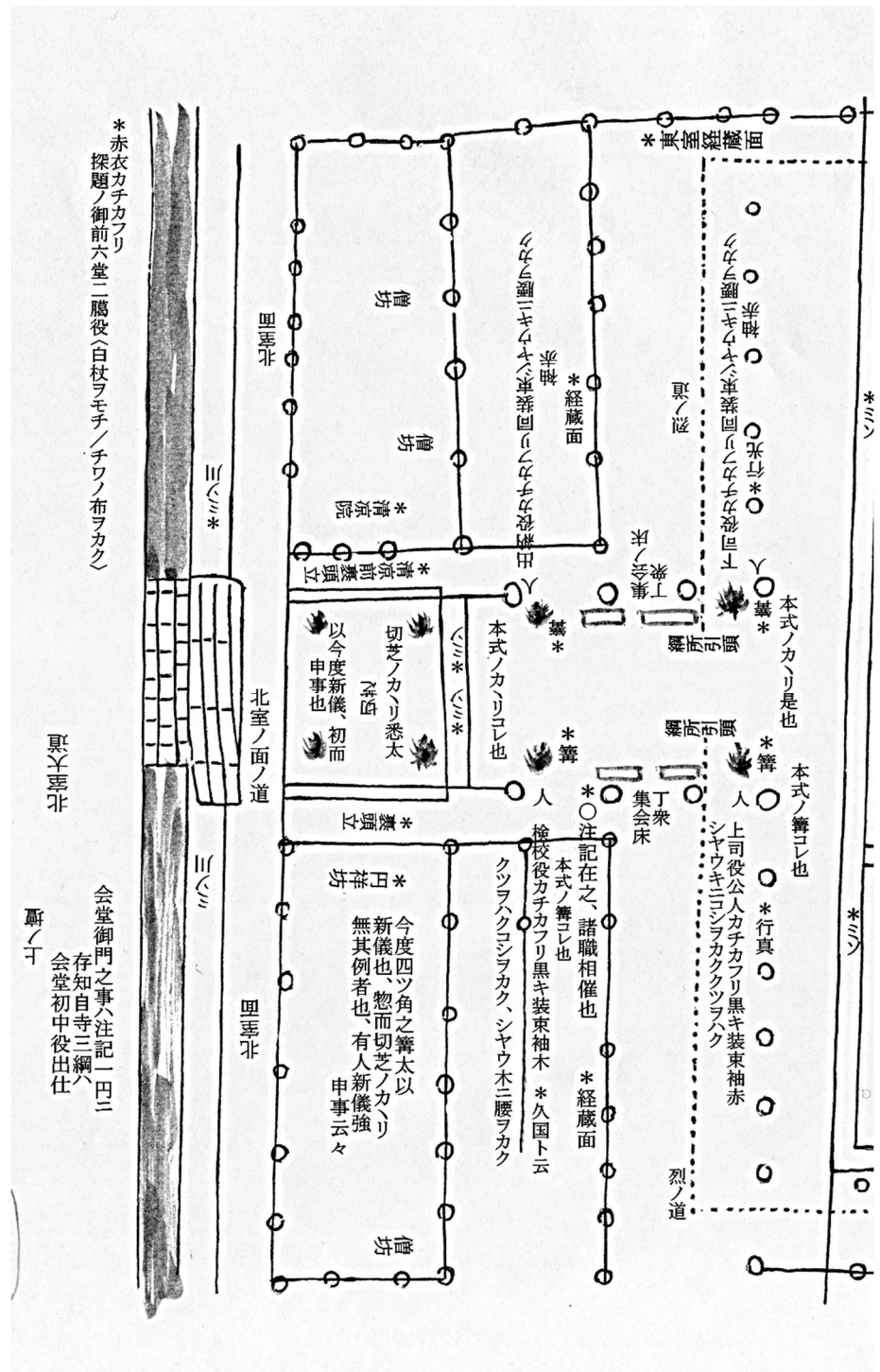
澄芸法師 盛重法師

英真法師 専順法師

正月二日放請送之畢、

一講堂々内簀并役者以下可相働分之事  
堂内後門烈以下指図





於英祐者依為服者除之畢、

一、同六日、自西室殿、以藏照房得業堅者可有勲仕之由、御返事、即今日吉日之間、

(25才)

放請可給云々、即以古跡案文写給畢、

奉放請 当年法花会堅義者事

『本ノマ、恵力』

公あ禪師

右、依 別当之仰放請如件、

法印權大僧都

宝徳二年十一月六日 延海〔在判〕

一、法花会有テ放請ヲ可為明年ノ堅者方四人方へ可送、若良家所望在之ハ、加良家可四人、補任料貳百卅文、此外之中臈

(25ウ)

任料同、若落放請様ヲ不取人、加任等所望寺務許、可有放請送也、

此等之子細、時之出世後見以存知、寺家之被得御意之間、三綱中雖不存

知事、為後学之書写者、惣而寺門事者、雖不入之令存知(而)、可成其覺悟

事也、於何事モ寺社之儀事、毎篇懸其意、無油断之儀可致心懸者哉、

(26才)

于時永正二年〔乙丑〕十一月下旬之比、為若輩之末学、令存知分、如形書置者也、於会式執行之儀者、守先規、任旧例、聊以無越度之様、執行事、三綱所之面目也、少モ不可構私曲未練之儀者也、〔猶於不審紛之儀者、度々旧記数通在之間、以古本可執行者也、〕

執行職会行事兼帶

勸実〔花押〕

『執行所会行事、少モ於未練者、会式越度トモ多在之、聊以私曲ヲ存セハ、神慮一大事、』

(26ウ)

私云、〔此三綱中之事者、自類ニ掟旨越請文在之、異類ノ罰不及申、縦自類之子ナ

リトモ、別之体ヲケカサハ三綱ニハ不可叶也、』

惣而、当寺之三綱之事者、聖武天皇以來直任之三綱トテ、不經京都之儀、一段之寵体也、依之御室之惣在庁ナントノ儀ヲ不請者也、然間、東南院之坊官中之流ニ有此子孫テ三綱職ヲ存知ス、殊ニ拙者之家之事者、天皇ヨリ以來、于今不斷絶、如形勲其役、惣領者北室薬師院ト号ス、祖子ハ山上ニ住ス、西辻ト号ス、西辻子ト号也、

(後補裏表紙見返)

紙数廿五枚

〔カン紙無之〕

貞享元〔甲子〕年九月日修覆 法眼実宣言

(後補裏表紙) ○白紙

一六 法花会始行日記（東大寺図書館薬師院文書二・二九二号）

（後補表紙ウワ書）

永正十

法花会始行日記

叡実記

（後補表紙見返し）○白紙

（表紙ウワ書）

永正十年（癸酉）卯月 日

法花会始行日記

執行薬師院大夫法印叡実（花押）

（表紙見返し）○白紙

（1才）

永正十年（癸酉）自卯月廿二日於中門堂法花会五ヶ日始行之、

（追筆）  
「中門堂最初ノ執行」

一、于時寺務東室光通

久我殿息

一、講師 興福寺妙徳院長教房権大僧都

『訓英』

『一臈法師』

『秀海』

一、探題 当寺清凉院大夫法印権大僧都

一、読師 中門堂衆樋坊英実大

堅者之衆記事

（1ウ）

堅者

初夜

『本堅者』

浄憲

『四聖坊之内了專房』

第二日

『同』

英嚴

『禪花坊 少納言公』

第二夜

『同』

英訓

『密乗坊之内 帥公』

第三日

『加任』

『如意輪院之内 中將公』

第三夜

『同』

実憲

『徳藏院了順房』

（2才）

第四日

『同』

宗助

『四聖坊貞教房』

第四夜

『同』

頼賢

『四聖坊之内式部卿公』

以上七人（本堅者四人、加任三人）

論匠衆

快憲法師

聖順法師

（2ウ）

真儼法師

秀覚法師

本舜法師

実紹法師

以上六人（三番分）

（3才）

一、綱所日供焼飯之支配并会堂掃除等之支配、合（二通）分ハ自執行所方、諸庄へ遣、奉ヲ取ル、日供焼飯之支配ハ、小綱之一藤役トシテ支配廻之、小綱之一藤笠坊賢長也、代役二藤宗賢致其沙汰之間、支配之事申付、諸庄之奉ヲ取ル也、又諸庄之掃除之支配ハ、木守役也、則木守湯名夜又五郎男ニ申付、庄々へ支配ヲ遣、奉ヲトル也、木守事両木守也、正月ヨリ至七月迄ハ湯名夜又五郎男存知スル也、又ソレヨリ後八月ヨリハ、十二月ニ至迄、帰金屋行元可存知也、

（3ウ）

則今度者、夜又五郎男ニ申付者也、已前永正二（乙丑）十一月十九日ヨリ法花会被行時ハ、帰金屋行元力親行真仕丁ニ申付、庄々支配之奉ヲ取ル者也、

一、綱所日供焼飯米之事、於執行所相集、納所方へ所下之、則請取分之日記、一石二斗四升 黒田庄（代錢七百八十文、和市寺升一斗力六十三文宛）当納所勸学院

（追記）「八斗六升闕庄分 寺門償之、」

八斗六升 北伊賀庄々（代錢五百四十二文） 当年預觀舜五師

加賀茂庄之分 公意方ヨリ被送持之、

四斗 櫟庄（米ニテ沙汰之、寺升定） 納所密乗坊

（4才）

禅栄得業英□方ヨリ被持送之、

六斗一升五合

此内 〈兩笠間庄 三斗六升九合 代二百四十文〉

〈兩笠間、四聖坊之内貞順房、笠間殿子方ヨリ被送之、〉  
〈薦生庄 二斗四升六合 代百六十二文〉

〈乾方勸学院ヨリ被持送也、〉

六斗四升（米）薬蘭庄（寺升定） 〈正宝院大進寺主寛成方被持送之、〉

一斗六升 長屋庄（寺升定） 〈当寺務東室殿ヨリ被持送之、〉

三斗二升（米）清澄庄（寺升定） 〈安樂坊代道慶方ヨリ持渡也、〉

〈此庄事、叡実法印知行之庄ナレ共、今 □□（料足）申契約之子細

在之間、如此也、修（餘）ハ当所へ可被返付者也、〉

四斗 雑役庄（代二百五十二文出之、） 自庄分

（4ウ）

『寺升定』

合四石六斗三升五合 〈九ヶ所庄之代〉

代錢三貫九文 〈寺升ノ一斗代六十三文ツ、〉

〈和市定也、〉

此焼飯米ハ、庄々ヨリ会式已前ニ、悉以執行所持セ被送者也、則今度モ如此、又悉以各々請取、自執行所出之切紙ノ請取也、杉原一紙ヲ四ツニ切テ書出也、

此焼飯米所下事

大乗院殿内

一石五斗（代九百四十五文） 維那從儀師分 多門院へ所下

一石五斗 現米（寺升定） 注記（二条子丹波都維那）

（5才）

一石五斗（代九百四十五文） 威儀師 二条丹波寺主

合四石五斗分 此分各々以請取三人之綱所請之、  
一、無官布代之事

四貫文、自寺務渡給者也、

冷人方

一貫五十文

寺侍

四百文 樂頭方

五百文

少綱五人之中

百文

出納

合二貫五十文 何モ／＼以請取下行之也、

相殘毎度執行得分也、

此無官布之事、為大井庄役会式コト、自

(5ウ)

寺務渡給之者也、大井庄之寺務得分雖無之、無官布代四貫文事ハ、毎々無懈怠之儀被所下、則於執行所請取支配之者也、然処、今度寺務東室殿、此無官布代事、惣而無御覺悟之上者、不可被出之由返答、言語道斷之曲事云々、度々所下之例明鏡之旨ヲ以出世御後見舜賢得業ヲモテ申詰之間、則所下之会式毎ニ寺門ヨリ疊之代ヲ四貫文分寺務へ被進上足ヲ毎度無官布方へ、御立用事、已前永正二(乙丑)歳会式執行之時モ、

(6才)

会料方ヨリ被進上、疊之代ニ立用候間、会料納所興春得業方ヨリ、執行所へ被渡之者也、又今度モ任其例、御立用之間、年預觀舜得業ノ切符ヲ被出、会料之納所密乗坊英憲方ヨリ請取之者也、書狀共毎々別紙在之者也、

一、堅者威儀供・捧物之事

『了專房』 三百八十文 淨憲 四百八十文 英嚴

『帥公』 三百八十文 英訓 四百八十文 『中将公』 澄芸

『了順房』 三百八十文 実憲 四百八十文 『貞教房』 宗助

三百八十文 三百八十文 合二貫 (九百) 八十文 (加目錢之、)

(6ウ)

上ノ八十文ツ、ハ加階トテ官位ニ取之、則叡実上座・法橋・法眼・法印加階四ツノ間、一二廿文ツ、ナレハ、四ツニ八十文取之、無官ニテワ、上ノ口之錢無之者也、則請取ニモ官位ヲ書載遣之、又請取之案文別紙在之、

一、亭殿方之事ハ、其之歳之会行事奉行之云々、今度之会式之事、会行事正宝院大進寺主可被致其沙汰之处ニ、一向ニ無案内之間、拙者ニ被申詔之間、致奉行者也、

則亭饗料請取分

(7才)

自分一口 会行事一口 会勾当分一口 鍋見ト云

合三口分請取ヲ遣、請取之、

一口宛 六十五文

此会行事分(一口)、会勾当分(二口)トワ(合二口)

正宝院可被取ト云ヘトモ、代ヲ沙汰之上ハ、此方へ取之、

一、亭殿へ会式結願之前日ニ会行事罷出見合テ、無越度之様年預方ト申合相調

者也、掃除已下畳已下ノ事ハ、一円年預五師沙汰也、

一、会堂之事ハ、中門堂ヲ被相構会式始行之、

一、講師坊ハ戒壇院之千手堂ヲ被相構之、則執行所ヨリ屏風并畳・ウスヘリ・

簾等、任例

(7ウ)

出之、戒壇院之知事ニ申テ、何モ々々借用シテ用意之、相調者也、

一、読師坊ハ大仏之西廻廊ノカコイヲ用意之、講堂之千手観音ヲツクル、カ

コイヲ被用之、

一、亭殿之差帳、会行事沙汰之(之)ヨミアクル事也、今度之堅者交名□事也、

一、差帳出書事、寺務之以御下知、出世御後見方被書成之、則宝庄院舜賢房被

書成者也、

今度之堅者交名

快憲法師 聖順法師 真儼法師

(8オ)

英算法師

以上四人本堅者也、

一、本堅者今度快憲(深乘房)為理運之处、加任之堅者不慮之寺家ト申事在之

テ、澄芸(中將)・宗助(貞教房)両方及相論之間、本堅者四人之中、快憲

一人被相退、加任二人之相論之儀、以償<sup>ツクノイ</sup>無為云々、彼快憲事ハ、本堅

者ト云、不便之次第也、但自寺家、以内儀、成身院明舜房律師ニ被仰合、

密乘坊下地申合、快憲ヲ被加教訓之間、雖背本意ヲ無力、本堅者ヲ相退之

間、彼兩人無為ニ堅義可被相遂者也、今度之事、珍子細新儀、中々

「<sup>(不及是非)</sup>儀者也、」

(8ウ)

一、就法花会之儀、檢校役籌等之役者已下之事多之、然処ニ已前之檢校小二郎

死去之間、其体于今不相定之間、今度檢校之体之事、色々以調法拜殿之ケ

ンマ源二郎カ子ノチャクシノ神人ヲ檢校ニ今度定置、其役ヲ被沙汰者也、

一、講堂之堂童子役、於会堂色々在之、講堂之炎上已後、堂童子無之間、堂童

子役可勤仕体無之之間、六堂之中三藏行房ニ被申付、堂童子役被勤仕者也、

一、此会式之事、去年十一月中ニ可被始行之処、加任之堅者之事ニ寺家ト出世

御後見

(9オ)

依有其紛当年ニ延引之、

一、講堂之掃除之事、可任先規之处、中門堂在所セハク小分之間、掃除ノ丈尺

相違云々、然間、木守申付、以丈尺、打分諸庄々へ配当札ヲ、又自執行所

一庄へ分書出、木守ニ申付、中門堂正面ヨリ東方之分、北南へ札ヲアヒ

クハリ、立置スル者也、

掃除之事、大講堂之儀ト中門堂ト相替之間、諸役分今度以尺杖打分申

付也、

櫟庄 四丈 葉蘭庄 五丈二尺 賀茂庄 一丈二尺



清澄庄 三丈一尺 長屋庄 一丈二尺 雜役庄 五丈三尺

(9ウ)

合七町分也、今度以尺杖、木守之婦金屋行元ニ申付、六ヶ之庄へ配

当之、自正月七月至迄、木守夜又五郎男ニ申含者也、

一、惣而寺門之神事法事、可被始行定日事、何比可有其沙汰之由、於執行所出世後見并年預牒送之、則今度就会式執行之儀、寺門集会之砌ヨリ、年預方ヨリ、少綱一臈ヲ使者ニテ其分被申送者也、又出世後見方ヨリハ以折紙牒送之也、

(10才)

一、惣而日記色々別紙在之、於自然之紛者、懇ニ旧記可明者也、

一、惣而捧物并無官布銭分、寺門訪亭殿之饗料以下ニ至迄、惣都合七貫百廿文、加目銭之定納取之、

(三行分余白)

永正十年〈癸酉〉卯月 日 法印叡実(花押)

(10ウ) ○白紙

(11才)

紙数十一枚

貞享元〈甲子〉九月 日 修覆 法眼実宣

(11ウ) (後補裏表紙見返し) (後補裏表紙) ○白紙

一七 法花会私日記（東大寺図書館薬師院文書二・二九六号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

（表紙ウワ書）

（異筆）  
「弘治」 慶長

法花会私日記

実祐

（表紙見返し）○白紙

（1才）

法花会料所下結解状（弘治二年〔丙辰〕十二月廿二日始行）

一、十四貫文 探題（四口探題分、一口自分）

一、八貫四百文 講師（二口講師分、一口自分）

一、四貫二百文 読師一口□  
（半力）

（1ウ）

一、廿四貫文 他寺聴衆十二口（興福寺九口・薬師寺二口・法隆寺一口、二貫文宛）

一、八貫文 非時供（他寺聴衆十二口・綱所三口・勸盃已講一口、五百文宛）

一、八貫文 （散花師英珍 年預五師 会所納所、次第聴衆、各貳貫文宛）

一、八貫四百文（綱所三口・威儀師・維那・注記、各二貫八百文宛）

一、三貫文 （専寺綱所三口 正宝院父子・薬師院、各一貫文宛、会料残米代）

（2才）

一、二貫文八百文 正勾当会料

一、二貫文 権勾当会料

一、十四貫四百文 専寺聴衆九口、各一貫六百宛、

一、廿五石五斗 （伶人ノ内マテ、楽頭紛仕出シ、從寺仲人シ、臨時米入処、  
此外四升二合

一、一貫二百文 笙・~~篳篥~~・篳篥・太鼓訪

（2ウ）

一、十二貫文 論匠衆（隆賢・延秀・英実・光憲・快円・公雅）

一、八百五十五文 油代（一斗五升 八合升定、一升 五十七文宛）

一、二百文 年預小綱

一、四百文 両承仕（貳百文宛）

一、貳貫百文 鑑取・綱掌（一貫五百文鑑取・六百文綱掌）

一、五十文 講師捧物絹切 正大煩

（3才）

一、百廿文 講師裏物（絹五疋代年預分）

一、二貫文 亭別給 神主方下行之、

一、百文 寺木守別給

一、二百文 筵十枚代（会堂高座辺敷之、年預方）

一、五十文 壇中 堂童子

一、壹貫文 結解料 年預方

（3ウ）

合百卅九貫四百七十四文

米所下 長合升 二斗七升

四石五斗九升 大仏供 十七杯

行事小綱・堂童子 各四杯宛

公人二藤・正勾当・出納 各三杯宛

一、三斗  
(後欠)

堂内幡懸代〈瓦葺・檜皮葺〉

此外十杯棟座役 〈自庄家沙汰之、合廿七杯〉

寺升下行和市一斗代廿五文宛

一、四石 講師

(4才)

一、一石 読師

一、一石六斗 初日衆所饗料

一、一石 鑑取・綱掌日役

一、五斗 鑑取・綱掌道問料

一、一石七斗 綱所三口、此内〈威儀師七斗、余二人五斗宛〉

一、一斗 亭油土器代、出納

一、一斗二升 御仏供 堂童子

(4ウ)

一斗 御読経仏供同

一、三斗 執蓋役等 同

一、一斗五升 敷設代 七堂

一、一斗 掃除 同

一、一斗 奉取 出納

一、四斗 公人二藤 堂童子

大煩 出納

一八 法花会日記（東大寺図書館薬師院文書二・二九七号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

（後補表紙ウワ書）

天正五

法花会日記

実祐記

（後補表紙見返し）○白紙

（表紙ウワ書）

天正五年（丁丑）

法花会日記 薬師院（実祐カ花押）

（表紙見返し）○白紙

（1才）

天正五年（丁丑）十二月二日ヨリ始行候畢、

北林院、時一藤法印

一、探題 大藏卿法印権大僧都隆賢

上生院了職房

一、講師 浄実已講

文殊院

一、読師 大法師良教房（中門堂衆之一老）

一、時之寺務 大藏卿法印

出世之御後見

（1ウ）

堅者

初夜研学 深長（禪花坊之内）

第二日 大夫公（内）  
（同）

第夜 願教房（上院普賢院）

第三日 学勝房（妙嚴院）

夜 長乘房（觀音院）

寺務加任

第四日 了春房（地藏院）

夜 禅宗房（中証之院内）

（2才）

以上七人（本堅者四人・加任三人）

一、日供境飯諸庄役所出分

四聖坊之内

黒田庄二石二斗四升（時之納所良順律師出被申畢、）

上笠間一斗八升四合五夕（成福院之内、宮内卿公執行所へ持送、）

下笠間一斗八升四合五夕（金珠院内、長願房下笠間第支配）

其時之西室院納所支配

薦生庄式斗四升六合法住院長勝房被出畢、

北伊賀庄七斗（北林院之内、部屋カリ）  
（備）  
順正房東南院殿納所支配出申畢、

（2ウ）

寺之御支配

櫟庄四斗（闕所庄会料之納所慈光院ヨリ出持被送、）

清澄庄三斗二升（安樂坊役納所北林院ヨリ出被申畢、遅々不納間迷惑之由達而雖被申、從寺先例如此被申、無力出申者也、）

藥園庄六斗四升（も）〔北林院出被申畢、是□郡山ヨリノ反錢被付、被申上

者、前者正宝院未進ナリ、只今者、無其体、北林院存知上、利運仁可被出之旨、堅被申、任道利所出被申也、〕

長屋庄一斗六升〔時之寺務役而任先例被出也、北林院〕

（3才）

賀茂庄一斗六升〔闕庄、寺役、会料納所慈光院執行所持送畢、〕

雜役庄四斗〔是茂闕庄之間、如賀茂庄、〕

以上日供米庄役、有形今度此通澄畢、

一、日供米下行様一石五斗威儀師分

一石五斗經記從儀師分

一石五斗從義師分

三人三口綱所へ、以寺升、執行所之ヲ渡申事、從先規無紛事、旧記糺敷有之、以此升可渡之由申之處、經記南院無明無実之召体ニテ、經記

（3ウ）

旧記ヲ此方へ被見候ニモ、ナニノマス共無之ニ、先如何様及申事候者、当寺同心可行力ノ心中ニテ申懸テ、結願夜之半迄、押被申候処、時之年預上生院被申様、不謂恣之新儀非例ヲ難有同心間、押置、結願及明夜トモ無力覺悟被申處、興福寺聽衆今度十五人被渡候内、妙徳院、利非ノ事者、重而旧記次第可有曖被申、第五夜ニ結願有之候以後、任旧記、此方者如前々之綱所衆於致請者無異儀由、返事候間、重而妙徳院以折昏、先年之以寺升如有来御渡候て可給候と、年預上生院迄被申送候条、以寺升、三人綱所下行一石五斗宛申畢、

（4才）

前代未聞南院經記、聊爾不足之被申事ト、両寺聽衆□□沙汰者也、重而失面目、被請殊請文認背先規候間、請サセ申マシキト申事ヲヨヒ候ヘトモ、不存知御免許申分間、同心申也、

妙徳院之折昏相副置候、

一、当執行へ從寺所出分之事

式貫文、会式付訪定例〔是ハ当執行迄〕

式貫八百文、皆下專聽衆置所出有之、是ワ三綱不從多小各々請取出仕シ畢、

（4ウ）

堅者衆分

調鉢代 三百廿文宛、人別宛七人ヨリ請、

三綱中各調鉢代者、以請文取畢、請文之案文在之、別懸置、（認）

差帳、コレワ寺務ヨリ懸会行事被送候ヲ、結願夜亭殿ニテ読申也、

差定明年法花会堅者交名事

（5才）

英定法師 英慶法師

英清法師 訓經法師

右、所差定之状如件、

天正五年〔丁丑〕十二月日

一、今度之法花会付、執行方所出、從寺相違付、（擦消）無量寿院訓經、雖為少老儀

□藕□□<sup>(出仕)</sup>「三綱中ヨリ之申事ワ、三綱一人別二貫、

一貫文■皆下請取、

堅者ヨリ

調鉢代三百廿六十文、三綱各請文取申者也、コレワ□無相違、

(5ウ)

一、皆下所出一貫文可在之由被申付、一円不謂儀、

(以下余白)

(6才)

慶長七年〈壬寅〉十二月十九日始行也、

一、探題 訓芸法印〈無量寿院〉

興福寺

一、講師 修南院々家

一、読師 大法師良泉坊〈文殊院〉

結願夜可被出処、堂中ノ申分ハ、六堂衆坊迄、迎ニ可出之由被申而出仕ナ

ク、所々蓮乗院不及申事ニ□出、結願有也、其故ニ良泉坊ハ

(6ウ)

さいくわに及也、

一、結願夜会堂料理過テ、ヤカテアハラヤエ出仕シテ亭論儀有之、  
○荒室

(以下余白)

(7才) ○白紙

(7ウ)

堅者

初夜 淨觀法師 第二日 澄延

第二夜 訓賢々々 第三日 祐芸

第三夜 実英々々 第四日 訓秀

第四夜 良意

一、第三日夜、窪転経院引被帰、其子細者、勾当補任噺候て法事ニ出仕申間、

(8才)

一兩日待申候へ共、補任可取沙汰ナクシテ、押而出仕申間、一乗院殿御内

者萬相届処、窪転経院失面目トテ引ノカレ、一夜延、其次夜出仕被申候、

然処、読師読師早々出仕ト申候処、六堂迎ニ寺迄来間、ミチマテ越ニテワ

出仕申間敷アツテ、種々噺ヲ不聞、夜明自堂方之内、蓮乗院呼出、読師勤

被申也、

(8ウ)

其夜罪科有之畢、

(以下余白)

(後補裏表紙見返し)

〈紙数九枚〉

貞享元〈甲子〉九月日修覆 法眼実宣

(後補裏表紙) ○白紙

一九 永正二年東大寺法華会記録（京都大学総合博物館所蔵一乗院文書）

①東大寺年預五師延海奉書

（異筆）

「永正二年（乙丑）十一月十九日法花会」

当寺法花大会来月中旬之比、可有執行候之由候、其方之綱所方御伝達可為珍重候、鑑取方へ同可被仰遣候之由、評定候、恐々謹言、

十月七日 年預五師

延海（花押）

（諱泰）  
注記丹波寺主御房

②1東大寺法華会専寺聴衆年戒交名  
法華会

（東大寺）  
専寺 聴衆年戒

探題 大藏卿禪花坊

英経権少僧都

大式 金藏院

盛縁律師（年七十一、戒五十七）

三位 信花坊内

秀恵律師（年六十七、戒五十）

三位 東室内

良範律師（年六十三、戒四十五）

卿公 東室内

実儼擬講（年六十一、戒四十四）

琳禪房 東室内

②2東大寺法華会他寺聴衆年戒交名

宗順得業（年六十、戒四十五）  
輔公 円城坊  
実友得業（年五十八、戒四十四）  
願証五師 深位坊  
顯円得業（年五十六、戒四十）  
興春公 四聖坊  
長傲得業（戒三十八）  
大進公 三藏院内  
康慶得業（年五十、戒三十五）  
小將五師 信花坊  
英海得業（年四十八、戒三十四）  
弁公 実相坊  
重祐得業（年四十六、戒三十）  
宮内卿 西室内  
延理得業（年四十五、戒三十一）  
大夫五師 惣持院  
英順得業（年四十四、戒三十一）  
舜賢房五師 東室内  
延海得業（年四十三、戒三十）  
禪栄房 密乗坊  
英憲得業（年四十三、戒三十）  
以上 専寺分  
講師 大夫法印権大僧都秀海  
読師 行賀大法師

他寺聴衆年戒

実英擬講（年六十二、戒四十七）  
光盛擬講（年五十九、戒四十七）  
朝乗得業（年五十九、戒四十二）  
宗宣擬講（年五十三、戒三十九）  
乗弘得業（年五十三、戒三十七）  
隆俊得業（年五十一、戒三十六）  
快乗得業（年五十二、戒卅五）  
清宣得業（年四十三、戒廿八）

以上興福寺分

③東大寺出世後見秀海書状

（東師寺・法隆寺）  
床賦早々可然候義、藥・法 両寺年戒遅々

可為如何哉、又可致催促候、

法華会来月中旬之比、可有執行旨、先日自年預五師被申送、則鑑取・綱掌御下知之事、被仰御意得候由候、目出候、年戒ヲ専他共以取進之候、藥師寺・法隆寺年戒及度々雖申遣候、于今無其沙汰候、餘無尽期候間、

先專他分調進之、於巨細者、使者可申候間、令省略候也、恐々謹言、

出世御後見  
十月十一日 秀海（花押）  
注記御房

④東大寺法華会薬師寺聴衆年戒交名

薬師寺聴衆（二口）  
長懷（慣了房得業、年四十九、戒三十五）  
繼淳（成禪房得業、年四十、戒廿七）  
〔異筆〕  
〔十月十一日二到来、〕

⑤東大寺法華会法隆寺聴衆年戒交名

法隆寺聴衆年戒  
合  
実宣大法師（年五十、戒卅五）  
延勝房得業  
十月十二日 安養院

⑥東大寺法華会床次第

法華会床次第  
一床（南上首）

探題大藏卿權少僧都

会始 大式律師

会始 三位律師

（左一行笈）

会始 三位律師

二床（北上首）

実英擬講 光盛々々

○宗順得業 ○実儼擬講

実友得業 朝乗々々

頭円々々 宗宣擬講

威儀師

三床（南上首）

維那 注記

長徹得業 乗弘々々

隆俊々々 快乗々々

○康慶々々 ○実宣々々

英海々々（重服之間辞退、）

四床（西上首）

散花師 長懷得業

重祐々々 延理々々

英順々々 延海々々

英憲々々 清宣々々

繼淳々々

已上

⑦東大寺法華会所作当次第交名

法華会所作当次第

初日花嚴宗

順助 精義 探題

一間朝乗得業 二間快乗々々

惣持院大夫公 薬師寺成禪房

三間英順々々 四間繼淳々々

信花坊小將公

五間英海々々 実友（円城房、帥得業）

第二日花、如意輪卿公無量寿院

春芸 精義実儼擬講

東室内琳禪房 三藏院内大進公

一間宗順得業 二間康慶々々

宝性院舜賢房 四間清宣々々

三間延海々々

法隆寺

五間実宣々々

第二夜

信祐（三論宗、専嚴公）精義宗宣擬講

円禪坊帥公 法隆寺、延勝房

一間実友得業 二間宗宣々々

蜜栗坊禪榮房

三間英憲々々 四間延海々々

五間康慶々々



第三日 三

公意〈信花坊内、観承房〉 精義光盛擬講

深位坊内願証房 禪花房

一問顯円得業 二問英経擬講

禪栄房

三問清宣々々 四問英憲々々

五隆俊々々

第三夜

勸学院宗舜房 実儼

俣賢 精義宋重拾

四聖坊興寿房

一問長儼得業 藥師寺、慣了房  
二問長懷々々

藥師寺、成禪房

三問繼淳々々 惣持院大夫公  
四問英順々々

五問乘弘々々

第四日

花三藏院治部卿

快惠 精義実儼擬講

実相坊弁公

一問乘弘得業 二問重祐々々

西室宮内卿

三問快乘々々 四問延理得業

興□

五問長儼々々

第四夜

盛重〈実相坊内、春禪房〉 千手院  
精義実英擬講

一問隆俊

二問延理々々

藥師寺慣了房

三問長懷々々

五問顯円々々

四問重祐々々

以上  
注記御房

⑧東大寺法華会所作交名

法華会所作

初夜 探題

堅者、花嚴宗 精義

順助

妙音院

一問朝乘

三問英順

五問実友

第二日 実儼

堅者、花

春芸 精義

一問宗順

三問延海

五問実宣

第二夜

堅者、三論宗

信祐〈専嚴房〉 精義 宗宣

実禪房

二問俊乘

藥、成禪房

四問繼淳

二問康慶

式部卿得業

四問清宣

一問実友 法隆寺  
二問実宣

三問英憲 四問延海

五問康慶

第三日

堅者、三 公意 精義 光盛

一問顯円 二問英憲

三問清宣 四問朝乘

五問隆俊

第三夜

堅者、三、勸学院

俣賢 精義 実儼

一問長儼 二問長懷

三問繼淳 四問英順

五問乘弘

第四日

堅花

快惠〈治部卿、三藏院〉 精義 実儼

一問乘弘 二問重祐

三問快乘 四問延理

五問長儼

第四夜

堅三、実相坊内  
盛重（春禪） 精義 実英

一問隆俊 二問延理

三問長懷 四問重祐

五問顯円

以上

⑨講問役交名

講問々役（自講師、注進之、）

初日 朝座 実英擬講

同 夕座 光盛々々

第二日 朝座 朝乗得業

同夕座 宗宣擬講

第三日 朝座 乘弘得業

夕座 隆俊々々

第四日 朝座 快乗々々

夕座 法之丁衆

実宣々々

夕座

夕座

已上

⑩四床分花衆交名

四床分花衆之事、加散花師而、每会上代者、九口之出仕候、さ候へハ会式遅々候之間、元乗注記之時節、結番候而出仕候、堅間等行合候而、出仕無官数候様役配候、一紙注進候、其段内々四床丁衆へ可有御伝達候、分花無人候者、可伝之床之丁衆候、且又先例候、

初日夕座

堅間兼之 英順 堅間兼之 繼淳

分花計 長懷

第二日朝座

堅兼之 延海 堅兼之 清宣

分花計 重祐

同夕座

堅兼之 英憲 堅兼之 延海

分花計 延理

第三日朝座

堅兼之 同前  
清宣 英憲

分 繼淳

同夕座

堅兼之 同  
英順 繼淳

同 長懷

分 堅 延理

長懷 堅 重祐

堅 重祐

○第四日朝座

堅兼 同 延理

重祐 分 清宣

此分出世後見坊遣了、

⑪法華会初日条々

永正二（乙丑）十一月十九日 法花会

法華会初日条々

一、集会鐘可槌事

以鑑取可下知堂童子事

一、堂莊嚴事、直二可賢知事

一、行事小綱并侍等、堂内所役之次第、可入魂事

一、立明事、年預五師方可申遣事、焼手出納

一、樂所出仕之事、若有遅参者、年預五師方可申

遣事

一、職掌可相尋事

一、執蓋役人可相尋事

一、東西丁衆人数事

一、光燈臺事、夕衆計置候敷否事、自朝座置之事

一、硯筆者、自夕座置之、

一、一床分、於集会所腰懸ニ着座之次第事、西之南之

端上首、二藹者東之南之端ニ可有着座、三藹又西

ノ南ヨリ二番目可有着座、又四藹東之次ニ可被

座、エヒスカケニ可被着座事

一、講問役人

興

舜善房擬講実英

(元見返し奥書)

「初日条々」

## ⑫法華会第二日朝座条々

永正二〔乙丑〕十一月廿日 法花会

第二日朝座条々

一、集会鐘事、自初日夕座、講師下知事

一、堂莊嚴事、無越度之様可檢知事

一、止集会之鐘可開堂戸事〔自影迎戸、可開初事〕

一、講読三度案内之事、令出仕者、最前ニ初度申之、

丁衆、少々有出仕者、第二度申之、於第三度者、

皆参之後、可申之、使者少綱、若有遅々者、以鑑

取可申之、

一、講問役人可催之、

舜実房五師朝乘  
にし室内

一、会始之事、急可催出、

使鑑取〔近来三度案内無之、〕

信花坊

三位律師秀恵

一、唄師大進得業康慶可催出之、

三花坊内

一、散花師可催出之、

實相坊のうち

一、精義者、卿擬講英儼可催出之事

如意輪

一、堅義者、春芸〔如意輪院〕

堅問五人

東室内

一問琳禪房得業宗順

三藏院内  
二問大進々々 康慶

東室内  
三問舜賢房々々 延海

興之丁衆、西室之内  
四問民部卿々々 清宣

法之丁衆、北上院 露生院  
五問延勝房々々 実宣

一、探題案内申之、使鑑取、

威儀師

從儀師

一、松明之料、待不召之、行向後戸、密々可下知事

一、短尺机・光燈臺・硯筆、同置之事

已上

分花衆

延海〔堅以兼之〕 清宣〔同〕

重祐

(元見返し奥書)

「第二日朝座条々」

## ⑬法華会第二日夕座条々

永正二〔乙丑〕十一月廿日 法花会

第二日夕座条々

一、集会之鐘止之、可開堂戸事〔自影迎戸、可開初、〕

一、堂内事、無越度之様可賢知事<sup>(檢)</sup>

一、講読案内事、

使者 少綱

一、会始出仕催促之事、

実相坊院

三位律師秀恵

一、講問役人

堯禪房擬講宗宣

一、精義者可催出之、

興之丁衆、安樂坊之内  
堯禪房擬講宗宣

三藏院内

一、唄師 大進得業康慶

一、散花師 可催出之、

東室内専舜々々

一、堅義者信祐

堅問五人

円城坊

一問帥得業実友

法之丁衆、三

二問延勝房々々実宣

蜜乗坊

三問禅栄房々々英憲

東室内

四問舜賢五師延海

五問大進得業康慶

一、探題連々案内申之、於第三度者、侍迎ニ参之時出

仕也、

威儀師

從儀師

分花衆

英憲〈堅問兼之〉 延海〈同〉

西室

舜賢五師延海〈西室内〉

一、短尺机・光燈臺・硯筆、同置之事、

十九日

(元見返し奥書)

「第二日夕座」

#### ⑭法華会第三日朝座条々

永正二〈乙丑〉十一月廿一日 法花会

第三日朝座条々

一、集会之鐘止之、可開堂戸事〈自影迎戸、可開初〉

一、堂内事、無越度之様可賢知事

一、講読三度案内事、

同前 使少綱

一、会始可催出事、

東室内

三位律師良範〈使鑑取〉

一、講問役人

善了房得業乘弘

三藏院内

一、唄師 大式得業康慶

一、散花師

一、精義者

行学房擬講光盛

堅問五人

一問願証房々々頭円

一問事興春房相伝也

二問禅栄房々々英憲

興丁衆

三問民部卿々々清宣

興丁衆

四問舜実房々々朝乘

興

五問行賢房

々々隆俊

堅義者公意〈觀順房、信花坊内〉

威儀師

從儀師

一、探題事、可催申、使鑑取

分花衆

清宣〈堅兼之〉 英憲〈同〉

菓  
繼淳

一、短尺机・光燈臺・硯筆、同可置之事、

一、松明之料、注記不召、侍行向後戸、密々侍二可下

知事、

已上

第三日夕座三一間事、願証の所可有沙汰云々、

### ⑮法華会第三日夕座条々

永正二〔乙丑〕十一月廿一日 法花会

第三日夕座条々

一、集会云之鐘止之、可開堂戸事〔自影延之戸、可開始、〕

一、堂内事、無越度之様可賢知事

一、講読案内之事、

次第同前 使少綱

一、会始可催出、使鑑取

東室内

三位律師良範

一、講師問役人

行賢房得業隆俊

三藏院内

一、唄師 大進得業康慶

一、唄師事、可催出之、

一、堅義者 僭賢〔勸学院、宗舜房〕

堅問五人

一問興春房得業長徹

菓

二問慣了房得業長懷

菓

三問成禪房々々繼淳

惣持院

四問大夫五師英順

興

五問善了房々々乘弘

精義者 卿擬講実儼

分花

英順 繼淳

長懷

一、探題事、可催出、使鑑取

威儀師

從儀師

一、短尺机・光燈臺・硯筆置之事

已上

### ⑯法華会第四日夕座条々

永正二〔乙丑〕十一月廿二日 法花会

第四日夕座条々

一、集会鐘事、注記令出仕者止之、堂戸可開事〔自影延戸、可開始、〕

一、講読案内事、可為同前〔使少綱〕、

一、堂内事、無越度之様可賢知事

一、会始事、可催出之、使鑑取、

金藏院

大式律師盛縁

一、講師問役

北上院、露生院

延勝房得業実宣

三藏院内

一、唄師 大進得業康慶

一、散花師〔探題坊〕

実相坊内

一、堅者 盛重〔真禪房、実相坊内〕

精義者

巴縁坊口坊

善房擬講実英

堅問五人

西室内

一問行賢房得業隆俊

同

二問宮内卿々々延理

三問慣了房々々長懷

実相坊内

四問弁々々重祐

深位坊  
五問願証房々々顯円

一、探題事、可催出申事、使鑑取

一、威儀師

從儀師

分花

長懷  
延理

重祐

一、短尺机・光燈臺・硯筆置之事

## II 興福寺維摩会記録

### 興福寺維摩会記録解題

奈良興福寺で本来は十月十日から十六日まで行われた『維摩経』を講ずる法会である。平安時代以降、藤原氏長者が主催し、興福寺の他、東大寺・薬師寺・法隆寺の僧侶が職衆として参加した。維摩会も東大寺法華会と同じく論義法会であるから、その職衆他の役割は共通性があり、探題・講師・読師・聴衆（問者・豎義・精義）などである。

維摩会は南都寺院社会随一の法会である。東大寺にとって最高のハレの場であつたから、そこで高い評価を得るための資料としてこれらの記録は残されたと言える。ただし東大寺は主催者ではないため、関わり方も限定的である。東大寺法華会の場合と違い、東大寺寺僧の維摩会記録の書き手は、聴衆の内、豎義・問者・精義などの職衆に絞り込まれる。法会の内容は法華会と共通性があるため、その記録・日記の記述内容も類似する。一方、独自のものもある。たとえば、興福寺内宿坊関係記事や、興福寺側からの受給物である興福寺別当坊・講師坊からの威儀供や維摩会料所興福寺領坂田荘からの供物、そして東大寺助成方・新袈裟方などからの支給物の記事などがある。

高山有紀・永村眞によって中世維摩会の実態解明は進んだ。とりわけ永村の

「高山有紀『中世興福寺維摩会の研究』（勉誠社、一九九七年）。永村眞「法会と文書

研究は興福寺側の記録を駆使するだけでなく、今回翻刻紹介した東大寺の記録も言及しており有益である。全体像はそれらの成果によらねばならない。以下では本冊で掲載した記録・日記の個別解題を行う。

興福寺維摩会関係記録の配列も概ね職衆ごととした。(1)複数職衆にわたるもの（問者・豎義・精義）、(2)豎義、(3)問者・精義、(4)興福寺専当である。最後(4)は興福寺側の記録を後に東大寺僧が入手したものである、豎義の場合も同様の事例がある。

#### 複数職衆（問者・豎義・精義）

##### 一 維摩会記録 一四一―五四一

「東大寺四聖坊」（表紙ウワ書）が、以下の（あ）①④と（い）⑤を書写したものである。江戸前期のものであろうか。

（あ）①永徳元年（一三八一）十月度から応永元年（一三九四）までは、聴衆の弁玄撰である。弁玄は、この間に、問者・豎義・精義を勤めている。途中明徳二年（一三九一）と応永元年の間に文和元年（一三五二）豎義兼精義円範僧都日記の引用がある（㉒ウ以下）。②応永十一年より永享六年（一四三四）は前後①③との書きぶりの違いと末尾の英覚差出の文書引用から判断して、聴衆・豎義の英覚日記と推測される。ただし途中（㉒オ以下）に③の経真日記が誤写（重複）されている。③永享九年より享徳二年（一四五三）聴衆・豎義経真日記。④享徳三年より文明十六年（一四八四）は聴衆・精義延宮日記。表紙

―興福寺維摩会を通して―（『中世寺院史料論』吉川弘文館、二〇〇〇年）

見返しの延宮の識語は①から④までかかるものと判断できる。

(い) ⑤長享二年(一四八八)より享祿二年(一五二九)は聴衆・堅義・精義英憲日記である。

東大寺図書館記録部には四聖坊僧侶による複数の記録があるが、本号と同様の書きぶりや筆跡は見出しがなかった。さらなる探求が必要である。なお最終的に上生院蔵になった(表紙ウワ書黒印)

## 堅義

### 二 維摩会日記 一四二―四六六

享徳二年(一四五三)十二年度の第五夜堅者英覚撰の原本(祖本にあたる)である。本冊は支出費目の記録であり「経営方日記」と位置づけられている。作法・次第については「委細別日記」があったようだが、現存はしていない。その後英覚は享徳三年十二月度聴衆・康正二年(一四五六)十二月度精義の記録を追記した。伝領した英祐(表紙ウワ書)は、文明七年(一四七五)十二月度堅義・文明十七年十二月度精義分を追記している。ただし文明七年と十七年では筆跡が異なるようでもあり、なお検討の余地がある。

### 三 維摩会記 一四二―四六五

寛正五年(一四六三)十一年度の堅義英澄撰の原本(祖本にあたる)である。後に英経が伝領し長享二年(一四八八)十二月度の問者として追記した。

### 四 維摩会遂業日記 一四二―四六七

永正十五年(一五一八)十二月度堅義密乗坊英憲の撰の原本(祖本にあたる)

である。冒頭の「加行事」から末尾の「雑々買物」まで構成がよく練られ、筆致も安定している。適宜、旧記の参照もあり、維摩会完了後に今後の参考となるように書いたものであろう。東大寺僧が維摩会堅義を遂行する上で、質の高いマニュアルとなっている。表紙を欠くためにその後の伝領関係は不明である。

### 五 維摩会日記 一四二―四九三

宝暦頃の北林院法印成杲の写本である(1才内題・表紙見返し書)。享祿二年(一五二九)十二年度の堅者英厳撰が祖本である。前号の師匠である永正十五年十二月度の堅者密乗坊英憲日記の構成や文言に倣っている。江戸前期一六世紀後半には惣持院英秀が伝領(「ウ識語」)し、そのものもしくは写本が後に北林院にあつて、成杲はそれを親本としたのであった。

### 六 維摩会堅義日記 一四二―四七六

江戸中期初め元禄年間頃の興福寺秀胤(東大寺図書館所蔵記録部一四一―五三八、維摩会見聞記(元禄十二年))が、①天文十年(一五四一)度十二月度堅義興福寺金蔵院堯範撰を写した後に、②天正十七年(一五八九)五月・八年度の堅義某の記事を追記、そして③元和九年(一六二三)十二月度堅義栄観房長英撰の日記を書写したもので、末尾では寛永十八年(一六四一)三月度にごく簡単に言及している。興福寺堅義の記録であつて、東大寺僧の活動を直接示すものではないが、比較の素材として有用であろう。後に前述の一四一―五三八とともに東大寺北林院が興福寺より入手したと考えられる(表紙ウワ書黒印)。

### 七 維摩会日記 一四二―四六九

天正十八年(一五九〇)十一月度堅義中證院訓英力撰の原本(祖本にあたる)



である。全三丁に過ぎず当座のメモの域に留まっている。

## 問者・精義

### 八 維摩会真俗私日記 一四一―五二六

聴衆として問者・精義を勤めた三河已講賢春の自筆原本（祖本にあたる）である。永徳三年（一三八三）十一月度から応永十一年（一三七二）十月度までの一四回分の記録である。日々書き付けた日記が別にあって、その中から維摩会関係記事を集めた部類記である。自らが問者・精義を勤めた記事は詳しい一方、問者・精義を勤めない年の記事は簡略である。そもそも聴衆として出仕しない年の記事もある。後に澄芸が伝領している（表紙ウワ書）。

### 九 愚記（薬師院文書二―二五六）

康正二年（一四五六）十二度問者亮信撰の原本（祖本にあたる）である、長祿四年（一四六〇）十一月度、文明五年（一四七三）十二度、長享元年（一四八七）十一月度の追記がある。江戸初期の清涼院実英伝領（表紙見返し書）。最終的に執行薬師院に移っている。表紙ウワ書には、「法花会」の文言もあるが維摩会の記録のみである。当該部分は異筆の可能性が高い。

### 一〇 維摩会日記 一四二―四六八

天文八年（一五三九）十二度問者宗芸撰の原本（祖本にあたる）である。さらに天文十六年十二度を追記する。最終的に惣持院が伝領した（奥書）。

## 興福寺専当

### 一一 大会之記 一四二―七九九

興福寺専当は主催者運営側の差配を行う。東大寺法華会での東大寺執行の役割に当たる。本号は天正五年（一五七七）十二度の専当慶印撰の原本（祖本にあたる）である。前半は堅義からの受給物・下行物である。後半は専当の職務に関わる会場設営・料理用意・被管公人への下行物などを記述する。後年、興福寺よりの東大寺に入ったものである。識語や印記などないため具体的な入手者は不明である。

一 維摩会記録（東大寺図書館一四一・五四一号）

（表紙ウワ書）

維摩会記録

（黒印「東大寺上生院」）

東大寺

四聖坊

（表紙見返し）○白紙

（1才）

一、勅会之時、威儀師・從儀師・注記、必朱紫甲着用、其子細、天竺広騰并法蘭二仏法文白馬等載之、漢土へ初而渡之、仍為住持、立寺、号白馬寺、彼二人着用袈裟朱紫甲也、仏法最初興行之時、着用之、仍以彼法会執行之時、必遂先規而朱紫甲、可令着用之旨、勅定也、依之必着用之、勅会之注也、  
延宮筆写之、

（あ①永徳二丁応永元年聴衆問者・精義弁玄日記）

請取 維摩会餅代事

合肆斗者、へ一ヶ夜分

右、大法師弁玄分所請之状如件、

永徳二年十一月十五日

使者判

（1ウ）

請 維摩会第四日講師坊非時供事

合

右、大法師弁玄分所請状如件、

永徳二年十一月十五日

使者判

一、当年大会十一月十日ヨリ始行云々、当寺会参人数

精 精初夜間上

第二夜一間

初夜二間

第二夜二間

頭済律師 秀海（帛丁衆、宣

聖成得業

專円五師

実演得業

第四夜堅者 法自相

第二夜三間

初夜四間

行替得業

寛忠得業

専曉得業

初夜五間

第二夜五間

範譽得業（年四十五、戒二十九）

弁玄得業（年四十五、戒二十九）

堅者東室

隆兼得業（有法差別、第五堅者）

以上十一人

（2才）

当年僧綱精義一人被渡之間、為堅問役丁衆一人加増スル也、已講ハトイアケニスル、問別ニ堅問役イラサル也、若精義二人ナカラ已講ナラハ聴衆十人ナルヘシ、

薬師寺、第二夜四間

英専（聖延房得業、年四十七、戒三十二）

円長（良觀房得業、年四十六、戒三十）、

法隆寺、初夜三間

慶算宗順房五師（年六十二、戒四十二）

從下行物

從僧一人（三百文、装束皆当方用意之、）

力者一人（二百文、衣着テ来也、先々ハ多分力者二人ト云々、）

藁履沓一人（百文、装束当方用意之、）

惣從中威儀供一前（二百文）、中間ニテ分配之、

十一月四日丁衆会合評定分記之、

一、新袈裟方下行物

(2ウ)

十六貫文 堅者二人 十貫文(已講分、此内五貫文ハ新已講加増)、

八貫文 律師分 廿一貫文丁衆七人(各三貫文宛)

以上五十貫文 十一月三日悉下行

一、学生供一貫五百文、皆下十一月三日

一、用意廻請十月七日承仕持来、衣着シテ自身出合也、

一床八口皆僧綱也、二床已講以下十二口、三床十二口、四床八口、

此外次第散花師四ノ床ノ頭ニ着座、合四床九口也、

一、唄役事、秀海已講云、三ノ床ノ一番ノ末引也、藹次若スヘニ他寺ノ丁衆多

シテ、東大寺ノ藹次三床ノ末ニアタラスハ、他寺ヲハ上ヘアケテ東大寺ノ

丁衆三ノ床ノ末ニツキテ唄ヲ引ヘシ、又当寺ノ聴衆ノ中ニヲイテ藹次ノ三

ノ床ノ一番ノ末ニアタル人体

(3オ)

唄ノ非器ニテ、上ニ器用アラハ藹次ヲヒキサケテ、上ヲ三床ノ末ニツケテ

唄ヲ引ヘシト云々、

発心院

久我得業

一、初夜研学堅者ノ精義秀海已講、第二夜ノ研学堅者ノ精義頭濟律師、

第三夜堅者(撰願院)精義秀海已講、聴衆ノ堅問役ハ当寺分并薬師寺・法

隆寺ハ、初二夜ノ内ニテ藹次ニコマトリテ一問アリ、トウナリ、弁玄ハ最

末ナル間、初二夜ニアマリテ、第三夜撰願院ノ五問ヲトウヘキヨシ寺務沙

汰アリ、

一、雖然秀海已講、香琳房得業シテ、内々寺務ヘ申様ハ、東大寺ヲハ先規皆初・

二ニテツクス日記アリ、如此御沙汰アルヘキ由、被申之間、其分ニテ弁玄  
第二夜ノ久我殿ノ第五問ヲトヲナリ、

一、講問役ハ当寺分僧綱以下悉勤仕ス、并薬師寺・法隆寺勤仕スル也、

請 維摩会第五夜堅義者威儀・供捧物事

合

(3ウ)

右、大法師弁玄所請如件、

永徳二年十一月九日

使者判

別当坊講師坊ノ非時供ノ請取モ表ヲ書ナラスハカリニテ、余所ハカワ  
ラサルナリ、

当年第五夜堅者東室隆兼、九日於当寺世俗捧物下行(人別八百文)

一、秀海已講初夜堅者、発心院精義問上也、第二夜ノ堅者久我殿ノ精義頭濟律

師、第三夜ノ堅者撰願院ノ精義秀海已講、重役ハ問上ハナシ、寺務ヨリ問

上ナルヘキ由、奉ヲ被取処ニ、重役ニハ問上ナキ日記共ヲ以、辞退申サレ

畢、

一、行誉(大弍得業)云、当年ノ講師来迎院法隆寺ノ別当ナル間、彼寺ノ丁衆

(別当)

ハ当別講師ノ時ハ、講問役ヲセサル由、被申間、内々論義ヲ重役ノタメニ

用意ス、雖然法隆寺ノ丁衆、講問役ヲ勤仕スル間、重役ナキ也、但今年ハ

僧綱精義ノ堅問役ノ為、丁衆一人多渡間、重役ナシ、若平丁衆八人ナラハ、

法隆寺問役ヲスルトモ、当寺丁衆一人重役アルヘキ也、

(4才)

弁玄

一、行嘗得業、堅者ノ世俗捧物等分七百文ツ、但自分ハ助成ニ遣畢、

一、十一月十日末鐘ノサカリ程ニ出立シテ、当寺ノ入道シテスクニ他寺ヘワタ

リ畢、宿坊窪転経院、同宿聖成・寛忠・專暁・弁玄

一、日クレテ探題坊ヘ夢見トテ題ウケニ出仕スル也、ナリワ鈍色ニ五帖袈裟、

所従ハ力者(草鞋)ハキ・カリキヌ、中間ハケ直垂・鼻広・草カイ、

シタウツモイラス、力者ニテ東大寺ノ丁衆参シタル由ヲ申入タレハ、侍出

合テ門ヘ入畢、其後寺務チキニ題ヲ持テ出合テタフ間、一人ツ、寺務ノ前

ヘユキテ題ヲトル也、

一、秀海云、今度ノ探題ノ沙汰ワルシ、修学者ニテモ良家ニテ出テ入ヘシ、又

題ヲ修学者持出テ、ソテノ下ヨリヒソカニワタセハ、(密)丁衆モ袖ヲサシ合セ

テヒソカニ取也ト云々、又同時ニ参タレトモ一人ツ、内入テ取也、是ハ同

時ニ内ヘイレテタフ、是モワルシト云云々、

一、ソテヲ指合セテ題ヲトリテ、高燈台ノモトヘヨリテ披キテ見也、若題カワ

リタラハ、其由ヲ申スヘキ也ト云々、

一、開白結願ハ皆参也、集会所ニ立テ皆参以後列ヲヒク、東大寺・薬師寺・法

隆寺ハ集会所ノ東ニ立ツ、正面一間ヲヘタテ、西ハ興福寺也、列ノ時ハ僧

綱ノ集会所ノ南ノハツレヲ東大寺ハ東ヘマワル也、

(4ウ)

正面ノ石壇ヨリ上テ堂内ヘイリテ、東ヘマワリテ、後戸ヲトワリテ、トコ

ヘユク也、結願モ同、但当年ハ結願ニ雨降間、後戸ノ壇上カト上テ壇上ヲ  
東ヘマワル也、

一、僧綱ハ開結モ後戸ヨリ出仕アリ、平丁衆ハ、タ、ノ時ハ西ノ戸ヨリ出仕ス、

四ノトコノ丁衆モ(床)マツトコニ座スル也、堅者ノアル時ハ講師ノ出仕シテ

堂内ヘイリ程ニ、西ノ戸ヘ出テ立也、四ノトコノ丁衆ヲソトヨフ時、内ヘ(喚)

イル也、朝座ナント堅者ノナキ時ハ、着座ノマ、ニテ不出也、

一、開結ニハ大行道トテ惣力皆散花ニマワル也、散花師正面ヘ行ハ、四ノトコ

ノ丁衆ツレテ正面ヘ行、花箱ヲ正面ノ東ノワキノ戸ノキワニテヒケハ、散

花師ヨリ初メテ臈次ニトリテ、北ヘカイタワリテ正面ヘマワル也、サル程

ニ正面ハフタヘニナル也、散花師ハ一ノトコノ前ヲマワレハ、四ノトコノ

丁衆ハ高座ノソハノ柱ノキワニ立留マル也、一ノトコ次第第二行道アリ、二

ノトコ以下ワリテ南ヘ出テ、一ノトコノウシロニツキテ行道アリ、四ノト

コハ三ノトコノ後ニツキテマワル也、一ノトコ以下ノ花箱ハ後戸ノ仏ノ後

ノ西ノカトニテ引之也、又散花師ハマワリテ後、正面ニ留マル、四ノトコ

同シク留リテ仏ニ向テ礼シテ西ヘマワリテトコニ上也、タ、ノ時中間ニハ

四ノトコハカリ散花ニ立ツ、正面ヘユキテ花箱トルナントハ同事也、四ノ

トコノ出仕スクナケレハ、二ノ床・三ノ床マテカリテ九人必散花ニハマワ

ル也、以上注記ノ記也、

(5才)

一、秀海已講ノ相伝云、四ノトコノ丁衆ハ唄ヲ引ハシムレハ、皆床ヲワリテ南

ノツラノカ<sup>(壁板)</sup>ヘイタノソヘニ西ノ戸ノワキニ立也、東ハ上首也、大行道ノ時

ハ一ノ床ヲリテ行道アリ、四ノ床ハ一ノ床ノ後ニツキテ、北ノカトマテユク、二ノ床以下ハ北ノ方ヨリ一ノ床ノ後ニ廻ル、四ノ床ハ一ノ床ノ末程ニマチテ、三ノ床ノ後ニ付テマワル散花師正面ニ留ル、四ノ床同ク留マテ西上ニテ、仏前ヘ向テ立テ六礼スル也、中間ノタ、ノ時モ四床ハ一ノ床ノカマチニマチテ、正面ヘハ散花師ハカリユク也、ト云々、

如此注スル処ニ、秀海已講云、日記ヲ見レハ、四ノ床モ正面ヘユイテ西上臈ニ東末ヘニ立也、正面ヘユカヌト申タルハ、悪クヲホヘタル也ト云々、

一、講問役ノ論義ハ<sup>カサネ</sup>重論義也、二帖ノアワイニハ、サテ後ハナント云、言ハナモナキ也、タ、問題ヲウタフガ如シ、二帖ヲウタイハテ、モ別ノ言ハナキ也、ヤカテ論義ノハテニ、ツ、ケテ、抑トイ、テ送表白ヲウタフ也、送表白ノウタイ様モ論義ニカワラズタカサモ同様ニウタフ也、

一、堅問役ウタフ時分ハ、精義得略ヲ判スルトテ、并ニ得タリト云、又一ハ得タリ、一ハ未判トモ、題ノハテコト云時、注記同クロマネヲスルカ如ク云畢レハ、頓テウタフ也、一ノ問ハ堅者表白ヲ読畢ウタフ也、

一、講問役ノ論義ハ、散花ニ四ノ床ノ丁衆婦テ床ニ着座スレハ、頓ニウタフ也、

一、秀海已講ノ精義ハ、一ノ問ハトイ上也、第四ノ重ヲ堅者答ハテ、精義申上ヨト云ヘハ、注記問題ト答トヲヨミ上也、其後精義シラメ声<sup>(調)</sup>ニテ、テウヲトリテ難ヲスル也、堅者ハ切声ニテ答□其後サシ声ニテ難スル也、発端ノ言ニ云、テウヲ取テ難ヲ加ヘケレトモ只申セ、二三重

(5ウ)

難畢テ、サシ声ニテ結解ヲシテ、并ニ得タリト云々、二ノ問以下ハ別ニ堅問役有也、問者ノ重畢テ申上ヨト云也、

一、秀海ノ時ハ嘆徳ノ句ナント別シテナキ也、頭濟律師ノ時ハ一ノ問ノシラメノ時、堅者ノテウヲ取テ難トノアワイニ、堅者ヲ嘆徳スル句ヲ声明ニテ<sup>(唱)</sup>ウタハル、又得略ヲ判セントスル時、結解ヲハセテ嘆徳ノ句ヲイ、テ、并ニ得タリト被云也、

一、寺務円守、行誓ヲ被精之時ハ、シラメノテウト難トノアワイハカリ、自嫌ノ句ヲ被云也、初ト繼トハ普通ノシラメ声也、中間ハ一ノ問サシ声也、一ノ問ノ時、一ハ得タリ、一ハ未刻ト被云也、結解ノ声ハシラメ声ノ様也、

一、東室、隆兼ヲ被精之時ハ、得略ヲ判セスル時、嘆徳ノ句アリ、

一、四ノ問ハ問題ヲウタイテ、頓テ、精義一ハ得タリ、一ハ未判ト被云也、如此ナル時ハ堅問役ハ問題ハカリ也、若精義、得略ヲ判セスシテ時分アレハ重ヲ一重ウタフ也、第五問ハ何様問題ハカリ也、

一、精義、得略ヲ判スル事ハ、多分四ノ問ノ時、一ハ得タリ、一ハ未判ト云テ、余ノ題ヲ皆并得タリト云也、

一、初日(十日ノ)夕座ヨリ堅義ハシマル也、第六日(十五日)ニハ堅義ナキ也、講問ハ朝座・夕座、ソラ婦ニテタ、ミテ行也、第七日(十六日)ニハ講問モナキ也、講師、高座ヘ上テ、注記、惣礼ト云テ後、金ヲ丁後、唄ヲ引テ後、講師サシテ何事スルトモキコエシテ下也、

一、唄師ハ香呂箱ヲ置ト云義アレトモ、先度助得業唄役時モ不置之由、被申之

間、今度又香

(6才)

呂ハ不被持也、

一、初日〔十日〕宿坊へ鑑取御請ヲ持来、請取テ、次ノ朝会堂へ遣テ、御請ヲ

ハタ／＼ニトリカヘテ、物ヲ請也、

一、餅ヲハ請取ニテ請也、日別二十枚代米四斗也、当年ハ二ケ日分ヲ請也、

一、講師坊ヨリ二百文ツ、二ケ度下行アルヲ、当年一ケ度ハカリ下行アリ、本院ノ威儀供也、

一、別当坊ヨリハ、捧物厚紙八帖紙ヲタ、ミテユイテ、紙ツミモナシ、威儀供

ハ饗ヲ下行也、散々ノ物也、前々ハ威儀供ハ代ニテ二百文下行ト云々、

一、初夜堅者ハ、世俗ハイトナム捧物ハ百六十文〔等分〕比興ト云々、

一、第二夜〔久我殿〕捧物ハ、厚紙九帖紙積ニツミテ、赤革一スチ、黒革一ス

チニテ結テヲロス、当年紙高直ナル間、四帖ハカリノ紙積、先ニナラハ五

帖ハカリ、世俗五百文下行尋常也、云々、

一、第三夜撰願院捧物ハ、同先組紙チト劣ナル様、世俗ハ二百五十文ツ、

一、從僧隨忍〔般若寺行者〕三百文下行、力者香信〔小屋ニアリ〕百文下行、

衣袴ハ当方ニ用意之、藁履又太郎〔小法師太郎トモ云也、北御門ニアリ〕

百文下行、装束ハ当方ニ用意之、又二百文惣中へ下行、從僧以下当方中間

一人、合四人分配之、中間今一人アル間、別ニ五十文下行了、

一、藁履ノ装束ハ公人二百文ニテ借用、

一、結願ニハ雨降間、從僧足駄ヲハキテ笠ヲサス也、但会堂ノマワリ計也、

(6ウ)

一、一ノ床ハ僧綱ハカリ也、後戸ヨリ入テ床ノ前ヨリ上テ着座ス、二床以下ハ

床ノ後ヨリ上テ着座スル也、已講・成業ハ二床以下也、戒臈次第也、已講

ニモヨラス、戒臈下ナラハ成業ヨリ末ニツクヘシ、

一、已講ハ開結ハ衲ノ袈裟也、中間ハ青甲也、

一、開結ニハ香呂ヲ持ツ、中間ハ不持也、

一、初日結日ニハ宿坊ニテ朝飯ハカリ、中間ノ五ケ日ハ二ケ度ツ、

一、坂田莊ノ加供ハ、結日ニ札ヲ集会所ニテ引、僮僕請取之、後日ニ請之、但当年ハ不下行、

一、講問役論義ハ、講師經ヲ挙時ウタヘトモ、多經ミヘサル間、散花廻ハテ、

ヤカテウタフ也、又論義不審ナル時、經ヲ挙事アリ、其時ハトリツケトテ、

講讀經ニナント付タルヲハウタハス、只論義ノツホハカリウタフ也、又送

表白モウタハス、

一、論義ヲ返スト、又今一度ウタエト云ト、同ク經ヲ挙ク差別難知、多分ノ云

差別ナキ也、秀海已講差別ナキ間、大概スイスヘシ、又比座ニモ談合スヘ

シト云々、

装束等用意

袍裳、表袴、腰椎、青甲、鼻広、香呂、檜扇、轆、以上自身分

鈍色、白裳、表袴、腰椎、五帖袈裟〔古尻切〕フルシリキレニテモ、ウラナシニテモ、

以上從僧用

下人直垂・小袖并両具装束ノ人物蒔袋等

(7才)

- 一、探題ノ許ニテ題ヲ請ル時ハ、門徒ニナラント思フ者ハ二字ヲ捧ク、サ思ハサル者ハ、不捧也、二字ヲ捧タレハ、先修學者出タル時コレヲ渡也、
- 一、結日ニ雨降間、講師ノ出仕難義ナル間、注記ノ方ヘ使者ニテ被申様ハ、鐘樓ノモトヲ通りテ西ノ石壇ヨリ上テ、出仕候ヘキ由、被仰間、勅使ノ座ヲ内ヘ入申テ、西ノ壇方上テ、南ヘ廻リテ正面方堂内ヘ出仕アリ、
- 一、精義シラメノ時ト、得略ノ時ト、両度嘆徳ノ句ノアル事ハ、シラメノアワヒノ句ハ、自嫌ノ句トテ我身ヲ卑下スル句也、得略ノ時ノ句ハ、堅者ヲ嘆徳スル句也、貴勝ナントノ取テハサミタル堅者ノ時ノ事也、一礼也、随聞記之、今度寺務東室ノ時ノ嘆ノ句ヲサラル、事ハ、貴勝ニテハナケレトモ東室サル人也、我身探題ノ始ナル間、セラル、歟ト云々、
- 一、僧綱精義ハ題ヲハ請ケサル也、トイ上ノ已講ハウクル也、

永徳三年〔癸亥〕 維摩會日記

薬師寺

繼円ノ処、俄ニ此仁ニナル

円長得業〔年四十八、戒三十二〕 実嚴得業〔年四十七、戒三十二〕

法隆寺

長乗得業

東大寺

顯濟律師〔第二夜、一乘院、御精義〕 行誓已講〔初夜、精義同上〕、

寛忠〔第二夜二問〕 專暁〔初夜三問〕 暁円〔第二夜三問〕、

慶海〔初夜四問〕 弁玄〔第二夜四問〕 隆兼〔第二夜五問、宣歸丁衆〕、

賢春〔初夜五問〕

堅者 実演 快尋

(7ウ)

- 一、丁衆助成〔三貫文〕、十一月一日下行并学生供〔一貫五百文〕、同日皆下畢、
- 一、專円五師、当年丁衆領狀申テ、一乘院一問ヲ問申ヘキニ、治定ノ処ニ、内方所勞難義ノ間、十一月三日朝辞退ノ間、次ノ藤次寛忠〔美濃得業〕、一乘院ノ一問ヲ問申ヘキ処ニ、無日數間、難義由被申間、丁衆ノ評定ニテ行誓已講ニ可被問申由、列參シテ誘申処ニ、領狀被申畢、二ヶ夜ノ精義ノ上ニ一向ノ重役言語道斷ノ達者也ト沙汰アリ、
- 一、薬師寺・法隆寺、一乘院ノ問役ヲ勤仕セハ、法隆寺寛忠ヨリ上座ナル間、一乘院ノ問役ヲ申スヘシ、雖然末寺ハ一乘院ノ問役ヲセサル間、寛忠ニアタル也、

一、行誓ハ非分重役先例モナキ事也、僧綱精義ノ問役ニ一人ハ加増スル処、行誓非分ノ重役ヲスル上ハ、加増ノ一人ハ無用ナレトモ、僧綱精義ノ時ハ一人加増スル例ヲ不可失間、賢春得業、丁衆ニ加ハル也、然ル間薬師寺ハ兩人初二夜ニアマリテ、第三夜ヘヤル也、

一、藤次ニコマトラハ、隆兼ハ初夜ノ五問ナルヘシ、然レトモ良家ナル故ニ、第二夜一乘院ノ五問ヲ問申ス也、

一、講師〔寛成〕、禅光院〔寛雅〕、西南院、東北院〔二年三人講師先代未聞事也〕

一、興福寺堅者、賢定房〔初夜〕、一乘院〔第二夜・第三日〕、

一、貴勝ノ時ハ答申旨、不可然、又答申旨、猶不明又分明ニ答申セナント云所

ヲハ、被答申旨、猶不明、又分明ニ被答申ヨナント被ノ字云也、如此云ヲハ、タ、ノ堅者ノ問役ニモ、惣シテウタフ事ハナシ、指聞也ト云々、〔東院〕円守ノ相伝也、難ヨリコソウタヘト云々、

一、服者モ從僧以下ノ供奉人ハ不苦、当年東北院ノ從僧モ一人服者アリト、他寺ノ人物語スル也、

(8才)

一、大会七日ヨリ始行由、其聞アル間、行營已講第二夜ノ一ノ問ヲ問申ヘキ処

ニ、延引シテ、十八日ヨリ始行之間、寛忠第二夜ノ一ノ問ヲ問申ス也、

一、堅者ノ義名ヲハ、探題方ヨリ被触時参スル也、弁玄十一日東院ヘ参スル時、

堅者ノ方ヘ明日〔十三日〕義名ヲ可付之由伝ヘ候ヘト言付ラル、問、助得業方ヘ伝申畢、後日ニ伝承レハ、東院ヨリ付衣ニテ威儀僧ナントヲモ略シテ、可参之由被仰間、其分也ト云々、

一、帥得業ハ来迎院ヘ被参也、其モ東院如此沙汰アル間、内々ノ義ニテ付衣ト

云々、

一、用意廻請ヲハ義名出テ後、被廻也、初夜分ハ十三日被廻了、

一、初二夜ノ探題ヲハ、専寺ノ探題ト名クル也、公家ヨリ蒙仰也、今年ハ第二夜ノ分東院辞退ノ間、来迎院ヘ被仰処ニ、于今不蒙仰ト云々、第三日以後ヲハ他寺ノ探題ト云也、

一、廻請ヲハ其日探題ヨリ出也、来迎院未定間第二日廻請遅々スル歟、

一、賢春〔三河得業〕第五日、快尋〔輔得業〕第四間重役勤仕、

初夜

一問行營太貳擬講〔年六十五、戒四十九〕

法隆寺

二問長乘延宗房得業〔年六十七、戒四十五〕

三問曉円伊与得業〔年五十二、戒三十六〕

薬師寺

四問延長良觀房五師〔年四十八、戒三十二〕

第二夜

一問寛忠美濃得業〔年五十七、戒四十二〕

二問專曉弁五師〔年六十一、戒四十一〕

三問慶海大進得業〔年五十一、戒三十五〕

四問弁玄少納言得業〔年四十六、戒三十〕

五問隆兼大納言得業〔年三十四、戒二十三〕

(8ウ)

一乘院御堅義時請取

謹請 第二夜御堅義者威儀供奉物事

合

右、弁玄大法師之分謹所請、如件、

永徳三年十一月 日 使者判

一、大会十八日始行、題ヲ請ニ探題ノ所ヘ可参処ニ、第二日ノ専寺ノ探題東院辞間、権別当来迎院ヘ長者ヨリ可被仰処ニ、遅々スル間、第二日ノ廻請十(知)八日マテ不成、然間来迎院ヘ不審申セハ、綸旨イマタ不到来間、下地ヲハ用意シテ候ヘトモ、不出候、若明日出候ハス、東院ヘ可参由返事セラル、間、東院ヘ不審申セハ、勅使ノ無沙汰ニテ候、是ヨリ申候ヘキ被仰了、然



間、十九日来迎院ヨリ廻請ヲ被成畢、則十九日夜、来迎院宿坊東湯屋坊へ参スル間、題ヲ被出了、

一、一乘院御捧物杉原七帖、ヒロ折敷ニツム、威儀供六百元（廿日下行）

一、初夜堅者威儀供ハ熟銅捧物代二百五十文（廿日下行）

一、第三日堅者中納言得業（松林院舎弟）捧物并威儀供代五百文（此内捧物二石）

一、第三夜堅者（東北院権坊主）捧物九帖、帯ニテユウ、威儀供代二百文

一、一乘院ノ御堅義ニハ切声ナキ也、

一、快尋得業世俗捧物、十七日東大寺ニテ被送畢、六百元

（9才）

一、実演得業ハ助成ニ遣了、六百元

一、別当坊非時供第六日下行、非時供ハイトナム、<sup>（堂）</sup>捧物代百六十文

一、講師坊非時供二百文、第四日分講師ノ沙汰、西南院ニテ請之、

一、喜多院ノ非時供ハ当年ハ下行ナシ、初日分也、

#### 下行物

五百文從僧、百文力者、百文ワラツハキ、二百五十文惣中へ下行、（ワラツ

ハキノ装束ハ、院家ヨリ借シ給ル）

#### 延年事

第三日講師坊、第四五六日三ヶ日ホソ殿、今年ハ第五日夜雨降ル間、延年ナシ、第六日二ヶ夜ヲ合アリ、祭礼廿七日間、計会ニヨリテ合シテ一度ニアリト云々、

一、第七日ノフト以下ハ食堂へ出仕ヲセサル間、蔵ニテ請之、若食堂へ出仕ヲ

スレハ、鉢ヲ食堂ニヲキテ請也、

（至徳）  
永徳 元年（甲子）十月十六日より始行

#### 法隆寺

有円浄禅房得業（年六十一、戒四十三）

#### 薬師寺

継円（浄観房、養勝院）得業（年五十三、戒三十四） 長寛禅円房得業（年

四十一、戒二十五）

#### 東大寺

（9ウ）

卿

頭済僧都（禅定院御精義）

太貳  
行營已講（初夜知足坊精義）

助 掃宣

帥

弁

少納言

東室

実演得業（禅定院一問）

快尋得業

専曉得業

舜恵得業

隆兼得業

三川

賢春得業

伊与

大進

堅者 曉円得業（法自相）

慶海得業（有法差別）

寺務東院

禅光院

探題 円守僧正

覚清僧都

権別当来迎院

講師松林院僧都

知足坊

興福寺堅者 了文房得業（研学）

禅定院

東門院

松南院（実尋）

一、両院家ノ一問ハ已講ノ役ナル由、注記兼日ニ申間、去年一乘院一問寛忠得業勤仕ノ由ヲ返事ノ処、悪例ナリト重テ申ス、又重テ一乘院ノ先門主御堅義ノ時、専円五師一問勤仕、其外旧例アル由、出世御後見ヨリ申遣サル、間、注記領状申畢、

一、大貳已講ハ、知足院初夜精義并第三夜東門院精義ヲ勤仕ス、卿僧都ハ第二夜禪定

院并ニ第三日松南院ヲ勤仕也、大貳已講、第三日ノ松南院精義ヲ沙汰アル

ヘキ処ニ、卿僧都所望シテ沙汰アル也、松南院ノ題共、去年沙汰シテ覺ヘ

タル故也、大貳已講ハ前後ヲ沙汰有、卿僧都ハ中ヲツ、ケテ沙汰アル也、

一、宣旨丁衆事、秀海云、必シモ帰丁衆ノ中ニテモナシ、又兩年ツ、ケテスル  
事モキカス、又当寺ニテハ已講ノシタル事モナシト云々、

一、第二夜堅者禪定院ノ第四問役勤仕、用意廻請十三日持来也、権弁当来  
迎院ヨリナサル、

一、大進得業世俗捧物六百文十五日請之、伊与得業世俗捧物、十六日七百  
文請之、

一、東北院得業御房、(切芝カ)キリシハヲスクニ僧綱ノ如ク出仕アル処ニ、注記・  
平丁衆ハ兩方ノワキヘ出仕アル由、鑑取ニテ申処ニ、東北院ノ返事ハ、門

跡ニ加様ニシツケタル由ヲ被仰間、注記重テハ何トモ申サス、

(10オ)

一、一乗院御出仕、寺務ヨリ先ニ注記ス、メ申処ニ、一乗院ノ被仰之趣ハ、寺  
務ヨリ後ニ可有御出仕由被仰間、寺務ヘ注記申スハ、一乗院御出仕遅々候  
ヘハ、先御出仕候ヘキ由ヲ申処、寺務先立テ出仕アリ、一乗院ハ最後ニ御  
出仕アリ、両寺共ニ壇ヨリ下テ参向申ス也、

一、キリシハヲ直ニ御出仕アル也、床ニ御着座ノ時ハ待申テ、御着座ノ後着座  
スル也、三ヶ度御出仕、開結并第四日御堅問役ノ時也、第四日御出仕ノ時

四床

一、御着座并行道ハ一乗院モ戒臈次第也、

一、初二夜ノ探題来迎院用意ノ廻請、両日共ニ来迎院ヨリナサル、也、来迎院  
ハ精義ハ一度モ勤仕ナシ、伊与得業ノ精義ハ東院寺務、大進得業ノ精義ハ權別当禪光

院也、

一、本院威儀供第二日(十七日)講師坊ニテ式百文請之、

一、初夜堅者、世俗ハイトナム、捧物代三百文請之、

一、禪定院御堅義第三日(十八日)夕部始ル、法差別(勝々伝)切声ナシ、

一、論義ニ三年已出ヲキラフ事、先ノ年ヨリ三年已出ヲキラフ也、当年ハ三年

ノ中ニハイラス、

一、松南院世俗捧物代合三百五十文、十九日請了、

一、禪定院世俗熟調(比興物也)捧物厚紙九帖(五帖紙敷)三ワリノ帶ニテ  
ユウ也、(ウスシ)

赤黒

一、東門院捧物厚紙九帖、結革二篇、世俗代三百文、

一、堅者ノ座具ハ左ノ袖ニツクル也、

一、講師坊威儀供第五日二百文請之、

(10ウ)

一、別当坊非時供厚紙八帖、熟調捧物捧物厚紙八帖請之、

一、鑑取御請ノ請取トリニ来時、ヤキ石ノ代二十五文下行了、日供下行ナケレ  
トモ少事ナル間、別義ニテ下行了、

一、僧綱以上ノ出仕ハ月夜ナレトモ松明ヲトル也、平丁衆ハ多分月夜ニハ火ヲ

ハトホサス、

(至徳)  
永徳二年〔丙寅〕 弁玄・賢春、堅者也、

嘉慶元年〔丁卯〕 十月十日始行、

法隆寺丁衆 意宝〔年四十八、戒三十二〕

聖延房五師 良觀房五師

藥師寺丁衆 英専〔年五十二、戒三十六〕 円長〔年五十一、戒三十五〕

東大寺

実演已講〔年六十四、戒四十八〕 快尋已講〔年六十四、戒四十四〕

寛忠得業〔年六十一、戒四十五〕 專曉五師〔年六十四、戒四十四〕

曉円得業〔年五十七、戒四十〕 弁玄得業〔年五十戒、三十四〕

尋盛得業〔年四十五、戒二十八〕 賢春得業〔年四十八、戒二十五〕

第五夜

堅者西室殿〔於東大寺一貫文下行〕

善兼〔第四夜、世俗捧物代六百元、十月八日下行、〕

興福寺堅者 安樂院誠識房得業〔世俗ハ熟調捧物代三百文下行〕

第二夜浄明院〔法雲院親弟歟、世俗捧物二四〇文〕 第三日二位得業〔世

俗捧物二三百文〕、第三夜慈恩院〔世俗捧物二四〇文〕

講師坊ニテ本院威儀供二百文請之、又粥時二百文請之、又イキ供四百文請

之、

合八百文於講師坊請之、粥時并イキ供内二百文トハ両院家ノ時ノ加増歟、

講師〔禪定院〕、探題西南院〔寺務〕、東北院〔権別当〕、松林院 三人

(二才)

西宝殿ノ精義〔松林院〕、善兼精義東北院、西南院ハ無役、

初二夜ノ廻請ハ西南院ヨリ被成也、第二夜ノ問役ハ東北院ニテ題ヲ請也、  
一、松林院西宝殿ヲ被精時ハ、嘆徳ノ句ナシ、指声ニテスコシロヒテ後、シ  
ラメ声ニテ、文理分明ナラネトモ大綱ソムカサル由ヲ、チト云テ、并ニ得  
ト被云也、次牒トシラメトノ中間ニハ自嫌ノ句アリト云々、其時分ハ不可  
聞也、

(ママ)  
一、嘉慶二年弁玄、新精義東院ニテ有法差別談義申次ニ、自嫌ノ句ナント申候

事ハ、必可有事ニテ候哉ラント尋申処ニ、返事云、自嫌句・得略句ハ探題  
以上ノ事也、其モ初年ハカリ也、平精義ニハ有マシキ也云々、秀海〔輔僧  
都〕ニ尋申処ニ、随意ト書タル物アリ、我身ハセスト云々、

一、牒ヲ取テ難ヲ加ヘケレトモ只申セト云事ハ、一同ハカリ也、二三問ニハ只  
申セトハカリ云也、牒ヲ取テ難ヲ加ヘケレトモト云詞ヲ略スル也云々、実  
演口伝也、

謹請 維摩会講師坊粥時事

合

右、大法師弁玄分謹所請如件、

嘉慶元年十月十四日

使者 判

一、ソロフ事モ随意也、ソロフトモ初メノ夜ノ一問ハカリ也、二三問ニアルマ  
シキ也、又次ノ夜ニハ一問ニモアルマシキ也ト云々、実演口伝也、  
一、大旨加様ニ申歟ト云事、内明ノ牒ヲ取ハテ、云也、因明ノ牒取畢テハ云マ  
シキ也、又此言ハ第三重ノ牒方可云也、

一、一ノ問ヲウタフ始ニ云事、所立ノ義、科唯識義章并因明四種相違義云、論  
 声  
 ウタフ様ニヒキクウタフ也、

一、得略ノ案内ヲハ次夜モ可申也、アナタトハ因明ヲ云ツケタリト云々、助已  
 講説、四五問ニモ申上アルヘシ、

(二ウ)

嘉慶二年(戊辰)分

玄理房  
 実嚴得業(年五十、戒三十四) 円浄房  
 長盛得業(年四十二、戒二十六)、以上

薬師寺

長乗(年六十六、戒五十)、法隆寺

実演 弁玄 寛忠 専暁 暁円 善兼 賢春 房頭  
 西室 堅者 尋盛 寛祐、

以上東大寺

興福寺堅者、浄恩房得業 中納言得業(浄名院止住、禅光院ノ親弟歟、)

中納言得業(松林院舍弟)、以上三人

所従下行物

五百文(徒僧)、三百文(大童子、装束アナタヨリキル)、三百文(力者二  
 人)、五十文(五郎丸)

康応元年(己巳)十二月十六日始行

講師(修南院)、探題(大乘院、松林院御代官歟、権別当、寺家(一乗院)、  
 初夜堅者(現信房、三百卅文捧物)、第二夜堅者(教家、大納言、合三百廿  
 文下行)、第三夜堅者(教俊、大納言、合四百三十文下行)

初夜精義実演已講、第二夜精義弁玄、第三夜精義実演

当年精義ノ事、実演ノ所存ハ題ヲエリテトリテ、一ケ夜勤仕スヘキ由被申  
 間、弁玄申ハ、実題ヲエラレハ弁玄ハ一ケ夜勤仕スヘシ、若弁玄、二ケ夜  
 勤仕セハ、題ヲハ弁玄エルヘシ、上首、題ヲエリテ一ケ夜勤仕ノ条ハ歎入  
 ル由ヲ出世御後見ニ申間、訴訟其謂アリトテ、此分ニ落居スル也、然ニ実  
 演題ヲエリテ法差別ト違三トヲ沙汰アル間、弁玄ハ第二夜有法自相ヲ一ケ  
 夜勤仕畢、

東大寺ノ堅者、重俊、弁融

三礼ハ末ノ已講ノ役ナル故ニ、去年・今年両年勤仕了、注記、寺務ニ案内  
 フ申、其後已講ノ方ヘ催ス時、

(12オ)

後戸ヨリ東ヘマワリテ礼盤ノソハヘヨル時、寺務モ床ヨリ立テ西ノ礼盤ノ  
 ソハヘヨリ給、礼盤上テ問時ニ三礼ヲスル、其後従儀師ヨリテ香ヲトリテ  
 勅使ニワタス、其間ハ礼盤ニ着座スル也、勅使ヘ香ヲ渡シテ後、礼盤ヨリ  
 オリテ立テ香ヲウクル也、其後礼盤ヘ上テ着座スル也、香引ハテ、後、綱  
 ソ金ヲ丁時、金ニアワセテ六礼ヲスル也、其後ヲリテ、如本後戸ヘマワリ  
 テ帰也、

明德二年(辛未)大会日記、三月廿四日ヨリ始行、

一、研学堅者辞退間、訓専(春善房得業) 加任ノ堅者研学ニナリテ、初夜ノ堅  
 義ヲ遂也、新義ト云々、

一、去年冬大会可有之由、沙汰之時ハ、堅者可有四人用意也、其時ハ実演律師・弁玄各二ヶ夜可勤仕之用意也、研学ハ弁玄第二夜、一乘院ノ御精義ハ実演律師、此分ハ治定也、其外ハ就題何仁ニテモ違三八実演、違四ハ弁玄可勤仕之由、実演約束スル也、而ニ違四ハ訓專加任ニテ用意スル間、弁玄可沙汰之處ニ、今年訓專、研学ニナル間、違三ヲ弁玄、精義役勤仕スヘキ由、雖承、兼日約束申上ハ難義ノ由申テ、実演二ヶ夜勤仕了、弁玄ハ研学ハカリ精義役勤仕了、

一、今年弁玄唄役ニアタル間、注記ニ相尋ル処ニ、精義役、唄役ヲ兼帶ノ事、イタクモ承及ハサル由申間、注記ノ返事ヲ以テ出世後見播磨僧都方ヘ申間、善兼筑前得業ニ唄役事被仰了、

一、一乘院堅問役事、今年ハ末寺勤仕了、

一、僧綱精義ハ、先々ハ夢見ニユカサル由承処ニ、探題大乘院、内々実演律師伺申処ニ、僧綱モ題ヲ可請由被仰之間、実演モ題ヲ請也、重役ノ分ハ、北戒壇院ニテ可請之由、出世奉行被仰也、

一、初学ノ研学、世俗捧物代六百五十文下行、此内五十文ハ已講加分、世俗ノ料ハ新義也、

一、一乘院捧物厚紙十帖・杉原五帖白キ(筋組)ニスチクミニテ、ユウナリ、得業ハ厚紙七帖、杉原紙三帖、緒皮ニテユウナリ、

(127)

一、第三夜堅者四百五十文、々々ハ已講加分、

一、講師東北院御方僧都御房非時供四百文、第六日下行(此内二百文ハ粥時分)、

一、当年御寺務御助成何モ半分ナルヘキ評定ナリ、雖然助律師訴詔之間、律師ハカリハ一貫文減シテ七貫文下行、堅者弁五師ハ八貫文皆下也、余人ハ一貫五百文、弁玄ハ二貫五百文、

一、別当坊捧物雜紙七束・厚紙五帖、帶ニテユウ、世俗百三十文、

一、本院威儀供八十五文、講師坊ニテ第七日請之、

一、堅者ノ題ニ付テ、北戒壇院ヨリ弁五師方ヘ、因明モ文三義二、内明モ文三義二ト取ル由被仰間、問題ヲツクリカヘテ被遣也、是モ一説歟、難治定、

一、略題ト云ハ、一ハ得タリ、一ハ略トモ云イ、又ハ、一ハ未判、一ハ略ナント云也、未判ト云ハ、一ハ得タリ、一ハ未判ト云也、ヒカ事ヲ申タラハ、略題ニラクヘシ、存知セサル事アリテ、ヒカ事マテハナクハ未判ニラクヘシ、

○以下ニ才途中まで、円範僧都日記引用。

円範僧都日記云、自文和元年十一月廿日被始行維摩会(去貞和四年之分、於此間堅者精義之事在之)

一、興福寺両院家堅儀之時、自当方可精之名僧、雖為凡僧(已講・擬講)、彼精義勤之、於久住者、必令昇進(僧綱)勤之、仍予此五六年之間、令昇進任律師、仍幸得折、其沙汰、為其沙汰為随分之光花者歟、

一、禅定院之五問十題、松林院法印為彼執筆之間、任先規内々可被出之由申送之處、則被出之(在別紙)、予勤維摩会之精義事、勘年紀及七ヶ年、尋度数為十七度、其間伺堅者之題、是始也、然是為堅者為潤色、全非為予之存知、此儀為先規之間、致此沙汰畢、

一、當堅者威儀供、於大乘院被行之間、四ヶ寺聴衆僧綱以下出仕之由風聞之間、不審之余、以使者相尋奉行因幡法眼（不知実名）、當注記之父之處、可有出仕、仍威儀供・捧物令用意之、但然就役人有違乱、不可

(13才)

出仕於威儀供・捧物者、可下行之云々、翌日俱請之畢、

以上、円範之日記之内処々少々書出之畢、

又云

一、別当坊非時供、當寺僧綱出仕耶否耶云々、不同、但先年覺聖法印為律師之時、為禪定院堅義之間、為精義令供奉彼會、其時予為擬講令供奉、勤三ヶ夜精義、其時參彼非時供畢、而彼仁當時不爾之由頻申之、比興也、但此条未審決之間、今度予尋遣因幡法眼之評<sup>(許)</sup>之處、可有出仕、則威儀供・捧物令用意之、然而就役人難義出来之間、可奉下行不可有出仕云々、仍不令參、翌日威儀供・捧物俱請之畢、為後代之記之、 以上円範日記

自応永元年十二月十六日被始行維摩會（貞治元年分）

初夜堅者了春房得業、同精義賢春（三川已講）、第二夜堅者禪定院、同精義弁玄、當寺々務東南院殿

一、弁玄精義役事、九月中旬比承之處、近日赤痢病ヲヤミアカリタル時分ナル

(病上)

間、辞退申ス、重テ誘承之間、領狀申畢、雖然病氣未散之間、不能稽古、得少減之時分、戒壇院ノ（天台宗）覺文房難去煩疏ヲ被所望之間、第一卷ヲ読畢、加様ニテ九月中馳過了、然十月一日ノ夜俄ニ病出ス、以外ナル間、

二日則精義役辞退申畢、御寺務御在京之間、出世後見京都へ被申、則被仰実演（助僧都）之處ニ、辞退申ス、重々御問答アリ、固辞退申間、御罪過マテ御問答アリ、然間、重テ十月十七日弁玄ニ被仰、随テ実演僧都、私ニ弁玄ニ可蒙恩之由、内々承間、十月十九日弁玄領狀申畢、仍実演ノ御罪科モ通畢、

一、学文事、大略目見也、両三度東院（光暁二位得業）ニ、名目等事ソラニ談

合申畢、

一、從僧二人、大童子二人（如木）、ワラツハキ一人、力者八人、從僧中間二人

（重直垂）

(13ウ)

大童子床子持二人（上下着也）、以円範僧都日記令用意畢、

一、香呂箱、居箱、草座、少納言殿蓮藏院ニテ借用、

一、三衣袋、香琳房律師ニ借用、

一、笠袋 但馬得業、西室殿ヨリ借用、此外ハ大略所持、鈍色・白裳新調畢、

一、出仕開白并第二夜精義時結願、以上三ヶ度

一、手輿 公方ノヲ借用畢、

一、堅者威儀供、貴勝之時ハ請之由、円範僧都日記在之間、今度注記ニ令申之處、被下行畢、雖僧綱貴勝之間、請ニ遣了、威儀供四百文、捧物雜紙（十束上品）、原紙（五帖）請之了、久住者ノ威儀供ヲハ、不請之也、

一、別当坊非時供四百三十五文請之、近年ハ僧綱不請之歟、是モ円範日記在之間、今度請之了、為後代記之、

一、講師坊并ニ本院威儀供不請之也、

一、別当坊非時供并禪定院威儀供、今度以僧綱例、良家被請之畢、

一、出仕事、正面ヨリ二番メノ間ニテ興ヨリ下由修南院被仰也、雖然今度ハ猶

東ヨリ下畢、夜アケテ十七日朝出仕間、松明ハトラス、

一、所従ハ悉ク増ノ下ニテワキヘマワル也、從僧モワキヘマワル也、壇ノ上ヘ

ハアカラス、

一、集会所事、西一番松林院正寺務、東一番北戒壇院權別当、西二番修南院（探題法印）、東

二番東門院（大僧都）西三番（弁玄律師）、東三番（勝願院律師）、西四番

（慈恩院律師）

如此コマトル也、然間、列ノ時モ弁玄西ヘ列ヲ引也、此分ハ三河已講早參

ノ時、注記ニ尋テ可給之由、誂申間、注記モ兼テ覚悟ナキ故、前後參着シ

テ申セトモ、ツイニハ此分ニ落居メカス也、此分ハ兼日修南院、円教断惑

談義ノタメニ二位得業、修南院ヘ同道ノ時、修南院被仰候分ト符合スル也、

然ニ会以前ニ審海僧都ニ尋申処ニ

（一ノオ）

彼云、小床ニハコトマル間、西ニ着ス、列ノ時ハ東大寺ハ東ナル故ニ東ヘ

ウツリタリト云々、是モ出仕ノ時注記ニ尋テ、注記申分ヲ沙汰スル也ト

云々、同注記也、会以前談合ノ時、如此被仰修南院ハ以前ノコトク、被仰

候間、不審ニテ三河已講シテ注記ニ相尋ル処ニ、修南院被仰コトク申也、

一、所従ハ皆後戸ヘ寄也、從僧二人ノ内一人ハ後戸ヘ寄テ列ノ間ニ道具等置也、

一人ハ列ニツレテ廻也、

一、三衣袋ハ居箱ニ入テ右ニ置也、香呂箱ヲハ左ニ置也、

一、開白ニハ行香畢テ寺務着座後、未ヨリ退出スル也、

一、結願ニハ門アケテ侍レト云時、未ヨリ退出スル也、

一、一床ハシヨヲ床ニテカク也、寺家權別当探題ハアマタ度物ヲカ、セ給也、

惣ハ一度也、

一、禪定院第三間法隆寺間申ス、

一、香琳房律師東院ヨリ借用スル三衣袋以外短間、不審申処ニ、僧綱ハ短カケ

レトモカ（堅結）タムスヒニテ居箱ニ入テ用也、長短ハ随意ト云々、

一、御短尺事、宗兼法印ニ申テ南戒壇院觀仙房得業方ヘ所望之處ニ、日数アリ

テ御短尺案ニ料紙ヲ添テ被送之間、コナタノ料紙ニテ写シテ、御料紙ヲハ

返進之、案ノ体比興也、（法具）ホウクノ裏ニカキテ、散々ニヲチ入ノ文字不見也、

以上応永元年（戊）分大概記之、

（二ノウ）

（あ）② 応永十一年より永享六年聴衆・堅義英覚日記？

応永十一年（甲申）十月廿六日維摩会始行

一、講師坊本院威儀供二百文、第二日（廿七日）講師坊ニテ請之了、

一、初夜堅者威儀供・捧物代六百文請之了、

一、講師坊威儀供二百文、第四日（廿九日）講師坊ニテ請之了、

一、講師坊粥土器代百文、第四日（廿九日）講師坊ニテ請之了、

一、第二夜堅義者（二乗院）威儀供代（六百文）、捧物（雜紙六十帖・杉原三帖）、

紙積ニツミテ染革ニテ結之、下行之請取ニ通ニ認め、各札紙ヲマキテ遣之<sup>(卷)</sup>了、

一、日供一ヶ夜代三百十文、第四日〈廿九日〉請之了、

一、日供一ヶ夜代三百十文、第五日〈卅日〉請之了、

一、日供一ヶ夜代三百十文、第六日〈十一月一日〉請之了、

一、<sup>大乘院</sup>別当坊非時供代百三十五文、第六日〈十一月一日〉会堂ニテ道忍〈中綱〉下行了、

一、別当坊捧物雜紙〈五束・厚紙三帖〉、衣帶ニテ結之臺ニツミテ、<sup>当威儀師也、</sup>福智院、

因幡寺主ノ所ニテ下行了、

一、日供〈一ヶ夜〉代三百十文〈十一月二日請之了〉、

一、日供〈五枚〉代七十七文〈十一月七日請之了〉、

以下從ノ下行物

三百文〈從僧一人、裝束袈裟・檜扇・ハキ物マデ此方用之也〉

百文 力者一人〈除裝束賃百文定〉、百文 藁ハキ一人〈除裝束賃百文定〉

二百文〈威儀供一荷、是ハ從ノ中ヘ下行、中間マテ四人シテ支配之〉

百文〈從方、会中ノ酒手悉皆分下行了、不依從多少、丁衆別百文ツ、出之也〉

応永十二年〈乙酉〉十月十日始行維摩会

(15才)

一、他寺探題権少僧都兼雅〈竹林院〉、然会始ノ僧綱ハ権大僧都良慶〈淨恩房、淨名院〉也、依為上首可着探題ノ上之处、正権別当之外、探題之上ニ不可

着之由、竹林院被申之間、藹次依為難義、開白ニハ探題之出仕無之、但探題出仕之時者、会始良慶僧都ハ、講問以後、探題御着座以前ニ退出畢、結願ニハ会始良慶僧都出仕無之、

一、第三夜寺分之堅者良祐〈覺乘房得業、菩薩溪柚木坊〉、精義者頼譽〈越後擬

講、東大寺北室〉、第三日以後之他寺之探題兼雅僧都〈竹林院、宿坊松室

ニテ夢見ト云々、仍精義者、頼譽〈越後擬講〉松室ニ參シテ夢見了、

一、第二日〈十一日〉、講師坊本院威儀供二百文、講師坊ニテ請之了、

一、第三日〈十二日〉、初夜堅者調鉢代六百文代請之了、

一、第四日〈十三日〉、第三夜堅者調鉢代四百文請之了、

一、第四日〈十三日〉、講師坊威儀供代二百文、講師坊ニテ請之了、

一、第四日〈十三日〉、講師坊粥土器百文、講師坊ニテ請之了、

一、第四日〈十三日〉、日供一ヶ夜〈米二斗・餅十枚〉、寄倉ニテ請之了、

一、第五日〈十四日〉、第三夜堅者調鉢代四百文請之了、

一、第五日〈十四日〉、別当坊非時供百三十五文、会堂ニテ中綱下行了、

一、第五日〈十四日〉、日供一ヶ夜代四百五十文、登大路ニテ請之了、

一、第六日〈十五日〉、日供一ヶ夜代四百五十文、登大路ニテ請之了、

一、第七日〈十六日〉、日供一ヶ夜〈米二斗・錢二百廿五文〉、寄倉ニテ請之了、

一、第七日〈十六日〉、別当坊捧物雜紙〈五束〉・厚紙〈三帖〉紙積ニ積テ、衣

帶ニテ結テ、因幡寺主ノ宿坊〈湯屋坊〉請之了、日記第五日〈十四日〉遣

請ニ之处、因幡寺主或ハ他行、或ハ指合トテ如此延引也、

一、大会以後〈十月廿日〉、日供〈五枚〉代百二十五文、登大路ニテ請之了、



一、大会以後〈十月廿二日〉、日供〈五枚〉代百二十五文、登大路ニテ請之了、  
(15ウ)

一、伏菟代百八十文、戊年五月十九日ヲケイノ会所殿ニテ請之了、ハタ／＼紛  
失之間、請取ニテ請イルナリ、

一、五百文〈坂田加供〉 応永十三〈丙戌〉 十月廿日請之了、

応永十三〈丙戌〉 十月十三日始行、〈応安七年分ト云々〉

一、第三日〈廿五日〉、初夜堅者調鉢代六百文請之了、

一、第四日〈廿六日〉、第二夜堅者調鉢代六百文請之了、

一、第四日〈廿六日〉、日供一ヶ夜〈米四斗〉請之了、

一、第四日〈廿六日〉、伏菟三ヶ夜請之了、

一、第四日〈廿六日〉、講師坊威儀供〈二百文〉、同本院威儀供〈二百文〉、同粥  
土器代〈百文〉請之了、

一、第五日〈廿七日〉、日供一ヶ夜〈米四斗〉請之了、

一、第五日〈廿七日〉、別当坊非時供代〈百卅五文〉請之了、

一、第五日〈廿七日〉、伏菟〈二ヶ夜〉請之了、

一、第六日〈廿八日〉、日供一ヶ夜〈米三斗四升・餅三枚〉請之了、

一、第六日〈廿八日〉、伏菟一ヶ夜請之了、

一、第六日〈廿八日〉、上供養〈一升、寺升程ノ物ト云々〉、ナスヒツケ〈五  
請之了、

一、第六日〈廿八日〉、日供〈一ヶ夜代五百文〉請之了、

一、第六日〈廿八日〉、別当坊捧物代〈二百文〉請之了、  
一、第七日〈廿九日〉、蔓草大根代〈合百五十二文〉、芋<sup>イモ</sup>〈四升〉請之了、

一、第七日〈廿九日〉、日供半ヶ夜〈代二百五十文〉請之了、

一、十一月二四日、ハタ／＼ノ請物百十七文請之了、

一、五百文〈坂田加供〉 応永十四年〈丁亥〉 十二月十四日請之了、

(16オ)

〈ヤキ石ノ代丁衆別二十文ツ、請之了、惣中之下行了、〉

応永十四年〈丁亥〉 十二月十六日始行〈北山殿十九日御下向、会堂内正  
面ヨリ東向ノ床ニ着御講問一  
座御丁聞畢、此時ハ二三ノ床モ  
散花ニ廻了、〉

一、第三日〈十八日〉、初夜堅者調鉢代六百文請之了、

一、第三日〈十八日〉、講師坊威儀供六百文并本院威儀供二百文請之了、

一、第三日〈十八日〉、八室粥土器代百文、講師坊ニテ請取了、〈本ノ日記ニ講  
師坊ノ粥土器代之物敷、〉

一、第三日〈十八日〉、日供一ヶ夜代五百五十文請之了、

一、第四日〈十九日〉、第二夜堅者威儀供・捧物代四百文請之了、

一、第四日〈十九日〉、日供一ヶ夜〈四升〉請之了、

一、第四日〈十九日〉、菜<sup>ナ</sup>・大根等代〈百七十六文ハタ／＼ニテ〉請之了、〈四  
ヶ夜分、

一、第五日〈廿日〉、日供一ヶ夜代五百五十文請之了、

西南院

一、第六日〈廿一日〉、別当坊捧物代五百文請之了、超過于前々畢、

一、第六日〈廿一日〉、別当坊非時代百三十五文〈公文ノ中綱〉会堂ニテ下行了、

一、第六日〈廿一日〉、日供一ヶ夜〈餅十枚・米二斗〉請之了、

一、第七日〈廿二日〉、日供半夜〈米二斗〉請之了、

一、十二月廿七日、日供五枚〈餅三枚・米四斗〉請之了、

一、五百文〈坂田加供〉 応永十五年〈戊子〉十二月十四日請之了、

応永十五年〈戊子〉十二月十六日始行〈永和二年分云々〉、廿文ヤキ石

ノ代鎔取了、

一、第三日〈十八日〉、初夜堅者調鉢代六百文請之了、

一、第四日〈十九日〉、第二夜堅者調鉢代四百文請之了、

(16ウ)

一、第四日〈十九日〉、日供一ヶ夜〈代八百文〉請之了、

一、第四日〈十九日〉、講師坊威供・本院威儀供・講師坊八室粥土器、合五百文請之了、

一、第五日〈廿日〉、第三日堅義者〈興禪院〉調鉢代四百文請之了、

一、第五日〈廿日〉、第三夜〈法隆寺分〉堅義者〈蓮花院〉調鉢代四百文請之了、

一、第五日〈廿日〉、別当坊非時代百三十文、会堂中綱下行、

一、第六日〈廿一日〉、日供一ヶ夜〈代二百文、米三斗〉請之了、但余衣米二斗

并代四百文云々、

一、第五日〈廿日〉、日供一ヶ夜〈現餅十枚〉代四百文請之了、

一、第七日〈廿二日〉、別当坊捧物代二百文請之了、〈前々ヨリ遅引ノ間、及嗽

訴下行了、

一、第七日〈廿二日〉、蔓草・大根・芋代、合百七十六文〈四ヶ夜分云々、ハタ

〈ニテ〉請之了、

一、第六日〈廿一日〉、油三合ハタノ請之了、并炭・薪請之了、

一、第六日〈廿一日〉、上供米一升請之了、

一、第六日〈廿一日〉、下餅供飯請之了、

一、第七日〈廿二日〉、日供一ヶ夜〈現餅七枚代五百文〉請之了、

一、同廿七日 日供十枚代四百文請之了、

一、応永十六〈巳丑〉十二月八日、坂田加供〈五百文〉請之了、

藁三十五把〈代二百十文〉、大根十把半〈代八十四文〉

芋一升〈十合定代六十文〉、〈但代付ハ可依年敷、是ハ子歳他寺ノ代付云々、但ツイニ令未進了、

一、応永十五〈戊子〉十二月十六日始行之維摩会ニハ、権別当無会参也、所以

者何、政所一乘院権大僧都良兼、権政所松林院僧正実雅、正権相對スレハ

一乘院ハ一座、松林院ハ第二座也、官途相對スレハ松林院ハ上<sup>カミ</sup>〈僧正故也〉、

(17オ)

一乘院ハ下〈僧都故也〉、然間御座席依為難義出仕無之、爰一乘院仰注記

云、権政所雖無出仕、会参ノ儀ニ用テ交名ニ入申、下行物等、可送進云々、

雖然松林院全ク不可有其儀、下行物等不可請取之由、被仰之間、下行物不

送進、無力之次第也云々、仍当年ハ権政所ハ無会参也、

応永廿年〈癸巳〉十二月八日始行、

一、第三日〈廿日〉、本院威儀供代二百文、講師坊ニテ請之了、

一、第三日〈廿日〉、初夜堅者調鉢代六百文請之了、

一、第三日〈廿日〉、百三十文〈十四ヶ夜、二十把ノ代〉、三十二文〈大根四把

代〉、廿四文〈芋四斗代〉、伏菟〈二ヶ夜〉

一、第三日〈廿日〉、百文講師坊八宝粥土器代

一、第四日〈廿一日〉、初夜堅者〈禪定院〉厚紙〈九帖〉、紙ツミニ積テ、帶ニ

テ結之、世俗代四百文、

一、第五日〈廿二日〉、四百文、第三夜威儀供・捧物、

一、第五日〈廿二日〉、百三十五文別当坊非時供、二百文別当坊捧物

一、第六日〈廿三日〉、百三十五文、菜・大根・芋・伏菟、二ヶ夜

一、第四日〈廿一日〉、日供四斗〈一ヶ夜分〉

一、第五日〈廿二日〉、日供五百文〈一ヶ夜分〉

一、第四日〈廿一日〉、二百文講師坊威儀供

去年分

一、応永廿一〈甲午〉十二月十七日日供一ヶ夜〈三斗、百二十五文〉請之了、

一、応永廿二〈乙未〉十二月十二日坂田莊ノ加供四百文請之了、

以上

一、坂田莊加供不足之由、専寺丁衆ヨリ被申送之間、重テ百文下行畢、〈請取ニ

テ請之〉、自今以後口別五百文ニ令治定云々、

一、日供半夜分二百五十文請之了、

一、応永廿二〈乙未〉十二月十八日、先日専寺丁衆方へ牒送之處、嚴密ニ下知

之間、如此云々、

(ニウ)

応永廿二年〈乙未〉十二月十日始行

一、十一日、六貫六百六十四文、〈新袈裟、但新已講分也〉

一、十一日、一貫五百文

以上、東大寺ニテ請之了、

一、第三日〈十四日〉 六百五十文初夜堅者調鉢代請之了、

一、第三日 二百文講師坊威儀供請之了、

一、第三日 二百文本院威儀供請之了、

一、第三日 百文八室粥土器代請之了

北戒旦院

一、第四日 〈十五日〉 六百五十文第二日 堅者調鉢代請之了、

一、第四日 日供一ヶ夜〈現米〉請之了、

一、第四日 百七十六文ハタ／＼ニテ請之了、

一、第四日 油三合五タハタ／＼ニテ請之了、

南戒旦院

一、第五日 〈十六日〉 四百五十文第三日 堅者調鉢代請之了、

一、第五日 日供一ヶ夜〈現米〉請之了、

一、第五日 百三十五文別当坊非時供請之了、

一、第五日 百四十二文ハタ／＼ニテ請之了、

一、第七日 〈十八日〉 二百文別当坊捧物代請之了、

〈當年御無沙汰之間、依及噉訴下行了、仍如此遅々畢〉

- 一、第七日 日供一ヶ夜〈餅十枚、錢二百五十文〉請之了、
- 一、会以後〈十二月廿五日歟〉 日供半夜二百五十文請之了、
- 一、応永廿三〈丙申〉二月八日 日供十枚代百廿五文請之了、
- 一、同年十月十一日 去年大会之坂田莊ノ加供五百文請之了、  
〈当年大会十月十日始行也、禪定院御講師也、延年ハ無之也、〉

(18才)

応永廿九年〈壬寅〉十月十日大会始行、

- 一、初夜堅者〈勸修坊〉 調鉢代六百文請之了、〈十二日〉
- 一、本院威儀供〈講師坊ニテ下行〉 二百文請之了、〈十二日〉
- 一、粥時代〈講師坊ニテ下行〉 百文請之了、〈十二日〉半分下行ト札在之、
- 一、第二夜堅者〈侍従得業〉 調鉢代四百文請之了、〈十三日〉
- 一、講師坊威儀供 二百文請之了、〈十三日〉
- 一、日供一ヶ夜 四斗請之了、〈十三日〉
- 一、第三日堅者 調鉢代四百文請之了、〈十四日〉
- 一、別当坊捧物 二百請之了、〈十四日〉
- 一、第三夜堅者〈識禪々々々〉 調鉢代四百文請之了、〈十四日〉
- 一、別当坊非時供 百三十五文請之了、〈十四日〉
- 一、万草・芋・大根代 百七十六文請之了、〈十四日〉
- 一、日供一ヶ夜 四斗請之了、〈十四日〉
- 一、日供一ヶ夜 四斗請之了、〈十五日〉
- 一、上供養 一升請之了、〈十五日〉

- 一、下供養 飯請之了、〈十五日〉
- 一、油 五斗請之了、〈十二日〉
- 一、万草・芋・大根代 百三十五請之了、〈十五日〉
- 一、日供一ヶ夜 米二斗、残式百五十文請之了、〈十六日依抑留会参訴詔畢、〉
- 一、伏兔二ヶ夜 会以後〈十九日〉元興寺塔東ノ中綱ノ処ニテ請之了、

(18ウ)

応永三十年〈癸卯〉十月十日ヨリ始行、

- 一、六百文 初夜堅者〈慶忍房得業〉 十二日請之了、
- 一、四百文 第二夜堅者〈少輔々々〉 十三日請之了、
- 一、五百文 坂田庄加供〈去年分〉  
ツノホリ 角堀ニテ請之了、
- 一、二百文 本院威儀供 講師坊ニテ下行了、十三日
- 一、二百文 講師坊威儀供 講師坊ニテ下行了、十三日
- 一、百文 粥土器代 講師坊ニテ下行了、半分定歟、〈十三日〉
- 一、四斗 日供一ヶ夜〈十三日〉
- 一、百三十五文 別当坊非時供〈十四日〉 会出ニテ勾当下行了、
- 一、四斗 日供一ヶ夜〈十四日〉
- 一、二百文 別当坊捧物〈十四日〉 西院ニテ下行了、
- 一、一合 油請之了、〈十四日〉
- 一、三百十四文 ハタ／＼色々下行了、〈大根・イモ・万草等〉十五日
- 一、四斗 日供一ヶ夜請之了、〈十五日〉
- 一、伏兔 二ヶ夜請之了、〈十五日〉

- 一、伏兔 一ヶ夜請之了、〈十六日〉
- 一、四斗 日供一ヶ夜請之了、〈十六日〉

応永三十一年〈甲辰〉十月十日

(19才)

- 一、坂田加供五百文〈去年分〉 下行、〈十一日〉
- 一、初夜堅者〈長専房得業〉 六百文下行、〈十二日〉
- 一、本院威儀供〈講師坊〉 二百文下行、〈十二日〉
- 一、講師坊威儀供 二百文下行、〈十三日〉
- 一、講師坊土器代 百文下行、〈十三日〉
- 一、日供一ヶ夜 四斗十三日下行、
- 一、油二合斗 十三日下行、
- 一、第二夜堅者〈中将々々〉 四百文下行了、〈十三日〉
- 一、第三夜堅者〈春息房々々、光林院〉 六百文下行了〈十四日〉
- 一、第三夜堅者 四百文下行了、〈十四日〉
- 一、炭柴少々 二条ニテ請之了、〈十四日〉
- 一、日供一ヶ夜 三百六十文下行了、〈十五日〉
- 一、別当坊捧物 二百文下行、〈十五日〉
- 一、万草・芋・大根等代 三百十四文下行、〈十六日〉
- 一、伏兔一ヶ夜 十六日下行了、
- 一、茄ツケ七 十六日下行了、

- 一、上供養 一升六合ハカリ〈云々〉
- 一、下供養 七合ハカリ、

一、日供一ヶ夜〈百八十文二斗〉 十六日下行了、

以上

(19ウ)

去年冬比去年大会日供半ヶ夜之分、他寺ヲハ難下行、於当寺並末寺三綱不下行間、東大寺方丁衆中並御寺務へ申テ、抑留結願、令訴詔之間、十六日夜九打時、半ヶ夜宛下行、仍後夜時分結願了、於藥師寺丁衆者、未下分請云々、三綱並法隆寺モ定而請歟、

会以後半ヶ夜ハカリ請了、

応永三十二年十一月十日始行、

- 一、五百文 坂田加供〈去年分〉 十一日請之了、
- 一、六百文 初夜堅者〈学春房々々〉 十二日請之了、
- 一、雑紙六束〈上二・中四〉・杉原三帖、結皮二文、第二夜堅者〈一乗院殿〉 十三日請之、
- 一、日供一ヶ夜四斗〈十三日〉
- 一、本院威儀供二百文〈講師坊、十三日〉
- 一、日供一ヶ夜下行了、〈十四日〉
- 一、第三日〈輔々々〉 堅者四百文下行〈十四日〉
- 一、第三夜〈定覚房々々〉 堅者四百文下行了、〈同日〉

一、第五夜〈東室々々〉 堅者八百文下行了、〈同日〉

一、炭・タキ、 二条ニテ請之了、〈同日〉

一、下供養一升ハカリ、 下行了、

一、講師坊威儀供 二百文〈十五日〉下行、

一、講師坊粥土器代百文〈十五日〉下行、

一、別当坊非時供百三十五文〈十五日〉下行、

(20才)

一、ハタ／＼芳草・大根代 三百十四文下行了、〈十五日〉

一、日供一ヶ夜 四斗 十四日下行了、

一、別当坊捧物 二百文下行了、〈十六日〉

聴衆用意

法服〈裳〉、青甲、鈍色〈裳〉、表袴二具、大帷二具、檜扇二具、襪

〈二足〉、白五帖二具、念珠二具、布タヒ、イトハリ、ハナカミ、茱、鼻

荒、帶三、從僧ハラツハキ、香呂、衣袴、カリキヌ、タ、ミモトユイ、

ワランツ、唐櫃、筵、枕、トノヨ物、紙色々、松、外居、米袋、足駄二

足、尻切、ウラナシ〈從僧用之〉、茶、ワン、ヲシキ、ハシ、スシウ、カ

ミソリ、ト、布袈裟、白帷、湯帷、硯、シトツ、<sup>(尿筒)</sup>、白米、茶子、唐笠、ツ、

ミ、布切、油、トウシミ、小刀、ユワウ、講問堅問論義、炭、酒、酒土器、

手ノコイ、<sup>(拭)</sup>、去年ノ坂田ノ札、

丁衆從下行三百文從僧、百文力者、百文ワラツハキ、

二百文威儀供一口、從僧・力者・ワツハキ・中間一人、四人配分

之、

百文酒手四人中下行了、

合八百文、

鑑取ニ式拾文下行了、

(20ウ)

応永三十四年〈丁未〉十月十日ヨリ、宿坊莊公院、

講師一乘院、探題大乘院同寺務、東大寺堅者經兼

〈寺務方ハカリノ送物被召了、探題方ヲハ一円二不進、就中御尋モナシ、同探題ノ棚ヲモ、然間進セントス云々、〉

初夜堅者〈実禅房々々〉 六百文下行了、〈十一日〉

第二夜堅者〈北院〉 六百文下行了、〈十二日〉

本院威儀供〈講師坊〉 二百文〈十二日〉

講師坊土器代〈講師坊〉 百文〈十三日〉

講師坊捧物〈講師坊〉 六百文〈十三日〉

日供一ヶ夜 四斗〈十三日〉

第三日堅者〈宗信房々々〉 四百文〈十四日〉

第三夜堅者〈識忍房々々〉 四百文〈十四日〉

日供一ヶ夜 四斗〈十四日〉

油物 一ヶ夜〈十四日〉

別当非時供

ハタ／＼諸下行物 百卅二文〈十五日〉、会堂ニテ自中綱方請之了、三百十四文、十五日下行了、

油物 二ヶ夜〈十六日〉請了、

日供一ヶ夜

四斗請了之、

日供一ヶ夜

五百文請了之、

日供五枚

一斗、十月廿二日豊後判官宿所ニテ請了之、

(31才)

正長元年〈戊申〉自十二月廿日始行、

寺務兼他寺探題一乘院送物、如去年寺務方斗、堅者賢惠大法師

〈東大寺三論宗〉

初夜堅者〈舜学坊〉

六百文〈廿二日請了之〉、

第二夜堅者〈仏地院禪師〉

四百文〈廿三日請了之〉、

坂田加供〈去年分〉

五百文〈廿三日請了之〉、

本院威儀供

二百文〈廿三日請了之〉、講師坊ニテ請了之、

日供一ヶ夜

四斗〈廿三日請了之〉、

油物二ヶ夜

〈廿三日〉請了之、

講師坊非時供

二百文〈廿四日〉、講師坊ニテ請了之、

講師坊土器代

百文〈廿四日〉、講師坊ニテ請了之、

別当坊捧物

二百文〈廿五日〉、北御所ニテ請了之、

日供一ヶ夜

四斗〈廿四日〉下行了、

油物一ヶ夜

〈廿四日〉下行了、

万草・大根代

三百八文〈廿五日〉下行了、

日供一ヶ夜

四斗〈廿五日〉下行了、

別当非時供百

三十二文〈廿六日〉下行了、

日供一ヶ夜

四百文ニテ〈廿六日〉下行了、

永享三年〈亥〉十月廿三日ヨリ始行、

講師喜多院、専寺探題大乘院、他寺探題知足坊、

西院

会始忍観房律師、勅使甘露寺、東大寺堅者弁範〈法自相〉

(31ウ)

初夜堅者堯善房得業〈成光院〉

六百文

第二夜堅者大藏卿々々〈恵心坊〉

四百文

第三日堅者順堯房々々〈発心院〉

四百文

第三日堅者良文房々々〈浄ルリ院〉

四百文

坂田加供堅者分〈去年分〉

二貫八百文〈五石六斗分堅者五人〉

講師坊捧物并威儀供

二百文

本院威儀供〈講師坊ニテ請了之〉

二百文

講師坊土器代

百文

別当非時供

百三十二文

日供一ヶ夜

四斗〈定用長合二ハ四斗八升四合延在之〉

日供一ヶ夜

四斗

油物二ヶ夜

万草等代

百七十六文〈四ヶ夜分歟、本ノ日記如此書付了、〉

日供一ヶ夜

五百文〈廿九日下行了、〉

別当坊捧物

二百文

万草等代 百三十八文（三ヶ夜分敷、）

油物一ヶ夜

油四人中へ一合ハカリ下行在之、

炭四人分会所目代二条ニテ請之了、

油物一ヶ夜塔本ニテ会以後請之了、

以上

(22才)

永享六年（甲寅）十二月六日大会始行（応永元年<sup>（ママ）</sup>至今今年、七百七十八年）、

寺家大乘院、探題西院（念観房僧都）、会始喜多院、勅使甘露寺、当寺堅者

尊勝院（法差別）

学生供一貫五百文

新ヶサ式貫文

六百文初夜（良明々々、金光院）

四百文第二夜（修南院）

四百文第三日（善定房々々、安養院）

四百文第三夜（湯屋坊長見房）

一貫文第四夜（安養院、尊勝院）

五百文講師坊三色

百七十六文万草・大根代

二百文別当坊捧物

百文別当坊非時供

百四十二文万草・大根代

二百廿五文日供半ヶ夜

五百文坂田加供（去年分）

四斗 日供一ヶ夜

四斗 日供一ヶ夜

二斗 日供半ヶ夜

合八貫百四十六文、米一石二斗

○「享徳二（癸酉）十二月十八日始行、」より丁未「帥得業経真」までは、24

丁途中と重複する。誤写と判断し省略する。

(22ウ)

一、二字書様 杉原二枚重テ卷テ其上ニ札紙ヲ卷ナリ、不用立紙包、名字与年

号、其間ハ六七行隔ヘシ、名字時又取墨色、

傳灯大法師位英覚

永享六年十二月 日

一、請書々様事、紙二枚引重書之、立紙捻之、或者折之云々、表書無之、

謹領

請書一紙

右、自今月六日、被始行維摩会聴衆、謹領如件、

永享六年十二月六日（始日書之、或其日書之、） 大法師英覚

請取其案文

謹請 維摩会別当坊捧物事

合

右、謹所請之状、如件、

永享六年十二月其日 東大寺聴衆大法師英覚（判）

謹請 維摩会別当坊非時供事

合

右、謹所請之状如件、

年号 月 日 東大寺聴衆大法師英覚（判）

(23才)



已上二枚引重テ立紙在之、折之云々、

請 維摩会講師坊威儀供事、

合

右、東大寺聴衆大法師英覚分、所請之状如件、

年号 月 日 請使力善(判)

請 維摩会講師坊粥時事

合

右、東大寺聴衆大法師英覚分、所請之状如件、

年号 月 日 請使力善(判)

請 維摩会本院威儀供事

合

右、東大寺聴衆大法師英覚分、所請之状如件、

年号 月 日 請使力善(判)

已上講師坊ニテ下行在之、紙一枚ツ、書之、

請 維摩会初夜堅義者威儀供・捧物事、

合

右、東大寺聴衆大法師英覚分、所請之状如件、

年号 月 日 請使松丸(判)

(23ウ)

第二夜・第三日等准之、

但両御所堅義之時者、謹請書之、立紙在之、

請 坂田莊加供米事

合

右、東大寺聴衆大法師英覚分、所請之状如件、

年号 月 日 請使松丸(判)

此坂田加供米ハ初年ニハ不請之、次年請之也、

請 維摩会日供之事、

合 壺ヶ夜者

右、東大寺聴衆大法師英覚分、所請之状如件、

年号 月 日 請使松丸(判)

(あ③永享九年より享徳二年聴衆・堅義經真日記)

永享九年〔巳〕十二月廿日始行

講師別当東門院、他寺探題喜多院、会始知足院

東大寺堅者西室〔公願〕、宿坊興西院

自門・他門・自寺・他寺・末寺等悉参威儀了、

丁衆八口 幸重擬講、伯耆擬講清薫、盛賢、英覚、聡海、延超、英乗、

尊勝院持宝〔帰丁衆〕

(24才)

宝徳元年〔己巳〕十一月十日始行

講師初夜研学専信房得業光胤、精義盛賢擬講

享徳元年〔壬申〕十一月十日始行

講師竹林院、他寺探題〈安養院〉、初夜研学〈法身院〉、第二夜〈大乘院〉、第三夜〈東院〉、当寺堅者西室〈公恵〉、経真得業

享徳二年〈癸酉〉十二月十八日始行、

講師一乗院、延年有之、

一、他寺探題寺務兼帯、但於精義役者、寺務御無沙汰間、第四夜精義琳舜房擬講永秀、第五夜精義專信房擬講光胤沙汰之、何モ問上也、第四夜堅者快春得業、第五夜堅者英覚得業

一、大乘院四床御出仕有之、第五夜堅問役〈五問〉御勤仕之、

○才途中からの重複部分により補う。  
「経真日記写之、」

〔あ〕享徳三年より文明十六年聴衆・精義延宮日記

同三年〈甲戌〉十二月廿日始行、

講師大乘院、探題一乗院、第四夜堅者聡海得業、

第五夜普門院秀雅、宿坊東室悦酒〈在之〉、

新精義 新精義 婦丁衆 同

丁衆八口 英真擬講、経真擬講、快春、英覚、澄春、賢祐、盛海、延宮、

康正二年〈丙子〉十二月廿日始行、

講師東院、探題大乘院、第四夜堅者澄春、第五夜堅者重誉、

新精義 同 婦丁衆 同

丁衆八口 経真擬講、英覚擬講、聡海、普門院秀雅、賢憲、延宮、盛宗

(24才)

長祿二年〈戊寅〉十二月廿日始行、

講師初夜研学興基得業、精義聡海擬講

寺分堅者薬師寺堯観房得業長乗、精義澄春擬講、当寺堅者、

寛正五年〈甲申〉十一月十日始行、

講師東北院任円、延年在之、別当東院兼円、

初夜研学顕舜房、精義澄春擬講、当寺堅者 盛海、延宮、

精義東院

文明二年〈庚寅〉十一月十八日始行、〈応永十四年分云々〉、

講師大納言律師尊誉、探題西南院光淳〈兼精義〉、初夜研学兼実〈長勝房〉、

精義延宮擬講、寺分寛専〈春円房〉、精義盛海擬講

同五年〈癸巳〉十二月十八日始行、

講師、初夜研学字延房得業興弘、

第四夜東大寺東室光任、精義東北院任円、于時堅・精兄弟

同七年〈乙未〉十二月十五日始行、〈応永十六年分〉

講師大乘院、初夜研学堯光房得業実乗、精義延宮擬講

第二夜北院空覚、精義東室光任、第三日加任淳快〈少輔得業〉、精義同、

西大寺分

(25才)

第三夜源賢房得業〈宮尊、題違四〉、精義延宮擬講

大安寺分

当寺堅者 英祐得業、澄延得業

一、東南院門主、就寺領押妨之御沙汰共在之、仍去年寺門一同追出了、其刻聖宝五師子如意、隨身而御遂電云々、今度雖及種々計略、流事不成、自一乗

院御經藏清範ノ如意取出所持云々、

一、探題箱出時、雨降事、自往古無之、申伝也、然今度初夜研学之時、大雨下間、笠指懸了、

文明十六年〔甲辰〕十二月廿日始行、

講師喜多院空寛、別当、

初夜研学、精義東大寺英祐法印

第二夜松林院、精義同

第三日長教房得業〔訓英〕、精義興福寺宮尊擬講

第三夜慈恩院、精義興福寺興憲擬講

当寺堅者 英澄得業、円盛得業

一、当寺精義役可有沙汰之体、禅識房法印英祐一人在之、初夜・第二夜兩夜沙汰也、於寺分加任之精義者、専寺之擬講兩人被沙汰了、俱以問上也、

一、別当非時供者、江州鯉江莊・犬上莊之役也、一乱中不知行之、同捧物者、播州吉殿莊役也、是又山名方流違乱、不及是非之儀間、不可有下行之、然先年〔文明二年歟〕、俱以下行也、事於被寄一乱中条、無其謂趣申達致訴詔了、仍終百文充被下行了、 延芸日記写之、

(25 ㄥ)

(い)⑤長享二年より享祿二年聴衆・堅義・精義英憲日記

長享二年〔戊申〕十二月十日始行、

講師陽專房律師興憲、寺務専寺探題大乘院、他寺探題喜多院空寛、

初夜研学長勤房、精義円盛擬講、寺分舜行房興胤、精義同、  
当寺堅者、延芸得業、順円得業、

延徳三年〔辛亥〕十二月十六日始行、

講師慈恩院、探題陽專房興憲、初夜研学専房〔尊舜〕、

精義延芸擬講、第二夜兼繼得業〔東院禅師〕、精義順円房擬講

寺分実英、同当寺堅者秀海得業一人、

一、当寺堅者調鉢代少々下行之処、悪銭巨多在之、百文仁卅文計也、大方興福寺掟法、於布施料物者、令精撰規模処、今度之調鉢悪銭繁多之条、為未曾有之次第故、自興福寺内者方、及一寺之沙汰由、被申送間、則相殘分調鉢代、致精撰曳之了、當時之恥辱、後代之嘲哂也、為後車乍憚注之、

明応五年〔丙辰〕十二月十六日始行、

講師東院禅師、初夜研学善了房、精義秀海擬講、

第二夜一乘院新門主〔良意〕

此精義役事、可為僧綱之仁由、兼日被催畢、当寺別当未補之間、為惣寺評定、禅識房法印可有勤仕由被申、雖為老体応命被勤仕了、予随従法印坊渡宿坊、一床出仕之次第日記別認之、題法差別〔勝々伝〕、

(26 ㄠ)

加任堅者兼祐、精義延芸擬講、寺分堅者北戒壇院、精義同

東大寺堅者英経得業一人、

一、当寺聴衆事、別当未補之間、為惣寺評定、自上首次第二可被渡〔但随意〕、

於後年者、除当会参衆、自次座可渡旨、一決了、別当未補之定也、  
禪職房法印英祐、延芸擬講、秀海擬講、秀恵得業、良範得業、  
英定得業、宗順得業、実儼得業、顛円得業、以上九人、

明応七年〔戊午〕十二月十五日始行、

講師長教房律師訓英、別当北院空寛、他寺探題東院禪師、尊勝願院僧都、  
初夜研学堯善房得業、精義英経擬講、第二夜西南院、精義秀海僧都、  
加任行学房得業、精義英経、寺分修南院禪師、精義秀海僧都、  
当寺堅者実儼一人

一、一乘院〔良意〕四床御出仕有之、開白者、諸衆皆参之時、専他之聴衆参向  
申畢、無比類御行粧也、其後別当北院出仕、専他又参向申、第五夜堅者〔東  
大寺〕五間役御勤仕之、至第六日朝座一床御出仕官位者、正僧都・少僧都  
云々、結座御出仕如開白、但一床御出仕也、

新精義

当寺聴衆 秀海権少僧都、英経擬講、顛円得業、長儼得業、  
重祐得業、延理得業、英順得業、経助得業、英憲得業、

以上九口

依別当普門院御点会義申了、

(267)

請物事

二百文本院威儀供、二百文講師坊威儀供、百文講師坊粥土器代、以上講師  
坊請之、

二百文別当坊威儀供捧物代、百卅五文別当坊非時供、以上別当坊請之、

六百文初夜研学調鉢代、五百文第二夜堅者調鉢代、  
四百文寺分堅者調鉢代、四百文加任堅者調鉢代、六百文東大寺堅者調鉢代、  
二貫文新袈裟方助成、於当寺下行、日供米六斗、餅十枚、伏菟十、曲五、

下行物事

廿文鎚取焼石代、三百文從僧、百文力者、百文藁ハキ、  
三百文酒直、所従三人・中間一人、合四人半分而取之、  
八百四十文宿坊雜事、坊布施一貫文、樽代三百文、院司給三百文、〔以上五  
人出之、各八百四十文ツ〕、

於宿坊愛染院記之、大法師英憲、

○38ウより移す。誤写による。

永正三年十二月十日始行、

講師東北院、探題大乘院、他寺探題光明院、  
初夜研学弘賀〔惣珠院学明房得業〕、精義英訓擬講、  
加任覺乘房得業、精義快恵擬講、  
寺分性恩房得業泰淳、精義英訓々々

当寺堅者深乘房快憲一人、精義探題光明院

聴衆寺次第

切口 新精義

同

公意擬講、英訓擬講、快恵擬講、実憲得業、

新得業分

同

同

頼賢得業、秀覚得業、実紹得業、宗芸得業、以上、

永正八年〔辛未〕十二月十六日始行

講師一乘院〈良意〉、寺務專寺探題修南院光慶僧正、

他寺探題長教房權大僧都訓英〈妙徳院〉、初夜研学慶宗房得業重尋、精義

秀海法印、第二夜孝縁得業〈東門院〉、精義秀海法印、加任快乘得業、精義

乘弘擬講〈專寺〉、寺分光明院、精義宗宣擬講〈同〉、

大安寺分

此兩堅者精義事、当寺無人之間、專寺之擬講兩人被沙汰了、

当寺堅者兩人、長懺得業〈法自相〉、英海得業〈有法差別〉、

(27才)

聴衆九口 秀海法印、延理得業、英順得業、信祐得業、延海々々、

英憲々々、信賢々々、盛重々々、春芸々々

当寺丁衆別当未補之間、自上衆次第仁、可被渡、但康慶得業者、近年在田舎〈在伊賀国〉一向寺住無之間、除之、現住衆可被渡之由、評定事切訖、

然康慶得業雖有愁所子細、既為集儀被定上者、不可有異反旨被申遣了、

#### 請物事

二百文本院威儀供〈第二日請之〉、六百人講師坊威儀供、百人〈会勾当粥時〉、以上講師坊請之、

二百文別当坊威儀供、百人別当坊非時供、以上別当修南院請之、

六百人初夜研学調鉢代、五百文第二夜堅物調鉢代、四百文加任堅者々々、

四百文寺分堅者、六百人第四夜長明々々、六百人第五夜英海々々、

二貫文新袈裟方助成、於当寺下行、日供米四斗、伏菟、曲、

#### 下行物事

廿文鎰取焼石代、從所下如先年、

#### 宿坊札事

一貫文坊布施、三百文樽代宿坊遣之、宿坊衣上下一度酒盛也、

宿坊衆五人、各七百廿文ツ、出了、於愛染院記之、大法師英憲、

一、五師子如意、今度当坊へ依有不慮子細入御目、当坊他寺へ渡了、

(27ウ)

永正十二年〈乙亥〉十二月十六日始行

予為国衙目代防州へ下向了、今度会式仁不供奉、意根多之、(恨)

講師西南院〈円深〉、他寺探題一乘院〈良意〉

初夜研学專忍房、精義者英海擬講、第二夜研学東北院禪師、精義長懺擬講、

民部卿得業〈違四〉、精義長懺々々、法身院懷春〈違四〉、精義英海擬講

当寺堅者 英順得業一人

聴衆 長般、英海、浄憲、公意、快惠、英訓、実憲、

頼賢、寺次第仁会参了、

永正十五年十二月十六日始行

講師吉祥院宗宣、專寺探題別当一乘院、他寺探題西南院円深、

初夜研学春実房宗快、第二夜研学大乘院經尋

此兩堅者精義役事、秀海法印用意之、則移宿坊、開白問者役沙汰之、然初

夜堅者既登高座刻、俄発病不能出仕而当寺仁帰住畢、言語道断、未曾有次

第也、堅者登高座之間、三時計云々、此間二精義役事、興善院快乘用意之、

因内無滞被遂其節畢、秀海之恥辱忽露、快乘之名譽満巷訖、於第二夜精義

役者、權別当東院僧正沙汰之、

当寺堅者 予（題有法差別、日記別認之、春芸兩人、

（28才）

聴衆 延海、信賢、淨憲、英訓、頼賢、英嚴、宗助、

別当尊勝院御点会參了、

永正十七年十二月十日始行了、

講師東門院（孝円）、専寺探題別当東院、他寺探題吉祥院（宗宣）、

初夜研学大聖院慶家、精義春芸擬講、第二夜松林院貞雅、精義 予、

加任東林院尊俊、精義 予、寺分北院空実、精義 予、三ヶ夜精義被為勤  
仕了、

当寺堅者 経賢、公意兩人、

兩人堅義十六日夜重会沙汰之、於公意悦酒者、覚悟相違之間、遂業之

次日十七日沙汰之、新儀以外事も、

#### 請物事

二百文本院威儀供、二百文講師坊威儀供、百文講師坊粥土器、以上講師坊  
請之畢、

二百文別当坊威儀供・捧物代、百文非時供代、

此威儀供・捧物代事、近年無下行由、被仰出、至第七日迄下行無之、仍及  
愁訴間、旧記勘之、可申入旨被申、則每度下行、旧記注之進之、及晚下行  
了、

精義 同

聴衆 英憲、春芸、淨憲、快恵、英訓、頼賢、英嚴、宗助、

以上、依寺家尊勝院御点、參勤了、

春芸一人、五大院宿防、余七人口莊嚴院宿坊、

白米長器二斗四升宛也、雜用料坊布施等四百九十五文宛支配之、

（28ウ）

所從下行如先年、酒直者二百文出之、四人配分之、

一、大乘院経尋四床御出仕之、先年如一乘院御出仕之、

#### 調鉢代事

五十文ハ擬講加分

六百五十文初夜堅者、五百五十文第二夜堅者、四百五十文（加任）、

東大寺

四百五十文寺分、六百卅文第四夜堅者、六百三十文第五夜堅者、

於莊嚴院記之、擬講英憲

一、大乘院（堅者方送物、如權政所二貫文進上之、

永正十八（改元大永元）十二月十八日始行了、

講師大乘院（経尋）、専寺探題別当東院、他寺探題東門院（孝円）、

初夜研学舜禪房（吉祥院住）、精義公意擬講、第二夜東院禪師、精義 予、

此精義役事、雖為信賢擬講新精義、所詮不堪之上、故障之由、依種々託

事被申之、予勤仕之、但於学侶助成新精義分者、信賢拝領之、予者為平

聴衆出仕之、

当寺堅者淨憲、快恵

#### 請物事

二百文本院威儀供、四百文講師坊威儀供、百文粥時、二百文別当坊威儀供・  
捧物代、百文非時供、日供二斗、六百五十文初夜調鉢代、五百五十文第二

調鉢代、六百三十文東大寺第四夜快惠、七百三十文第五夜淨憲、宿坊雜事了、六百五十二文宛出之了、

(29才)

愛染院衆、予、信賢、賴賢、宗助、以上

窪軫經院衆 公意擬講、英訓、実憲、英嚴、

此度聴衆等次第参勤了、去永正十二年参勤衆次座英嚴ヨリ始、次宗助〔成業分最下藹〕上首仁立帰、英憲、信賢、公意、英訓、実憲、賴賢迄会参了、

大永二年十二月十六日始行

講師光明院、探題大乘院經尋〔専他兼帶〕、初夜研学、

精義淨憲擬講、第四夜堅者東大寺英訓、精義探題、

請物事

二百文本院威儀供、二百文講師坊威儀供、百文同粥土器、以上講師坊、

百文別当坊非時供、於別当坊東室請之、

二百文別当坊捧物代事、播州吉殿莊役也、當時依山名方違乱、莊務無之由、

為給主成身院被申条、不可有下行旨、被仰出之間、去文明十六年依山名方

違乱不可有下行由、雖被仰出、堅堅愁訴之刻、下行畢之、以来每度下行無

紛由、以旧記而申入畢、雖然何仁不可有下行由、被仰出之間、第五夜出仕

止及愁訴刻、從当講以兩使被仰可被弁出由、則百文宛下行了、此半減事者、

不可成已後例由、御出狀間、属無為出仕了、

日供三斗、初夜調鉢代六百五十文、第四夜調鉢代六百三十文、

宿坊愛染院雜事料六百三文出之了、白米二斗三升宛、

(29ウ)

聴衆事、別当未補之間、以寺次第相催畢、去年会参衆切口英嚴、新得業

円儼、宗助、又上首二立帰、英憲擬講、信賢擬講、新精義淨憲擬講、婦丁衆快惠擬講、

新得業故室分英秀得業、以上

○以下、永正三年十二度記事がある。26ウへ移す。誤写による。

享祿二年〔丑〕十二月十二日始行

講師東林院〔尊俊〕、別当東門院、専寺探題、他寺探題東北院、

初夜研学順文房得業玄懷、精義快憲擬講、

第二夜研学一乘院覺譽、

(30才)

御精義役事、任先例可為僧綱仁之旨、被触給間、〔予〕勤仕之、

爰以東院僧正〔兼繼〕内儀、被仰談間、就法自相、仏弟子相對伝加難

勢云々、先門跡〔良意〕御堅義之時、先師英祐法印精義役被勤仕之、

今度〔予〕勤精義役可謂奇異也、所從以下如先年用意之、

出仕次第

先力者兩人〔取松明〕、次大童子二人〔取松明〕、次從僧二人、

次手興〔前力者三人、後力者一人〕、次道具持、次唐笠持、次又童子

二人、以上

加任堅者 定忍房得業盛尊、精義英訓擬講、

寺分堅者 宮内卿得業好潤、精義快憲擬講、

東大寺堅者一人 英嚴得業、精義東北院、

一、初夜堅者捧物代四百文、以送文、折紙相副被送之、加任・寺分兩堅者同之、

東大寺堅者六百三十文、被送之、加階制之敷、<sup>(副)</sup>

一、一乘院捧物代六百文、以送文被送之、平聽衆五百文下行之間、威儀供敷、捧物敷由、尋申処、悉皆此分返答之間、專寺聽衆へ背先規旨、牒送之處、於東室唱集會、抑留結願了、仍門跡坊人可為請乞出狀旨雖被申、依無承引、東院僧正御請乞間、屬無為結願事訖、

(30ウ)

十九日、於東院家相殘分下行了、

平聽衆 威儀供五百文、捧物代四百六十文、

擬講分 威儀供五百文、捧物代五百三十文、

一床出仕〈予〉捧物代六百文、威儀供五百文、

先年增長院御遂業時御支配旨如此、今度写旧記、專寺聽衆集會所へ遣之、以此旨、於東院家被下行了、

一、別当坊威儀供・捧物事、領地不納之間、不可有下行旨雖被申出、堅愁訴之間、如先規下行畢、

一、三礼役末擬講役云々、今度快憲擬講勤之、注記相訛時床ヲ下、經後門到正面、別当見合登礼盤、三礼 行香時礼盤下西礼盤之前へ移、別当者東礼盤前へ居替、此ハ勅使ノ行香ヲ東ヨリ次第ニ為受之云々、行香畢、如元居替上礼盤後、六礼有之、每度打磬、其後如前回後門着本座、六位三礼卜御定也云々、東院僧正仰旨如此、以此趣快憲擬講授之畢、

一、当寺聽衆

英憲法印、英訓擬講、快憲擬講、英秀得業、実憲得業、頼賢々々、春祐々々、証芸々々、宗助々々、以上

(裏表紙見返し・裏表紙) ○白紙



## 二 維摩会日記（東大寺図書館一四二一四六六号）

（表紙ウワ書）

享徳二年（癸酉）十二月十八日より始行

維摩会日記（堅者英覚）

（異筆）  
「英祐」

（表紙見返）○白紙

（1才）

維摩会第五夜堅者英覚

享徳二年（癸酉）十二月十八日より始行、

探題（北院）

以略儀等事（義名等）、一円ワヒ申サレ畢、然間、付宛ニテ、同十五日可参申由、被仰出間、十五日（未ノサカリ）程ニ被出了、快春得業両堅者同道アリ、出世奉行（侍従得業云々）、則義名等事、状ニテ承間、返事状ニテ被申畢、彼ノ快春ナント一コ  
ンノ儀モ無之、

一、生料威儀供和市定事、

（1ウ）

一、十一月、自十四日夜三ヶ夜後夜入堂アリ、天氣殊吉、両堅者同道、三ヶ夜トモニ春日并興福寺々中被参候畢、

北院 此内五百文増分 丁衆方

政所（三貫文）

權政所（二貫五百文、此内五百文加増分）

尊教院祐弘 四百六十文

四百六十文

浄忍房律師（此内百文増分）

竹林院律師（此内百文増分）

以上一床 合六貫四百廿三文

興福寺

永秀 此内百文増分 驒弘

琳舜房擬講 七百卅文 勤觀房擬講 同 專信房擬講 同 識春房得業 長尊 七百元

長英 善弘 順覺房得業 七百元 良仙房々々 同 帥得業 同 轉法院泰承

光舜 琳清 順春房五師 同 仙玄房得業 同 勤專房々々 同 訓清

盛円 宗秀 盛恩房々々 同 延恩房五師 同 觀縁専房得業 同 増秀

（2才）

祐盛 俊深 舜顯房々々 同 松真房々々 同 良舜房々々 同 善英

好栄 乗清 松学房々々 同 学識房々々 同 懷夷 禪堯房々々 同

東院ヶ 四百卅文 六百七十文此内百文増分 散花師長琳房 半源房五師 良実法師 同 大乘院 二貫五百文（此内五百文増分）

大納言擬講 同

東大寺

英真擬講 七百卅文 經真五師 〇百文 聡海得業 同

澄春得業 同 英豪々々 同 賢祐々々 同

盛海々々 同 延宮々々 同

已上合

藥師寺

堯觀房 長禪房

長乗得業 七百元 繼範得業 同

合二貫四百文

法隆寺

宮源房

榮秀得業〈七百文〉

三綱

七百卅文

七百文

威儀師

從儀師

從儀師

同

(3才)

合三十三貫二百七十九文

講師一乘院

他寺堅者一人

生料威儀供十八前

四貫九百八十九文〈六石四斗八升代、口別三斗六升ツ、十八前分、和市

百文別一斗三升ツ、

少威儀供十前

五百文〈チマキノ代〉

五百廿文 雜紙代廿六束分

合六貫十二文

已上請取ニテウクルナリ、

都合

(3ウ)

從方下行了、

〈長器ハ百文一斗二升ツ、寺升ハ一斗六斗ツ、

從僧二人

百文〈チン〉

(賃)

六十文 厚紙三帖代

八十文

米一斗〈長器代〉

合□百四十三文ツ、

二人 合四百八十六文

中童子二人

三百文〈クツシタウツノ代〉

二百文

(檀紙) 帶代

廿五文〈間人布代〉

五十文〈□代〉

六十文〈米一斗代寺升定〉

合六百卅七文ツ、

二人

合一貫二百七十四文

大童子四人

百文〈チン〉

四十文〈コウシニ帖代〉

六十文〈米一斗代寺升定〉、

合二百三十三文ツ、

四人

合八百十二文

力者六人

(4才)

五十文〈チン〉

八十文〈米一斗代長器〉、合百卅二文ツ、

六人

合七百九十五文

又童子四人〈百五十文ツ、

四人

合六百二文

百五十文〈カラ笠持一人〉

百七十七文〈ワランチャヤ

百文〈床木持一人〉

百文〈松持一人〉

合五百卅文

装束師方

六百文〈ミ入チン六具〉

四十文〈コウシニ帖代〉

八十文〈米一斗代長器〉

合七百廿三文

経営方日記、委細別日記在之、

(4ウ)

○英覚追記

「一、享徳三年〔甲戌〕十二月廿日ヨリ維摩会始行、

堅者〔聡海得業、廿三日 宿坊ノ酒アリ、廿四日昼豎儀ナリ、  
西転経院 東室

普門院禪師、廿四日宿坊ノ酒アリ、同夜堅義アリ、

講師大乘院

探題一乗院

ニトメ 新精義

精義者英真擬講・経真擬講 二人、

当寺丁衆八口帰丁衆 同

快春・英覚・澄春・賢祐・盛海・延宮、已上六人

維摩会

一、康正二年〔丙子〕十二月廿日ヨリ始行、

堅者二人〔澄春、二諦坊 宿坊 重誉、西発志院〕  
見菓子一人俱無之、

講師東院

ニト目 新精義

精義者経真擬講・英覚擬講

当寺丁衆八口帰丁衆 同

聡海・普門院禪師・賢憲・延宮・亮信・盛宗

探題大乘院、澄春堅義〔廿四日申之時計、出仕アリ、〕

重誉〔廿五日午時計、出仕アリ、〕

(5才)

(異筆1)

「文明七〔未〕十二月十五日ヨリ始行、

当寺立者〔英祐・澄延〕二人、十九日夜兩人俱ニ立義致之、」

(異筆2、英祐筆か)

「一、文明十七年、自十二月廿日始行、堅者〔英澄・円盛〕

講師北院、探題〔大乘院・元 〔冷?〕院〕

当寺精義英祐法印、権大僧都〔初夜、松林院第二夜、二ヶ夜〕  
新

久無始行間、日中近而不遂、帰丁衆而精義 事何処、他寺之評定而、不可  
(如脱カ)

有子細由被申之間、一座ニ出仕了、

(以下余白)

(5ウ、裏表紙見返し・裏表紙) ○白紙

## 三 維摩会記（東大寺図書館一四二・四六五号）

（表紙ウワ書）

寛正五年（甲申）十一月十日

維摩会記

大法師英澄

（表紙見返し）○白紙

（1才）

記 寛正五年（甲申）十一月十日、維摩会始行、英澄尊勝院別當時渡了、年形

〈形廿六、年四十一、住シテ出分、実ニハ四十五年也、〉

一、講師 東北寅禪師御房 講問役ニケ夜勤之、〈第六日朝夕、空帰在之、〉

一、堅問役ニケ夜、五問（光明院殿第二夜、大乘院大納言得業第三夜）

一、探題東院殿十日夢見ニ参、出世奉行多聞院、公卿之間ニテ出世奉行ヨリ請

義之、無御対面也、

一、開白初夜半時ニ始マル、探題御出仕之時、集会所ヨリヲリテ参向ス、御ト

ヲリノ後、丁衆ノ末ヲリ本所ニ登帰ル也、

（1ウ）

東ノ廻廊ヲ廻ル連也、正面ニテモ東ヨリヲ越テ。《堂内》入ル、ウシロヘ

廻、四ノ床ニ着ス、シハシシテ惣礼アリ、同時ニ三礼ス、講問以下終テハ

西ノ戸エ出テ帰也、〈四十丁衆ノ最末ニテアルナリ、〉

一、御請之御請事様（ニト重ニ書テ立紙アリ、カイトリニ菓子風晴ニテ酒ヲタフ、

謹領

請書一紙（但丁衆ノ請書ノ御請ナラハ、聴衆者ト可書也、）

右、自今月十日被始行維摩会堅義、謹領如件、

寛正五年十月十日 大法師英澄

一、講師坊威儀供事一枚ニ書テ立紙之、

（2才）

請 維摩会講師坊威儀供事

合

右、東大寺聴衆大法師英澄所請如件、

寛正五年十一月十一日 請使（花押）

此時二百文下行、

一、名積 二字トモ云、書様ハ一重ニ礼紙アリ、《タテ紙ニハセス、合三枚

伝燈大法師位英澄

二行ニ如此書也、紙一枚ノ内ホトライハ可計、

二行ノ間ハ五六行アクル也、

寛正五年十一月十日 二行ノ間ハ五六行アクル也、

（2ウ）

一、従共ニ下行事

従僧ハ三百文、力者百文（草鞋穿）ワラウツハキ百文、以上

一、威儀供二百文ニテ、従僧五十、力者五十、ワラウツハキ五十、中間五十、

合式百文ニテ四人ニ下行スル、近年ノシツケナリ、仍従僧ハコレマテ合三

百五十文ニアタル（此外落着卅文、熟調ナレハ卅文不出、）

一、僧綱以上八月夜ナレトモ松明ヲトホス、平聴衆八月夜ニハトホサス、クラ

キ夜ハトホスヘシ、(提灯)チヤウチンノ事ナリ、

一、ヤケ石代トテ廿文、鑑トリ方へ下行、

(3才)

一、講師坊威儀供 二百文

講師方ニテ下行、

本院威儀供 二百文

頭舞房初夜堅者引物 六百文

光明院第二夜堅者 五百文

第三日堅者曳物 覚忍房 四百文

日供一ヶ夜(四斗、十三日下行)

第二日堅者曳物 四百文

伏菟曲、一ヶ夜、十三日下行、

大乗院大納言御子 十四日下行、

第三日夜堅者曳物 四百文

日供代ニテ(四百文下行、十五日、)

非時供百文(別当坊ヨリ、)

日供、四斗、十六日

伏菟曲二ヶ夜

粥土器佰文、十六日

六百文按察得業、堅者

六百文藏延五師、堅者

(3ウ)

一貫五百文学生供皆下

二貫文新袈裟助成

以上八貫四百文歟、

一、宿坊へ礼事

一貫文 酒一斗 カキ一盞 白壁一合

近年ノ儀如此、仍当甲申莊嚴院此分遣了、

一、今年(甲申)宿坊ニテ雜用一貫七十文算用了、

一、二百文雜事方粉骨分ニタフ、賢阿ミ沙汰スルナリ、(人別五十文ツ、出合ナ

リ)

(4才)

○追記、英経筆カ

長享二年(戊辰)十二月十日始行、始而丁衆《英経》出仕、

初而夕座講問役勤之、

六百文 初夜堅義者長嚴房 精義円盛

。莊嚴院宿坊阿弥陀院口入、

明王院同宿也、(戊申)十二月十一日

英経問役、重役アリ、一ハ英定  
アツラユル

(4ウ、5、7、裏表紙見返し、裏表紙)○白紙

四 維摩会遂業日記（東大寺図書館一四二・四六七号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

○原表紙が欠損している。

（1才）

維摩会遂業日記

一、加行事

四日、曳之、出入者可撰之、於坊中五辛魚肉可禁之、旧記云、百日入堂云々、祈師堂方へ可申之、加行中諸講問無所作出仕之、但觀音講已下第二重計講問ヲハ講師・問者可勸其役、至当月ハ諸講問会合等可為停止之、後夜入堂三ヶ夜、此内一ヶ夜春日社・氷室・金堂・講堂・南円堂・子守・神岡・龍藏（参詣）

（1ウ）

或日記云、三ヶ夜共春日社参詣云々、仍随意歟、今度者一ヶ夜参詣申畢、厚紙袋白二升宛入之、数三用意之、初日持参、大仏殿堂童子給之、八幡・春日（御師相尋渡之、御幣載之、）

一、和市定事

旧記二ハ、生料威儀供和市定者、兼日ニ承仕方へ遣使者云々、今度者、自承仕方以折紙相尋問、其返事ニ定日申遣畢、時和市相尋覚悟之

（2才）

生料威儀供 合十八膳 口別三斗六升宛

合六石四斗八升 一乘院長合定

代六貫五百卅七文 和市一斗宛

小威儀供十膳 粽代口別五十文宛

合五百五文

雜紙（廿六束代、五百十九文）

都合七貫五百六十一文

以上、宿坊へ以請取状來時下行之、

今度承仕一藹四室良善來、生料威儀供者、

（2ウ）

一乘院長合由申聞處、承仕方日記モ同前云々、仍当和市八升五合宛相定長合ニ延テ一斗宛申定畢、則良善自筆勘合注文別在之、

酒一献勸之、毛立一種、菓子（<sup>縁高</sup>フチタカ）用意之、引出物兩人百文宛紙裏

給之、修學者勸盃出合、

一、此生料威儀供十八膳内、鑑取方へ四聖支配之云々、此儀ニ混乱而、今度自堅者直ニ給由、鑑取頻愁訴畢、雖然自堅者方直ニ下行物一向無之由、加回答落居訖、

（3才）

一、義名事

以略義可致出仕由、兼日ニ以内儀探題へ可伺申、又拝礼事、任近年例可預御免旨、同可申入之、

兼日義名催狀到來、其狀云、

明日維摩会堅義々名可令出給候由。西南院法印御房所候也、仍執達如件、

十二月十四日

尊俊〈奉〉

謹上 禅栄得業御房

(3ウ)

返事書様

明日可出維摩会堅義義名之由事、謹給候畢、早可存知候、某〈英憲〉恐惶

謹言、

十二月十四日

英憲〈請文〉

杉原一枚二書之礼紙用之、立紙上下捻之、

表書ハ無之、実名計也、英憲請文ト書之、

当日両堅者同道、重衣白五帖、羅箱蓋〈令持之〉、於中門出世奉行出合、先

二字渡之、次羅箱

(4才)

蓋ニ義名入之、直持之内へ入、着座、次探題出給、御着座之砌、礼節可為

之、次彼蓋義名入之、堅者直持参、探題御前ニ蹲踞シテ、以左右手、捧羅

箱蓋進之、探題義名ヲ御請取後、本座ニ着座、此時彼蓋大床へ差出之、次

探題義名ヲ披見後、聊礼節在之、内へ入御後、堅者座敷罷出、次於中門十

題ヲ出世奉行へ渡之退出了、

二字十題ヲハ堅者懷中而持之、二字ヲハ頭ニ取出渡之、十題ヲハ密ニ從袖

下渡之、

(4ウ)

二字書様

旧記云、杉原二枚重而書之、其上ニ礼紙ヲ卷之、不用立紙也、名字与年

号其間六七行可撰之、名字時、墨ヲ《磨スル歟》、<sup>(取)</sup>墨黒ニ書之云々、

伝灯大法師英憲

永正十五年十二月 日

義名書様

旧記云、杉原二枚重而書之、中ハ引卷テ不封不用、礼紙立紙卷之、不捻

押折也、書様ハ極信ニ一枚ニ

(5才)

広々書之云々、

注進 当年維摩会第四夜堅義所立義名事、

声聞賢聖義章〈若花嚴宗ナラハ斷惑義章〉

因明四種相違義

右、注進如件、

永正十五年十二月 日 堅義者英憲

十題書様

杉原一枚二書之、不用礼紙立紙也、先内明五題自一問

(5ウ)

至五問書之、次参行計撰テ、因明五題書之、問字無之、別ノ紙ヲ細ク切テ、

中ヨリ卷出テ、表ヲ封シテ封字書之、

章云、如地論説。文 五種相者、何等耶、

章云、問日何故。文 意何、  
 章云、鈍根所得。文 意何、  
 章云、地經論中。文 意何、  
 章云、燭頂二位。文 意何、

此間三行計撰之

(6才)

有法差別相違作法如何、  
 何名比重相違耶、

真能破軌微。耶

纂云。意何、

断云。意何、

以上

旧記云、維摩会因内題取様事、内明五題内三八文短冊、二八義短冊也、因  
 明同之。文、三義二也云々、

一、宿坊移事、

当寺并春日社参詣而、自其宿坊へ移由被申方

(6ウ)

在之、今度者、前日春日社参詣申、当日二八直二宿坊へ渡之了、修学者、  
 四五人并祈師同道、

一、御請々文事、

鑑取宿坊へ御請持来一献給之、《如威儀僧時、》蘿箱蓋用意之、修学者出合

御請々取之、又請文渡之、

請文案、杉原二枚重之書之、立紙捻之、或押折之、表書無之、

謹領

請書一紙

右、自今月十六日被始行維摩会堅義者、謹領如件、

永正十五年十二月廿日 大法師英憲

(7才)

一、出仕事、

初度案内諸從相催、第二度装束、第三度出仕、宿坊櫛ハ草鞋、路次ハ鼻高、

馬道棟下立、散花師廻後戸、後四床聴衆催時、經混廊登壇上、從僧・威儀

僧同登壇上、大童子ハ取松明、廻壇下、堅者先程左方、大童子二人者堅者

ヲ過シ威儀僧ノ前ヲ切テ西エ通ル、中童子已下、又童子同壇下ヲ廻ル、堅

者入自西戸、五床懸尻向南、從僧ハ堅者ノ前ニ北向ニ居ス、威儀僧從是退

散、中童子・大々々ハ石壇与鐘

(7ウ)

楼間ニ懸尻、於床子作テ輪居ス、以壇方為上首、次第二列居シテ立明ス、

探題参堂之時堅者可出西戸、小便等ノ用故実也、《中童子床子尻ヲハツス》、

此時履草鞋ヲ探題着座後入堂内、向東立、從僧如元堂内居、直勅使座後維

那師打磬《一丁》、於一床頭住位僧某登高座云テ、聊伺探題氣色、東へ歩寄

テ開短冊箱蓋、歸ル時堅者步行、二床頭ニテ互ニ摺テ左袖通ル也、至仏前



礼槃中心三礼（盤）（ヒチノヒサニツクホト）、次東工向テ奉礼大明神（一礼）、

次歩還至短冊箱ノ前ニ、檜扇ヲ納テ短冊

（8才）

箱ノ中ニ覆タル紙ヲ引上テ短冊ヲ探取之、可挟左大指俣ニ、因明皆挟之、次ノ俣ニ内因明題三帖、次俣ニ二帖挟之、次微音読之、自一向次第二短冊箱ノ両方ニ置之、東方因明、西方内明読畢、登高座草鞋ハ路次ニ脱之、五回訖如元退出、

一、捧物事（政所・権政所・探題三ヶ所へ捧物事、以生料可進上之由、兼日案内伺申之、）

一床分以送文遣之、

長櫃、蘿箱蓋 大童子一人（フタコ）・力者二人用意之、送文者、現紙員数也、別ニ折紙副之、生料員数ニ載

（8ウ）

之、対奉行所遣之、

一、寺家・権別当・探題捧物送文（但現紙数可替也、）

杉原二枚重書之、立紙上下捻之、或押折之、表書無之、

進上 第四夜堅者調鉢代事、

合紙一積（上積十五帖・下積三十五束、結緒帶二筋）

右、進上如件、

永正十五年十二月廿日 第四日堅者英憲

正権探題ハ進上、余ノ一床ハ奉送書之、

（9才）

現宝物事、

寺家（上積杉原五帖・厚紙十帖之内上六帖・中四帖）

下積雜紙卅五束（上五束・中十束・下十束） 結緒帶二筋（二丈二尺ツヽ）

権政所（上積杉原五帖・厚紙七帖之内上四帖・中三帖）

下積雜紙廿五束（上十三束・中八束・下四束） 帶二筋（九尺ツヽ）

探題（上積杉原三帖・厚紙七帖之内上四帖・中三帖）

下積雜紙廿束（上十束・中六束・下四束） 帶二筋（九尺ツヽ）

大僧都 厚紙十八帖之内（上五帖・中八帖・下五帖） 結緒皮二文

少僧都 十七帖之内（上五帖・中七帖・下五帖） 結緒皮二文

（9ウ）

律師 十五帖之内（上五帖・中六帖・下四帖） 結緒皮二文

擬講・威儀師 各十一帖之内（上三帖・中五帖・下三帖） 皮二文

成業・從儀師・注記 各十帖之内（上三帖・中四帖・下三帖）

散花師 九帖之内（上三帖・中四帖・下二帖）

結緒皮七十二筋 大枚二枚 代六百文云々、

紙積台八角 口広一尺五寸（タカハアリ） カワノ長一寸八分

（10才）

足高一寸二分

以上旧記

近年例以生料曳之、 当年同之、

政所〈貳貫五百文〉一乘院 權政所〈貳貫文〉東院

探題〈壹貫五百文〉西南院実禅房僧都〈五百廿文、当寺秀海法印闕如分〉

会始 善了房僧都〈四百九十文〉 已上一床分

擬講・威儀師〈六百卅文〉、成業・從儀師・注記〈六百文宛〉、

散花師〈五百七十文〉、 已上貳拾八貫百文

(10ウ)

一、威儀僧十五人、此内拝礼三人、奉取年預小綱〈百文下行之〉、

捧物貳百文宛、拝礼加五十文宛

奉唱維摩会第四夜豎義者威儀僧交名事、

深恩房 深乗房

、――、――

右、来十九日、於惣珠院辺可有御会合状如件、

永正十五年十二月 日

(11オ)

一、諸從方事、

從僧二人〈鈍色下重裳・表袴・轆・檜扇・鼻広用之、百文賃、六十文厚紙  
三帖代、百文米一斗代、当和市、合二百六十文宛

中童子二人〈装束公物在之、床子二敷皮二枚用意之、三百文沓轆代、二百  
文壇紙帶代、廿五文扇代、五十文餅代、百文米一斗代、合六  
百七十四文宛

大童子四人〈装束公物在之、百文賃、四十文厚紙二帖代、百文米一斗代、  
合貳百四十文宛

(11ウ)

力者三人〈装束二具公物在之、一具用意之、二人松明、一人ハ水瓶持之、  
五十文賃、百文米一斗代、合百五十文宛

又童子五人〈百五十文宛〉

唐笠持一人〈百五十文宛〉、床木持・松持二人〈百文宛〉

笠袋・筒用意之、

装束師方

六百文〈身入賃、六具分〉、四十文〈厚紙二帖代〉

(12オ)

百文〈米一斗代、当和市定〉

合七百四十文下行之、

一、觀禅院送物事、

毛立三〈居着如常〉、菓子ハ餅、クリ、慈仙ノ中ニ〈大和ヲシキ、クミツケ〉、

已上十八膳分

酒ハ荷樽〈片方〉、薪〈二束〉、鍋〈二〉、鉄輪〈二〉、杓〈二枝〉、銚子・鋤

一具、 已上、今度者唐院へ送之、

鍋已下ハ人ヲ付置後ニ、此方取置也、

(12ウ)

一、祈師 一貫文遣之、

当日召請之、於宿坊一献在之、

一、雑々用意物之事

松明之松〈百廿把入〉・白木十二荷〈此内三荷宿坊へ遣之、

フスへ木十二荷〈百廿束〉、此内三荷宿坊へ遣之、

柴卅三荷、此内三荷宿坊へ遣之、

箸三千膳入、<sup>(十)</sup>

米六石五斗〈十合定〉、餅米二石五斗〈十合定〉

(13才)

酒一石五斗〈助成樽・瓶子等〉、八斗買酒

二石〈当坊酒〉、合四石五斗、此内一石宿坊入、

一、雑々買物事

素麵〈三貫文〉、五百文〈府肉 五百廿文〉

霰〈五百文〉、慈仙十二箱、此内七箱助成〈百文ツ〉、

油一斗

(以下余白)

(裏表紙) ○白紙

五 維摩会日記（東大寺図書館一四二・四九三号）

（表紙ウワ書）

享祿二年（乙巳）十二月日

維摩会日記

英嚴

（表紙見返）

法印成果記之

（1才）

維摩会遂業日記（北林院之本写之、）

一、加行事、

四日曳之出入者可撰之、於坊中五辛魚肉可禁之、旧記云百日入堂云々、祈

師堂方へ可申之、

加行中諸講問無所作出仕之、但觀音講已下第二重斗、講問ヲハ講師問者可

勤其役、至当月者諸講問会合等可存停止之、

後夜入堂三ヶ夜、此内一ヶ夜、春日社・氷室・金堂・講堂・南円堂・子守・

神岡・龍藏参詣之、

（1ウ）

或日記云、三ヶ夜共春日社参詣云々、仍隨意敷、今度者一ヶ夜参詣申畢、

厚紙袋白二升宛入之、数三用意之（初日持参）、

大仏殿（堂童子）給之、八幡・春日（御師相尋渡之、御幣戴之、）

一、和市定事

旧記ニハ生料威儀供和市定者、兼日ニ承仕方へ遣使者云々、今度者自承仕方以折紙相尋問、其返事ニ定日申遣畢、

時和市相尋覺悟之、

（2才）

生料威儀供合十八膳 口別三斗六升宛

合六石四斗八升 一乘院長合定（八合五夕云々、）

代五貫四十六文 和市一斗一升宛（十合定）

小威儀供十膳 粽代口別五十文宛

合五百五十文

雜紙廿六束代 五百十九文

都合 六貫七十文

已上宿坊へ以請取状來時下行之、

今度承仕一藹円道・二藹舜円、生料威儀供者

（2ウ）

一乘院長合申聞處、承仕方日記モ因前云々、仍当和市（十合）一斗一升仁

相定、長合ニ延テ一斗三升宛申定畢、則承仕自筆勘合注文別書之、

酒一献勸之、毛立一種・菓子（フチタカ）用意之、引出物兩人百文宛紙裏

給之、修学者勸益出合、

一、此生料威儀供十八膳内鑑取方へ四膳支配之云々、此儀ニ混乱而、英憲堅者

之時直ニ給由、鑑取頻愁訴、

一、義名事

以略儀可致出仕由、兼日二以内儀探題へ可伺申、又

(3才)

■<sup>押</sup>礼事、任近年例可預御免旨同可申入也、

兼日義名催状到来、其状云、

明日維摩会堅義々名可令出給之由、

法印御房所候也、仍執達如件、

十二月九日

謹上 少納言五師御房

返事書様

明日可出維摩会堅義

義名之由事、謹承候畢、

(3ウ)

早可存知候、某〔英嚴〕恐惶謹言、

十二月九日 英嚴〔請文〕

杉原一枚二書之、礼紙用之、立紙上下捻之、

表書ハ無之、実名斗也、 英嚴〔請文〕書之、

当日両堅者同道、重衣・白五帖、蘿箱蓋令持之、於中門出世奉行出合、先

二字渡之、次蘿箱蓋ニ義名入之、直持之、内へ入着座、次探題出給御着座

之砌、礼節可為之、次彼蓋〔義名入之〕堅者直持参、探題御前ニ蹲踞シテ

以左右手捧蘿

(4才)

箱蓋進之、探題義名ヲ御請取後、本座ニ着座、此時彼蓋大床へ差出之、次

探題義名ヲ披見後、聊礼節在之、内へ入御後、堅者座敷罷出、次於中門十

題ヲ出世奉行へ渡之、退出畢、

二字十題ヲハ堅者懷中而持之、二字ヲハ頭ニ取出渡之、十題ヲ密ニ從袖下

渡之、

二字書様

旧記云、杉原二枚重而書之、其上ニ礼紙ヲ卷之、不用立紙也、名字与年号

其間六七行可隔之也、

(4ウ)

名字時墨ヲ取り、墨黒ニ書之云々、

伝燈大法師位英嚴

享祿貳年十二月九日

義名書様

旧記杉原二枚重而書之、中ハ引卷キ、不封不用礼紙、立紙卷之、不捻押折

也、書様極信ニ一枚広々書之云々、

注進当年維摩会第四夜堅義取立義名事、

断惑義章、着三論宗ナラハ声聞賢聖義章、

(5才)

因明四種相違義、

右注進如件、

享祿二年十二月九日 堅義者英嚴

十題書様

杉原一枚ニ書之、不用礼紙、立紙也、先内明五題自一問至五問書之、次三行斗隔テ、因明五題書之、問字無之、別ノ紙ヲ細切<sup>ホソク</sup>テ、中ヨリ卷出テ表ヲ封シテ、封字書之、

問被断裁如何、

章云、初即不墮二乘地故〈文〉意何、

(5ウ)

章云、於煩惱尚不能断、但能断状〈文〉意何、

章云、不異真如是、煩惱〈文〉意何、

頓被断裁如何、

此間三行斗隔之、

法差別相違作法如何、

何名比量相違耶、

疏云、翻九句中第八正因〈文〉意何、

纂云、論一切法不過二種〈文〉意何、

断云、亦有意許通言顯故〈文〉意何、

(6才)

已上、

旧記云、維摩会因内題取様事、内明五題内三文短冊、二ハ義短冊也、因明同之、文三義二也云々、

一、宿坊移事、

当寺并春日社参詣而自其宿坊へ移也、被申旨在之、今度者前日春日社参詣申、当日ニハ直ニ宿坊へ渡畢、修学者四・五人并祈師同道、  
一、御請々文事

鑑取宿坊へ御請持来、一献<sup>如威儀僧膳</sup>給之、蘿箱蓋用意之、

(6ウ)

修学者出欠御請請取之、又請文渡之、

請文案 杉原二枚重書之、立紙捻之、或押折之、表書無之、

謹領

請書一紙

右、自今月十二日被始行維摩会堅義者、謹領如件、

享祿二年十二月十六日 大法師英嚴

一、出仕事

初度案内諸徒相催、第二度〈装束〉、第三度出仕、

宿坊様ハ草履、路次鼻高、馬道棟下三、散華師廻後戸

(7才)

後、四床聴衆催時経混廊、登壇上、徒僧・威儀僧同登壇上、大童子ハ取松

明廻壇下、堅者先程左方、大童子二人者、堅者ヲ過シ威儀僧ノ前ヲ切テ西

エ通ル、中<sup>(童)</sup>子已下、又童子同壇下ヲ廻ル、堅者、入自西戸五床懸尻向南、

徒僧ハ堅者ノ前ニ向テ北居ス、威儀僧徒是退散、中堂子・大童子ハ石壇与

鐘楼間、懸尻於床木、作<sup>テ</sup>輪<sup>ニ</sup>居ス、以壇方為上首、次第二列居ス、立明ス、

探題参堂之時堅者可出西戸、小便等ノ用故実也、〈中童子参床木、尻ヲハ

ツス、〉此時履草履ヲ探題着座之後、入堂内、向東立〈從僧如元堂内居〉直

勅使座ノ後、維那師

(7ウ)

打啓〈二丁〉於一床頭、住位僧某登高座云テ、聊伺探題氣色東へ歩寄テ、

同短冊箱蓋歸ル時、堅者步行二床頭ニテ互ニ摺左袖通ル也、至仏前ニ礼盤

中心三礼ヘヒチ、ヒサニツクホト、次東へ向テ奉礼、大明神一礼、次歩

還至短冊箱ノ前ニ檜扇ヲ納テ、短冊箱ノ中ニ覆タル紙ヲ引上テ短冊ヲ探取

之、可挟左大指侯、因明皆挟之、次ノ侯ニ内明題三帖、次侯ニ二帖挟之、

次微音讀之、自一問次第二短冊重兩方ニ置之、東方因明、西方内明、読畢、

登高座ニ草鞋、路地ニ脱之、五問訖、如元退出、

(8オ)

一、捧物事〈政所・權政所・探題三ヶ所ハ、捧物事以生料可進上之由、兼日案

内伺申之、

一床分以送文遣之、

長櫃・蘿箱蓋 大童子一人〈フタコ〉力者二人用意、

送文者現紙員數也、別ニ折紙副之、生料員數裁之、對奉行所遣之、

一、寺家權別當探題捧物送之〈但現紙數可替也、〉

杉原二枚重云之、立紙上下捻之、或押折之、表書無之、

進上 第四夜堅者調鉢代事

合紙一積〈上積十五帖、下積三十五束、結緒帶二筋〉

(8ウ)

右、進上如件、

享祿二年十二月十六日 第四夜堅者英嚴

正・權探題進上、余ノ一床ハ奉送書之、

旧記云、

現宝物事

寺家〈上積杉原五帖、厚紙十帖之内、上六帖、中四帖〉下積雜紙卅五束

〈上十五束、中十束、下十束〉  
一丈二尺ツ、  
結緒帶二筋

權政所〈上積杉原五帖、厚紙七帖之内、上四帖、中三帖〉下積雜紙廿五束

〈上十三束、中八束、下四束〉  
九尺ツ、  
帶二筋

探題〈上積杉原三帖、厚紙七帖之内、上四帖、中三帖〉下積雜紙廿束〈上

十束、中六束、下四束〉  
九尺ツ、  
帶二筋

大僧都 厚紙十八帖之内〈上五帖、中八帖、下五帖〉、結緒彼二文<sup>(皮)</sup>

(9オ)

小僧都 十七帖之内〈上五帖、中七帖、下五帖〉、結緒彼二文

律師 十五帖之内〈上五帖、中六帖、下四帖〉、結緒彼二文

擬講・威儀師 各十一帖之内〈上三帖、中五帖、下三帖〉、皮二文

成業・從儀師・注記 各十帖之内〈上三帖、中四帖、下三帖〉

散華師 九帖之内〈上三帖、中四帖、下二帖〉

結緒皮七十二筋 大皮二枚〈代六百文〉

紙積台（八角口広一尺五寸（タカハカリ）足高一寸二分 カワノ長一寸八分

以上旧記、

近年例以生料曳之、当年同之、

（9ウ）

政所（参貫文、此内五百文加増分、東門院殿）

権政所（貳貫五百文、此内五百文加増、光明院殿）

探題（貳貫文、此内五百文加増分、東北院殿）

英憲法印（六百廿文、此内百文加増、此内百廿文ハ官位四度分、一床衆ハ

威儀供代無之、捧物四百文斗也、）

会始（五百六十文、此内百文増、修南院権律師） 已上一床分

擬講・威儀師（七百卅文宛、此内百文加増、）

成業・從儀師・注記（七百文宛、百文増分、）

散華師（六百七十文、加増定百文、）

一、威儀僧十五人（此内三人拝礼）奉取年預小綱（百文下行也、）

捧物 貳百文宛、拝礼加五十文宛、

奉唱 維摩会第四夜豎義者威儀僧交名事

（10オ）

兵部卿云、（今度者得業衆兩三人請之、）

右、来十六日於寿福院辺可有御会合状如件、

享祿二年十二月十四日、

一、諸従方事、

從僧二人（鈍色、下重、表袴、裳、襪、檜扇、鼻高、用意也、）

百文賃、六十文厚紙三帖代、七十七文米一斗代当和市、

各二百四十文、

中童子（装束公物在之）二百文檀紙、帶代廿文、扇代五十文、餅代米一斗

代七十七文

（10ウ）

合六百五十四文宛

大童子四人（装束公物在之、）

百文賃、四十文厚紙二帖代、七十七文米一斗代、合二百廿文宛、

力者三人（装束二具公物在之、一具用意也、二人ハ松明、一人ハ水瓶持之、）

五十文賃、七十七文米一斗代、合百卅文宛、

又童子五人百三十文宛、

唐傘持一人百五十文、床木持・松持二人（百文宛、）

傘袋 筒用意也、

装束御方

（11オ）

六百文身入賃、六具分、四十文厚紙二帖代、七十七文（米一斗代、当和市）

合七百廿文下行、

一、觀禪院送物事、

毛立三、居着（如常、）菓子ハ、餅・イリ慈仙、中ニクミツケ

已上十八膳



酒ハ荷樽〈竹方、薪二束、鍋二、鉄輪二、杓二枝〉  
銚子鋌一具 已上、

鍋已下ハ人ヲ付置渡之、此方へ取寄也、

一、祈師〈良慶大〉一貫文遣之、表神供、百文遣之、

(二ウ)

当日 招請也、於宿坊一献在之、

一、雑々用意物事

松明之松 百廿把、白木〈百束、木津助成、此外十二荷買之、

フスヘ木 二百五十束、

柴 五十荷〈三百束〉此外五十束杓木被助成、

炭 五荷 此外白木〈フスヘ木・柴三荷宛、宿坊へ直ニ運置之、

箸 五千膳 白箸四百膳

米 十石 餅米三石五斗

酒二石当坊用意之、五斗置之、二石助成ニクル、四石助成之樽卅八荷

合八石五斗

(12才)

一、素麵 三貫五百文

一、慈仙十三箱入慈仙<sup>イリ</sup>

一、府

一、霰

一、油一斗五升

一、酌十人 礼二百文宛遣之、

一、上下着 五人 礼百文宛遣之、

一、惣奉行、五百文遣之、

一、経営衆、百文宛遣之、

(12ウ)

一、鎌屋衆下部 五十文宛十人、諸衆

享祿貳年〈乙丑〉十二月十六日、遂大業訖、大概記之、

宿坊寿福院

今度会式從十二月十二日始行之、十六日ニ遂業畢、悦酒同之、

英嚴〈判〉

○伝領識語

「惣持院

英秀法印」

(13才)

床賦次第

一床〈南上首〉

政所〈東門院〉 g 權政所〈光明院〉

探題 東北院

法隆寺法印權大僧都 一乘院殿、精義

会始修南院

大安寺權律師

已上

二床〈北上首〉

成身院 学乘々々七百卅五文宛

奥芸擬講

興發志院 泰穩々々

法隆寺七百文宛此内百文加増之 定普得業

摩尼珠院

乘度房

常光院

政胤々々

連弘々々

英懷々々

香賢房 尊美房 舜禪房  
慶宗擬講 堯弘得業 光弘擬講

(13ウ)

良禪 慈明房  
定憲得業 公算々々 定弘々々  
一ヶ夜精義二度目 北小路  
英訓擬講 威儀師〈七百卅文〉

参床 〈南上〉

注記威儀師維那 二ヶ夜精義也  
快憲擬講

英秀得業 宗学 玄順々々 実憲々々

学守一 明王院 堯実一  
興算々々 曉胤々々 朝懷々々

良円 円禪五師 唄役  
英尊々々 興專々々 頼賢々々

四床 〈北上〉

兼有 花藏坊  
散華師〈六百七文〉 頼融得業 藥師寺  
経円々々

(14才)

春祐々々 宗助々々 隆芸々々

延命院 藥師寺 東院僧正御弟子  
胤弘々々 長胤々々 兼範々々

(14ウ・裏表紙見返し、裏表紙) ○白紙

六 維摩会豎義日記（東大寺図書館一四二・四七六号）

（表紙ウワ書）

天文十年十二月日

○興福寺

金藏院顯定房私記之、

維摩会豎義日記（奥仁栄觀房研学之豎義事少載之、）  
（長英）

（黒印）「南都東大寺北林院経蔵」

秀胤權律師

（表紙見返）○白紙

（1才）

①天文十年豎義興福寺堯範日記

天文十年（辛丑）維摩会執行

第三日加任豎義遂業畢、顯定房得業

堯範

一、拙者豎義之事、雖非其器之間、且雖有憚為結縁連々依有望内々窺申寺家之

御儀候処、被成御許可之間、則十一月六日加行始社參、大廻沙汰畢（如常）、

寺家權別当不及參賀（古日記通）

（1ウ）

一、装束之事 鈍色 白五帖 直垂着二人

走童（不召具） 近例通、旧記ニハ召具由在之、

於社頭捧弊頂戴、祈禱師神人出之、（十足遣之、）

一、加行始、一献儀式如形、其沙汰之由先達之說也、有無之儀異說也、於今度

者不及其沙汰者也、（私調雖有候、略之畢、）

一、東院兼範僧都當講御伝授（十月十九日）御心加行（同日）正加行（十一月三日）

一、初夜研学豎者定經（吉祥房得業）加行始（十一月朔日）

一、寺分豎者寛秀（長堯房得業）加行始（十一月八日）

（2才）

一、豎儀長者宣到来之間、加行始之日可給之旨、兼而從東院被仰聞之間、大廻

次而祇候拝領畢、

東院僧都兩門御師範（互）、當講殊一乘院殿出世奉行御存知也、東院僧都

兩門御師範、而大会毎々御指南也、然間、於彼院家長者宣給之畢、

長者宣 写

カウフテ  
被 長者宣ヲ イハク  
大法師堯範

可賜去応永卅三年分

（2ウ）

西大寺分豎義請之由、

ツカハスヘシ  
宜ク遣仰者 長者宣如此、

以此旨可令申入別当大僧正

御房請、仍執達如件、

天文十年九月廿六日 左中弁將

謹上 東院僧都御房

長者宣モ門跡寺家之御時者如此、又良家寺家時者相替別当直書敷、

（3才）

一、毎月入堂之様、七堂之様二旧記在之、瀧藏觀禪院一言主窪弁才天、随意之様敷、今度ハ瀧藏觀禪院略之、窪ヨリ一言主令參詣畢、

後夜入堂（如常）、木守漢国迄悉參詣畢、

一、後夜入堂修學者相證七度令參詣、准扨自身三ヶ夜其沙汰之由先達被申間、今度モ其通三ヶ度其沙汰畢、（近例之通敷、）中古五ヶ度沙汰之様二旧記在之、

一、短尺之事、精義者内々被申之間、認遣之畢、

（3ウ）

一問兩帖一卷認之、二問ヨリ五問（因内）マテ一卷認之、二卷ニ精義重マテ書之遣畢、

東院僧正御房へ尋申候処ニ、此通被仰之間、其通認畢、旧記因明一卷

ニ内明一卷ニ認之由在之、善行房擬講此通被申、雖然前東院僧正御房仰之旨 認置候条其マ、遣畢、自注記方以書狀被申候之間、則注進畢、

一、短尺問題初重答、自注記方以書狀被申之間、則注進畢、

（4才）

一、義名之事十二月十三日、他寺探題修南院殿出世奉行奉書到來畢、奉書ハ杉原立文之狀也、

明日（十四日）午貝定可令出維摩會豎義義名給之由、大安寺法印權大僧都御房所也、恐々謹言、

十二月十三日 光俊奉

謹上 顯定房得業御房

御請狀

明日（十四日）維摩會豎義義名可付進之由謹承

（4ウ）

候、可存其旨之由可預御披露候、恐々謹言、

十二月十三日

堯範

謹上 出世奉行御房

出世奉行禪師御房ニ而御渡候間、西座出世奉行御請狀ニハ可相替敷、無覺悟、臨期ニ可尋申様無之間、如古本認遣、不及申事、

一、義名參入將束、<sup>（装）</sup>本式法眼平袈裟、僮僕以下豎義如出仕、鄭重之儀式也、旧

記巨細也、不及隨

（5才）

近例以內儀參入之由申入者也、

重衣 白五帖 直垂着一人 走童一人

義名問題二字、羅箱蓋二入、走童持之、

一、義名認様 <sup>カイト</sup>強杉原（二枚）重書之、表卷其沙汰上下押打無礼紙、

一、義名書様之事、

註進

当年維摩會第三日西大寺豎義義名事、

（5ウ）

所立

唯識義一章

因明四種相違義一具

右注進如件、

天文十年十二月伝燈大法師堯範

一、同問題書様事、 カイタ紙一枚、

一、内明題五帖初書之、次少引離テ因明題五帖書之、問之自何モ不書之、

(6才)

二明之間、二行ハカリ置テ書之、問題ハ短尺様ニ書之、

捨監留純識重意如何、

金剛無間道中品無漏現行可薰仏果上品種子――

章云、成事唯俗行縁議故或亦通真自性滿故云々、

意何平等性智得名可通有情平等――

章云、識言惣顯一切有状各有八識云々、心何

一因違四比量作法如何、

(6ウ)

疏云、必無不定及与相違云々、意何、

疏云、如仏法言有識有満云々、意何、

纂云、即異喩中能立不遣云々、心何、

断云、理問論云、如是成立於有法云々、心何、

以上如此、強杉原一枚ニ書テ奥書無之、奥ヨリ押卷テ常ノ杉原一枚ニ  
ツ、ミ上下ヲ押折懷中云々、出世奉行へ渡時、上紙取之問題ヲイカニ

モ信ニ可書之者也、

(7才)

一、二字認様事、常ノ杉原二枚五六寸奥ヨリ

伝燈大法師堯範

天文十年十二月 日 年号三寸ハカリ引離、

一、二クタリ二字認様 興胤日記ニ大ニ相替ル、

今度東院僧正御房尋申処、彼院家前々ノ古本多シ、此通ノ由慥ニ被仰畢、

一、義名羅箱蓋ニ入、堅者持之、探題御前エ参、サカサマニ取、ナヲシテ奉ル  
之、少シ立チノキテ蹲踞ス探

(7ウ)

題義名ヲ取テ開テ見給之、其時縁マテ退出ス、縁ニテ懷中ノ問題ヲ取出シ

出世奉行へ進之、出世奉行探題エ被進之時、罷歸畢、

一、興胤日記ニハ、二字最結句ニ可遣之様ニ在、此段モ東院僧正御房へ尋申候  
処、二字最初ニ進之、其次義名、其次問題進之由慥ニ被仰事ナリ、其通沙

汰了、

一、問題封歟否事、 興胤日記重々在之、近年之通、上注沙汰畢、然間旧記不

能注、

(8才)

義名付之時、探題坊ニテ一献有之様ニ同記在之、今度者一切不及其沙汰近

例歟、

一、会式十二月十六日ヨリ執行、

勅使前日十五日可有御下向之通知常、<sup>(ママ)</sup>拝礼於從當講被仰合候處、十二日三日ヨリ城州俄令物忌、路次不通ニテ十五日無御下向、雖然十六日講師指入講坊御沙汰アリ、勅使御下向次第、会式可有執行通也、十七日八ツ<sup>(打)</sup>折程勅使御下向也、仍十六日ヨリ執行通ニ会ヲタ、ミ御

## (8ウ)

執行也、勅使宇治ヨリ和束エ被成御越、其路次調之儀南着遅々畢、

## 一、初夜研学堅義十七日夜遂業畢、

一、拙者第三夜加任堅義、同寺分堅義長堯房得業、今度第二夜堅義無之間引上、

第二夜可有遂業之通前日治定之處、勅使御下向遅々間、一献以下用意、樽遣之間如常、第三夜可有遂業之通、又方々申合十九日夜第三夜遂業畢、

## (9オ)

一、一献之事、於当坊沙汰之入逢時分ヨリ中院エ移畢、初献赤飯サキ、クミニ

〈ハス・コハウ〉、カウイリモヲカス、

二献素麵キ、ウ立〈如常〉スイモノ椎茸〈引ヲカシ〉

三献、ニクミ<sup>(煎慈仙)</sup>〈イリシセン〉・ヤマノイモ、菓子<sup>(縁高)</sup>〈フチタカ〉打ヲキ

一、威儀僧前日以廻請相催、内々請申候〈威儀供無之、中間触之〉、成業二人・学道三人、以上五人、

一、裏頭衆七十五人、法印ヨリ未新入マテ、京都公人〈請文使〉・從僧・中童子〈大童子・身入大童子、此分本式之繕〉

## (9ウ)

一、中院ニテモ赤飯・雑羹・打置菓子一献義式、參籠衆エモ此通ニテ酒進畢、

一、中院中童子部屋、堅義ヤトリ、

初度案内開行水沙汰、装束以下調授之、

二度案内装束沙汰、其後水瓶ニテ手水仕之、從僧取繼之、第三度案内之時、廳而出仕内ヨリ草鞋ハキ、沓脱ヨリ鼻高ニヌキカエ畢、壇上マテ鼻高ハクヘキ儀ナレトモ、夜ルノ事也、略儀ニテ路次ハ草履ナリ、

## (10オ)

北堂壇ヲ上リ、廳而鼻高ハキカエ畢、講堂後馬道ニテ堂内ノ様ヲ伺、講開始、散花師後戸ヲ通ル、堅者進、石壇ヲ上リ次第二石壇ヲ廻ル、從僧・堅者跡中童子・大童子以下僅僕者、壇ノ下ヲ堅者ト同様ニ進廻ル、石壇未申角ニ至リ堂内エ入サマニ草鞋ヲハキ、堂内ニ入、第五床ニ南向テ腰ヲカケテ侍ツ、從僧南壁ノキワニ北向テ蹲踞ス、中堂子・大童子以下未申角戸ノ前壇ノ下ニ相待ツ、中堂子・大童子床

## (10ウ)

木ニ腰遂居畢、

一、其時探題參堂之時、堂内ヲ出テ探題着座ノ後、如本第五床ニ腰ヲカクル、講師御退出之後、都維那於一床頭、住位僧、伺探題氣色ヲ伺テ、東一步寄テ開短尺箱蓋、歸時堅者立床漸歩寄ヘシ、堅者ト都維那ト互存知シテ、二床頭ニテ左ノ袖ヲスリ合テ通ルヘシ、堅者ハ南、都維那ハ北、仏前ニ進テ二ノ礼盤ノ中程ニシテ三礼、東向テ一礼、至短尺箱下短尺ヲ誦

## (11オ)

寄由、探題氣色ヲ伺、又探題モ許可由ヲ示給、其後横彼ノハシヲ左ノ手ニ

テ引上テ右ノ手ニ持タル、檜扇ヲヲチサル様ニムネニヲサメテ、短尺読  
ニ寄時、右ノ足ヲ可進候也、三足退リ様ニシテ読也、短尺ハサム様異説多  
シ、今度八十枚一度ニトリ、内明三枚、大指ノマタニ、二枚、次ノマタニ、  
因明三枚、第三ノマタニ、二枚、次ノマタ、如此シテ文次第ハサミナヲシ、  
内明ノ一問題ヲ一番ニ読、二問ヨリ文次第一枚ツ、読、箱ノキワヨリ、東  
エ面ヲ下エナシテ、次第二

## (二ウ)

ナラフル、又因明一問題ヲ一番、二問ヨリ文次第読、一枚ツ、次第二箱キ  
ワヨリ西エ面ヲ下エナシテ並ナリ、如此シテ檜扇ヲ取持、登高座シテ侍ツ、  
都維那座ヲ立テ短尺ヲ取、探題捧ル、探題又賜都維那次第二曳之、一問短  
尺クハリテ、又探題御前ニ帰ル時、二問以下ヲハ一度ニ被曳、此時分発声、  
表白スルカヨキナリ、立、彼真似ヲ表ント云事ヲ、チト声ヲ上テ一向ニ耳  
ニ聞ル様ニスル、表白終カタニ、左エチトネチムク様ニ

## (12才)

スル故実也、

一、兼日用意装束分之事、

法眼 裳 下重 表袴 襪 平袈裟

座具 檜扇 鼻高 草履 水瓶 角手洗

唐笠 同袋

從僧方

鈍色 同裳 表袴 白五帖  
中堂子

## (12ウ)

装束〈皆具〉 袖單 ヲ、イカツラ入本結、白布タヒ

ハ、キ 沓 床木

大童子

装束〈皆具〉 ヲ、イカツラ 又入モトユイ

白タヒ ハ、キ 床下 沓

力者 衣袴四具〈是ハ講師坊力者兼帶シテカタラウ間、衣袴等無用意〉

又童子装束三具、香呂袴無之間、祭礼願主人カチ郎等直袴借テ用之、折鳥

子三

## (13才)

走童装束一具、

僧名

一乗院殿專寺探題

政所 二貫五百文

喜多院殿

權政所 一貫五百文

修南院殿

会始

他寺探題 一貫三百文

香賢房權大僧都 三百文

光明院殿

清水寺法眼 四百文

以上一床

宣丁

良順房擬講 四百五十文 延識房々々 四百五十文

宣丁

隱密

順文房々々 四百五十文 実乗房得業 三百文

## (13ウ)

隱密

駐範得業 三百文

琳祐々々 四百文

宣丁

善行房擬講 四百五十文 淨春房々々 三百文

高芸得業 四百文 春学房擬講 四百五十文

隱密

訓憲得業 三百文 興嚴々々 四百文

隱密

興盛々々 三百文 実盛々々 四百文

宣丁

英澄 四百文 英順々々 四百文

宮内卿擬講 四百五十文 円清々々 四百文

大乘院殿

尋円 四百文 西南院殿隱密 光実 三百文

## (14オ)

以上専寺廿口

勸学院

頼実擬講 四百文 隆芸々々 四百五十文

大進

信聖房

秀覺得業 四百文 英運々々 四百文

円儀房

禪実々

実胤々々 四百文 堯嚴 四百文

花教院

淨議々

興定々々 四百文 英実 四百文

以上東大寺八口

経円得業 四百文 乗盛々々 四百文

以上薬師寺二口

## (14ウ)

脇坊

快專得業 四百文 法隆寺 一口

散花師 四百文 一口

威儀師 四百文 註記 四百文

維那 四百文 以上綱所 三口

都合拾九貫八百文歟、

一、会始香賢房權大僧都權大僧都、光明院法眼一床御出仕也、賞翫ニテ威儀師供不可被召儀ニテ隱密丁衆并三百文、西南院得業、隱密直三百文ニテ可有由願定房律師

## (15オ)

被申事候之間、其通送遣候處、香賢房權大僧都・西南院得業無被申事、被請取了、光明院法眼ハ旧記四百文通也、先規通可被召由被仰事候間、旧記ハ四百文トアリ、其通光明院法眼分送遣畢、一床出仕良家得業、賞翫分ニテ三百文ナラハ、大乘院殿可為其並併歟、但兩門跡丁衆御出仕、現紙進上之旨、旧記有リ、雜紙五束・杉原三帖クロ皮ニテ結之、台ニヲキ進上之由也、雖然、内儀伺、色代ニテ近年進上

## (15ウ)

之由也、今度モ内々奉行方エ不審之處ニ、色代可然通ニ申間、惣之丁衆直四百文進上也、

綱所三口之内一口、威儀師四百五十文之由旧記ニモアリ、然處、今度初夜研学余直支配、無申事之由被申間、四百文支配無申事者也、雖然威儀師擬



講ノ<sup>後</sup>（資？）ナラハ、四百五十文ニテアルヘキ歟、

一、当日請書到来（使四人）綱掌、請取（二人）所守、以上一献結之、（式膳）下人在之、大概膳之由旧記ニアリ、寺分

（16才）

ナレ共、於当坊一献沙汰之間請出、使当坊ヘ可給之由、兼而注記申遣候処、寺外ヘハ不可来由申事之由注記返事アリ、前々寺外ニテ一献不珍、請書使一献沙汰候間、其坊ヘ来事不及沙汰儀也、其旨可被申聞候由申遣候処、則請出持来了、次修学者重衣（白五帖）請書請取之、蘿箱蓋入渡之、自身又於客殿請取之開頂戴畢（重衣・白五帖ナリ、）嚴儀ニ可有沙汰之由先達被申訖、

（16ウ）

請書 請文案

謹領

網牒一紙

右当年維摩会聴衆者如件、

天文十年十二月十九日大法師 堯範

杉原二枚重テ如此認之、上卷モ上下打押、蘿箱蓋入如前渡之、

下行

（17才）

威儀供各一前、別生料三斗六升宛、四口、

合一石四斗四升 会所斗定六合升

二百文<sup>四十文</sup>雜紙代、 二百文 粽代 以上下行畢、

一、読師三斗六升（下行会所斗）

講堂々童子、為清仕丁請ニ来ル、興胤日記ニモ旧記講堂司トアリ、不審トアリ、為清仕丁相尋処、読師ヨリ堂童子方ヘ三斗六升下行有ル、堅者方ノ下行可請取由被申事之由申間、則下行畢、彼請文ニモ

（17ウ）

講堂司アリ、読師・講堂司同躰歟、取乱、其段不相尋者也、

一、当堂少綱雜紙代以下可請之旨、雖有申事、於寺分加任者無下行之旨、興胤日記ニ委細アリ、於今度者可請之由申事モ一向無之、

一、捧物支配

政所（雜紙三百六拾帖、上積十五帖）

權政所（雜紙二百六十帖、上積十帖）

法印（雜紙二百帖、上積七帖） 大僧都（雜紙百廿帖、上積五帖）

（18才）

少僧都（雜紙百廿帖、上積三帖） 律師（雜紙百十帖、上積三帖）

已講威儀師（雜紙七十帖、上積三帖） 成業以下（雜紙六十帖、上積三帖）

一、兩門跡四ノ床御出仕之時者、如權別<sup>（当脱）</sup>捧物可進之旨、妙音院日記ニ在之由、

興胤日記ニアリ、雖然興胤豎儀之時者、御門跡丁衆御出仕無之間、捧物支

配様躰無之、於今度者大乘院殿、四ノ床ノ丁衆御出仕之處、聴衆並之通、

諸堅者被支配畢、巨細上注之、妙音院

(18ウ)

日記録也、

一、寺家捧物送文

進上維摩会第三日加任豎義者捧物事

合〈糴紙三百六十帖、上積十五帖〉

右進上如件

天文十年十二月日

如此、上品杉原二枚重テ表卷、如常、上下押打、表書無之、札紙モ無之、

折紙制狀アリ、  
(副)

捧物之代二貫五

(19オ)

百文令進上候、宜預洩御披露候、恐々謹言、

十二月日 堯範

越前権上座御房

一、権別当探題 会始 送状同上

捧物員数不同、巨細注之、〈寺家権別当良家之時儀、文字不可有之、〉

一、光明院法眼、如上認、以折紙別狀送遣了、精花之子細ニテ如此歟、

一、西南院得業、以文、如常被請取訖、

(19ウ)

一、大乘院殿四ノ床御出仕、如寺務、送文・折紙・解狀、如上、員数上委細注之、

一、惣ノ丁衆送文書様

維摩会第三日加任豎義者捧物〈糴紙七十帖、上積三帖〉代四百文

擬講支配之通、成業以下〈糴紙六十帖、上積三帖〉代四百文

札書様同上

威儀師、如擬講、四百五十文之通旧記ニアリ、於今度モ成業、直四百文支

配無申事、実否不分明、他寺丁衆札ノカ

(20オ)

タニ、薬師寺・法隆寺ト有ヘシ、於專寺丁衆者無之、請文次第ニ支配畢、

一、東大寺衆ヨリ捧物支配之事、寺中先規ナリ、寺外ニテハ不可請之由被申事

アリ、寺外ニテ支配、先規連綿之由申遣候處、則請ニ來候間支配了、

一、札、旧記ニハ杉原五ツニ切ル由アリ、近年四枚ニ切、可然上品ノ杉原也、

一、松明之事、旧記ニハ百把ハカリ用意之由也、長三尺百把

(20ウ)

注意了、中院ヨリ出仕、路次僮僕衆持分ニハ廿把ハカリニテ有リ、豎義候

間カ、  
(籌)  
リニタク間、多入ナリ、カ、リハ堂破木可然歟、但可随宜、

一、僮僕衆、風フセキニ瓦肴ニテ酒遣畢、

一、出仕之時節〈并〉還威儀寸楊、  
(対揚)  
膳居アリ、承仕配膳鉢、興胤ノ日記ニア

リ、近年出仕之前ニモ還威儀モ不及沙汰由也、不取入自由ノ沙汰也、雖然

毎々勘略之間、近年之通一向無其沙汰者也、

(21オ)

一、出仕之時簾之役、未講師之躰、兩人其沙汰了、

一、僮僕衆本式嚴儀也、旧記委細者、近年一向略儀各沙汰也、今度者其並也、  
僮僕人数之事極略、

從僧一人、中堂子一人、大童子一人、力者四人

下行事

百文〈從僧〉、百文〈中堂子〉、百文〈大童子〉

五十文宛〈四人〉、廿五分宛〈又童子三人〉走董〈二人〉

(21ウ)

二百文 身入下行

中童子・大童子装束賃百文ツ、

合八百文

一、所作次之日、悦參大廻之時、探題并勅使へ參賀之由、奥胤之日記ニアリ、

近年不取入儀也、無其儀由先達被申間、今度者不能參賀、

一、装束 鈍色〈白五帖〉直垂着二人、如加行始、

一、大廻之次、西金堂着座沙汰了、捧物十足遣了、堂

(22オ)

方正法院二申、不限堂司事也〈如法花念、此着座之事、無其沙汰由被申方

多之、雖然旧記之面、為結縁授、拙者其沙汰了、隨意歟、

一、惣諸下行

合十九貫八百文 四十丁衆分

寺務始而不注記、巨細上注之、〈会始西南院得業威儀師支配様ヨリ、少可

有相違者也、

合一石四斗四升、会所斗定、四百文、請書使之衆

三斗六升、会所斗定、講堂司請文

(22ウ)

合八百文

都合廿一貫四十文

米一石八斗歟、

一、知足坊研学米壹石請之、大会結日以折紙被相触、以請文請之畢、初夜者式

石寺分・加任壹石宛也、

一、款狀并寺解文、於寺分・加任豎義者無用意者也、

一、先年宗玄〈明禪房得業〉・藥師寺懷了房得業、第三日豎義者也、然処第三日

藥師寺分ニテ有間、懷了房

(23オ)

得業、寺分豎義可被遂之旨、被申事アリ、明禪房得業、于時、大乘院殿御

同学也、寺分・加任之次第、当寺寺務并其寺別当ハカライ也、然間、明禪

房得業、寺分豎義可被遂之由被申処、懷了房得業、寺分豎義理運之由執心、

被申事ニテアレ共、東院僧正仰之旨任テ、明禪房得業、西大寺分ニテ寺分

豎義被遂畢、其以來、此申事人意未不慥歟、今度拙者豎義之次ニ、東院僧

正尋申之処、初夜・第二

(23ウ)

夜当寺分、初夜限凡人、初夜研学豎義別而規横也、第二夜限良家、但西座

遂業、第三夜他寺分、法隆寺・薬師寺・西大寺、第三夜薬師寺存知之由、一向無案内之儀也、堅義ヲ、時、第三日朝座、加任ニテ堅義者被付事也、寺分・加任次第、寺務御ハカライ之由被仰事也、法花寺・清水寺ハ堅義者無之、第四夜・第五夜東大寺分也、

一、表白、副因明四種、相違義一具ヲ、異説、

(24才)

興胤日記ニ委細アリ、今度東院僧正尋申候処、義断纂要付間、一具ノ意、其謂アリ、本ヨリ異説也、雖然一具言ナキモ不苦、先師口伝無之通ノ由被仰間、於今度者一具言略之、

一、此日記之事、就今度拙者堅義、大方古今儀聞合私注之、一向不可有法量者也、殊旧記ニモ相違之角共在之、近年一向略義共也、且自由之沙汰歟、雖然勝手ニ任由、於今度者毎々略義此通也、

(24ウ)

於慇懃儀者、旧記能々可被撰者也、但上古モ、堅者僮僕旧記之通事過之由、及沙汰由也、上古ハ一献以下如形被沙汰、学業〔并〕出仕行粧根本タシナル、近年学業一向無沙汰、毎々上古ニハ相替候也、

一、一献ノ入目等雖在之、面々分限次第、随意事共之、略之畢、

堯範頭定房得業堅義之時日記、書写畢、

(25才)

②天正十七年五月・八月度堅義カ某日記

天正十七年〔己丑〕五月十六日ヨリ維摩会執行、從関白殿八木五百石〔他金子〕御合力相渡之間、俄御執行、講師之儀、南井坊〔春音房〕權大僧都、一乘院殿一円御仕立也、

一、初夜研学発心院〔善舜房得業〕、精義檜皮院〔治部卿擬講〕

一、第二夜堅義一乘院殿〔尊政得業〕、精義東大寺了識房法師

一、初夜副惣殊院〔專儀房得業〕、精義者多聞院〔長実房〕

(25ウ)

一、第三夜堅義加任喜多院〔空慶得業〕、精義東大寺無量寿院

一、寺分堅義修南院〔光助得業〕、精義願雲房擬講

一、第四夜堅義東大寺地藏院、精義寺務東北院殿

(26才)

天正十七年〔己巳〕八月 大会執行

一、頭定房法印日記ニ加行始以下之事、具ニ在之、

僧名布施半減之通、

東北院

政所 壹貫貳百五十文

專寺探題東林院

權政所 七百五十文

南井坊

他寺探題 六百五十文

長実房法印權大〔僧都〕 百五十文

会始

光助大安寺法眼 百五十文

空慶法花寺法眼 百五十文、

忍禪房權律師 百五十文

以上一床、

四十丁衆之内一床除之、殘三十人二百文宛

但隱密如一床百五十文

(26ウ)

散花師 二百文 威儀師 二百文

注記 二百文 維摩師 二百文

読師 壺斗八升〈会所斗半減〉

一、僮僕下行之事

從僧五十文、大童子五十文、力者二人廿五文ツ、

走童一人十三文、直垂者五十文、身入大童子百文

一、請書使衆四百四十文、七斗式升鐘取方

(27才)

③元和九年堅義榮觀房長英日記

元和九年〈癸亥〉十二月十九日ヨリ維摩会執行、

一、講師摩尼珠院源勝房擬講、

一、心加行十一月朔日ヨリ、

一、十八日、良家弟子分、寺入之作法有リ、

一、廿二日、於大乘院殿御伝授、寺類衆一献在之、

一、十二月三日ヨリ講師正加行ニ被入畢、

一、同十四日、探題御伝授ナリ、

一、于時、研学堅義千手院榮觀房得業、是去年研学ノ

(27ウ)

悦酒大供<sup>(勤)</sup>勸仁也、当年分得請ノ仁、研学仕候而、此度堅義理運ト

競望雖有之、去年研学可為理運之旨御治定也、

一、十一月廿三日精進、廿四日ヨリ加行、ミコ懺悔沙汰之大廻、春日・寺内

子寺・漠国、悉社參也、直垂者以下被召連畢、

一、注連、大門〈并〉加行部屋本尊ノ前ニ曳之、本尊ハ講堂曼陀羅也、大職冠

懸ル異説アリ、

一、大廻装束鈍色〈白五帖也〉、於仏前、香花・灯明・短尺毎日如常、毎日入堂

ニハ、觀禪院鎮主〈并〉瀧藏ハ略之、先例也、

(28才)

一、廿六日、長者宣到来ニ付テ、一乘院殿へ致伺云、今頂戴畢、

一、廿八日、短尺探題へ上訖、

一、十二月九日・十日・十一日三ヶ屋後夜入堂、修學者相語沙汰之訖、松明ハ

無之、當講ニハ松明ニテ被沙汰了、

一、十三日、研学堅義東唐院ヨリ廿五石請取畢、

一、十六日、義名可付之由、出世奉行御奉書云、

明日〈十七日〉午貝定、可令出維摩会堅義名結之由、

御氣色所也、恐々謹言、

(28ウ)

十二月十六日 兼隆奉

榮觀房得業御房

返條安文

明日〈十七日〉午貝定、維摩会堅義々名可付進候由、謹而承候、可存其旨

之由、可預御披露候、恐々謹言、

十二月十六日 長英

出世奉行御房

杉原二枚ニ立文、上ヲ封シ、一枚ニテ表卷、上下捻、表書在之、

(29才)

出世奉行ヨリ如此認之間、其通返條認遣畢、

一、義名認事、強杉原一重ニ書之、

註進

当年維摩会初夜見学豎義々名之事

所立

唯識義章

因明四種相違義一具

右註進如件、

(29ウ)

元和九年十二月日 伝燈大法師長英

如此認之、表卷上下押折

一、問題認事、紙同上、

内明初二五帖、次少引離テ、因明五帖、問題計書之、問ノ字無之、一枚ニ

書之、常ノ杉原ニテ表卷、上下押折、

一、二字認事、常杉原一重五六寸奥ヨリ書之、

伝燈大法師

(30才)

三寸斗引離テ、

元和九年十二月日

義名問題二字、以上三色、蘿箱蓋ニ入、探題一乘院殿へ参上訖、公所ニテ

出世奉行へ渡之、二字最初進之、次義名・問題進候了、重表白五帖、直垂者、走童、

一、十八日、廻請触之、来〔廿日〕午貝定、維摩会初夜研学豎義出立、一献其

沙汰候、以裏頭之儀、於何院入御所仰之、

一、威儀廻請事、杉原横折、

興範得業、良祐得業、清秀□□、供目代

(30ウ)

法用僧 堯清

出立所 唐院 立書、〔横折異説也、〕

一、捧物支配之事

一、寺務・權当・他寺探題・会始 送文此方ヨリ指遣ス、

進上 維摩会初夜研学豎義捧物之事

合〔三百六十帖、上積十五帖〕

右進上如件、

元和九年十二月日

(31才)

上品杉原一重表卷、上下押折、表書・礼紙無之、

折紙副状有之、

捧物之儀、以代米耄石五斗令進上候、宜預洩御披露候、恐々謹言、

十二月日 長英

## 丹波法眼御房

- 一、権別当会始送状同前、但兩門之外ハ洩ノ字不可書之、
- 一、権別当、雜紙二百五十帖、上積十帖 代米壺石

(31ウ)

- 一、他寺探題 会始 〈副状、是モ披露書也、〉

## 布施物支配之覺

- 一、別当〈壺石五斗〉 一、権別当〈壺石〉
- 一、他寺探題〈七斗五升〉 一、会始以下一床分二斗五升

余ハ三斗宛、〈但已業・擬講并〉東大寺已業ノ人ニハ二升五合ツ、加分在之、威義師同上、隱密ハ式斗五升宛、

(32才)

今升

- 一、壺斗 読師壺人分

- 一、専当方一献沙汰之、

- 一、五斗 壺貫代 一、壺斗四升 一、五升〈何も請文上之、〉

今升

合六斗九升〈是ハ研学ニ限ル歟、〉

- 一、僮僕下行之事、

- 一、五升 從僧 一、五升 大童子 一、二升 身入

- 一、八升 力者四人分 一、一升式合七夕 走童子

以上、是ハ栄觀房堅儀之日記写之、

(32ウ)

寛永十八年三月廿四日ヨリ執行、

- 一、講師福園院、勲觀房法印

- 一、研学堅義堅舜房得業布施物以下、右如日記引之間、別ニ不及注之、
- 一、延年被執行了、近衛様〈并〉御寺務・勅使御忍ニテ御見物在之、

〔裏表紙見返し〕○白紙

○糊はずれの付箋 もとの位置不明

〔已業・擬講〈并〉東大寺已業ノ人ニハ、二升五合ツ、〕

〔裏表紙〕○白紙

七 維摩会日記（東大寺図書館一四二・四六九号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

（表紙）

維摩会日記

（表紙見返）○白紙

（1才）

一、両門跡講師ノ時ハ威儀供六百文也、良家并平ノ寺聴衆講師ノ時ハ、威儀供二百文也、

一、鑑取方ノ焼石ノ代ノ事ハ、一ノ床分ハ百文ツ、下行也、平ノ衆ハ廿文ツ、下行也、

一、新精義ハ六貫六百六十六文、古精義ハ三貫三百卅二文、

一、僧綱精義ハ七貫文也、英訓私草紙之趣也、写本ハ、観音院ニ在之、

（1ウ）

一、日供ヲハ堅著モ請ル也、

一、凡人云ハ、平ラノ寺僧ノ事也、  
ハシシ

一、一床ハ無<sub>キ</sub>威儀供間、平ノ衆六百文ナレハ、三百文也、但僧綱已上加階在之、婦丁衆同之、無<sub>キ</sub>威儀供故也、

一、講師坊威儀供二百文、同粥土器代、百十文、各別ニ以請文請之、

（2才）

二百文 本院ノ威儀供

二百文 別当坊ノ威儀供 別当坊トハ■寺務ノ事也、

百文 別当坊ノ非時供 是レハ平ノ聴衆ノ時ノ請物ノ様如此、

（以下四行余白）

（2ウ）

一、五ケノ間トモニ何レモ精義者申上ケイト云フ、別注記申上乎、第五ノ間ノ

時<sub>キ</sub>注記申上ケハ、精義者ヤカテ、ニツハ得タリ、一ツハ未判ト云フヘシ、

（以下二行分余白）

維摩会霜月十一日ヨリ始行、

天正十八年霜月十一日

（裏表紙見返・裏表紙）○白紙



## 八 維摩会真俗私日記（東大寺図書館一四一・五二六号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

（表紙ウワ書）

（異筆）

「澄芸」

維摩会真俗私日記

賢春

（表紙見返し）

三礼開白結願ニアリ、本寺他寺ノ間ニ末已講ノ役也、講師ノ退出ノ後、註記末ノ已講ノソハエヨリテ、三礼ト云時、床ヨリ下テ香呂ヲ持シテ、後戸ヲ廻テ正面ヘ出ツ、寺務ハ西ヨリ東ヘ行、見合セテ、ネリテ東ノ礼盤ニ已講ハ上リ、西ノ礼盤、寺務ハ上テ礼盤ノ上ニテ香呂ヲ持テ三度礼ス、其後礼ニ盤ノ上ニ着座ス、然後中綱・々所来テ、行香ノ器ヲ勅使ト礼人トニ渡ス、其後礼盤ヨリ下テ、立カワリテ寺務ハ東ノ礼盤ノ前ニ南面ニ立、已講ハ西ニ南面ニ立ツ、其後行香ヲ請テ返納シテ、又立カワリテ寺務ハ西、已講ハ東ノ礼盤ニ上テ着ス、綱所鐘ヲ打ニ合セテ香呂ヲ持テ礼盤ノ上ニテ六礼シテ、其後礼盤ヨリ下テ後戸ヲヘテ本ノ床ニツクナリ、

一、大行道ノ時ハ、二三ノ床ノ衆ハ、床ヨリ北エ出テ、二床ハ一床ノ次ニ廻ル也、

（1才）

維摩会真俗日記 永徳三（亥）年

一、東大寺丁衆六人、僧綱精義之時ハ、問アケナキ間、一問ノ為ニ今一人加請アリ、七人也、精義二人、堅者二人ナリ、当年ハ卿律師精義ノ間、丁衆七人渡、

一、精義、卿律師頭済 大式擬講誉（新精義）

一、丁衆、寛忠、専暁、暁円（唄師）、慶海、弁玄、隆兼（東室宣旨丁衆）、賢

春、

已上七人、

一、十一月七日ヨリ大会始行有ヘシト云々、然ルニ専円良観房五師

（1ウ）

第二夜ノ一問ノ役ナリ、内方所勞大事ナリ、若死去セハ、恐カ、ルヘシトシテ、三日ノ朝丁衆ヲ辞退シ畢、次座ハ寛忠ナリ、今ヨリ一問役ノ事、難義ノ由申ス間、珍事ニ及所ニ惣ノ丁衆到参シテ行誓已講ニ勤仕候ヘト申ス間、子細ナク請取畢、雖然ト大会延引ノ間、寛忠一問勤仕、

一、初夜ノ問上ノ外ニ、又第二夜ノ一問役大式擬講勤仕ノ事、先例ナケレトモ、事闕ル御。《他》寺ノ寺務免セラレ候畢、大会延行ノ間、無其儀、

（2才）

一、僧綱精義ノ時、一問ノタメニ丁衆一人加請、然ルニ一問ハ已講兼テ勤仕候ハ、丁衆ノ加請無用ナレトモ、僧綱精義ノ時ハ加請先例ナル故ニ、加請候畢、雖然大会延引ノ間、寛忠一問ヲ勤仕アル間、如先例ナリ候畢、

一、良観坊五師俄ニ辞退ノ間、賢春丁衆ニ加候畢、

一、初二夜ノ立問役ハ、東大寺ノ丁衆ヲ。《本ニ》請尽テ、不足ニ薬師寺・法隆

寺ヲ藹次ニ請スル也、初二夜ノ間ハ三

(2ウ)

ヶ寺寄合テ藹次ニ問也、

一、立問役事ハ、永徳二年〔戊子〕秀海已講、内々手ツカイヲシタ、メテ、香琳房ノ得業ヲ以テ、他寺ノ別当円守僧正方へ送サル、此分無相違トテ、秀海ノシタ、メタル手ツカイノマ、ニ用意ノ廻請ヲナサレ候畢、

一、当年モ去年ノ例ニテ、当寺ニテ。〔内々〕評定アリ、手ツカイヲシタ、メテ、十一月四日少納言得業弁玄、他寺ノ別当円守僧正ノ所へ持参ス、此分ヲウツシテ用意ノ

(3オ)

廻請ヲナサレ畢、

一、当年大会十一月七日ヨリ始行云々、俄ニ延引シテ、同十日ヨリト云々、又延引シテ同十八日ヨリ始行候畢、

一、十一月十二日夜、当寺堅者実演助得業、義名ニ探題円守ノ所へ行テ候畢、探題ノ方ヨリ、内々略義ニテ参セラルヘキヨシ申サル、間、ツケ衣ニテ参セラル、從僧・威儀坊等ノ童僕一向略セラル、無念ノ事ナリ、此、宗兼播磨律師・普門院義宝律師ノ例ト云々、

一、同十三日ノ夜第五夜ノ堅者快尋帥得業、探題權

(3ウ)

別当教兼ノ所へ参セラル、好相如ト、前ノ夜ノ探題ノ方ヨリ事サル、間、略義也、堅者無念ノ由、内々物語候ト云々、

一、十一月十三日ニ、初夜ノ用意ノ廻請、円守探題ノ方ヨリ持テ来ル、

一、同十六日朝、第五夜ノ用意ノ廻請持テ探題教兼ノ方ヨリ来ル、賢春当寺ノ聴衆ノ最末タル故ニ重役ヲ勤仕畢、  
 (第五夜ノ四問ナリ)  
 第五夜ノ四問也、

一、用意ノ廻請ヲハ唯識講承仕重衣ニ五帖ノ袈裟

(4オ)

ニテ持テ来ル、コナタモ重衣ヲキテ出合テ、礼ヲシテ廻請ニ奉ラスルナリ、  
 一、第二夜ノ専寺ノ探題ヲ寺務円守辞退、権別当教兼勤仕候ヘト寺務ヨリ申サル、然レトモ公家ヨリ専寺ノ探題ノ仰ヲ蒙ラサルトテ、廻請ヲハ兼日ニハ出サレス、大会十八日ヨリ始行アリテ、会ノ第二日十九日ノ朝用意ノ廻請出サレ候キ、十九日ノ第二夜ノ立門役ノ衆、題ヲウケニ行、先代未聞ノ事ト云々、

(4ウ)

一、題請ニ行ク時、鈍色ニ五帖ノ袈裟ニテ探題坊へ行テ、此由ヲ力者ヲ以テ被入、修学者出合テ引道ス、名跡ヲ捧ル時ハ、出合タル修学者ニ先此名跡ヲヤル、但名跡ハコナタノ随意ナリ、必シモ挙ルニハ非ラス、探題法眼ニテ出仕ノ将束ニテ横座ニ着ス、某ト申テ探題ノソハエヨリテ、袖ト袖トサシ合セテ密々ニ題ヲ請取テ、中門ノ廊ニ出テ、他燈台ノ本ニテ密々ニ題ヲ開テ見テ、相違トナレハ退出スルナリ、若相違ノ事アレハ、重テ

(5オ)

被入テ、相違シタルヨシヲ探題ニ申シテ題ヲ取ル也、

一、アマタ同道シテ行タル時ハ、一人ツ、密々内エ入テ題ヲ請也、何ニモく、  
 隱密ノ儀ニスルナリ、然ルニ去年・当年ハ探題円守ツケ衣ニテ出合テ、諸  
 人ニ同時ニ題ヲ請サセラル、則高声ニ物語候キ、比興ノ至極ト云々、  
 一、東室ハ賢春ヨリハ一藤上也、藤次ナラハ初夜ノ五間ニテアルヘシ、然ルヲ  
 第二夜ノ堅者一乘院ニテ御座アル間、尊勝ノ問役ハ、良家同シクハ宜シカ  
 ルヘシトテ、第二夜ノ五間ニ

## (5ウ)

東室ヲナシ初夜ノ五間ニ賢春ヲ廻請ニナサレ畢、

初日・第一日 第三日・第四日 第五・第六・第七日

一、当年ノ講師禪光院覚成・西南院覚家・東北院

三ケ日

三人講師ノ事如法カスカナル例也、大略新義ト云々、

一、講師方ノ下行物ハ、三人シテノ寄合テ配分シテ下行ト云々、

一、延年ノカリヤハ、三ノカリヤヲ講師一人ツ、シテ一間ツ、フタケラル、当  
 年ハ三ノカリヤ皆講師坊ナリ、

## (6才)

永徳三年維摩会十一月十八日より始行、

初夜〈次日十九日酉時程ニ始之、夜ノ後夜時程ニ終、〉  
 同上 撰末帰本 有法差別 ヒワタヤ 堅者賢定坊得業

一間 行營大式擬講(年六十五、戒四十九) 新精義

法隆寺

二間 長乘延宗坊得業 年六十一、戒四十五

三間 曉円伊与得業 年五十三、戒三十六

藥師寺  
 四間 円長良觀房五師 年四十八、戒三十三  
 五間 賢春三河得業 年三十九、戒二十二

## (6ウ)

第二夜 堅者一乘院 精義顯濟律師

捨乱留能、法自相、仏弟子敵無

一間 寛忠美濃得業(年五十七、戒四十二)

転試得智、相違因

二間 専暁(年六十一、戒四十二)

無世因法、如仏法言

三間、慶海大進得業(年五十一、戒三十五)

四間 弁玄(年四十六、戒三十)

東室

五間 隆兼 大納言得業(年三十四、二十三)

第三日昼堅立者隆俊(中納言得業、精義行營擬講

第三夜堅者円俊(大上大臣得業、東北院、精義顯濟律師

東大寺

東大寺

第四夜堅者実演(助得業)、

第五夜堅者快尋(帥得業)

精義円守

精義教兼

## (7才)

尊勝之時、

謹請 第二夜御堅義者威儀捧物事

合

右、賢春大法師之分、謹所請如件、

永徳参年十一月其日 使者(判)

## (7ウ)

紙二枚書立紙捻之、(或折之、表書無之、)

謹請

請書一紙

右、自今月十日被始行維摩会聴衆者、謹領如件、

嘉慶元年十月十日 大法師某

(8才)

謹 維摩会第四日講師坊非時供事

合

右、大法師賢春分所請如件、

永徳三年十一月 使者〈判〉

(8ウ)

請取 維摩会餅代事

合四斗者

右、大法師賢春分所請如件、

永徳三年十一月其日 使者〈判〉

(9才)

(付箋)

(覺)  
「□悟事」

一、開結ニテ清瀧院ノ衆会所ニ立、西ハ興福寺、東ハ東大寺・薬師寺・法隆寺・

散花師ナリ、

一、列ニナル時、興福寺ハ西エ、東大寺等ノ三ヶ寺・散花師ハ東エ廻ル、正面

ヨリ入テ、東ハ東エメクリテ、ウシロ戸ヲヘテ床ニツク、西ハ西エスクニ  
行テ床ニツクナリ、

一、自他寺寄合テ臈次ニ床ニツク時、此座ノ臈次ヲ知ラサル時ハ、左右ナク床  
ニツカテ立テ、此座ノ人ニ年戒ヲ尋テ臈次ニ床ニツクナリ、

(9ウ)

一、開結ノ出仕ハカリニ香呂ヲ持ナリ、中間ノ出仕ニハ、香呂ヲハ持サルナリ、  
一、衆会所エツク時ハ丁聴ハ石壇ヨリハノホラスシテ、衆会所ノ東ノ芝ヨリツ  
クナリ、僧綱ハ石壇ヨリノホル、

一、四床ハ散花所ヲ加テ九口ナリ、講師ノ定者法師、堂内エ入ヲ見テ、四床ノ  
丁衆西ノ戸ヨリ堂ノ外ニ出テ、堂ノ外ノ西ノ壁ノソエニ立ツ、四床ノ丁衆  
ヲソト候時、堂内ニ入テ床ニツク、

(10才)

一、散花ノ時ハ唄ヲ出ソル、ヲ聞テ、四床ノ丁衆末ヨリ床カラ下テ、西ノ戸ノ  
南ノワキノカヘイタノソエニ、東末ニ北向ニ立テ、散花師ヲ待テ、散花師  
ヲ先立テ正面エ臈次ニ行ク、散花師御前ニ留テ、其ヨリ西エメクル、  
ノ八口カラヨリニ正面エ行テ西エメクル、一ノ床ノカマチニテ、花籠ヲ引、  
大行道ノ時ハ散花師先ニメクルニ、余ノ四ノ床八口ハ、一ノ床ノ南ノカマ  
チニ立テ一床ヲサキ立テ、一ノ床ノシリニツキテメクルニ

(10ウ)

又一ノ床ノ北ノカマチニ留テ、二三ノ床ヲ待テ三ノ床ノ衆ノ次ニ、四床ノ  
衆メクルナリ、正面ニテ仏ニ向テ、四床ノ衆六礼ヲ事々シカラスシテ、西

り散花ニメクルナリ、  
 (二三ノ床ハ北エ出ルナリ)

一、初夜豎者賢定房得業、世俗熟調捧物二百五十文

一、第二夜御豎者一乘院殿捧物杉原七帖、威儀供六百文

一、第三日豎義東北院、厚紙九帖、衣帶ニテユウ、世俗捧物■(二百)五十文

一、第三夜豎義松林院中納言得業、世俗捧物五百文、

一、第四夜豎義実演〔助得業〕、世俗捧物六百元、助成送之畢

一、第五夜豎義快尋〔帥得業〕、世俗捧物六百元、助成送之畢

至徳元〔甲子〕年、文和四年分

一、講師松林院長懷、喜多院・竹林院・北戒壇■●四人、(三人)

公方ヨリ一年ニ講師御免アリ、又修南院・松室二人所望アリ、六人講師タルヘキ由、將軍家ニ歎申サル、故ニ

(二ウ)

松林院一人講師勤仕候畢、

一、一乗院還聴衆清瀧院ノ衆会所ニテ 一乗院御出仕ノ時ニ専寺・他寺ノ聴衆  
石壇ノ下テ参向申ス事、寺家ノ御出仕ノ如シ、一乗院ハ僧綱ノ一床ノ出仕  
ノ如ク石壇ヨリ、スクニ御上アリテ、聴衆ノ集会所ニ御立アリ、

一、東北院円俊得業、還聴衆ノ一床ノ出仕ノ切芝ノ石壇ヲスクニ御上アリ、注

一、初夜豎義知足坊、世俗熟調捧物代三百文、

一、第二夜堅義大乘院（下品ノ厚紙九帖、タ、絹ノ三ワリノ帶一ステ、已上捧物、世俗ハ散々ノ熟調、言語道断ノ比興ノ物也、於東室下行、）（チ）

(12才)

一、第三日 尊者松南院実尋得業（於南戒壇、世俗捧物二百五十文下行、）

一、第三夜豎者東門院円尋（捧物厚紙九帖ヲ皮ニテユウ（ク□カ皮・赤皮ニステアリ、）世俗三百文、

一、第四夜豎者曉円〔伊与得業〕世俗捧物七百元

一、第五夜豎者慶海〔大進得業〕世俗捧物六百文

一、初日二本院ノ威儀供於講師坊下行二百文

一、初日ノ朝座ノ床ニテ講師ノ侍、講師坊非時供トフル、惣ノ聴衆講師坊エ出仕アルヘキ処ニ、十七日ノ朝僧綱等三人東大寺ノ已講ハカリ、講師坊エ出仕アリ、

(12ウ)

一、一乗院ノ御出仕ハ寺務ノ出仕アリ、後二御出仕アリ、

一、御義三年已出也、大弐已講云、去年ヨリシチノ三年已出也、ト云々

一、初日豎義〔第二日〕ノ夕暮程ニハシマリテ、後夜ノ後ニハテ畢、

一、第二夜ノ禪定院ノ御立義〔第三日十八日〕ノタニハシマル切音ナシ

一、別当坊ノ非時供、第五日世俗熟調捧物厚紙八帖（於寺家坊下行、）

一、講師坊非時供生料二百文於講師坊二下行、第四日下行アル也

一、鑑取当日ノ御請ヲ持参ス、御請ヲ申時、ヤケ石ノ代ニ用途十五文鑑取ニ下  
行、

一、堅者ノ捧物一分宿坊ニ置也、

(13才)

初夜立者重耀〈知足坊〉、精義行營擬講

專寺探題權別当教兼

法隆寺

一問〈遣虚存実、有法自相〉行營〈兼一問〉

二問

有円得業

三問〈如無違法〉

專曉〈弁五師〉

藥師寺

四問 継円得業

五問

賢春

第二夜堅者禪定院、精義顕濟僧都

專寺探題權別当教兼

一問〈隱省顕勝、法差別〉実演

二問〈先後体〉快尋

三問

舜恵

四問

弁玄

(13ウ)

五問

隆兼〈大納言得業、東室〉

第三日堅者松南院実尋得業、精義卿僧都

探題寺務円守

一問〈遣相証性、一因違三〉良濟

二問〈三細随抵、若言眼等〉

三問〈第九識体、誉此三種〉

四問

融玄

五問

長寛〈薬師寺〉

第三夜堅者東門院、精義大式擬講

探題禅光院覚成

一問〈撰末帰本、一因違四〉慶懷 二問〈違次自他共〉憲重

三問〈正品争故〉

四問

專円

(14才)

五問

賢春〈重役〉

第四夜探題寺務円守、堅者曉円伊与得業

第五日、廿日、日中程ニアリ

一問〈円教断惑、法自相〉継弁

二問

三問

四問

東北院

五問

一乘院

第五夜探題禅光院覚成、堅者慶海

一問〈有法差別〉源英

二問

良春

(14ウ)

三問

英敏

四問

憲祐

五問

隆俊

一、月夜ナル時ハ、平聴衆ノ松明ヲトラス、僧綱ノ出仕ハ月夜ニモ松明ヲトル、

禪定院

一、尊勝ノ御堅義ニハ一問ハ已後勤仕スヘシト注記申ハ、去時一乘院ノ御堅義

ニ寛忠得業一問ヲ勤仕之由ヲ、当寺ヨリ出ス、注記、此ハ惡例也ト申ス、

先年一乘院御立義ノ時、專円五師勤仕之間、近ク兩度マテ成業ノ勤仕ノ由

ヲ申ス間、注記ヲレテ、子細ナク実演得業勤仕候畢、

一、堅者ノ座具ハ左ノ袖ニツクルナリ、

(15才)

至徳三年〈丙寅〉十一月廿日維摩会始行

講師一乗院 禪定院還聴衆

初夜堅者 吉祥院〔法自相〕 精義実演〔助已講新精義〕

第二夜々々 松室〔有法差別〕 精義快尋〔帥已講新精義〕

第三日昼々々 松林院弟大納言得業 実雅〔違四〕 精義快尋

第三夜堅者 無之、〔寺分〕

第四夜堅者 弁玄少納言得業〔円教弘戒、法差別〕 精義西南院寛家〔新探題〕

(15ウ)

第五夜堅者 賢春三川得業〔智障断位、有法自相〕 精義東北院

東大寺聴衆

〔附箋〕 〔僧〕 実演已講、快尋擬講、専円五師、専曉五師

〔附箋〕 〔判〕 曉円得業、慶海得業、善兼得業、尋盛得業

一、立問役ノ時、答申旨不可然、若夫、付答申、大旨加様ニ申候力、此等ノ難勢ヲ■分明ニ答申セ、此等ノ詞ハ皆サシコエナリ、

〔附箋〕 〔判〕

一、一問ノ時、所立義科唯識義章并ニ、因明四種相違義トヒキ□、□イテ後、問題ヲウタウナリ、

一、精義ノ時、第四重ノ答ハテ、後、牒ヲトラテ精義申上ヨト云、注記重ヲ

(16オ)

読テ、問役誰カシト云テ後、シラヘ声ニ牒ヲ取テ後ヲ、表白ヲシラヘ声ニ

云テ後、難勢ヲ上ク、シラヘ声ナリ、ニケ夜スル時ハ、初ノ夜ハカスルナ

リ、後ノ夜ハ略之、毎年コトノ様ナリ、

一、サシ声ノハシメニ<sup>スヘカラ</sup>■クハ御牒ヲ取テ難ヲ加ウヘケレトモ、只申セト云

テ彼難勢■条々アクルナリ、二問已下ハ只申セトハカリ云テ、難ヲクワウ  
ルナリ、

一、サシ声ハテ、○探題着座アラハ得略何様ニ候ヤラウト申後、結解ヲスル、  
堅義ノ肝要ノ道理四五ヶ条ヲ云上ル也、若此義猶難アラハ、難シテ此義ニ  
テハ此難猶アレトモ、大旨此伝ニテハ、此分ニテコソアラメナント云テ、  
得略ノ句ヲ、シラヘ声ニ云テ、並ニ得タリト云、結解ヲハ詮句取ルトモ云  
也、初二内明ヲ云ヒ、次二因ヲ云、或又、前二因明ヲ云ヒ、後内明ヲ云、  
此両義也、何モクルシクハナキナリ、

一、二問・三問ニハ結解ナシ、因明涯分難シテ後、並ニ得タリト云ナリ、

(16ウ)

一、四五問ニハ、サシ声ノ難ナシ、四五問ノ間ニ何ニテモアレ、一ハ得タリ、

一ハ未判ト云ナリ、五問ニナリテハ、若シワスル、事モアル間、近年ハ皆

四問ニテ一ハ得タリ、一ハ未判ト云テ、五問ハ問題ハカリ答テ後、○《申上  
ヨト申ス、註記申テ後ニ》、並ニ得タリト云ヘハ、註記又并ニ得タリト云、

彼十題ノ内九ハ得タリ、一ハ未判ト註記云時退出スルナリ、

一、詮句取ルコトハ以上セヌ事モアリ、快尋擬講丁卯年維摩会ニ以上セラレス、

実演擬講初夜ニハシテ、第三日昼堅義ヲハセラレス、セヌモクルシクハナ  
キナリ、サリナカラ同ハスヘキ也、

一、申上ヨト云事ハ、五ヶ問ニミナアルナリ、

## (17オ)

- 一、探題退出ノ後ハ、得略何様ニト云事ナシ、只精義得略ヲ、判スルナリ、  
 一、已講二人渡ル時ハ、薬師寺・法隆寺ヲ加テ立問役ノ人体、十一人アル時ハ  
 三ヶ寺脇次二十人請シテ、設ヒ上ナレトモ今一人ヲハ薬師寺・法隆寺ノ間  
 ■聴衆ノ末ヲ一人末ノ夜ニナスナリ、

- 一、松林院探題ノ時、  
(詮句トル) ■■■ ■シラヘノ時、凡ソト云言ハカリ、シラヘ

声ニシテ、其以後ハ指声ヲ以テ取ラル、東院ノ時モ加様ニアリケルカト覺  
 ル也、加様ニスル事モアルナリ、此程セラレツル様ハミナ (結解ノ時ハ) ■■■ ■シ  
 ラヘ声ナリ、

- 一、論匠ノ時ハ、問題ノ (答ヲサシ声ニ) ■■■ ■云、牒モサシ声ナリ、問題并第三重ノ難、

第二重ノ答ヲハ ■牒モ難モ、牒モ答モミナウタウナリ、牒ノ後サシ声ニ大  
 旨カヤウニ申スカト云也、難ノハテ ■■■ ○《サシ声ニ此等ノ難ヲ》審  
 定シテ分明ニ答申セト云、答ノハテニハ全ク相違ナシト云也、

已上勅使坊ノ番論議聴聞ノ分記之、

## (17ウ)

- 一、鑑取御請ノ請取トリニ来タル時、ヤケ石代トテ所望、日供下行ナキ間、難  
 義ナレトモ別儀ニテ十五文下行候畢、

- 一、松林院長懷・西室房顕得業ヲ被精之時、第四ノ答ノ牒ヲシラヘ声ニ取テ、  
 次ニ自謙ノ句アリ、其後第五重ノ難ヲスル時、凡ソ字ハカリヲシラヘ声ニ  
 シテ、其後ハ只指声ノ様ニシテ後ニシラヘ声ニシテ、文理分明ナラネトモ

大綱ソムカサル由ヲ云テ、並ニ得タリ云々、歎徳ノ句ハナシ、

## (18オ)

嘉慶元年〈丁卯〉十月十日維摩会始行

- 一、初夜堅者安樂院淨識房得業、世俗熟調、捧物代三百文、  
 一、第二夜堅者浄名院〈良家〉、世俗捧物二百文下行、  
 一、第三日昼堅義二位得業光暎〈良家〉、世俗捧物二三百文下行、  
 一、第三夜堅義慈恩院兼覺〈良家〉、世俗捧物二百文下行、  
 一、二百文本院ノ威儀講師房ニテ下行、

- 一、粥土器代二百文、講師方ヨリ下行、両御所ノ御講師ノ時ハカリアル事也、  
 一、大坊仕料二百文、一乗院講師之時下行、禪定院講師之時無之、  
 一、第四夜堅者善兼筑前得業、世俗捧物六百文下行、  
 一、第五夜堅者西室殿房顕得業、世俗捧物二貫文下行、

## (18ウ)

- 一、別当坊非時供十四日ノ夜世俗熟調下行、捧物五帖十五日朝下行、今三帖不  
 足十五日夜ノ出仕ヲ (略シテ) ■■■ ■押テ東大寺丁衆訴訟、然ル間別当西南院十六  
 日朝必下行申ヘシ、先此夜ハ出仕アルヘシト云状ヲ出サル、其時出仕畢、  
 十六日朝今三帖下行、合八帖下行候畢、

(付箋)  
 「威儀供事」

- 一、講師坊ノ威儀供四百文下行、平講師ノ時ハ只二百文下行、今度禪定院ノ御  
 講師ノ故ニ今二百文加増也、



一、力者ワラウツハキハ、衣袴・カリキヌヲ、コナタヨリカシテ、外ニ百文ツ、下行、此外力者ワラウツハキ、從僧・中間一人ノ中エ威儀供一前下行スルナリ、中ニテワケテトル二百文ヲ惣ノ中ヘ下行、

(19オ)

聴衆

助擬講実演 帥擬講快尋 寛忠 専曉 唄役  
曉円

弁玄 尋盛 賢春

探題西南院寺家

初夜堅者 淨識房得業弁祐 精義実演

遣虚存実、法差別

一問 実演、二問 寛忠、三問 曉円、四問 円長〔葉師寺〕、五問 尋盛

探題東北院權別当

第二夜堅者浄名院 精義快尋

遣相証性、有法自相

一問 快尋、二問 専曉、三問 英専三問 英専〔葉師寺〕、四問 弁玄、

五問 賢春

捨乱留能、違四

第三日昼堅義 探題東北院、堅義者二位得業〔光曉〕、精義実演

撰末帰本、違三

第三夜堅義 探題松林院〔新〕、堅者慈恩院〔兼寛〕、精義快尋

(19ウ)

一、講師大乘院、一、勅使 弁資国〔日野弟〕

一、第五日律威儀堂家法眼 平袈<sup>ツマ</sup>ニテ、講師威儀ニ参、何ノ講師ニテモアレ必参スル也、

一、第五日ト結願ノ十六日ト毎度将童アリ、

一、十六日講師御社参依雨延引、十七日ニ御社参アリ、新車ニ為ナル、

一、十六日御坊人延年ノ勤仕シハ、雨ニ依テ延引、十七日夜於法雲院ニ延行、皆修学者、共遊僧ニナル、道ノ遊僧ハマシラス、

一、第六夜日夕座、講問結願ノ後、丁衆・綱所、会堂ヨリスクニ講師坊ニ参ス、

講師御出アリテ、御着座、法服ニ平袈裟ナリ、丁衆ハ下ニ立ツ、興福寺ノ已講サシ声ニ歎読申ス、講師御返答アリ、其後丁衆退出候畢、両御所ノ御講師時ハカリアル也、一乗院ノ御講師ノ時ハ歎読句ヲハ、ウタワ

(20オ)

レケルト人物語アリ、

有法差別

一、第四夜堅者善兼得業、探題權別当東北院

法自相

一、第五夜堅者房頭〔西室殿〕、探題松林院

一、勅使坊ノ番論義ノ時、御匠衆ハ檜扇ト念珠トヲハ、本座ノ床ニヲキテ、論匠ノ座ニ坐ス、

(20ウ)

嘉慶二年〔戊辰〕十二月十六日維摩会始行

新探題、専寺他寺御兼

政所一乗院

權別当松林院長懷法印

東北院円俊

御方

已上一床三口、先代未聞事ト云々、

勅使 中御門宣俊 講師喜多戒壇長雅

新

初夜堅者浄恩房得業 精義少納言擬講弁玄

第二夜堅者松林院同宿大納言得業光雅 精義擬講実演

第三夜堅者浄名院大納言得業円範 精義擬講弁玄

一、北戒壇講師之時、非時供二百文之外、粥土器之代二百文下行

(21才)

嘉慶三年〔巳〕十二月十六日維摩会始行

講師修南院実惠僧都 勅使中御門宣俊

寺家一乘院 権別当松林院長懷法印

新

探題大乘院〔専寺・他寺兼〕 題請事ハ御代官松林院宿坊西院工行畢、

初夜堅者源信房得業〔法差別〕 精義実演已講

第二夜堅者大納言得業教家〔有法自相〕 精義弁玄已講

第三日堅者大納言得業教俊 精義実演已講

第三夜堅者無之、

第四夜堅者重俊〔東大寺、円教断成、有法差別〕 精義禪定院

第五夜堅者弁融〔東大寺、智障断位、法自相〕 精義禪定院御代官松林院

(21才)

一、初夜堅者世俗熟調、捧物代三百文下行

一、第二夜堅者世俗捧物二已上三百文下行、結句遅々比興、

一、第三夜堅者世俗捧物二百百文下行

一、第四第五夜堅者各六百文充下行

一、二百文講師坊非時供下行

一、本院威儀供下行ナシ

一、別当坊非時供生料百文下行、厚紙八帖捧物下行

一、油物七ヶ夜分下行

(22才)

一、明徳元〔庚午〕維摩会延引之畢、年内二始行無之、

明徳二〔辛未〕年自三月廿四日維摩会始行

寺家大乘院 探題大乘院〔専寺〕 北戒壇長雅〔他寺〕

勅使日野資国 講師東北院御方円俊

初夜研学堅者訓専〔春禪房得業〕 精義弁玄擬講

一問 弁玄、二問 善兼、三問 実徹〔薬師寺〕、四問 賢春、五問 重俊

(22才)

第二夜研学一乘院新御前 精義実演律師

一問 曉円、二問 円長〔薬師寺〕、三問 尋盛、四問 覚祐、五問 弁融

一、貴勝御堅義ノ時、末寺二問役勤仕、近年更ニ無其儀、今度は初也、若上古

有其例歟、不審ト云々、

一、第三日加人堅者西南院ノ忠家〔大納言〕、精義実演律師

一、第三夜寺分堅者当年闕之畢、

一、第四夜堅者專曉（弁五師、東大寺）、精義北戒壇長雅

義名拝礼共ニ被申請無其儀云々

(23オ)

一、第五夜堅者依無人体闕之畢、

一、六百文、初夜世俗捧物代、元々初夜研ハ熟調当年生料、結句代物少分比興ト云々、即牒申之畢、

一、第二夜捧物厚紙七帖、杉原三帖、緒皮二足、世俗代六百文

一、第三日世俗物已上四百文

一、第四夜世俗捧物代六百文、堅者弁五師ニ賢春分ヲ助成ニ申之畢、

一、二百文、講師坊非時供

一、二百文、講師坊粥土器代、貴勝盛花ノ時ニ限ル歟、

(23ウ)

一、別当坊非時供代百卅文、同捧物雜紙五束、厚紙三帖、平絹ノ三ワリノ衣帶

一スチ

一、八十五文、本院ノ威儀供

一、廿文、丁ノ代下行

一、油物七ヶ夜ノ分下行

一、当寺ノ御寺務ノ助成ニ、新袈裟正体ナキ間、法花会々料ヲ以テ人別半分充

下行、聴衆ハ一貫五百文、已講ハ二貫五百文也、僧綱ハ四貫文ニテアルヘ

キ処ニ、助律師固ク被歎申間、力ナク一貫文ヲ闕シテ

(24キ)

七貫文下行候畢、余聴衆・已講ハ半分ツ、下行

一、一床僧綱出仕ハ從僧二人・大童子二人（如木、実ヲ入）、然ルニ助律師・大童子一人ニテフタコナリ、実モ入ラス、人数モ減比興ト云々、

一、僧綱精義ノ時ハ、題請ニ探題坊へ行カスト云々、然レトモ当年ハ探題ヨリ

参ヘキ由、兼日ニ承ル間、助律師モ参シ畢、已講モ同上ニテ、ナキ夜ハ題ヲハ請スト申伝タルナリ、当年先紀ニ異スル事小々アリ、

(記)

一、弁玄已講唄ノ座ニ当レリ、注記ノ方ヘ相尋ヌル処ニ精義役勤仕スル程ノ人ノ唄役勤仕ノ事、無先紀之由申ス間、

(24ウ)

善兼ハ円長ヲ一人撰テ、上三床ノ末ヨリ三番ナリシカトモ、弁玄ニ座ヲ居カエテ、善兼唄役ヲ勤仕畢、

(付箋)

「

一、三札ノ已講ハ両寺ノ已講ノ中ニ未已講勤仕スルナリ、

一、宿坊ハクホ(窪)転経院、弁玄・曉円・弁融・賢春四人同宿、弁融上下五人飯雜

事等賢春沙汰ヲイタシ候畢、

一、夢見ノ題ノ新紙ハ一乗院ノ探題ノ時、コワ杉原、大乘院ノ御時ハタカ檀紙

ナリ、イツモ如此歟、又此門主御時、自ラ如此歟、

一、三札ハ初日ト結日トニアリ、已講ハ後戸ヨリ東ヘマワル、東ノ札盤ニ上リ、寺務ハ西ノ札盤ニ上デ、三札ヲ札盤ノ上ニ

(25キ)

テシテ札盤ニ着座ス、勅使・綱所已下来テ、行香ヲトリワタシテ後、寺務ト已講ト<sup>(寺務)</sup>■札盤ヨリ下テ立テ替テ、寺務ハ東ノ札盤ノソエニ南向ニ立テ、已講ハ西ノ札盤ノソエニ南向ニ立ツ、行香ヲ引時、左ノ手ヲ仰ケテ大指・頭指ヲ捻シテ供養ノ印ノ様ニシテ、行香ヲ請テ火舎ノフタヲ樂人以テ来ル時、香ヲフタニウツシテ、又已講ハ東ノ札盤ニ上リ、寺務ハ西ノ札盤ニ上テ着座ス、綱所鐘ヲ打ツ時、札盤ノ上ニ立テ、鐘ヲ合テ六度ト■札拝ス、サテヤカテ札盤ヨリ下テ、已講ハ後戸エ廻テ本座ニ着座スルナリ、

(25ウ)

明徳四年十二月十六日ヨリ維摩会始行

勅使 経豊<sup>トヨ</sup>〈小河〉 専寺探題長懷僧正〈松林院、寺務〉

講師 円尋〈東門院〉 他寺探題実恵〈修南院〉

平一床

会初

長雅僧正〈権別当、北戒壇〉 円俊大僧都〈東北院御方〉 隆俊〈中納言律師〉

新

初夜研学堅者宗弘〈賢舜房〉 精義賢春擬講

一問 賢春、二問 長寛〈薬師寺〉、三問 覚祐、四問 賢弁、五問 経音

(26ナ)

新

第二夜研学堅者快秀〈小将督〉 精義善兼〈筑前已講〉

一問 善兼、二問 長盛〈薬師寺〉、三問 弁融、四問 宗英、五問 賢弁

一、御寺務助成減少、平丁衆ハ二貫文宛、新精義兩人ハ六貫七百六十四文宛下

行、〈本法ノ時ノ二三分一ヲ御減也、〉

一、唄師ハ覚祐〈帥得業〉

一、宿坊ニテ從僧・力者・下部等ノ中へ酒初中後ニ下行、

一、初夜堅者威儀供捧物代六百五十文

〈此内五十文ハ已講ノ加分、研学ハ熟調ニテアレトモ、当年世間ツマリ、又月迫ノ故ニ生料ニテ下行〉

(26ウ)

一、第二夜堅者世俗捧物代四百文下行、〈此外五十文已講加分〉

一、東大寺堅者只一人兼俊大進得業第四夜ニ勤行之畢、世俗捧物代六百三十文

下行、〈此内三十文ハ已講ノ加分也、賢春之自分大進得業ニ助成申候畢、〉

一、本院ノ威儀供八十六文下行、

一、二百文講師坊非時供、

一、別当坊ノ非時威儀供代百卅五文〈捧物代二百四十文、平ハ捧物代六十文〉

一、平丁衆別当坊非時供世俗百卅五文、捧物百六十文良家モメサル、

一、本院威儀供、弁ニ講師坊ノ非時供ハ良家ハメサレス、

(27ナ)

一、日供餅代一ヶ日分ニ二百文下行、〈十二月廿一日安主ノ方ヨリ下行、良家モメサル、〉

一、卧兔ハ七ヶ日ノ分時下行、

一、油五合下行〈一合ホトアルカ、〉

一、炭籠少々、薪少々下行、

一、一乗院ノ新御所聴衆ニテ御出仕ノ時、初日ニハ衆会所ノ石壇ヨリ惣ノ丁衆

ヲリス、寺家ノ出仕ノ時ハカリヲル、後日ニ御前ヨリシカルヘカラサルヲ由ヲ、注記ノ方ヘ仰セラレテ、結願ノ時ハミナヲル、

一、一乗院立問役ノ御時御出仕之時ハ、三四ノ床ノ着座ノ丁衆三十床ヨリ下<sup>(リ)</sup>御着座ノ後床ニ上ル、

(27ウ)

一、サカタノ新加供十二月廿七日ニ口別三百五十文下行、

応永元年〔甲戌〕十二月十日ヨリ大会始行

勅使資国〔日野〕 講師隆俊〔中納言律師〕

一床七口

専寺探題

正別当〔松林院長懷僧正〕、権別当〔北戒壇長雅僧正〕、

実恵〔修南院法印権大僧都、他寺探題〕

円尋〔東門院大僧都〕、勝願院〔律師〕、憲覚〔慈恩院律師〕、

弁玄〔少納言律師〕

初夜研学堅者了音坊得業 精義賢春擬講

一問 賢春、二問 英専〔薬師寺〕、三問 覚祐、四問 兼俊、五問 宗英

(28オ)

第二夜研学大乘院新御所 精義弁玄律師

薬師寺

一問 尋盛、二問 長寛、三問 弁融、四問 賢弁、五問 公弁

第三日 加人 寺分 共闕畢、

第四夜堅者経音〔中納言得業〕 探題修南院

一、初夜堅者捧物六束三帖〔ヲ、カソニテユウ、已講加分一束、世俗代三百五十文〕

一、第二夜堅者捧物六束三帖〔三ワリノ平絹帯二筋ニテユウ、已講加分、束、

世俗代四百文

〔付箋〕  
「儀供請之」供事」

一、両御所ノ威儀供ヲハ僧綱モ良家モ請ラレ候由、円範ノ日記ニアリ、今度モ

即下行候畢、僧綱ノヲハヲ<sup>(送)</sup>クラル、事ハナシ、コナタヨリ請ニヤル、弁玄

律師二十束、五帖帯ニテユイテ下行、帯ハ平ト同事也、

(28ウ)

一、別当坊非時供ハ僧綱モ良家モ請ラレ候畢、

四百卅文僧綱、三百七十文已講、平二百九十五文

一、本院ノ威供二百文下行〔僧綱ト良家トニハ下行ナシ、〕

一、講師坊非時供二百文下行〔大番仁弼土器代トテ二百文下行、是ハ尊勝青花

ノ時アリ、只ノニハ是始也、〕

一、第四夜堅者中納言得業威儀供・捧物代六百文下行〔已講加分卅文〕

一、寺務御助成〔新袈裟〕平丁衆二貫文、已講三貫三百卅文、僧綱七貫文下行、

後年ハ式ニ本法ニ御下行アルヘキ由、御教書ヲ出サレ候畢、未進モ後年ニ

出スヘキ由ヲ、御教書ニノセラレ畢、

一、僧綱・良家モ日供トハタノノ下行物ハ皆ウク、但シ僧綱ヲハ、クシハタ

ノヲトリテ、クシ請テヲクル、七ヶ夜ノウケ一ヶ夜ヲ口クシトル、

(29才)

応永二年〔乙亥〕自十二月十日ヨリ維摩会始行

勅使 権右少弁量光 講師実雅〔大納言僧都、松林院〕

一床五口

専寺探題

政所権僧正長雅 権政所実恵〔権僧正〕 円尋大僧都〔他寺探題、東門院〕

実円 〔報恩院〕 隆俊僧都

初夜堅者嚴尋〔松輪院〕 精義尋盛擬講〔新〕

一問 尋盛、二問 長盛〔薬師寺〕、三問 重俊、四問 弁融、五問 賢弁

第二夜堅者〔西南院〕 精義賢春擬講

(29ウ)

薬師寺

一問 賢春、二問 覚祐、三問 長賢、四問 兼俊、五問 隆盛

第三日寺分 加人堅者闕之、

第四夜堅者宗英〔但馬得業、東大寺〕 精義円尋〔新探題、東門院〕

第五夜東大寺堅者当年闕之畢、

一、初夜堅者世俗奉物代六百五十文下行〔此内五十文已講加分〕

一、第二夜堅者世俗奉物代七百五十文下行〔此ケ内五十文已講加分〕

一、第四夜堅者世俗奉物代六百卅文下行〔此内三十文已講加分、但馬得業二助成当年堅者也、〕

一、本院威儀供二百文下行、〔講師坊下行、初日〕

一、講師坊非時供二百文、於講師坊下行〔第四日〕

一、別当坊非供代百三十五文、同捧物代二百文〔此内五十文已講加分、捧物ハ

(30才)

訴訟ニ依下行〕

一、油物七ヶ夜分悉下行

一、寺務御助成新已講六貫六百六十文〔新袈裟方、尋盛卿擬講〕

一、寺務御助成古已講ハ三貫三百三十文下行〔賢春〕、平丁衆二貫文下行、

一、講師坊大番仁粥土器代ハ下行ナシ、結月ヲ押テ訴詔アレトモ無理ニ下行ナ

シ、比興ノ事也、

一、八斗日供餅代、円専房方ヨリタフ、沙汰人二百文下行、

一、五斗日供餅代、慶福丸カ申ニ、吉祥院下人力秘計、

一、宿坊窪転経院、宿坊ノ炭木油、惣雑掌賢春カサタ、

一、若狹得業ノ分ハ飯料モ賢春サタ候畢、

一、宿坊宿賃一貫文置〔武蔵得業・若狹得業・大夫得業・賢春〕四人シテ各二

百五十文出ス、

(30ウ)

一、宿坊ハ禪花坊ヘ申シ借用候畢、窪転経院、

一、青早、禪花坊ヨリ追借用アル間、精義夜一ヶ夜カケ候畢、

一、納袈裟ハ惣寺ケサ柚木ノ坊ニアリ、ソレヲ毎年借用申ス、

一、從僧ハ眉間寺ヨリヤトウ、三度ノ出仕ノ分ナル故ニ三百文下行、

一、力者福方・德行二人質<sup>(賃)</sup>ニ各百文、威儀供代各五十文、合百五十文ツ、下行、

一、一若丸・千寿丸・次郎丸ニ威儀供代各五十文宛下行、

一、宿坊人帥公同道、捧物代二百文進之、

一、坂田加供、応永二〔乙亥〕年維摩会分、次年応永三〔丙子〕十二月五日城戸辺ニテ下行、一石ノ代二百文下行アリ、

一、堅者宗英〔但馬得業〕坂田加供九分請之、代一貫八百文云々、

〔応永三〔丙子〕十二月五日去年宛分也、〕

(31才)

一、坂田加供応永三年分ヲ応永四〔丁丑〕十一月十八日ニ下行、等分三百文宛下行、堅者九口分二貫七百文下行、

一、応永四〔丁丑〕維摩会ニハ坂田莊ヒテリ文ヲハ、他寺ハカリヲハ、結願ノ

日引テ東大寺分ニハ引カス、先規ナキ事ナリ、

一、応永四〔丁丑〕維摩会別当東北院〔専寺探題〕・權別当修南院〔他寺探題大

乗院御方〕、東大寺堅者東室光海得業

聴衆

第二度

第二度

新 新

寛祐已講〔第二夜精義〕・重俊擬講〔初夜精義〕・弁融・隆盛・良俊・英重・

新

寛英・公弁〔帰丁衆〕

丑年

一、大会十一月廿日始行、夢見ハ廿一日白中、是又先規ナキ事也、

丑年分

一、坂田加供応永五〔戊寅〕十二月十一日ニ丑年分下行、三百三十文

(31ウ)

一、一床ハ八口、四床ハ八口、以外散花所一口、

貞治五年分

応永五年〔戊寅〕十二月十二日維摩会始行

初夜堅者兼弼〔順良房得業〕、精義權律師賢春

薬師寺

法隆寺

一問 長寛、二問 訓寛、三問 頼譽、四問 俊尊、五問 盛円、

新

第二夜堅者経憲〔少納言得業〕・精義大納言擬講〔公弁〕

薬師寺

一問 公弁、二問 長祥、三問 宗英、四問 豪弘、五問 寛英

勅使 宣俊〔中御門〕

一乗院ノ御代官

新

御寺務一乗院〔良昭〕・専寺探題修南院〔実忠〕・他寺探題〔松林院実雅〕

(32才)

一床五口

一乗院〔寺務〕・修南院〔權別当実忠〕・実雅〔松林院權大僧都〕・実円〔報

恩寺權少僧都〕・賢春〔權律師〕・講師憲寛〔慈恩院〕

一、初夜精義役寛祐擬講用意処ニ、俄ニ違例ノ間、堅故障之畢、既ニ大会及違

乱、自寺務堅被責伏之旨、無力、十一月十一日ニ領状申畢、○《十一月》

十九日ヨリ法花会始行、第四夜精義賢春勤仕、一問因明有法差別ハ大会ト

同也、旁依計会、如形大会精義勤仕畢、

(32ウ)

一、因明ハ大綱ハ少納言僧都ニ談合、大略ハ自見也、内明ハ一向自見、堅者以

外不聴之間、問答率爾ス、大概難ヲ加畢、

僧綱ハ世俗不請之、 七 小箱二入

一、初夜堅者ハ、雑紙八十帖上積三帖ノ代七百文下行候畢、送文ニテ堅者方アリ、送之、

一、第二夜堅者ハ、雑紙八十帖上積三帖ノ代合五百文下行〔送文ニテ堅者方ヨ

リ送之、

一、第四夜東大寺堅者筑前得業〈英重〉捧物代三百六十文被送之、

一、一貫五百文学生供皆下畢、

一、新袈裟方助成七貫文下行畢、〈本ハ八貫文也、〉

一、精義夜退出ノ時、中綱二人松明ヲ取テ、宿坊マテ送畢、

(33オ)

一、一問得略ニ一ハ得タリ、一ハ未判ト判セラレ畢、常ニハ一問ヲ一ハ未判ト云事ハナシ者、彼院家ニ加様ニシツケラレタル歟、不審、〈松林院、新探題時〉

一、本院ノ威供ハ僧綱良家ニハ下行ナシ、平ニハ各二百文下行、

一、宿坊ハ松院ノ下坊角院人申シテ借ル、大納言擬講・越後得業・弁得業・大

式得業〈東室〉・尾張得業・伊与得業・賢春、若人ニハ帥殿ヲ同道候畢、已

上八人同宿候畢

一、六百文堅者筑前得業ニ助成、兼日ニ送之畢、

一、宿坊ノ雑事ヲハミナ賢春沙汰候畢、〈炭一荷竹・油一升〈長器〉皆賢春カサ

タ、

一、惣從ノ中人三ヶ度ノ酒直ニ丁衆七人シテ、各百文出シテ、合七百文下行、

(33ウ)

一、瓶子一双・慈仙一箱・茶子一ホン・コフ三束・ハス三子・茶一大海、角院

ヨリ送ラル

一、瓶子竹、コフ一束・ハス一子・菓子一ホン・茶一大海、内方ヘヤル〈十五

日雪フル、

一、瓶子一双・サウメン一束・スサイ一ハチ・クシカキ五連、内ヨリタフ、

一、筒一・慈仙二箱・山ノイモ〇《廿本》・ハス三テ・菓子一ホン 〇《サウメ

ン》、東院ヨリタフ、

一、二貫文宿坊ニ置ク、丁衆七人各出、〈各二百八十三文宛出之候畢、〉

一、夢見ハ十二月十二日夜、修南院ヘ参之畢、

一、僧綱モ惣題ヲ請ニ参ス、

(34オ)

〔附箋〕  
□□様

僧綱一床〈以円範弁玄沙汰候畢、今度賢春以弁玄ノ例如此沙汰之畢、〉

從僧二人〈眉間寺行者二人カタラウ、鈍色・白裳二具、表袴二具、腰帷二具、五帖袈裟二帖、鼻広二足、シタウツ二足、檜扇二本〉

如木

大童子二人 千寿丸・十郎丸、フタコ二具〈此ニアリ、コワハリ一ハコ

レニアリ、一ハ唯心院ノシヤウシニ、シラ皮ノタヒ二足、クツ二足、如木、袖ヒトエノキヌ〈九尺、二百七十二文ニト

ル〉、実入賃〈二百文〉

從僧下人二人〈重直垂二具、エホウシ二具、ワラウツ二足〈カミマキ〉入

道丸・次郎丸二人、西勝院ヘヤトウ

大童子下人二人〈此ノ三郎丸、スワウハカマヲキスル、シヤウシモタス、

タイ松ヲモチノ下部一人、助人ニヤトウ

(34ウ)

御童子一人〈カリキヌ一具、ワラウツ一足〈カミマキ〉、彦四郎〉

力者八人〈衣袴八具、二具ハ此ニアリ、二具宰相殿ニカル、一具ハ東室帥

殿ニカル、二具連藏院、一具ハ唯心院ノ御力者キテ来、

德行・福万・徳寿・道性・隨徳・円仏、



一、力者六人（二ハ、三ヶ度ノ出仕ハカリニ来ル、宿坊ニヨカス、百五十文ツ、下行、コノホカハクイ物、酒ヲモノマセス、此分マテ堅約束候畢、）

一、徳行一人 宿坊ニヨキテ百五十文下行、

一、一若丸・千寿丸・十郎丸・彦四郎丸、別儀ニテ五十文宛下行、

一、入道丸・次郎丸・西勝院ヘヤトイ申シタレトモ、別儀ニテ五十文宛下行、

一、從僧二人ニ各三百文宛下行、

(35才)

一、草座ハ伊与僧都ニ借用、

一、手輿ヲハ武藏擬講ニカル、

一、輿ノ綱ヲハ唯心院ヘカリ申ス、

一、唐笠袋ヲハ院家ヘカリ申ス、

一、香爐箱居箱ヲハ、北室殿ヘ借用、輔殿ノ縁ナリ、

一、三装衣袋ヲハ角院ヘカル、

一、別当坊非時供ハ僧綱ニハ下行無由ヲ申間、円範僧都ノ例并ニ弁玄律師ノ時

四百卅五文下行、此例ヲ出ス処ニ、寺務ヨリ納所ノ方ヘ下行アルヘキ由御

教書ナサル、其時只二百文下行、  
捧物代

(附箋)  
「応永五年」

一、別当坊非時供、世俗代百卅文下行、僧綱良家供ニ請之畢、合三百卅文下行、

(35才)

一、略題ト云ハ、一ハ得タリ、一ハ略トモ云イ、又ハ一ハ未判、一ハ略ナント

云也、未判ト云ハ、一ハ得タリ、一ハ未判ト云也、ヒカ事ヲ申タラハ、略

題ニヲクヘシ、存知セサル事アリテ、ヒカ事マテハナクハ、未判ニヲクヘシト云々、

一、円範美濃僧都日記云、自文和元年十一月廿日、被始行維摩會、去貞和四年之分口、於此間堅者精義等事、在之、

一、興福寺両院家堅義之時、自当寺公請之名僧、雖為凡僧（已講・擬講）彼精義勤之、於久住者ニ令昇進（僧綱）勤之、仍予此五六年之間、令昇進任律師、仍幸得打、致其沙汰

(36才)

為隨分之光花者歟、 円範日記

一、円範日記云、別当坊非時供当寺僧綱出仕耶否耶云々不同、但先年覺聖法印為律師之時、為被定院堅義之間、為精義今日供奉彼會、其時予為擬講令供奉勤三ヶ夜精義、其時參彼非供畢、而彼仁當時不參之由頗申之比興也、但此条未審、次之間、今度予尋遣因幡法眼之處、可有出仕、則威儀供奉物令用意之、然而就役人難儀出来之間、可奉下行、不可有出仕云々、仍不參翌日威儀供奉物俱請之畢、為後代記之、

(36才)

一、講師坊粥土器代、当年ハ半減百文宛下行、良家ニモ下行、僧綱ニハ下行ナシ、

一、講師坊非時二百文下行、僧綱・良家ニハ下行ナシ、

一、僧綱ニハタノローヲハ下行ナシ、細々下行物按主方ヨリウケテ送之、

一、油物七ヶ夜分按主請送之、取鉢分ヲハ按主取之、結句今年ハ油物九ヶ夜分

送之云々、若按主之謬歟、

- 一、重服ノ物ハ童擦ニハ子細ナシ、今度モ十郎丸服者ナレトモ大童子ニツレ畢、
- 一、輕服ハ廿日忌中ナレトモ、服ヲタニヌキタラハ、法師ハ子細ナシ、維摩会宿坊故、僧ニハ子細アルマシ、只同道候ヘト野田ノ宮内祢宜ニ尋ル処ニ、クルシカルマシキ由ヲ申ス間、

(37オ)

- 今度帥殿兄ノ忌ノ内ナレトモ、服ヲヌカセテ同道之畢、興福寺ニハ輕服ノ忌内ニハ社頭ノ参籠ヲモスル間、惣シテ子細ナキ事也、東大寺忌マル、事不審ナリ、

- 一、三百文 帥殿ニ遣之、寺助成多ヲ取タル間遣之畢、

- 一、四百文 空蔵房布施（十一月十九日ヨリ十二月十八日マテ三十ケ日、大仏・八幡・春日マテ日参、日別十文充、又八幡宮興明興光十九所ニテ初日・第二日・ニケ日仁王經一座ツ、）

- 一、三百文 通証御房 堅持院ヘヤル祈禱布施、如形

- 一、日供代七斗 莊升定 ワニノ東莊ヨリトル、シキシ二百文タフ、

- 一、松林院一間ヲ未判ニヲカル、修南院後日ニ対面ノ時、物語ニ大ニ不

(37ウ)

- 不審ノ由申サル、若彼院家ノシツケニテヤ候ラント申セハ、何ニトテサヤウ事ハ候ヘキト申サレ候キ、

- 一、結願ノサ、ヤキノ時、從僧出シ伝レト申ス時、一床ノ未遂講ノ人ニ座ヲ立テ出ヘキ由、法恩院ノ実円僧都申サル、是又大ニ不審、後日少納言僧都ニ

物語申セハ、我一床ノ時立タリトモ覺ヘス、不審ト云々、

- 一、香爐箱ハ左、置箱ハ右ニヲクナリ、
- 一、開白結願ニハ、香爐箱・置箱共ニ是ヲ持テ床ニヲク、中間ノ夜ハ只香爐箱ハカリ持テ三■袋ヲハ、香爐ニ箱ニ入ル、置箱ヲ略スル也、修南院・松林院・法雲院ミナ如此、

(38オ)

- 一、雨フル時ハ、開結ハ会堂ノ後ヲヘテ石壇ノ上ヲ東西二分テ烈ヲ引也、今度結願ニ雨フリタレトモ、烈ノ時分ニ雨ヤミタル間、本式ニ烈アリ、深泥言（道）語斷斷、

- 一、行香ノ時ハ、一床ハ床ヨリ下テ、行香ヲ請ク、香ヲ返納シテ後、床ニ着座スルナリ、

- 一、坂田莊加供、応永五（戊寅）年始行分、三百五十文、応永六（己卯）十月八日下行、

- 一、応永六（己卯）維摩会十月十日始行、勅使中御門宣俊、寺務一乘院（專寺）探題代修南院、他寺探題報恩院実円、講師東院光暁律師

(38ウ)

- 東大寺丁衆 新精義初夜 新精義第二夜 弁融擬講、兼俊擬講、頼譽、賢弁、宗英、俊専、英重 帰丁衆

- 光海（東室、去々年堅者）、
- 他寺堅者、初夜頭覚房得業（浄瑠璃院）、第二夜良家（浄名院同宿）、
- 東大寺堅者隆盛（実相坊弁得業）、

一、応永七〔庚辰〕十二月十六日維摩会始行、

勅使豊光〔北小路舎弟〕、寺務実恵〔修南院、専寺探題〕

他寺探題憲覚〔慈恩院〕、講師訓專〔発志院住侶〕

東大寺聴衆〔弁忠擬講、兼俊々々、賢弁、宗英、弘豪、隆盛〔帰丁衆〕、英重、経範〔新丁衆〕〕

東大寺堅者頼誉〔越後得業、第一夜十九日〕

(39才)

一、東院円守、行着得業探題之時、一問ヲ一ハ得タリ、一ハ未判ト云ハル、法自相ニ付テ三<sup>ハ</sup>愚鈍義、隆光所引私記ニ見タル由ヲ申サレケル歟、別義ト云フ、愚鈍ノ別義ト了見スルニテコソアレ、分明ニ見タル事ナシト精義申サレケル歟、

一、東院光曉探題ノ時、堅者寛英得業、纂要扱、別而説フ仮説ノ伝ニテ別時ト申サル、此伝ニテハ別義ニテコソアルヲ、別時トハ申スマシキ由ヲトカメラル、一問ヲ一ハ得タリ、一ハ未判ト申サレ畢、

一、円範日記云、当堅者威供、於大乘院被行之間、四ヶ寺聴衆僧綱以下出仕之由、風聞之間、不審之余、以使者相尋奉行因幡法眼〔不知実名〕、当注記之父之處、可

(39才)

有出仕、仍威儀捧物令用意之、但就役人有違乱不可出仕、於威儀供奉物者、可下行之云々、翌日俱請之畢、

一、弁玄日記云、堅者威儀供、貴勝之時ハ請之由、円範僧都日記在之間、今度

注記ニ令申之處、被下行畢、雖僧綱貴勝間請ニ送畢、威供四百文捧物雜〔十束上品〕・厚紙〔五帖〕請之畢、貴勝外堅者威儀ヲハ、不請之也、

一、弁玄記云、別当坊非時供并禪定院威儀、今度以僧綱ノ例ヲ良家被請之畢、

(40才)

応永十一年〔甲申〕十月廿六日維摩会始行〔応安五年分〕

勅使〔權左少弁量光〕、寺家大乘院〔専寺探題孝円〕、權別当東門院、

訓專權大僧都〔他寺探題春禪房、発志院〕、賢春權少僧

都、乗雅權少僧都〔竹林院会始〕、已上一床五口

講師良繼〔浄名院、浄善房權少僧都〕

初夜研字聡義大法師〔新院〕、精義弁融擬講

薬師寺

薬師寺

一問 弁融、二問 祐円、三問 英重、四問 寛英、五問 繼寛

第二夜研字一乗院良兼、精義賢春權少僧都

一問 頼誉、二問 良俊、三問 盛円、四問 経範 五問 英玄

(40才)

第四夜堅者普門院秀経、精義訓專權大僧都

一問 二問 三問 四問 五問

第三日加人 寺分并第五夜堅者闕無之、

一、学文ハ九月末ニ五六日東院ニテ尋申畢、因内ニ共大略自見、不審事共、少々

尋申畢、

一、初夜堅者捧物雜紙百帖・上積三帖、代五百文被送之畢、

一、第二夜一乗院捧物紙一積・雑《紙ユカウ》十二束、杉原五帖《白クミ、ニ  
スチ》自是請ニ可送之処ニ、被送畢、慇懃御沙汰也、御威儀供ヲハ僧綱方  
下行ナルマシキ由ヲ申ス、奉行梨原弁上座方ヘ注記ヲ以テ、円範・弁玄僧  
綱ニテ大乘院ノ御威儀供請申タル例ヲ勘テ、彼日記ヲ出ス、旧記分明也ト  
テ六百文下行候畢、

## (二オ)

一、第四夜堅者普門院捧物代五百九十文被送之畢、平ハ各一貫文、  
一、智禪坊僧都探題時、自謙句ヲハ論義声ニウタワル、開白問者ノ表白声如シ、  
常ニハシラヘ声ニスル事也、何ニトテ加様ニ有ヤラン、定テ口伝ニテソア  
ルラン、余探題ノ時、更ニ不同之間、不<sup>(符)</sup>審也、先達ニ尋申ヘキ也、詮句  
取事ヲセラレス、得略句ハアリ、得略ノ句ヲ常様ニシラヘ声ニセラル、  
一、僧綱モ題請参ス、廿六日夕東室ヘ参ス、僧綱ノ事ハ必シモ参セストモト、  
御記ニモシルサレタル間、惣題ヲ御送アルヘキ歟処ニ、参タル条、神妙之  
由被仰、即惣題ヲ給畢、

一、講問役ハ東大寺僧綱已講等末寺三ヶ寺、已上四ヶ寺勤仕、今度問役ハ僧綱  
ハ遁ル、由、注記申ス処、会所ニテ若狭已講ニサス注記ノ未練ナリ、僧綱  
□問同先規ニ候、即今度モ用意由、返事

## (四ウ)

候畢、即賢春勤仕之畢、

## 一床

從僧二人 本童子二人・如木一人ハ幸若丸、一人ハ寿菊丸

力者八人 藁沓履一人《狩衣》

從僧ノ下人三人、円範、弁玄、并賢春、先年出仕ノ時ハ二人ナリ、直垂三  
具所持間、半ナレトモ、三人ツレ畢、

大童子下人二人《スワウハカマ、障子持》、続松持一人《次郎》

一、香呂箱、居箱、香呂、新院秘計、

一、手輿、新院秘計、法雲院輿ナリ、

## (五オ)

一、輿綱 西勝院ニ借用、

一、唐笠袋 院家、

一、大童子下人々体、ウツホヤノ夫、清房夫、鳥屋夫《大進殿ヤトウ》

一、大童子下人二人、西勝院下部、精義夜ハ《西勝院ヨリ一人、大東坊ヨリ一人》

一、別当坊非時供捧物上品雜八束、杉原五帖、紙横ニツム、平絹ニワリ、帶一筋

一、別当坊非時供、世俗料百三十五文下行、

一、油五合下行、三トホシハカリアリ、

一、蔓草・大根、七ヶ夜分下行、此内一ヶ夜分ハ駈仕取ル、僧綱ノ分ヲハ駈仕

之方ヘ細々請物ヲ請テ、一ヶ夜分ヲ駈仕取テ、六ヶ夜分ヲヲクル

## (五ウ)

一、油物七ヶ夜分下行、此内一ヶ夜分 駈トル、

一、イモ少々下行、

一、日供餅五ヶ夜分下行《此内一ヶ夜ハ餅廿枚、殘四ヶ夜一ヶ夜宛四斗代

三百十文、此内一ヶ夜駈仕取》

一、〔<sup>(貼紙)</sup>鑑取料物堅申間、別〕儀ニテ五十文下行、

一、鑑取ニヤケ石ノ代ト堅申ス間、別儀ニテ十五文下行事アトアリ、

(43オ)

一、続松百廿抱、宿坊へ持タセテ行、

一、力者五人、三ヶ度出仕、皆料二百五十文ツ、下行、此外ハ飯・酒等タフ事

ナシ、宿坊ニモヲカス、三ヶ度出仕時分ニ来ル也、

一、徳寿・徳行ヲハ、主人ニヤトウ間、下行物ナシ、去作別儀ヲ以テ五十文ツ、

下行候畢、

一、一若丸・福万法師・御房丸ニ別儀ニ各五十文下行、

一、宿坊ニ諦坊、鶴丸之縁ニテ借用、

一、尾張得業・帥得業・少納言得業・賢春・同宿藏人大進公、

以上五人同宿坊ニ同宿、

一、瓶子<sup>(竹)</sup>□、慈仙一箱、茶子一盆、茶一種、宿坊内方へ送之、

(43ウ)

一、フト三、マカリ二、蔓草少々、宿坊内へ送之、

一、薬師寺丁衆祐円、茶五袋タフ、宿坊内へ送之畢、

一、廿七日ニ慈仙一箱、餅一盆、茶子一盆、アメ、瓶子竹、角院ヨリタフ、

一、十一月一日、中院御舍利拝見候畢、南円堂内床同拝見之、香琳房法印同道、

一、一貫文、宿坊ニ置、尾張得業・帥得業・少納言得業、賢春四人各出、

一、宿坊炭・油等、皆賢春無サタ、

一、宿坊七ヶ日間雑事等、皆賢春之サタ、

一、〔<sup>(貼紙)</sup>西坊三郎・タマ丸、三ヶ夜〕ヤトウ、別儀ニ各三十文下行、

○右一行は貼紙下にある。

一、フト・マカリ十ヶ夜分ノ一斤、夜分駈仕取

(44オ)

一、ウツホヤ・鳥屋・公人一藹之下部、合三人ニ各三十文下行、

一、僧綱ハ衆会所向ノ経藏東ヨリ二間ノ間ニテ、トホリヨリシテ興ヨリ下ル、

開結共ニ同シ、帰ル時ハ、衆会所ノ壇ノ上ヨリ興ニ乗ル、精義ノ夜ニハ衆

会所石壇ノ下中ノ程ノ道ヨリ興ヨリ下ル、退出ノ時ハ、右陣ノ上衆会所ノ

南ノ辺ヨリ興ヨリ下ル、

一、門跡ノ御堅義ノ時ハ、御立義終テ後、精義門跡へ参スルヨシ御記ニアリ、

参セヌ精義モアリ、其ハ所存アルカ、又ハ無沙汰歟、今度ハ参シタラハ、

可然之由、東院ヨリ内々申サル、参セハ梨原ノ弁上座ヲ尋ヌヘキ旨仰セ

(45ウ)

セラル、間、御堅義以後、参セントスル処ニ、堅義以後、会堂ヨリスクニ

御堅者勅使坊ヘナル、其後探題坊東室ヘ拝礼ニナル、其間ハ精義賢春、会

堂ノ後門辺ニ待申テ還御ノ後、一乗院へ参ス、弁上座引道シテ南へ出タル、

中門ノヤウナル廊ニ、御所、元ヨリ御着座、御前ノイタニ蹲居シテ賀申テ

退出候畢、

一、杉原<sup>(X11)</sup>一帖・厚紙一帖・雑紙一束、用途三百文大進殿ニ進ス、

一、厚紙一帖・雑紙一束、大式殿ニ進ス、

一、厚紙一帖・雑紙一束、北室少納言殿ニ進ス、中坊ノ留守、

(45オ)

一、精義事、一問ハ第四答畢、探題着座ノ時ハ、探題申上ヨト仰セラル、探題退出ノ時ハ精義云フ也、註記申上テ後、精義第四ノ答ヲ牒■ニ取テ、其後自謙ヲシラヘ声ニチトヒキク、アケツ、ヲロシツ云フ也、堅者ヲ歎シ自身ヲ卑下スル心也、自謙句畢テ、第五ノ重ノ内明・因明ノ難ヲシラヘ声ニ云也、

一、一問ノ語ノ重ヲワリテ後、探題着座アラハ、得略何様ニ候ヘキヤラント申スヘシ、若探題退出アラハ、案内ニ及フヘカラス、探題兎モ角ヲモト仰セラル、其時因内二明肝要ノ難ヲ申上テ《サシ声也》、堅者申ス旨ハ加様ニアレトモ「ハ加様事共アルナント難ヲ加ウ、サレトモ大■綱ハ」  
「ント云テ、並ニ得タリト云也、若堅者ヒカ事ヲ」  
「」

(オウ)

事アラハ、タカイタル様ヲ、申シ頭スヘシ、未「アレトモ、東大寺精義トシテ未判事ハ、当時ハ■」「ヘキ歟、ヒカ事ヲ申タラハヒカ事条々ヲ申シ、頭「潤色ノ儀ニテ並ニ得タリト云ヘキ歟、先達ニ尋申ヘシ貴勝候事ハ、タトヒ、カ事ヲ仰セラルトモ、サノミトカメ申ス事アルヘカラス、

一、語句取畢後、得略ノ句《歎徳ノ句トモ云也》ヲシラヘ声ニ申スヘシ、其後并ニ得タリト云也、

一、自謙歎徳句ハ、探題以上ノスル事也、ソレモニケ夜ノ時ハ始めノ夜ハカリ

也、

次夜ハナシ、并精義ハ貴勝ノ御時スルナリ、只ノ堅者ニハナシ、慈恩会・三蔵会ノ貴勝ノ御時ハミナアリト云々、

一、一問ノサシ声ノ初ニスヘカラクハ、牒ヲ取テ難勢ヲ

(オオ)

加ウヘケレトモ、只申セト云テ、其後難ヲ加ル也、

一、二問以下ハ、詮句取事ナシ、指声畢後、置得タリト云也、

一、二問以下ノ指声ノ語ノ重ノハシメニハ、只申セト云也、声色ハチトソレタルヤウニ云ウナリ、

一、四問以下ハ、立問役畢テ後、精義申上ヨト云、註記申上テ、ヤカテ精義、並ニ得タリ云也、

一、貴種ノ者時ハ、精義モ立問役モ申サルト云也、被字ヲ加ウヘキ事ナリト云々、

一、貴種御堅義ノ時ハ、十題共ニ並ニ得タリト云テ、皆得題タルヘキ旨、兼日

ニ東院申サル、今度一乗院良一御堅義ニ、賢春さ様ニサタ申シ畢、大方ハ

不審ノ事也、円範僧都、其僧都ノ日記ニ不見、東院ノ物語ハ、ムロ殿僧正

ノ御堅義「」

(オウ)

精義常様ニ九題ハ得題「□申□□□」「務ノ時、東南院ノ

御立義アリ、他寺ノ探題十題共ニ得題置ク、其時御寺務ムロ殿ニテ御座ア

リ、後日ニ註記ノ日記ヲメサレテ、常ノ様ニ九題得題一ハ未判ニ書直サル、

其時ノ様ハ加様ニアリシカトモ、近來ハ皆十題ナカラ得題ナルヘシ、但シ  
他寺ノ精義常ノ様ニサタ候トモ、精義ノ越度マテハアラシト、東院申サル、  
旧記ハ勘得タル事ニナケレトモ、今度ノ精義役事、毎事東院ヲ指南憑申ス  
間、彼ノ申サル、ニ任セテ十題共ニ得題ニ置申畢、大方ハ不審ノ事也、能々  
先達ニ尋ヌヘシ、

一、一乘院殿御立義ニ立者ノ威儀供、僧綱ナレトモ、立者

(裏表紙見返し)

貴種ニテ候由アル間、請之畢、奉行梨原ノ弁上座、僧綱ハ訴ヘカラサル由  
ヲ被申間、円範僧都、禪定院御立義ノ時請申畢、此礼ヲ以テ弁玄律師、禪  
定院ノ孝円ノ御立義時認申シ畢、此礼ヲ申ス間、奉行梨原弁上座ヲシテ御  
威供、<sup>(儀脱)</sup>賢春僧都ニ下行之畢、

(異筆)  
「相伝澄芸」

(裏表紙)

(澄芸筆力)  
「初日

書様

請 維摩会本院威儀供事

合

真名

東大寺丁衆大法師 分所請取如件、

年号 日付

請使各書之、」

## 九 愚記（東大寺図書館薬師院文書二・二五六号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

（表紙）

亮信

愚記

（異筆カ）  
「〔法花会・維摩会事〕」

相伝□□□

（表紙見返し）

（異筆）  
「〔伝領実英〕」

（1才）

康正二（丙子）十二月廿日ヨリ維摩会始行

一、廿日夜九打程ニ鑑取御請持而来畢、御ウケ、重而ト分テ写シ了、

一、夢見ハ開白已前ニ悉アル事モアリ、今度ハ不然、毎度堅義已前ニアル也、

異説歟、

一、開白廿日夜八打程ニ有之了、

一、廿一日ニ御請ヲ故実ノ者ニ持セテ□□□遣シ、専当ヲ尋サセ、ハタ／＼

「□□□」

（1ウ）

一、廿一日夕方夢見アリ、法□□

「西向ノ広縁ニテ、先ニ字

ヲ被請□其□題ヲ被出了、

一、廿一日初夜夕座之時、勅使出仕アラハ、ケイヒチノ声ヲ聞、四床衆ハ西

戸口ノ外ヘ出テ、其後散花師進ヲ見テ、内ヘ入、スクニ行道スルナリ、但

此儀、或ハ堅義ノアル夜計ナリ、毎度可得其意、

一、初夜（廿一日夜）研学（勸修坊ヨリ）廿二日ニ六百

（2才）

文請了、

一、第二夜堅者（東門院ヨリ）廿三日ニ五百文請了、

一、本院キキ供、講師坊ヨリニ百文、廿三日ニ請之云々、存知而廿四日ニ請了、

一、日供一ヶ夜分ヨセノ庫（莊嚴院ノ前ナリ、又者大炊敷）ヨリ廿三日ニ請了、

一、炭・油、フトマカリ続松、同処ヨリ請「□□□」

一、第三夜（廿三日）空帰諸衆西ノ「□□□」

（2ウ）

四床衆計而諸衆雖入堂「□□□」

「戸口ノ北ノワキニ立テ相待、散花

□ロヘンヘ進ムヲ見テ、内ヘ入、スクニ列テ行道スルナリ、堂童子来テ、

縦雖催如此、

一、廿四日、四百文西南院引物請了、

一、廿五日、二百文講師坊キキ供、講師坊ヨリ請之、

一、廿五日、前当坊（非時供）  
捧物二百文、福智院ヨリ請之、

（3才）

一、廿五日、フト四、マカリ四請之、

一、為唄役四床聴衆三床ヘ上ル、不可然之由注記申云々、

一、講師坊粥時、依未前不可下行云々、

一、廿八日別当坊非時供百文請了、

（二行分余白）



一、廿<sup>(七日)</sup>《■》六日、講問ハカリ二座□」

一、第七日結願仰」

(3ウ)

長祿四年〈庚辰〉十一月十日□□□」

一、修南院〈寺家〉出仕之時、諸衆参向アリ、

一、講問役送表白因内論義歌イハテ、後ニ沙汰之、返々論義之後ナリ、

一、已講一藤開口ノ問者沙汰之、因内論義ノ前後ニ表白在之、返々論義ノ後ニ  
モ前ニモ表白在之、僧綱精義アレハ、其人之役也、

(4才) ○白紙

(4ウ)

文明五年〈癸巳〉十二月十一日ヨリ維「」行

一、十八日、御請鐘<sup>(取脱)</sup>来深更之間、御請重而ト云テ返了、次日来ル、御ウケ渡之、

下部衆代廿文ツ、下行、一床ノ下行八百文ト云テ、取之、

一、廿日、初夜研学堅者〈賢□院〉引物六百文請之、料物トテ、又米一斗トル、

一、十日本院ニキ供二百文、講師坊ヨリ請之、一床ニハ無下行、道理令然歟、

一、一床ハ何方ナリトモ威儀供無下行、仍不可請之、

(5才)

講師坊粥時モ無下行、可得其意、

一、一床ニハ日供之内、一口馳土ノ下行物トテ、立用シテ不下行、馳土トハ何

ヲ云ソト、尋レハ一床ノフト・マカリ、日供ナント送り持テ来ル者ヲ云ト

云々、

一、貴種様ヨリ下行物ノ時ハ、○《カキリテ、》一床モキ供取之、旧記在之、

一、別当坊非時供公文所目代多聞院ニテ百文、廿三日請之、

一、同捧物百文同処請了、

(5ウ)

長享元一〈丁未〉閏十一月十<sup>(六日)</sup>「」始行」

一ノ床分ニ御請ナル、御ウケ申了、鐘取ニ寺升一斗ノ代七十文下行了、時ノ和  
市□」

(以下五行分余白)

(6、裏表紙見返し、裏表紙) ○白紙

## 一〇 維摩会日記（東大寺図書館一四二・四六八号）

（表紙ウワ書）

天八年

私注之

維摩会日記

聴衆宗芸

（表紙見返し）

一、天文八年講師修南院殿、勅使ハ町殿云々、

一、簡尺二十六日宿坊へ移而案内申、出世奉行ヨリ早々可参候由、観音院へ御  
 使者在之、古精義衆ハ簡尺ニハ不被参、但於有問役者、可被参也、各参候  
 之所へ、出世奉行東院ノ僧都、重衣五帖ニテ簡尺問題一ツ、御持アツテ、  
 面々ニ給訖已後、可有対面之由被仰、各参訖、二字之書様如前、

一、年戒事、年四十五、戒卅一と付訖、雖仮虚役、上ノ衆□□其通タルニヨツ  
 テ次第二付也、

一、堅間役当リ所ハ初夜五問也、雖然、春祐得業頗依侘事、第二夜二問ニ替懃  
 仕之、

一、寺助成式眞文、当下行也、於地藏院借用云々、

（1才）

天文八年（己亥）十二月十六日大会始行

宿坊於新坊少々注之、

十六日夜於会堂之内触之、

一、十七日本院威儀供講師坊ニテ請之、二貫文宛也、請取一紙ニ認之、立紙無

之、力者請使也、書様

請 維摩会本院威儀供事

合

右、為東大寺聴衆宗芸得業分所請如件、

年号月日

請使丸判

一床出仕体ハ不請之、無威儀供故也、為覺悟記之、

（1ウ）

一、初夜研学（実言房）十七日夜遂業訖、翌日（十八日）於中院調鉢代下行之、  
 六百文請之、精義證芸擬講也、

一、十八日夜大乘院（尋円）御堅義、精義東大寺観音院（英訓法印）於一床懃  
 仕之、然処、一問役徳藏院（実憲）沙汰之处ハ、自問題も不聞候、剩至三  
 重四重者、一円無定也、依之堅者独所候也、四座聴衆悉以令仰失躰間、翌  
 日自大乘院ヨリ対注記御状在之、則注記以副状、年預へ被申送、其旨者、  
 堅間役一向無音之条、前代未聞也、可被処嚴科、万一於無沙汰者、自此方  
 可有成敗之旨也、然間、早朝令集会不被仰出以前ニ加罪科之由返答在之、  
 其後学侶ヨリモ書状在之、同篇之子細也、旁以□□

（2才）

之間、被処罪名畢、学侶之恥辱何事如之、当寺瑕瑾失面目訖、仍自第三日、  
 英嚴法印暫退而出仕如此、暫退之儀也、能窮明大芳被申請、此分ニ落着畢、  
 尽理之儀委細□存知処也、擬講ニ被暫退了、

## 第二夜

一、捧物事、前々雖為現紙以料可有御下行之由、被仰之間、一乘院御遂業之砌、威儀供五百文、捧物代四百六十文可為其通候歟之由、雖申、彼門跡ニハ相替之旨、被申、仍二色七百文被下行訖、當重以旧記可有愁訴歟、一度体ニハ百足被送訖、

一、第三夜寺分藥師寺十輪院行觀房遂業、捧物四百文下行也、於擬講加分二百五十文下行之、興福寺モ五足也、當寺ノ下行卅文加増如何之由、專寺擬講為分之由、明星院□内々雖被申、以旧記申分訖、若如專寺者、捧物等事四百文可下行之由、如内々申之間、其外ニテ落着了、

## (2ウ)

寺々ノ規式相替歟、先規連綿不可有疑貽也、

一、一床良家分無威儀供之間、平ノ衆六百文ナレハ三百文、其外ニ《一床ナレハ》律師・僧都等加階分ヲ加テ下行之處、余ニ少分之由、自東院殿雖被仰、是又旧記分明也、非新儀且々御無案内之故也、然間以旧記内々申分訖、《不限一床婦丁衆、何レモ粥土器代、良家分ハ無威儀供、》

一、講師坊威儀供二百文、同非時供百文下行之、何モ以請文遣之、書樣粗如本院威儀供歟、廿一日ニ請之、使力者也、於非時供無之云々、但專寺衆可有之由被申仁モ有之、能々可尋決歟、

一、別當坊非時供并威儀供可有下行歟之由申、經案内之處、威儀供ニハアラス非時供ニ可書之由申云々、如何之由雖存之、各員數同ナレハ不可苦之由、任申可書遣之由、被申候間、其□

## (3才)

彼役人等無案内之故歟、如近年私日記者、威儀供二百文・非時供百文見タリ、是ハ非本式以略儀如此下行云々、

一、第四夜堅者頼賢《觀音院》廿日夜遂業云々、宿坊寿福院、以外雪降、昼ノ程ハ雨、入夜雪ニ成ル、依降雨探題御出仕事、如何之由、依有沙汰遲々、雖然雪ノ分ハ御出仕アル事之由、依被仰相調訖、第四夜ノ夕座ニ堅者モ出仕也、講師御出仕雨儀也、出仕ハ如常、空帰リハ西ノ壇ノ上ヲ廻、後門ヘ廻テ御待、其ヨリ又廳而御出仕、講師坊ヘ御帰之時モ後門方ヘ御廻アツテ、北室ノ後ヲ御通アツテ講師坊御帰、但其時分講問役タルニヨツテ不起座間、委ハ不見、粗注也、勅使ノ御座モ最初ヨリ内ニ□訖、

一、拙者捧物等事ハ助成ニ遣之訖、

一、布施物下行之事、被詔之間、於祈坊下行也、於四床光明院禪師

## (3ウ)

西南院禪師御出仕、仍無威儀供之間、三百文ツ、下行之、是又旧記之趣也、  
一、当年政所ハ一乘院、探題御兼帶也、然時ハ、探題分ハ無下行、政所分也、是モ御記有之、北林院日記之内ニ在之、專寺ノ衆モ其通被申訖、彼門跡ヨリモ別ニ被仰儀無之、於權政所者、無出仕、雖然於捧物者、送進之、喜多院殿也、但一乘院殿御着座ナシ、於彼院家者、出仕無之云々、請文并折紙返事等不有之、

一、焼石代鑑取ニ廿文下行之、

一、○《廿二日終日》日供分一斗下行之云々、請文遣之、惣而御請ヲ進テハタノ

ト取替、其後日供下行之時ハ、其ハタ／＼ニテ請也、雖然近年自他不如  
旧記之間、多篇無法之重也、雖然

## (4才)

於今度者、種々歎申訖、是併祭礼之時伶人等糺明子細有之間、如此申歟、  
一、同日結願後夜過ヨリ始之、埴坊晨朝時分也、

一、所從下行事、從僧三百文、力者并藁《沓》履共二十疋宛也、今度ハ力者不  
召具、雖非本願不事闕也、其外二二百文、惣所從之中へ酒直而下行之、一  
人別ニ所從四人也、分配而五十文宛取之云々、然間、藁沓履ナントへハ五  
疋下行之、於中間者余少分之間、別ニ遣之、委細不能注置、宿坊礼ハ一貫  
文并樽料而百三十疋也、雜用共二五百八文宛下行之、於英嚴擬講者、闕請  
之間、無別所領故、宿坊ニモ不取居之間、於雜用之配當者、閣之、宿坊一  
ノ礼配當人數被加了、觀音院之内誓口裁判也、

## (4ウ)

一、結願以後埴坊之刻、宿坊ヨリ瓶子一食籠之立サマニ酒在也、

## (以下六行分余白)

天文六年分宿坊音信分

一、自木津、食籠一樽一持来、一、自井上、食籠樽来、

一、井上之次ニ御樽一荷食籠来、一、自井上而、上品樽一荷・焼餅一盃、聴衆

惣中へ云々、

一、自四聖坊、御樽一荷兩種来、

## (5才)

天文十六年極月十六日ヨリ大会始行、

講師大乘院殿、別当一乘院殿、權政所北院殿、

專寺探題一乘院殿、他寺探題東院兼範、

一、十六日、申見定簡尺仁可參之由、當日早朝仁催狀在之、仍其時分移宿坊案  
内申、則參上出世奉行修南院殿、題共ヲ懸テ後二字ヲ進之、其後御対面在  
之、

一、開白自後夜過始、退散之時、夜明訖（勅使御訴詔遲始故也）、

一、初夜堅義者戒藏院、精義宗助擬講、十九日夜勲仕之、調鉢代六百文請之、

一、平僧威儀供二百文、於講師坊請之、

一、粥土器代百文、同前講師坊請之、

一、十八日、第二夜研学西南院光口得業御勲仕之、一問予勲之、  
(宗莖)

## (5ウ)

翌日十九日調鉢代請之、五百文下行之、

一、寺分加任刑部卿得業勲仕、調鉢代四百文下行之、


一、寺分修南院殿勲仕之、調鉢代四百文下行之、

一、三百文、別当坊非時供請之、

一、六百文東大寺第四夜堅義信花坊勲之、調鉢代者、請之、廿日堅義在之、大

雨風也、雖然堅者出仕時分少晴云々、仍探題出仕候、無別儀、講師出仕者

雨儀云々、

一、至第六日、日供之儀、及訴詔、唄師之出仕抑留及九過之處、自當講兩奉行  
前、于拙者書狀在之、仍各申請、先以令同心、至結願、可及訴詔之

由返答、仍唄師出仕在之、

一、宿坊礼配当分百五十六文出之、礼百疋也、友清へ十足分配当云々、此外別  
二樽料者無之、

一、宿坊雑用二百六十四文在之、於宗助擬講者、宿坊仁不被

(6才)

座之間、不被出之、於宿坊礼者、人数二被加、是以外其通也、

一、焼石代廿文鑑取下行之、

(以下余白)

(異筆)  
「惣持院」

(6ウ、裏表紙見返し、裏表紙) ○白紙

一一 大会之記（東大寺図書館一四二・七九九号）

○紙背文書があるが翻刻は省略した。

（表紙ウワ書）

天正五年（丁巳）十二月 日

大会之記

専当慶印

（表紙見返し）○白紙

（1才）

天正五年（丁丑）十二月十六日大会御執行

一、御講師 大乘院殿

一、御寺務 大乘院（大御所様）

一、権別当 東北院殿

一、勅使 中御門殿（此時有官下向）

一、会始 西南院殿（宿坊一乗院殿）

（1ウ）

一、読師 愛染院長嚴房、下行三百文、此時東金堂寺役也、

一、会奉行 摩尼珠院・金珠院両御沙汰

一、注記 高天殿

一、初日十六日堂内出仕次第

四十聴衆御出仕也、

御寺家并他寺探タイ東北院殿・東林院殿御兩人共以御出仕也、

一、会終而行幸在之、

（2才）

一、堅者依無之、勅使を以、下二御着座也、行幸之時、内へ勅使御出仕、行香

之役ハ算主役、此時慶禪沙汰事、

一、諸催之事、鑑取沙汰事、

一、第二夜《十七日》初夜研学円城院并堅者堯禪房也、催之事ハ御前六人之内

末公人役、

一、堂内催之事、当講・勅使・読師・会始、専寺ノ探タイ、以上五所也、

（2ウ）

一、初夜ノ研学 下行物之事、

老貫文 奉物、式百八十文 雑紙ノ代、百文 粽ノ代、合老石三斗八升也、

御前六人、算主・堂達・侍兩人、十人ノ支配、一人別ニ老斗式升八合、此

内百文粽ノ代ハ算主・堂達兩人ノ支配、

一、当講下行三百文代米三斗、御前六人・算主、堂達・侍兩人、十人ノ支配人

別三升宛、第三夜ニ請取事、

（3才）

一、第三夜十八日、堅者金藏院ノ内中将公御前衆一献ニ付事、

一、催之事、如先夜ノ御前六人ノ内、末兩人沙汰事、勅使第二度マテ勅使坊へ

行、第三度ハ中室ニテ申事、読師第二度ハ宿坊へ行、第三度ハクワイ廊ニ

テ申事、

一、勅使へ第三度ハ注記声ニテ被申也、

一、堅者在之時、勅使ノテウ内へ小綱入事、注記コエニテ被申事、  
一、当講第三度ハ八ノ宗ニテ申事、

(3ウ)

一、他寺探タイ東林院殿御出仕也、

一、第四夜十九日、催之事、如先夜沙汰事、

一、堅者専勝房、精義東大寺上生院願春房兩人、

一、探題東林院殿、御精義本松林院殿、御一献御沙汰。御前衆参事、

一、第五夜廿日、催之事、如先夜沙汰事、

一、堅者東大寺無量寿院一献、会堂へ持之、サケ、膳十膳、御前六人・算主・

(4才)

堂達・侍兩人也、

一、他寺探題東林院殿御精儀、御一献ニ参者也、

一、廿一日、東大寺堅者下行物事、一乘院長合三石六斗奉物、代米二斗八升貳百八十八文雜紙代、御前六

人、算主・堂達・侍兩人、十人支配、一人別二十合三斗三升四合宛百文、

粽ノ代算主・堂達兩人拝領也、(龍力)於龍雲院請取、

一、第六夜会四ツ、講読師計 出仕也、

(4ウ)

一、他寺探題東林院殿御下行物之事申入之处、東北院殿御両所御探題之条、御

下行物半分宛可有御下行由被仰間、則御訴詔申处、会奉行并多聞院へ御下

行物之儀御預リ召テ、明日廿二日中以前ニ《從探題無御下行之御旧記、

於出申者、小綱衆申分無之歟、《可有沙汰旨御請乞条、多聞院一筆給置、御  
役ニ隨者也、東北院殿御下行之儀者、東北院殿次第ニ可有沙汰候、被仰者  
也、

一、会終而金堂東ヨリ 目下ニアラ床ヲ敷、上ニタ、ミヲ東ニ二帖、西ニ二

帖敷事、

(5才)

北ハ荒床計、東ノ方北ニ勅使御出仕、次ニ別会、西ノ北ニ御寺家代東林院

殿御出仕、次ニ注記、礼ハ<sup>(盤)</sup>ン中ニアリ、ケイハ別会ノ前ニ置也、注記最勝

王経御読ノ返アリ、其後<sup>(試)</sup>誠経法師在之、古僧事ハ算主役也、礼盤ニテ三方

へ向三々九度礼也、タレへ一床ツ、カヘリ三度礼盤へ小之礼ス、于時別会

五師惣殊院春源房也、

一、試経法師終而於勅使坊番ロンキ在之、

(5ウ)

一、金堂前試経法師料理之事、荒床ハ修理<sup>(木)</sup>小守沙汰、壇ノ下ノ松明□同前、タ、

ミ会所目代ヨリ出事、礼盤并ケイハ堂トウシ沙汰事、

一、廿二日夜前ノ御筈之条、多聞院へ申处、御旧記至于今不出候上者、御下行

之儀者、明日多聞院ニテ可有御酒御返事、則会堂、中将公御房・多聞院御

両所御出、会堂ノ侍モ同前ニ如此事、

(6才)

一、専寺ノ探題御下行物之儀申入之处、腰差六貫四百文ヲ、從御寺家被仰給ハ、

從先規五貫六百文ノヨシ被仰、其段之儀、種々申理、六貫四百文并御聽米  
 《会所斗》壺石八斗・酒肴米壺石四斗四升、是ハ会所斗定十合ニ算勘シテ  
 被下事、会所ノ斗ハ六合五夕也、御前六人ノ支配六貫四百文ノ内四百文者、  
 上兩人ニ、二百文宛加分在之、人別壺石三斗二升宛四人分也、十合、上二  
 人ハ壺石五斗二升宛、是ハ腰差・御聽米・酒肴米、此三色ノ支配也、

## (6ウ)

一、小綱衆餅之事、卅枚此支配、

慶禪 五枚、慶真 四枚、賢職 三枚

宗職 二枚、慶春 二枚、慶觀 二枚

慶円 二枚、慶印 二枚、慶尊 一枚

慶音 一枚、琳賢 一枚、慶紹 一枚

賢乘 一枚、慶忍 一枚、琳智 一枚

琳德 一枚、以上卅一枚歟、

## (7才)

一、第七夜、廿二日他寺ノ探題東林院殿御出仕之条、一献ニ可参旨御音信之条  
 各参事、専寺ノ探題大乘院殿大御所、他寺探題東林院殿、御両三人御出仕  
 也、

一、行香在之、硯ノ役末ノ小綱沙汰事、□取ノ役ハ算主役也、

一、於食堂前ニ取鮑在之、南ニ注記・威儀師・維那三人ソテヲカツキ立テ出仕、  
 東ニ勅使、西ニ御寺家、此時東林院殿御代官而御出仕、勅使ハ会御出仕之、

## (7ウ)

中ニ礼盤在之、勾当役而礼盤ニ登、フシニ文ヲヨムマネヲシテ如本帰事、  
 取終ハ此分也、

一、料理之事、南ノカリヤ、修理小守沙汰事、荒床同前、タ、ミ者会所目代沙汰事、  
 礼盤者堂童子沙汰也、

一、東北院殿他寺探題御下行物之儀、六貫四百文腰差へ上二人ニ二百文ツ、加  
 分在之、

## (8才)

人別壺貫文宛也、御聽米壺石八斗会所斗也、酒肴米ハ人別八升宛、度数ニ  
 ヲウテ被下事、此時壺ケ度御出仕之間、四斗八升御下行、

廿五日、於大乘院ニエ(延年)ンネン在之、

廿六日、御寺家参事、御見参在之、

一、今度大会之儀付、從東林院殿、御前衆へ御下行物之事

六貫四百文腰差、会所斗定壺石八斗御聽米、

## (8ウ)

九斗六升酒肴米、一人別ニ八升宛、御出仕ニケ度之間、如此、是モ会所斗  
 也、多聞院請乞之、粮米ヲ以請取申也、從當講東林院殿へ御合力之代米ヲ  
 以如此也、以米之儀モ他寺之探題御始行之有力キリ、御下行可在之者、如  
 此ノ支配ハ御前六人支配也、

四百文ハ上二人、二百文宛拝領也、

## (9才)

御前六人ハ六貫文ト御聽米并酒肴米此三色也、



(裏表紙)  
○白紙

(以下余白)

東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二四―一二（二〇二五年三月二八日）

中世東大寺記録東大寺法華会・興福寺維摩会関係史料

基盤研究（A）（二〇一八～二〇二三年度）「日本中近世寺社〈記録〉論の

構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化」（代表遠藤基郎）

（課題番号 18H03583）報告書

二〇二五年三月二八日 発行

編者 遠藤基郎・畠山聡・西尾知己

発行 遠藤基郎（研究代表者）